

Title	非戦・平和の思想家 住谷天来の研究
Author(s)	大崎, 厚志
Citation	2014 年度 博士論文
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=5501
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014年度

論文博士

主 題

非戦・平和の思想家 住谷天来の研究

聖学院大学大学院
政治政策学研究科
(修士課程修了)

群馬県前橋市 大崎 厚志

非戦・平和の思想家 住谷天来の研究

目 次

はじめに	1
序 章	
1. 住谷天来にかんする先行研究	3
2. 本稿の構成並びに概要	5
第1部 住谷天来の生涯と思想形成	
第1章 住谷天来の生きた時代	
1. 生誕から国府小学校時代	6
2. 「幽谷義塾」時代	8
3. 「前橋英学校」時代	9
4. 前橋教会での受洗	10
5. 「上毛青年会」時代	13
6. 早稲田・慶応義塾への遊学	17
7. 「上毛共愛女学校」教師時代	18
第2章 内村鑑三との出会いと東京時代 —ジャーナリストとして—	
1. 上京、内村鑑三との邂逅	21
2. 『警世』・『聖書之研究』創刊との関係	23
3. 『警世』編集人として	26
4. 『英雄崇拜論』の刊行	28
5. 『十九世紀之豫言者』の刊行	31
第3章 上州に生きる —教育者として—	
1. 上州への帰郷	34
2. 「共立普通学校」教師時代	35
3. 『詩聖ダンテの教訓』の刊行	38
4. 『孔子及孔子教』の刊行	40
第4章 キリスト者として —平和への思い—	
1. 前橋教会など、県内各地での伝道	43
2. 「伊勢崎教会」牧師時代	44
3. 「甘楽（富岡）教会」牧師時代	46
4. 『聖化』の創刊	50
5. 内村鑑三との交友と「上州人」の詩	52
6. 高崎での晩年、『聖化』の廃刊	57
7. 『黙庵詩鈔』の刊行	59
8. 昇天 —天来の死—	62
注 「第1部 住谷天来の生涯と思想形成」	65

第2部 住谷天来の思想 ―とくにその社会・平和思想―

第1章 住谷天来の社会思想

1. 『上毛之青年』に見られる天来の社会観 …………… 82
2. 『警世』に見られる天来の社会観 …………… 88
3. 『上毛教界月報』に見られる天来の社会観 …………… 92
4. 住谷天来の教育観 …………… 95
5. 住谷天来と社会主義者との交友 …………… 101

第2章 住谷天来の非戦・平和思想

1. 同時代のキリスト者の非戦・平和思想 …………… 103
 - (1) 木下尚江 …………… 104
 - (2) 深澤利重 …………… 106
 - (3) 柏木義円 …………… 109
 - (4) 内村鑑三 …………… 111
2. 住谷天来の非戦・平和思想
 - (1) 住谷天来の初期の平和思想について …………… 115
 - (2) 住谷天来の非戦論 ―日露戦争期の「非戦論」をめぐって―
 - ①天来とトルストイの平和思想 …………… 118
 - ②天来と墨子の非戦論 …………… 123
 - (3) 『聖書之研究』に見られる天来の平和思想 …………… 127
 - (4) 『聖化』に見られる天来の平和思想 …………… 134
 - (5) 住谷天来の非戦・平和思想の軌跡 …………… 142

注 「第2部 住谷天来の思想―とくにその社会・平和思想―」 …… 143

むすび …………… 159

資料編

- ・住谷天来 年譜
- ・第1次資料（住谷天来関係）
- ・第2次資料（住谷天来関係）
- ・参考文献
- ・群馬県略地図

はじめに

住谷天来^{すみやてんらい}〔幼名を弥作、号を八朔^{やさく}〕（1869～1944）は、群馬県群馬郡国府村東国分（現群馬県高崎市東国分）に生まれた。出身は地域でも素封家の農家の次男であった。実家近くの国府小学校に学び、農業に従事するも、学問に興味を持ち前橋の幽谷義塾に学ぶ。ここで生涯の友となる共立普通学校（現群馬県立大間々高校）の創設者、井上浦造と出会う。二人とも、前橋教会にて新島襄門下の不破唯次郎から洗礼を受け、キリスト者となった。また、「上毛青年会」に参加。当時群馬県下を中心に展開していた廃娼運動に熱心に参加した。その後、上京し、早稲田・慶応義塾に学ぶ。上州に帰郷後は、「上毛青年会」の機関誌、『上毛之青年』に自己の主張を発表する傍ら、前橋の上毛共愛女学校の教師としても地域の教育に貢献した。上毛共愛女学校を退職後、再び上京。

明治29年（1896）、夏、基督教青年会第8回夏期学校（静岡県興津）に参加し、内村鑑三と出会う。内村との出会いをきっかけに、松村介石らとともに雑誌『警世』の編輯人となり、盛んに自己の主張を載せジャーナリストとしても活躍。明治33年（1900）、カーライル著『英雄崇拜論』を翻訳。明治36年（1903）には、内村主筆の『聖書之研究』に「墨子の非戦主義」を載せ、非戦論を展開する。また、『十九世紀之豫言者』を刊行し、カーライル、ラスキン、トルストイを取り上げ、紹介している。日露戦争前のトルストイの紹介は、天来の非戦論の主張との関連において注目される。

明治38年（1905）頃には、故郷の上州へ帰郷。明治42年（1909）、『詩聖ダンテの教訓』を翻訳、明治44年（1911）、『孔子及孔子教』を著す。また、この頃井上浦造の創設した「共立普通学校」の教師となる。キリスト者としては、明治末期に伊勢崎教会の牧師となる。大正7年には、甘楽（富岡）教会の牧師となり、地域の伝道に努めた。また、同郷の非戦論者・柏木義円の『上毛教界月報』にも投稿、非戦論を展開した。昭和に入り、まもなく昭和2年（1927）、『聖化』を創刊。軍国主義が強まり、戦時体制下に「非戦・平和」の言論を展開するも、昭和14年（1939）、官憲の圧力で筆を折るに至った。『聖化』の廃刊については、当時の矢内原忠雄、塚本虎二らはその廃刊を惜しんだ。

住谷天来の生涯や思想については、そのトータルな研究が少ない。地元、群馬県内では、その存在が顕彰され、調査も進みつつあるが、未だに不明な部分も多い。本稿では、住谷天来の生涯を追い、「非戦・平和」を叫び続けたその思想形成を解明する。

そのためには、これまでにあまり分析されていなかった新たな資料（天来が、『上毛之青年』、『警世』、『聖書之研究』などに寄稿した論稿）などを読み、住谷天来の生涯と思想形成を総合的に捉え、住谷天来の人間像を再構築したい。

住谷天来の生涯は、明治維新から大日本帝国憲法の成立、近代国家が確立し、日清・日露戦争期を経て、欧米諸国と肩を並べて歩む日本の姿とともにある。すなわち、筆者は、その後も次第に高まる軍国主義の時代に抗して、キリスト教思想の受容と信仰により、「自由」・「平和」を叫び、ジャーナリスト・教育者・キリスト者として生きた天来の姿（生涯と思想形成）をより鮮明にしたい。また、天来が諸雑誌に発表した論稿を読み、翻訳書（『英雄崇拜論』、『十九世紀之豫言者』、『詩聖ダンテの教訓』など）を出版した意図などの分析をとおして、かれの主張や思想を解明したい。

そこで、本稿では特に天来の「非戦・平和論」にかんする主張に焦点を当てる。近代日本の平和思想にかかわる住谷天来とほぼ同時代人（キリスト者でもある）の木下尚江、深澤利重、柏木義円、内村鑑三らの「非戦・平和論」の分析をとおして、住谷天来の「非戦論」との対比なども試みて、住谷天来研究の新たな視点も提示し、その生涯と思想形成を明確にすることによって、住谷天来の基礎研究としたい。

序章

1. 住谷天来にかんする先行研究

住谷天来についての先行研究として、群馬県内において紹介を始めたのが、郷土史研究家でもある萩原進である。萩原は、戦後、「自由のために戦った人々」と題し、住谷天来を『上毛新聞』（昭和26年9月22日付）に発表した。その後も、「住谷天来（上）」～「住谷天来（下）」を昭和38年1月、同紙に発表。県民に住谷天来の生涯を紹介した。さらに、小論を「住谷天来」としてまとめ、『近世群馬の人々（1）』（「みやま文庫」、1963年）に掲載した。恐らくこの著作が住谷天来研究の出発点であると思われる。

次に、天来の親戚・住谷悦治（天来の甥にあたる）が、自著『あるところの歴史』同志社大学（1968年）の中で、「内村鑑三と住谷天来」と題し、内村鑑三とのかかわりを中心に天来を紹介した。その後、自著『鶏肋の籠』（中央大学出版、1970年）のなかでも「住谷天来略伝」を著し、天来の生涯をおおまかに概観した。

また、1970年代後半になると、須田清基や角田儀平治など、群馬県内のキリスト者を中心に住谷天来の顕彰の動きが見られた。須田清基は、「非戦論の先駆 住谷天来」と題し、『隠れた教育者、春山松太郎の生涯』（群馬寛容会、1975年）のなかで、「非戦論」を展開した住谷天来の姿を述べた。角田儀平治も『群馬の先駆者』（前橋朝禱会、1977年）のなかで、「住谷天来」を非戦・平和論者として紹介した。こうして、住谷天来を顕彰しようという運動が起こり、「住谷天来顕彰会」が、1978年頃に発足。機関誌『住谷天来顕彰会ニュース第1号』（1978年12月）が発行された。その運動の結果、住谷天来の記念碑が、1981年（昭和56）5月、前橋市石倉町の利根川西岸に完成した。

1980年代に入り、住谷悦治が、「住谷天来とわたくし」を『季刊 群馬評論 冬 1980年 特集住谷天来』（群馬評論社、1980年）のなかで発表。武邦保が、「住谷天来の人と思想 ー非戦と自由の先がけー」を『群馬評論11号』（群馬評論社、1982年）に発表した。次いで、門奈直樹が、「戦時下のキリスト教ジャーナリズム ー住谷天来と非戦の言論ー」を『民衆ジャーナリズムの歴史』（三一書房、1983年）に発表し、天来の戦時下抵抗が論じられた。また、久保千一が「住谷天来」を『近代群馬の思想群像Ⅱ』（日本経済評論社、1989年）のなかで発表し、天来の生涯及び思想を論じた。さらに、住谷天来が創刊した雑誌『聖化』（不二出版）が、1990年に復刊され、天来

の思想を『聖化』の全号から読み取ることが可能となった。

このように、次第に天来のことが人々に知られるようになり、住谷悦治の死去にともない、住谷家の方から住谷天来や悦治の貴重な図書などが、群馬県立図書館へ納められることとなり、「住谷文庫」が設置された。こうしたなか、天来の没後50年を記念して、「住谷天来を語る・没後五十年」というタイトルで講演会とシンポジウムが、群馬県立図書館を会場に開催された。この時の発表内容などが、のちに手島仁らにより、「特集 住谷天来を語る・没後五十年」『群馬文化第241号』（群馬地域文化研究協議会、1995年）としてまとめられた。さらに、住谷一彦（天来の甥悦治の子）が、「住谷天来への視線—非戦平和の牧師像」『群馬文化第249号』（群馬地域文化研究協議会、1997年）を發表し、また、住谷一彦・住谷馨・手島仁・森村方子編『住谷天来と住谷悦治 —非戦論・平和論—』が、1997年に「みやま文庫」から出版された。そして、萩原俊彦が『近代日本のキリスト者研究』（耕文社、2000年）のなかで、「壮年期住谷天来の活動」として、「住谷天来の略歴」、「住谷天来の著・編・訳書目録」などを合わせて発表した。その後、田中秀臣が「叔父住谷天来の死」『沈黙と抵抗 ある知識人の生涯 評伝住谷悦治』（藤原書店、2001年）を發表した。

こうして、群馬県立博物館において、手島仁が、「内村鑑三と住谷天来をめぐる人々」『上州人とは、群馬学の確立に向けて 群馬の肖像Ⅱ』（群馬県立歴史博物館、2005年）、「住谷悦治遺稿とテーマ展示『群馬の肖像Ⅱ』」『群馬県歴史博物館紀要 第26号』（2005年）というかたちでも發表し、多くの群馬県民にも天来の生涯が知られるところとなった。近年では、笠原芳光が、「『医蘇』としてのイエス—住谷天来『黙庵詩鈔』」『日本人のイエス観』（教文館、2007年）を著し、天来のキリスト教思想を取り上げた。また、地元群馬県富岡では、斎田朋雄が「非戦と平和の使徒 住谷天来と『聖化』」『西毛文学』（第192号～209号、2003年～2008年）を著し、『聖化』を分析した。

以上、これまでの住谷天来にかんする「先行研究」をまとめてみたが、全体的に住谷天来の生涯と思想を総合的に分析した研究は少ない。

2. 本稿の構成並びに概要

本稿は、2部構成とし、全体を論述する。

第1部においては、「住谷天来の生涯と思想形成」について概観する。第1部は4章に編成する。第1章の「住谷天来の生きた時代」では、天来の幼少期から、前橋に出て幽谷義塾・前橋英学校などに学ぶ修学期、同じくキリスト教思想の受容（前橋教会での受洗）、「上毛青年会」への入会と廃娼運動への参加、「上毛共愛女学校」教師時代を概観する。第2章の「内村鑑三との出会いと東京時代」では、上京した天来が、内村鑑三と出会い大きな影響を受け、ともに上州出身者として意気投合し、雑誌『警世』、『聖書之研究』などの編輯にかかわる。また、この頃に『英雄崇拜論』や『十九世紀之豫言者』などの翻訳を出版している。この東京時代は、主にジャーナリスト、翻訳者として活躍した。第3章の「上州に生きる」では、帰郷し、教育や著述に活躍した天来の姿を描く。天来は、親友井上浦造が創設した「共立普通学校」の教師となる。また、この頃『詩聖ダンテの教訓』、『孔子及孔子教』などの著述を刊行した。第4章の「キリスト者として」では、群馬県内（前橋教会など）においてキリスト教の伝道を始め、「伊勢崎教会」、「甘楽（富岡）教会」の牧師として活躍する天来の姿を描く。「甘楽教会」においては、『聖化』（1927年）を創刊した。『聖化』は、天来が「非戦・平和」の言論を主張したジャーナルとして注目される。しかし、『聖化』は戦時色が濃くなる昭和14年（1939）に、ついに官憲の圧力により廃刊にさせられた。その後、天来は昭和19年（1944）に没する。

第2部においては、「住谷天来の思想」について考察する。第2部は大きく2章に編成する。第1章では、「住谷天来の社会思想」について論述する。『上毛之青年』は、青年期の天来がその編輯にかかわった雑誌である。『警世』は、ジャーナリストとして社会批判を主に展開した雑誌であった。また、「上毛共愛女学校」や「共立普通学校」の教師としても活躍した天来の「教育観」についても考察して見る。第2章では、「住谷天来の非戦・平和思想」について論述する。「1. 同時代のキリスト者の非戦・平和思想」では、住谷天来とほぼ同時代を生きた木下尚江、深澤利重、柏木義円、内村鑑三の「非戦論」を取り上げ、住谷天来の「非戦論」との対比を試みる。次に、「2. 住谷天来の非戦・平和思想」として、特に天来の思想の核となる「キリスト教思想（トルストイの平和思想）」・「墨子の非戦論」について分析して見る。そして、それらの主張が載せられた『聖書之研究』・『聖化』などの論稿を読み考察する。

第1部 住谷天来の生涯と思想形成

第1章 住谷天来の生きた時代

1. 生誕から国分小学校時代

住谷天来（幼名は弥作、八朔と号す）は、明治2年（1869）2月16日、群馬県群馬郡国府村大字東国府村（現群馬県高崎市東国府町）に、住谷弥次平、母せいの三男三女の次男として生まれた⁽¹⁾。兄友太（長男）は、のちに同志社総長になる甥悦治の父であった。住谷家は、地域でも素封家の農家であった⁽²⁾。

住谷天来が生まれた群馬県群馬郡国府村（現群馬県高崎市）は、群馬県でもほぼ中央に位置している。この（旧）国府村のあった（現）高崎市東部と利根川を挟む対岸の（現）前橋市西部を含む地域は、古く奈良時代には、上野国の国府が置かれていた。北東に赤城山、北西に榛名山、西に浅間山を望む平坦地であり、上州特有の「空っ風」が吹きすさぶ地域でもあった。

天来自身の回想によると、「…僕は前橋市の正西約一里を距つる古への国分寺の旧跡国府に生れ。家業も亦同じく半商半農の養蚕種製造を以て生活のたすけとした…」⁽³⁾と語っている。また、父弥次平のことについて、「私の父は少々気短で愛情には富んでいたが清水の次郎長式の所があり、怒ると雷の様に怒鳴るので人をして桑原々々と言わしめた」⁽⁴⁾とも述懐している。

明治5年（1872）わが国初めての「学制」に基づき、天来の住む東国分村にも、明治6年（1873）、常安寺の境内に「国分学校」⁽⁵⁾がつくられた。天来は、この「国分学校」に明治9年（1876）に入学し、漢籍の初歩などを学んでいたと思われる。なお、この学校とは別に、近隣の子弟が通った「内山大蔵坊塾」という漢学塾があり、こちらにも天来の兄友太と通い、漢学を学んだという⁽⁶⁾。

こうして、天来は、「国分学校」を明治15年（1882）に卒業し、その後は家業の農業を手伝ったというが、当時のことを「…早くも田園に逐ひやられて、草を刈り畠を耕し田植時には馬の手綱を把つて満身に泥水を浴びせられ、炎天には汗を流して田草をとるような事さえあった…」⁽⁷⁾と農業の辛さを語っている。

しかし、天来の向学心は旺盛で、「…農閑の時を見つけて、国語も漢文も、外国語も殆ど自修独学でやり通した…」⁽⁸⁾とも語っているので、「国・漢」はもちろん、英語など

の外国語も学びはじめていたと思われる。

天来の述懐によれば、「私は十四五歳の頃までは全く和文と漢文しか見た事のない者ですが、十五の歳の春にちと許し英語と云ふものを学び始て西洋の学問にふるゝ機会を有する事となった」⁽⁹⁾と語っている。

天来の甥悦治によれば、天来のことについて、「…恐らく十四、五歳ごろから『哲由』という雅号を使っていた。古い蔵書には『住谷哲由所蔵』と名前が書いてあり…」と言い、勉学の様子を語っている。また、「哲由書」という石碑が地域の村にあり、天来がすでに青少年時代から「村一番の書家」であったと述べている⁽¹⁰⁾。

その後も向学心旺盛な天来は、利根川を隔てた前橋の町にあった「幽谷義塾」に、明治18年頃、入塾することとなる⁽¹¹⁾。

2. 「幽谷義塾」時代

幽谷義塾は、明治17年（1884）、前橋百軒町に創設され、漢学と数学を主として教えた私塾であったが、途中より英学も教授するようになり、「スペリング」、「ナショナルリーダ第一読本」、「パーレー万国史」、「グートリッチ英国史」などを教えていた⁽¹²⁾。塾主の蜂須長五郎は、父が尾張徳川侯の旧臣で江戸に生まれたが、のちに前橋藩士蜂須家の養子となり、明治11年に群馬県師範学校の教師となる。その後、前橋に「幽谷義塾」を開いた。また、明治21年に蜂須は、県会議員に当選している⁽¹³⁾。

この幽谷義塾は、明治20年（1887）3月28日、近くで火事があり、塾も焼失してしまったといい、前橋堅町に新校舎が再建された⁽¹⁴⁾。

当時の幽谷義塾の様子について、井上浦造の回想によると、

「この時塾主蜂須長五郎先生は、県会議員に当選されて大に雄弁を揮はれた。この先生は非常の勉強家で漢英数就中数学は得意であったが、…当時が塾の全盛時代であつて、塾生は約二百名、師範入学生なども多くこの塾より出た」（井上浦造『華甲記念後凋先生詩文集』）

と記している⁽¹⁵⁾。

この幽谷義塾時代に天来は、のちに生涯の友となる井上浦造（1867－1952）と出会う⁽¹⁶⁾。浦造も、農業を手伝うかたわら和漢洋の学問を学ぶ。このあたりの経歴は、天来と井上浦造は似ている。二人とも農家に生まれ、明治維新後の学制にともなう小学校教育を終え、卒業後は家業である農業を手伝うが、学問を好み前橋の町に出て、幽谷義塾で二人は出会うのである。井上浦造は、その後、新島襄に出会い、同志社神学校に学び上州に帰郷。県内各地でキリスト教の牧師として活躍するが、教育に関心を持ち大間々町（現みどり市）に共立普通学校（現群馬県立大間々高等学校）を創設した⁽¹⁷⁾。

浦造は天来の幽谷義塾時代のことについて、

「この塾でも折々討論会なるものがあつて福地万亀江、関根元哉、住谷弥作、…などという塾生と交際した。その中で住谷弥作氏は後の天来氏でその後慶応に入り、牧師となり英学者として名をなして居り、…当時は何れも白面の書生、何となるやら解つた者ではなかつた」（井上浦造『華甲記念後凋先生詩文集』）

と語っている⁽¹⁸⁾。天来も後年、『聖化』（第20号）において、「後凋先生は本名を井上浦造君といい、予の青春時代の友なり」と記している⁽¹⁹⁾。

また、天来の前橋時代には、青柳新米の回想⁽²⁰⁾によると、天来と浦造が、「鳳鳴義塾」に学んでいたという。青柳新米（1865－1958）は、元前橋藩士の子として生まれ、前橋教会にて海老名弾正から受洗。若き日には、「上毛青年会」に所属しており、天来や浦造らと行動をとともにしていたようである。前橋英学校、前橋英和女学校（後の上毛共愛女学校）の教師として活躍。明治時代の末には、第6代上毛共愛女学校長に就任している⁽²¹⁾。

その青柳の回想によると、「昔し上毛英学校（共愛女学校の前身）時代、スグ其西隣に鳳鳴義塾があった。塾長は保岡亮吉即ち鳳鳴先生であった。…鳳鳴先生は即ち亮吉氏にして曲輪町に鳳鳴義塾を立て教えていた。井上後凋（浦造）住谷天来（弥作）二氏ハ保岡鳳鳴の門弟であった」と述べている⁽²²⁾。

この鳳鳴義塾は漢学塾で、塾長の保岡亮吉（1851－1919）は、元前橋藩の儒学者保岡嶺南の孫であった。明治時代に入り前橋で鳳鳴義塾を開き、その後、群馬県師範学校、群馬県立中学でも教鞭をとっていたという⁽²³⁾。天来や浦造は、この保岡に師事し、詩文や書法を学んでいたようである。両者とも漢学、書道に優れているのも、この前橋時代に、幽谷義塾や鳳鳴義塾で学んでいたことが大きいと思われる。

3. 「前橋英学校」時代

天来は、この前橋時代の明治19年、「前橋英学校」にも通っていた⁽²⁴⁾。

幕末の横浜開港以来、物産の「生糸」が中核となり、近代化の基盤を築いた前橋の地でも、文明開化の風潮により、英学熱の高まりがあった。明治19年、高津仲次郎ら当時の群馬県内の有力な政治家や地域の有力者の協力により、「前橋英学校」が設立された⁽²⁵⁾。校主には、「熊本バンド」出身の加藤勇次郎を招いた。加藤は、肥後国（現熊本県）出身、不破唯次郎と同じ新島襄の弟子で、同志社の第1回卒業生でもあった。加藤は、同志社卒業後、すでに明治18年には、群馬県師範学校の教師として来県していた⁽²⁶⁾。

「前橋英学校」は、速成科（修業年限3年）と本科（修業年限5年）の二学科から成り、男女共学であったという。主要な教科書として、英語に関する「綴字書」、「文法」、「会話」をはじめ、「ギゾー文明史」、「アンダーソン英国史」、「オンタワード英文学」、その他「政治学」・「幾何学」など、英語以外にも高度な学問を教えていた⁽²⁷⁾。

この「前橋英学校」の教師として活躍したのが、竹越与三郎（三叉）であった。

竹越与三郎（1865－1950）は、明治19年頃、前橋に来たという。埼玉県本庄出身。慶應義塾に学ぶ。湯浅治郎・小崎弘道・海老名弾正らを知り、小崎が前橋でのキリスト教的な青年活動と教育活動の教導者として、竹越を推薦したという。竹越は、のちにジャーナリストとなり歴史家、衆議院議員や貴族院議員として活躍した人物であった⁽²⁸⁾。

小崎弘道も海老名弾正、不破唯次郎、加藤勇次郎と同じ熊本出身。いずれも同志社の第1回卒業生で新島門下であった。特に海老名、不破、加藤の3人は、明治の中頃、前橋の地においてキリスト教の伝道や教育活動に従事していたのであった。

こうして、天来は、「前橋英学校」で、本格的に「英語」を学んだと思われる。

天来の甥の住谷悦治は、

「叔父はいったいその英語の実力をどこでつけたことであろうか。わたくしの聴き覚えでは天来の十代の少年時代に前橋市に、あの有名な竹越与三郎が『英語塾』を設立していたのでまづそこで英語というものに触れ、あとは独学でマスターするに至った」（住谷悦治「住谷天来とわたくし」『群馬評論』創刊号、所収）

と述べており⁽²⁹⁾、特に竹越与三郎の影響を指摘している。いずれにしても、天来の青年期には、新島襄も前橋に来訪しており、前橋英学校の加藤勇次郎、前橋教会の不破唯次郎ら新島門下の同志社一期生とも接していたので、その影響を受けていたものと思われる。

4. 前橋教会での受洗

前橋におけるキリスト教伝道については、「前橋教会」の記録によると、明治12年頃、同志社（中途退学）に学んだという和田正幾^{まさちか}が、伝道に来たのが最初のものである⁽³⁰⁾。

その後も同志社卒業の蔵原惟郭^{くらはらこれひろ}が、明治16年頃やって来て、じょじょにキリスト教が広まりつつあった。本格的には、新島襄の弟子の海老名弾正が、明治17年秋頃より、伝道にあたり、前橋紺屋町に教会堂が建設された⁽³¹⁾。当時の前橋教会には、いわゆる知識階級のほかに青年層も出入りするようになっていた。

天来は、井上浦造や他の塾生との交友もあり、恐らくこの幽谷義塾の塾生であった時代に、前橋の地で初めてキリスト教に触れたと思われる。

当時の天来や浦造などの幽谷義塾生が前橋教会へも出入りしており、浦造の回想によると、「他の塾生などが酒を飲み煙草などをすうたり、時には料理屋に出かけるものもあったが、教会に出入りするものはその様な事は絶対になかったから、この点には塾長も幾分

敬意を払うていたらしかった」と、キリスト教信者の塾生らは、真摯に勉学に励んでいた様子が伺える⁽³²⁾。

また、深澤利重との交友もこの頃から始まったと言う。天来は深澤の死後、「逝ける好友深澤君を偲ぶ」という追悼文を著しているが、それによると「余が初めて君を知り親交を契りしは、前橋教会が紺屋町の片隅に呱呱の声をあげて居る頃であった」と述べている⁽³³⁾。深澤は、後に天来と同様に日露戦争開戦にあたっては、非戦論を論じていた人物であった⁽³⁴⁾。

さて、新島襄自身の前橋訪問についてであるが、『新島襄全集 8 年譜編』によると、すでに明治12年(1879)12月9日～10日、安中の伝道にあっていた海老名弾正の按手礼式に出席のため安中へ行き、前橋に立ち寄ったとの記録がある⁽³⁵⁾。

その記録によると、新島は12月9日、前橋の「生産会社」(蚕糸業関連の会社か、場所は不明)において説教した。聴衆は二百人ほどいたという。その日は、前橋に一泊したとのこと。

この時の話かどうか不明な点もあるが、中山光五郎の回想「先生の講演を聴いて」によると、

「…前橋蚕糸改良会社楼上に於て初めて先生の御講演を聴く。聴衆は師範医学両校の学生が多かりき。…新島先生は欧米至る所工業製造の旺盛なるを説明し、前橋の地勢は最も此事業に適するなり、人類万般の働は如何なる種類の働を為すにも、国家、社会、人類の為に真正の幸福と成るべき事業を、誠心誠意を以て、責任を重んじて、忠実に働く時は其人生幸福なるはなしと…」(『新島先生記念集』所収)

と、前橋での新島の講演内容を伝えている⁽³⁶⁾。

次に新島が、前橋を訪問しているのが、明治19年(1886)年1月である。

1月27日、前橋教会の海老名弾正を訪問し、新築された前橋の「教会堂」で話をしたとの記述がある⁽³⁷⁾。新島が、どのような内容の話を行ったか不明であるが、天来は、すでに前橋の幽谷義塾の塾生時代であった。のちに天来は、新島没後の5年が過ぎた頃、前橋の臨江閣に於いて「新島先生を懐う」と題し、「新島先生永眠五周年記念講演」を行っている⁽³⁸⁾。したがって、天来が新島と出会っていた可能性は高い。

天来は、前橋教会において、明治21年(1888)3月4日、不破唯次郎ただじろう牧師より洗礼を受けた⁽³⁹⁾。浦造は天来より一足先に、明治20年(1887)2月6日、同じく不破牧師から洗礼を受けていた。

不破唯次郎（1857－1919）は、肥後国（現熊本県）出身で、「熊本バンド」の一員であり、新島襄の弟子で、同志社の第1回卒業生であった。前橋教会には、明治19年頃に転じてきた。不破の前橋赴任は、前任牧師の海老名弾正の東京転出に伴う後任であった⁽⁴⁰⁾。

幽谷義塾での勉学後、浦造は新島襄の同志社に、天来は福沢諭吉の慶応義塾に学ぶことになるのだが、この幽谷義塾時代の二人の出会いは、終生の友となる両者にとって大きな意味をもった。

5. 「上毛青年会」時代

明治20年（1887）1月、石島良三郎、高津仲次郎、竹越与三郎（三叉）等によって「上毛青年会」が結成され、前橋桑町住吉屋にて発会された⁽⁴¹⁾。後に、住谷天来、井上浦造も「上毛青年会」のメンバーとなった。主な構成メンバーとして、湯浅治郎、不破唯次郎、深澤利重、福田和五郎、塚越芳太郎らがいた。「上毛青年会」は、当時の群馬県内のキリスト教徒、進歩的な知識人や青年たち、製糸家、県会議員、民権家、ジャーナリスト、教育者など数十名により成り立っていた⁽⁴²⁾。

天来の回想が、『上毛教界月報』第405号（昭和7年7月25日発行）にある。「私は当時前橋に住んでいて正に勉強中であつたが、前橋にて上毛青年会というものを我らの仲間が起こして盛んに弁論を戦わせて、自家の修養は勿論、宗教や道徳やあらゆる時事問題を討究しておつた」と述べている⁽⁴³⁾。

明治22年（1889）1月に「上毛青年会」の機関誌として、『上毛青年会雑誌』が、創刊された⁽⁴⁴⁾。発行所は、「上毛青年会事務所」（前橋曲輪町）。発行者は、石島良三郎。編集人として永井元。両者は、いずれも前橋教会員のクリスチャンであつた。

『上毛青年会雑誌』創刊号（明治22年1月15日発行）、「上毛青年会雑誌発行の趣意書」には、次の一文が載せられている。

「一 上毛青年会雑誌は広く世人の知識の交換場、理論の戦場、交友の連鎖場となしたる者にして決して寡数の者の専有物にし非ざれば何人と雖も此の雑誌を其の道具となして差支えなし」（『上毛青年会雑誌』創刊号）

と記され⁽⁴⁵⁾、広く世間の民衆に言論思想の自由のために、その主張を訴える姿勢を示している。なお、同紙の創刊号には、当時の民友社の徳富猪一郎（蘇峰）が「祝詞」を寄せている。また、創刊号の「青年会記事」によると、明治22年（1889）1月5日、春期大会が開かれ、会員四十数名が集まっている。そこで、住谷八朔（天来）が、「青年会雑誌の作用」という題で演説している。

後年、雑誌『聖化』などを発行し、ジャーナリストとして活躍する天来であるが、若き日にかかわったこの『上毛青年会雑誌』（第7号より『上毛之青年』と改められる）こそが、長い言論活動の出発点であつたと思われる。

『上毛青年会雑誌』第3号（明治22年3月16日発行）、「青年会記事」によると、同年3月10日、「上毛青年会」をさらなる大連合にするため、委員十名を選挙し、県内

各地の青年会及び諸会合へ遊説するとの目的で、住谷八朔（天来）がその委員に選ばれている⁽⁴⁶⁾。

『上毛青年会雑誌』第4号（明治22年4月20日発行）においては、民友社社員の人見一太郎の「平民主義と文学美術技芸との関係」などが載せられている。同年3月14日、「第28回上毛青年会例会」（前橋住吉屋）において、住谷八朔（天来）は、「天賦の自由」と題して演説している。その内容については、「人類当有の権理（利）自由を就きて欧米諸大家の説により自己の之に対する意見を論説したり」と記されている⁽⁴⁷⁾。

『上毛青年会雑誌』第5号（明治22年5月18日発行）には、住谷八朔（天来）が、「真正の英雄」という一文を載せている⁽⁴⁸⁾。この文章は、現在、筆者が確認している八朔（天来）の最初の論文である。

『上毛青年会雑誌』第6号（明治22年6月15日発行）、「青年会記事」の6月9日によると、『上毛青年会雑誌』を『上毛之青年』に改めること、社名を「上毛青年社」にすることなどが決定された。幹事に石島良三郎ら3名。常議員に高津仲次郎、住谷八朔（天来）ら7名が選出された⁽⁴⁹⁾。これにより、『上毛青年会雑誌』は、「上毛青年会」（上毛青年会事務所発行）の機関誌的性格から脱皮させた。そして、何より言論活動を重視するとの姿勢から、「上毛青年社」として出版社的性格を持たせ、再出発したものと思われる。

なお、『上毛青年会雑誌』第6号には「上毛青年会々員姓名表」（明治22年6月現在）として、「住谷八朔（天来）」、「井上浦蔵（造）」ら、実に109名の氏名が掲載されている⁽⁵⁰⁾。

『上毛之青年』第7号（明治22年7月20日発行）には、「本誌改題の趣旨を明らかにす」との文が載せられた。また、「上毛青年会」は、当時、群馬県下に広がりつつあった廃娼運動などを目的とした県下の青年会の連合組織として「上毛青年連合会」に改めた旨を載せている⁽⁵¹⁾。同7号の「上毛青年の連合成る」には、「…貴族的の勢力は巖の如く剛くして容易に動かし難く、平民主義の勢力は柔らかなる事卵子の如し、此の柔軟なる勢力を以て巖石を砕かんとす…」と述べられており⁽⁵²⁾、当時の社会情勢に対して「上毛青年会」の持つ使命を訴えている。また、同7号には当時、前橋を来訪した民権家の植木枝盛の講演「女権之伸縮」が、「寄書」として載せられている。「上毛青年会記事」によると、植木枝盛は、同年7月5日、前橋集楽亭に於いて演説。二百余名の傍聴、中には四十数名の女性もいたという。植木は、「女権ノ伸縮」と題し、二時間にわたり快弁を振る

った⁽⁵³⁾。

植木枝盛の日記によると、明治22年(1889)7月4日、「本日午前十一時上野に赴き、汽車前橋に赴く。曲輪町対岳館に投ず。高津、関、石島良三郎、二三十名に会す」同月5日、「雨。夜集楽亭にて演舌す。女学校生徒等多く来る」と記されている⁽⁵⁴⁾。なお、この時の前座として、住谷八朔(天来)も、「真正ノ壮士」と題して演説している⁽⁵⁵⁾。

『上毛之青年』第8号(明治22年8月17日発行)の表紙には、同紙の性格、その意図する主義・主張が明確に明記されている⁽⁵⁶⁾。

「本誌は真理の従僕、正義の勇将、進歩の伴侶、自由の好朋、平和の良友、婦人の味方、時勢の先導、及び政海の燈台たらんことを期すものなり。故に其論ずる所は其信ず所にして其信ず所は、常に真理と平和と自由の指す所に外ならず」(『上毛之青年』第8号)

とその目的を高らかに宣言している。また、「本誌(『上毛之青年』)現時の所望」として、「藩閥政府の消滅」、「善良なる女子教育法の発明」などを掲げていた。

こうして、「上毛青年連合会」の活動は、主に廃娼運動という社会運動にその成果を結実させて行く。天来も、遊説委員として県下各地を回り演説した。

『上毛教界月報』第405号(昭和7年7月25日発行)によると、

「その頃、我が群馬県会に於ては廃娼問題が起こつて盛に辯難討議中であつた。我々も亦それに共鳴して、独り上毛青年会のみならず県下の各青年を糾合して上毛青年連合会なるものを組織し、大いに廃娼論を絶叫し、我々の如きも一廉の戦士として、握飯と草鞋で以て勇ましく県下を駆け廻りて、あらゆる妓郎楼の所在地に臨んで熱心に宣伝したのであつた」(『上毛教界月報』第405号)

と、天来は当時のことを回想している⁽⁵⁷⁾。

群馬県下における「廃娼運動」の動向については、すでにいくつかの研究が発表されているが⁽⁵⁸⁾、自由民権思想、キリスト教思想、天賦人權論などの理論がその背景にあるといわれている。

『上毛之青年』第18号(明治23年6月21日発行)、「上毛青年連合会記事」には、5月24日、全国の廃娼団体を糾合した全国廃娼同盟が東京で結成されると、「上毛青年連合会」は、これに加盟、石島良三郎ら3名が上京。当時の内務大臣に面会を求めた。同日、天来ら10名の上毛青年連合会の代表も上京し、「全国廃娼同盟会年会」へ出席した

という⁽⁵⁹⁾。

天来の回想によると、

「僕は友人の関根元哉君と廃娼軍の先駆者として其の頃上州の妓楼地を日の丸辨当と草鞋穿で巡回し、盛に廃娼の演説をなし、帰来各地で敵の為に迫害をうけた事を得意としていた時代であった。その直後に上毛青年連合会が出来、亀の甲より年の功で石島という男が会長となり全県下の青年を糾合し盛に廃娼の氣勢をあげた」（『敢闘七十五年』346頁）

とも語っている。

さて、「上毛青年社」の社員であるが、『上毛之青年』第23号（明治23年11月15日発行）によると、編集人として永山悌太郎、以下、主なメンバーとして、住谷八朔（天来）、関根元哉、青柳新米ら十四人の名前を連ねている⁽⁶⁰⁾。いずれも前橋教会に属していたクリスチャンであった。関根元哉⁽⁶¹⁾は、天来や井上浦造と幽谷義塾で学んだ同窓生であった。青柳新米は、前橋英学校の教師であった竹越与三郎の後任教師として活躍した人物でもあった。

いずれにしても、天来は、明治22年頃から、明治29年頃までの数年間、「上毛青年社」の社員として、『上毛之青年』の出版事業に関与し、また時には、自己の主張などを載せたりして、まさにジャーナリストとして活躍し始めた頃であった。ただ、その間明治23年2月、上京して「早稲田」、「慶応義塾」に約1年ほど学んでいる。慶応義塾においては、明治24年12月に卒業している⁽⁶²⁾。

天来は、群馬県に帰郷後、明治25年には、「上毛共愛女学校」の教師を兼務しながらも「上毛青年社」に復帰したのか、結局、明治29年の春には、「上毛青年社」を退社。「上毛共愛女学校」も退職して、再び、上京することとなった⁽⁶³⁾。

6. 早稲田・慶応義塾への遊学

明治23年(1890)、八朔(天来)は上京する。当初は、東京専門学校(のちの早稲田大学)英語政治科に学んだというが、わずかヶ月程で退学。同年6月に慶応義塾別科に学ぶようになった⁽⁶⁴⁾。

甥の悦治によれば、「…竹越与三郎が福沢諭吉の慶応義塾出身であることから、竹越の影響か勧誘によって慶応義塾に出てさらに勉強したいという発心をしたか、熱望したかが原因で東京へ遊学の決心を固めたのだという」と述べている⁽⁶⁵⁾。

この頃の八朔(天来)は、「上毛青年会」の活動に積極的に関わっていた頃でもあり、また、向学心も旺盛な時期でもあったろうが、あえて上京した。東京では、神田仲猿楽町の服部市右衛門宅に身を寄せたという。服部市右衛門は、クリスチャンであったというが、詳しい経歴は定かではない⁽⁶⁶⁾。『上毛之青年』第5号(明治22年5月18日発行)の「広告」に、「前橋曲輪町 服部市右衛門支店 明治22年5月」という記事がある。この「謹告」によると、「服部市右衛門支店」というのは、もともと伊勢崎で、「洋服」や「靴」などを製造していた商店のようで、前橋にも支店を構えていた⁽⁶⁷⁾。

八朔(天来)は、恐らくこの人物とつながりを持ち、東京に出たのではあるまいか。というのは、のちに八朔(天来)は、明治29年にも上京することになり、その時も服部市右衛門を頼った。そして、彼の娘「みつ」と結婚している⁽⁶⁸⁾。

さて、慶応義塾での学業であるが、明治23年に入学し、翌年の明治24年には卒業している⁽⁶⁹⁾。八朔(天来)が、どのような科目を学び、担当の教師は誰であったのか、詳細は不明であるが、甥の悦治の手許に、八朔(天来)の卒業写真が残されていた。

悦治によれば、「…これは慶応義塾の卒業記念写真で福沢諭吉、小幡篤次郎、小泉信吉、岡崎邦輔教授、関係名士等々が卒業生とともに塾の正面玄関に居並んで写さっているものである」と当時の教師の姿を述べている⁽⁷⁰⁾。その写真の中で、八朔(天来)のことでいうと、「住谷弥作(天来)は、下から三段目のやや中央に、左から九番目に和服でボタン止めの白いシャツが、ややはだけた着物の下に見える。如何にも明治二十年代の青年の姿が窺われる」とその姿を語っている⁽⁷¹⁾。

この卒業写真の裏に天来の書いた墨痕鮮やかな揮毫の文字が、次のように記されていた。

「惟時 明治二十四年十二月 際 于 慶應義塾 卒業 同窓 学友 為記念 撮影
聞一知十 凡夫之事 聞一亡十 是 英雄」

（一を聞いて十を知る、凡夫のこと 一を聞いて十を忘る、是 英雄）」⁽⁷²⁾

悦治は、「その文句の野心満々たる当時の弥作青年の心意気が表現されている思う。皮肉を交えつつも大鳳の志を逆説において物語っているところ、実に妙々、絶妙の名文句であり、まさに二十二歳の青年弥作の意気軒昂たる、澁辣たる姿が相望できる」と語っている⁽⁷³⁾。

こうして、わずか一年半程度の期間を慶應義塾に学んだ天来であったが、この間も故郷上州の雑誌『上毛之青年』第25号（明治24年1月24日発行）⁽⁷⁴⁾、『上毛之青年』第28号（明治24年11月21日発行）⁽⁷⁵⁾にも投稿していた。結局、帰郷し、再び「上毛青年社」へ復帰したと思われる。

というのは、『上毛之青年』第30号（明治25年1月発行）には、「上毛青年社々員」として、住谷天来を含む、「平賀勝三郎、青柳新米、渡邊金次郎、赤石濱太郎、住谷八朔、関根元哉」の6名の名前が記されているからである⁽⁷⁶⁾。

上州に帰郷した天来は、恐らくこの「上毛青年社」で、『上毛之青年』の編輯にかかわりながら、「上毛共愛女学校」の教育に関係するようになったと思われる。

7. 「上毛共愛女学校」教師時代

天来も学んだ前橋英学校が、経営難に陥り廃校することとなり、在籍の女学生を救済するため、女学校設立が図られた。こうして、明治21年（1888）6月、「前橋英和女学校」が、高津仲次郎、深澤利重らにより、前橋曲輪町に開校した⁽⁷⁷⁾。この「前橋英和女学校」は、前橋教会、アメリカン・ボードの支持を得て設立された「キリスト教主義」の学校であった。初代校長は同志社に学び、新島襄に師事した不破唯次郎であった。

明治22年4月、上毛のキリスト者による女学校経営と振興を図るため、「共愛社」が結成された。この「共愛社」の設立発起人には、「不破唯次郎、深澤利重、湯浅治郎、海老名弾正」らを始め、何よりも「新島襄」自身が、その名前を連ねている⁽⁷⁸⁾。その後、「前橋英和女学校」は、明治23年（1890）9月に、「上毛共愛女学校」と名称を変更している。新島襄は、明治22年（1889）11月25日に「前橋」を訪問している⁽⁷⁹⁾。それは、同志社大学設立募金活動のための来県であった。前橋にて、当時の群馬県知事（佐藤興三）らと面会。前橋の臨江閣において演説している。新島は、前橋に滞在中、「前橋英和女学校」（上毛共愛女学校）教師のミス・シェッドと会食の後に腹痛を発し、

一時療養後、明治22年（1889）12月13日になり、東京へ移って行った⁽⁸⁰⁾。

新島は、前橋を去るにあたって、天来ら「上毛青年会中基督信徒諸君」に宛て、次の語を贈った。『上毛之青年』第13号（明治23年1月28日発行）によると、「社会矯風之元氣基於信基督 人心改良之精神生於愛基督 二十二年十二月十三日 新島襄 敬呈」との言葉⁽⁸¹⁾が掲載された。その後、新島は、体調を悪化させ、明治23年（1890）1月に神奈川県大磯で没した。

天来は、新島襄の没後、5年が過ぎた明治28年（1895）に前橋の臨江閣において「新島先生を懐う」と題して演説した記録を残している⁽⁸²⁾。恐らく天来は、新島が何度か群馬県を訪れていた際のいずれかの機会に、新島に接していたのではないだろうか。（ただし、筆者の調べによっても、新島と天来が会っていたとの確実な記録が見つかっていない。）

天来は、「上毛共愛女学校」に、明治25年春頃から勤務するようになった。天来は主に「国・漢・英」の三科目を教授したという⁽⁸³⁾。この頃の校長は、2代目の杉田潮^{うしお}（1856－1925）であった。杉田も不破と同様に、同志社に学んだ新島襄の弟子であった。杉田は、摂津国（現兵庫県）出身。同志社英学校を明治17年に卒業している。その後、すぐに安中教会牧師として来県。明治24年に前橋教会に転任した。こうして、杉田は、「上毛共愛女学校」の校長を兼任していたようである⁽⁸⁴⁾。

『共愛学園百年史（上）』の記録によると、明治27年（1894）3月28日、第3回の卒業式が挙行された。杉田校長からの卒業証書授与のあと天来が、漢詩「送卒業生」を吟詠したという⁽⁸⁵⁾。

明治28年頃、「上毛共愛女学校」を運営する「共愛社」において、「女学校拡張計画」が起った。すなわち、学校の規模の拡大をはかるべく、杉田潮校長と教師側では天来がその計画を推進していたというが、途中で「共愛社常議委員会」との内紛が起り、結局、杉田校長と天来が辞任するという問題が生じた⁽⁸⁶⁾。

この時、「共愛社常議委員会」のメンバーに深澤利重がいた。天来は、

「…余が共愛女学校の教授として関係すること前後五年、君（深澤）は学校の守役として設立者として関係せるが故に、その間の交情は更に一層密なるものがあつた。

所が或る時、学校の教授上に於ける問題と募金の問題から衝突して、余が突然辞職するや、…」（住谷天来「逝ける好友深澤君を偲ぶ」『紀念 深澤利重』所収）

と当時のいきさつを述懐している⁽⁸⁷⁾。

『上毛之青年』第5号(明治29年7月26日発行)、「上毛青年社」の「社員の現状」、
「住谷八朔氏」の記事によると、「天下無二の正直者、略なく又謀なし、然れども器局宏
量、文才溢るるが如く、人情極めて濃厚也、今春上毛共愛女学校の不義を憤りて、郷国を
去り、東都に出でて実業に従事し、傍ら群書を博覧す、未だ其の事業をして又著書として
見る可きものなしと雖も、飛はば必ず人を驚かすものあらん」と評されている⁽⁸⁸⁾。

結局、天来は明治29年春頃には、「上毛共愛女学校」を辞職、「上毛青年社」も退職
して上京することとなる。

第2章 内村鑑三との出会いと東京時代 ―ジャーナリストとして―

1. 上京、内村鑑三との邂逅

天来は、明治29年頃、「上毛共愛女学校」での問題もあり同校を辞職、『上毛之青年』の編集社である「上毛青年社」も辞め、心機一転をはかるため上京した。ここに天来の東京時代が始まる。天来は、「…数年は余の放浪時代であった。或時は江原素六翁の許で麻布中学の教師となり、或時は松村介石氏と共に『警世』雑誌に筆陣を張り、又或時はカーライルの英雄崇拜論の翻訳者として筆硯に従事し、東京に漂浪するもの約十年、…」と語っている⁽¹⁾。まず、天来が頼ったのは、慶応義塾時代に世話になった服部市右衛門であった。甥の悦治によると、どういう経緯か分からないが、天来は服部のもと、一時、神田仲猿楽町で牛乳販売業を創始したが失敗したという⁽²⁾。ただ、この頃に天来は、終生影響を受けることになる内村鑑三と出会う。

内村鑑三の記録をまとめた『内村鑑三日録1892～1896 後世へ残すもの』によると、明治29年（1896）、7月7日から17日まで、基督教青年会の第8回夏期学校が、静岡県興津の亀島楼を会場として開催された。校長は平岩^{よしやす}愼保、講師には内村鑑三、植村正久、松村介石、江原素六らがいた。参加者は約120人。その中にはのちに文学者となる若き日の正宗白鳥などもいたという。天来は、この第8回夏期学校に参加していたのである⁽³⁾。

明治29年（1896）7月16日、内村は、夏期学校で午前九時から「カーライルの事業」と題し第5回目の講演をした。内村と親しく語り相談する機会をえた天来は、『言フベカラザル利益ヲ得且ツ感化ヲ受ケタリ』と、内村の印象を日記に記した⁽⁴⁾。

また、『内村鑑三日録1897～1900 ジャーナリスト時代』の記録によると、明治30年（1897）9月6日、「住谷天来を訪ね、時事、宗教について語る」⁽⁵⁾。明治32年（1899）7月5日、「神田で住谷天来と出会う」などの記述が見られるので、天来と内村は、次第に交友を深めていったものと思われる⁽⁶⁾。

天来は、明治32年頃、麻布中学校の教師となっている⁽⁷⁾。麻布中学校は、江原素六が明治28年、麻布尋常中学校として創立した学校である。明治32年には、麻布中学校と改称している。江原素六は、幕臣出身のクリスチャンであった。天来との出会いがいつ頃であったのか、定かではないが、恐らく、明治29年の基督教青年会の第8回夏期学校

には、両者とも参加していたので、この頃には面識を得たのかもしれない。いずれにしても天来は、麻布中学校で、「国・漢・英」を教授したというが⁽⁸⁾、正確な在職期間は不明である。

さて、内村は、明治33年(1900)5月14日、神田の小川町で天来に出会った。翌日の5月15日、内村は、天来を自宅に招き、『東京独立雑誌』の記者になることを勧めた⁽⁹⁾。『東京独立雑誌』は、明治31年(1898)に内村鑑三が主筆となって創刊した「社会、政治、文学、科学、教育、宗教上の諸問題を評論討議」する雑誌であった。ところが、明治33年(1900)5月20日、内村は、天来を訪ね、『東京独立雑誌』の記者となることの延期を依頼したという⁽¹⁰⁾。それは、「東京独立雑誌社」に起った「大波瀾」、すなわち内村と、同社社員との内紛のためであった。天来は日記に、

「正午、角筈カラ内村鑑三先生来談、昨日独立雑誌社内ニ大波瀾アリ毎月三回ノ紙誌発刊ヲシー一回トナス事、亦小生ノ入社ヲ依頼セシモ右等ノ為メ又先生ノ味方ヲ入ルハ却テ『セルフイッシュ』ノ嫌ヒアルヲ憂フレハ暫時見合セ願度トノ事ヲ唱フルベキニアラサレハ敢テ一言ノ不平ヲ唱ヘス諾ス」(『内村鑑三日録 ジャーナリスト時代』)と記している⁽¹¹⁾。内村にとって「東京独立雑誌社」における内紛は、大きなショックであったようで、結局、天来の入社は見合わせられた。明治33年(1900)7月13日、天来は、内村宅を訪問した。天来の日記には次のように書かれている。

「此日、新宿在角筈内村鑑三氏ノ寓ヲ訪ヒ曩日借用セシコンエイ氏ノカール伝ヲ返シ、偉人論、詩人論、等ヲ為シ彼ノ先師シリー氏ノ德行ト尊敬ヲ聞キ真正ノ平民主義ノ個人ノ尊敬ヨリ来ルコトヲ了セリ」⁽¹²⁾。(『内村鑑三日録 ジャーナリスト時代』)

また、「此日同氏ノ依頼ニテ此暑中休暇ノ間、彼カ講壇ノ興国史談ヲ編纂スルコトヲ約シテ還ヘレリ」⁽¹³⁾と記されていることから、結局、天来は、内村が『東京独立雑誌』に連載で掲載していた「興国史談」を単行本として出版する仕事を手伝うことになった。

『興国史談』(警醒社刊)の内村鑑三の序文(明治33年9月12日付)⁽¹⁴⁾には、

「…終に臨んで余は茲に余の同國人にして友人なる隅谷八朔氏^(ゴツ)が此書に興へられし編輯並びに校正の労を深謝せざるを得ず、吾等同志の為し得る事業は小にして少し、然れども之に深き友情の伴ふあり、此小冊子亦愛友との共同事業の一なり、…」

と記し、天来との親密な交友関係を述べている。その後、内村は『東京独立雑誌』を、明治33年(1900)7月に廃刊している。

2. 『警世』・『聖書之研究』創刊との関係

(1) 『警世』創刊について

『内村鑑三日録1897～1900 ジャーナリスト時代』によると、明治33年(1900)7月18日、天来は、内村と共に警醒社書店に行き雑誌発行の相談をした。この日相談した雑誌とは、同年秋から発行される予定の『警世』のことであった。天来が編集者になり、寄稿者として内村のほか、留岡幸助、松村介石らが予定された。内村は、『東京独立雑誌』の記者として天来に入社を頼みながら、同紙の急な廃刊で、天来の入社を実現できなかった。そのため、『警世』の編集者となれるように尽力したようである⁽¹⁵⁾。

次に、『内村鑑三日録1900～1902 天職に生きる』の記録によると、明治33年7月25日、女子独立学校を会場にして第1回夏期講談会が開催された。会期は、7月25日から8月3日までの10日間。内村鑑三を責任者として、大島正健、松村介石、留岡幸助などが講師となり、住谷天来も「会友」として参加。住谷の日記には、内村の「開会の辞」が記されていた。「東京独立雑誌社」の解散にもかかわらず、内村を慕う者が集まったという⁽¹⁶⁾。

同年7月27日、夏期講談会の3日目、午前8時に記念写真を撮影。記念写真には、講師の内村鑑三、大島正健、会友の住谷天来を中心に、「逢坂信悉、小山内薫、井口喜源治、青山士、荻原守衛、倉橋惣三」ら66人が、女子独立学校の校舎を背に写っている⁽¹⁷⁾。

同年8月3日、夏期講談会の10日目(最終日)、留岡幸助の講演のあと、内村が送別の挨拶をした。住谷は日記に、「集マルモノ皆力ニ満チ神ト自ラノ天与ノカトヲ頼リ、キリストノ為メ神ノ為メニ各為スベシト決心シテ散スル」と記した⁽¹⁸⁾。

同年9月11日には、内村と警醒社の福永文之助が住谷を訪ねた。『聖書之研究』とは、別の新雑誌、のちの『警世』を創刊する話で、「内村および松村介石が執筆し編集人には住谷天来があたることを決めた」とのこと⁽¹⁹⁾。

同年9月29日、内村が来訪。雑誌『警世』の相談をした。新雑誌『警世』については、結局、「主筆を松村介石とし、住谷は助手の任にあたり、内村は寄稿者の一人となることを取り決めた」という⁽²⁰⁾。

『東京毎週新誌』894号(10月12日)には、「松村氏を主筆とする『警世』は来る二十日を以て発刊せられんとす、敢へて健在を祈る」との記事が載る⁽²¹⁾。

明治33年(1900)10月14日、内村宅で独立苦楽部^(ママ)の会合が開催された。「集まるもの約30人」、住谷天来を除けばいずれも血気盛んな青年ばかりで、倉橋惣三、小山内薫らもいたという⁽²²⁾。

天来は日記に「出席薄暮、歡を極メテ帰宅ス 内村先生カラ英雄崇拜論(拙訳セルノ批評ヲ載テ帰ル是レ来ル二十五日初号発刊ノ『警世』ニ載セルモノ也」と記した⁽²³⁾。天来の訳したカーライルの『英雄崇拜論』は、明治33年(1900)10月3日に警醒社から発行され、内村の書評が10月25日創刊の『警世』に掲載された⁽²⁴⁾。

『警世』は、明治33年10月25日、松村介石が主筆となり、天来が編集人、内村が「社友」として創刊された。『警世』は、現在では、その存在があまり知られていない雑誌ではあるが、明治37年(1904)7月の第82号で終刊になった⁽²⁵⁾。

天来と内村は、版元の警醒社書店と何度も相談を重ねてきた雑誌であるから、ただの社友ではなく同人に近い立場で刊行したものといえる。同誌の創刊号には『聖書之研究』の広告も出された⁽²⁶⁾。

(2) 『聖書之研究』創刊について

『内村鑑三日録1900～1902 天職に生きる』によると、明治33年(1900)8月6日、内村鑑三は、「聖書研究所」、及び「中学校」の設立を住谷天来と相談。その結果、「聖書研究所」を市外に置き、世界智識及び英語を主として教える「中学校」設立を決意した。校長に内村、教頭に大島正健、校舎の持主を住谷とし、三人のほか坂入巖(夏期談話会で雑務の担当)を加えた四人が資金を出すことで話がまとまったという⁽²⁷⁾。

同年8月7日、内村鑑三、坂入巖が、塾と聖書研究所の相談のため、住谷を訪ねた。前日の中学校設立の件は、まず私塾を設けて一ケ年実験をすること、「聖書研究所」は、内村の角筈の住居の側に寄宿舎を設けることとした⁽²⁸⁾。

同年8月13日、内村が住谷を訪問。「聖書研究所」と家塾の二つを設けることは、労力や資金からも大変なため、とりあえず両者を結合して設けることに変更。雑誌(のちの『聖書之研究』)も9月に出すことを語り、9月9日までに天来も一文を書くように依頼された⁽²⁹⁾。

同年8月23日、内村は、相談していた私塾の設立は、資金および土地家屋の面から、しばらく延期し、当面『聖書之研究』の発行に全力をつくすことを語った。同誌の編輯者

として天来に就任を依頼し、天来はこれを承諾した。同年8月25日、天来は内村を訪ね、「ともに『聖書之研究』の編集に従った」と日記に記した⁽³⁰⁾。

同年9月3日、内村は、天来宅を訪問するが、天来の家には先客として田島（上州出身の田島進）がいたとのことで、内村・天来・田島の三人は、「『聖書之研究』のことなどを語りあい、小川町の常磐亭で昼食を共にして別れた」という⁽³¹⁾。

同年9月13日、内村は、来宅した天来に『聖書之研究』を発行することを表明。内村は天来に書簡を送る。なお、天来宛の同年9月□日の書簡（『内村鑑三全集36書簡一』所収）によると、『聖書之研究』雑誌の編輯人名義について、内村は天来に編輯人名義を依頼しようとしていたが、結局、内村自身がその責任を負うことを伝えた⁽³²⁾。

こうして、明治33年（1900）9月30日、内村鑑三主幹『聖書之研究』が創刊された。いずれにしても、内村鑑三主幹『聖書之研究』の創刊には、天来や田島進⁽³³⁾

（1876－1952）などの「上州人」が、かかわっていたことが知れる。同紙の創刊号には、天来筆「解嘲之章」が載せられた。

3. 『警世』編輯人として

『警世』第1号は、明治33年（1900）10月25日に発行された。発行兼印刷人は、原安治郎。編輯人に住谷弥作（天来）。当時の住谷の住所は、「神田区仲猿楽町14番地」。発行所は「警世雜誌社」で、住所は「東京府豊多摩郡巢鴨町1623番地」であった⁽³⁴⁾。天来は「燈下の読書」という一文を、「刀水漁郎（住谷天来）」の名前で載せた。他に「評壇」、「新著紹介」などに「刀水漁郎」の名で載せている。

『警世』第1号（表紙）には、「本誌の目的は社会に健全なる思想と精確なる智識と不拔なる道念と公平なる観察とを与え暗黒の敵を破り腐敗の空気を掃ふにあり」と、高らかに創刊の意義を述べている。『警世』の名前にふさわしく、言論による主張によって社会の浄化を叫ぶ姿勢が伺える。また、「社告」（第1号裏表紙）には、同紙の主旨として、「一警世は積極的、建設的、指導的のものを尊び、憤慨の間に救治策を講じ、暗黒の間に光明を放たんと期す」との方針を示している。主な内容としては、「論説、雑録、修養、史伝、評壇、時論」などがある。松村介石が、「発刊の辞」を載せ、内村鑑三が「警世の発刊に際して友人松村介石君に告ぐ」の文章を寄せている。松村は、『警世』創刊号の「発刊の辞」のなかで、「目下政界を視るに、此れに党し彼れに私し、各々嘘言八百を捏造して、施策弄計、反間苦肉、至らざるなく、殆ど社会をして正確なる観察を得ざらしめんとす」と言い、当時の社会を痛烈に批判した。そのため、「公平なる観察を世に与へ、人をして正確なる知識に接せしめんと欲す」と言い、『警世』紙上にて、「当世流行の人物評」、「大觀的政治論」、「人格の修養」、「世界の知識」を報じるとの旨を述べている⁽³⁵⁾。

なお、同紙には内村鑑三が、『英雄崇拜論』（トーマス・カーライル原著、住谷天来訳）の書評、「英雄崇拜論 住谷天来訳 警醒社書店発行」を載せている。以下、内村の書評（全文）を掲載する。

「哲人カーライルの著にして友人住谷天来氏の翻訳なりカ氏の著にして外国語の翻訳に堪ゆる者は唯此書のみなりと信ず、余は天来氏の原稿を以て数ヶ所に於て原書と対照したりしに能く其精神を汲み意を通ずるを見たり、余が天来氏の文才に服するに至りしは実に此訳文に由るものなりとす、『英雄崇拜論』、其名既に我邦青年の心を引くに足る、然れどもカーライルの所謂崇拜なるものは東洋の日本に於けるが如き奴隸的崇拜にあらず、英雄崇拜すべし、然れども神を拝する如くに拝すべからず、此書蓋し此迷誤を解くに足らん乎、余は謹んで茲に此有益なる訳書を歓迎す 内村鑑三評」

（『警世』第1号）

と記した⁽³⁶⁾。ここで内村が、カーライルの「原書」と天来の「翻訳」した文章を比較して、「能く其精神を汲み意を通ずるを見たり、余が天来氏の文才に服するに至りしは実に此訳文に由るものなり」と述べている。このことから内村が、いかに天来の深い学識を評価していたかが知れる。こうして、天来の『警世』編集人時代が始まる。『警世』第1号（明治33年10月）から、『警世』第23号（明治34年10月）までの編集人が、「住谷弥作（天来）」の名義となり発行された。

4. 『英雄崇拜論』⁽³⁷⁾ (トマス・カーライル原著 住谷天来訳) の刊行

天来の最初の訳書として、明治33年(1900)10月3日発行、警醒社書店刊、『英雄崇拜論』(トマス・カーライル原著 住谷天来訳)がある。定価50銭。「自序」は、全文が漢文体で書かれ、文末には、「明治三十三年春三月 天来誌」と記されている⁽³⁸⁾。

天来の「言志一束」によると、「初め余の翻訳を企つるや、未だ何人も此書を訳したる者あらざりき(勿論其一部分は訳したる者あるを聞けど而かも全部を訳せし者あるを聞かず)」とのこと。天来は、土井晩翠が訳書を出したことをのちに「時事新報」の広告を見て知ったという⁽³⁹⁾。晩翠訳は、『英雄論』(春陽堂刊)として、明治31年(1898)5月に発行されていた⁽⁴⁰⁾。天来は、「言志一束」の中で、自らのことを「…先きは当世流行の文学士、余は即ち無冠の帝王、学位無く才名無し、…」と述べている。

また、天来は、「…故に余の畏友鑑三君内村氏は諗て曰く、思想は翻訳を通じて完全に解するを得ずとは言語学上の恒則也と、況や泰西の文学中、特に最も解し難きカーライルの文の如き、…所詮何人の巨腕によるも到底完璧に訳し得べき者に非ず、其訳文の鹵笨なるは素と余の浅学に坐すと雖も亦原文の構成上、然らしむる者無くんば非ず読者幸に之を瞭せよ」⁽⁴¹⁾と言い、内村からアドバイスを受けていたことも記していた。

トマス・カーライル(1795-1881)は、スコットランド出身で、19世紀イギリスの歴史家、評論家として著名である。明治26年(1893)7月には、民友社から「十二文豪 第1巻」として、平田久著の『カーライル』が出版されている⁽⁴²⁾。

天来が、いつ頃からカーライルに関心を持ったのか。『聖書之研究』第352号(昭和4年)に載せられている天来筆の「荘子の話(一)」によると、

「私の青年時代であった。丁度今から四十年の前、少とばかり英語が読めて来たので、世にも名高い英国の文豪カーライルの書^(ママ)た衣裳哲学^(ママ)を読んだ事がある。其時彼の文章が超逸であり奇抜であり就中剛健であって、而も其感想が神秘玄妙であると共に言々句々さながら肺腑より煮染み出すような深刻味のある処にほとほと心酔したものであったが、…」(『聖書之研究』第352号)

との回想⁽⁴³⁾があるので、天来が二十歳(明治22年)、「上毛青年会」に加入していた頃には、すでにカーライルの著作に触れていたようである。

また、天来は、明治29年(1896)7月、基督教青年会主催の「第8回夏期学校(静岡県興津)」において、内村鑑三のカーライルについての講演を聞いている⁽⁴⁴⁾。いずれ

にしても、カーライルは、内村をはじめ、新渡戸稲造及び、矢内原忠雄、畔上賢造らにも影響を与えたといわれている。

その後、天来訳の『英雄崇拜論』（警醒社書店刊）は、版を重ね、明治35年版⁽⁴⁵⁾には、「自序第二」が載せられている。「…余の如き無学なる素人文士が、臍の緒切て初てなる此拙劣の訳書が、幸に寿命ありて仮令二年三年でも有望の読者を有して、今日まで存在せること、何等の榮ぞ、何等の幸ぞ、是実余の力に非ず、我師カーライルの偉才に由る也」と述べている。

さらに大正時代になっても版を重ね、大正14年（1925）1月25日発行の同書は、「十六版」となっている⁽⁴⁶⁾。この「十六版」には、「自序第三」が載せられている。

ここで、天来は、「本書の初めて世に出でしは今を去ること十八年前、即ち明治三十三年九月の末にてありき。爾来版を重ねるもの十数回、…今や其改版に臨み、之に厳密なる校訂を加へ、…之を旧本に比すれば殆ど其面目を一新せるが如き觀あり。…」⁽⁴⁷⁾と述べている。また、「自序第三」の文末には、「大正六年四月上旬 桜花爛漫として我帝国を飾るの日 赤城山頭の白皚々たる残雪を眺めつゝ 天来誌す」と書かれていた。

この大正14年の「十六版」には、巻末に「本書に対する世上の毀譽」⁽⁴⁸⁾として、住谷天来訳『英雄崇拜論』（警醒社書店刊）についての書評がいくつか載せられている。

内村鑑三が、『警世』創刊号（明治33年10月25日発行）に載せた「書評」をはじめ、「萬朝報評」には、

「カーライルの『ヒーロー、ウォルシップ』を訳したるもの、前に春陽堂の出版に係る土井晚翠の訳あり…春陽堂の訳書には所々恣のままに刪略したる跡多く未だ純然たる訳書とは言うべからざりしも警醒社のは此点に於て遺漏を補うに庶幾く、文章も可なり流暢なり、…」（「本書に対する世上の毀譽」『英雄崇拜論』所収、巻末2頁）

と、晚翠訳よりも天来訳が良いとの高評価になっている。

『聖書之研究』第2号（明治33年10月発行）には、田島進が書評を載せ、

「友人住谷君カーライルの英雄崇拜論を訳せられ世に公にせらる、頃日一本を本社の主幹に送られ批評を乞うはる、敢て之を読むに訳者が苦心経営の跡歴々として紙面に溢れ余輩をして殆ど原書を読むの感あらしむ、真に恰好の訳書也とす…」（「本書に対する世上の毀譽」、『英雄崇拜論』所収、巻末3頁～4頁）

と賞賛している。田島進は、天来や内村と同郷の上州出身者（旧碓氷郡磯部村）で、一時期（明治33～34年）、内村鑑三の紹介で、札幌独立教会教務主任をしたという人物で

あった⁽⁴⁹⁾。

『福音新報』には、「植村正久君評」として、

「訳文も中々精確なるように読まれたり、曩には土井晩翠氏の翻訳あり今又住谷氏の翻訳をも見る、余輩は此二ツを対照し読まざるを以て遽に其優劣を判じ難しと雖も解し易き点に至りては住谷氏の方少しく優れる者の如し兎に角其の如き丁寧の訳書の出でしは読書社会の大に喜ぶ所なるべし」（「本書に対する世上の毀誉」『英雄崇拜論』所収、巻末4頁～5頁）

との書評が載せられた。植村正久もまた、晩翠訳よりも天来訳のことを評価していた。

いずれにしても、天来の訳書、『英雄崇拜論』（警醒社書店刊）は、当時の有識者からなかなかの評価を得て、少なくとも昭和の初期まで読み継がれていた⁽⁵⁰⁾。

5. 『十九世紀之豫言者』（M.A.ウォード原著 住谷天来訳補）の刊行

天来の二冊目の訳書が、『十九世紀之豫言者』（M.A.ウォード原著 住谷天来訳補）である。明治36年（1903）4月4日発行、定価75銭。天来の当時の住所は、東京市神田区仲猿楽町14番地であった。発行所は、警醒社書店⁽⁵¹⁾。

『十九世紀之豫言者』の「目次」は、「十九世紀の豫言者 小引」、「原著者の序文」、「原著者より訳述者への書状」、「緒言一則」、「第一編 トーマス、カーライルと彼が労働の福音」、「第二編 社会改革家としてのジョン、ラスキン」、「第三編 トルストイ伯と其の福音」という構成になっている⁽⁵²⁾。なお、「十九世紀の豫言者 小引」には、「明治 36年2月 住谷天来」とあり、「緒言」には、「天来生識」とある。

天来の「緒言」によると、本書は、「才名両ら高き米の文士アルデン、ワード氏の近著『十九世紀の豫言者』の補訳也」と記している⁽⁵³⁾。

『十九世紀之豫言者』の原著者である、M.A.ウォードという人物であるが、May Alden Ward (1853-1918) と言い、原著は『Prophets of the Nineteenth Century. Carlyle, Ruskin, Tolstoi, Boston, Little, Brown, and Company, 1901』であった⁽⁵⁴⁾。

May Alden Wardには、他に『Old Colonial Days』、『Dante: A Sketch of His Life and Works』、『Petrarch: A Sketch of His Life and Works』などの著作があった⁽⁵⁵⁾。

天来が、M.A.ウォード原著を翻訳しようと思い、原著者（M.A.ウォード）に手紙を出して、原著者の承諾を得ようとしたのが、明治34年（1901）10月のことであったという⁽⁵⁶⁾。ところが、天来の書簡が到着した頃、原著者（M.A.ウォード）は、郷里を離れ、大陸旅行に出かけていた。その後、原著者からの返事が来たのは、明治35年8月頃のこと、ちょうど天来が、眼疾していた時であったという。原著者からの返事には、「1902（明治35年）の日付」が入れてあった。こうして、天来がこれを訳したのは、明治35年末から明治36年の年頭にかけてのことであったことが知れる⁽⁵⁷⁾。

天来は、原文を参照し、「カーライル、ジョン・ラスキン、トルストイ」の文章より学んだことを加え、自己の研究した内容を補足的に挿入した。そのため、「訳」とはせず、

「訳補」としたという⁽⁵⁸⁾。

天来は、「十九世紀の豫言者 小引」に、三者（カーライル、ジョン・ラスキン、トルストイ）のことを次のように述べている。

「虚偽を悪むこと蛇蠍の如く、真理を愛すること恋人の如く、生涯『労働の福音』を唱えて、自ら励精の人たりしはカーライル也」、「美を愛すること詩人の如く、正義を行うこと神の如く、自ら『理想の王国』を建て、生涯其实行者たりしはラスキン也」、「戦争を嫌うこと猛獣の如く、平和を愛すること慈母の如く、自ら『基督の基督教』を提して、今尚を其实現に熱中するものはトルストイ也」と、短文にて明快に三者のことを言い表している⁽⁵⁹⁾。

天来は三者の性格を、「カーライルは意の人也、ラスキンは情の人也、トルストイは智の人也」、「…カーライルや、ラスキンや、トルストイや、皆是一代の俊豪一特に彼等は近代の総ての人に優って、古希伯来（ヘブライ）の豫言者に似たり」と言う。

そして、天来は、三者（カーライル、ラスキン、トルストイ）を次のように評価している。

「…実に暗中の光明、濁世の聖人、人中の傑物、我等泥土に困転して、暗中に模索するもの、此偉傑に就き、此聖人に質し、其光明を仰き、其盛徳に化するあらば、庶幾くは宇宙の本源を悟り、人生の真相を明らめ、以て帰すべくば則ち帰し、以て為すべくば則ち為し、攻めては此穢土にありて、人らしき生涯を送るを得ん乎」⁽⁶⁰⁾

（住谷天来「十九世紀の豫言者 小引」『十九世紀之豫言者』所収）

当時の天来は、すでに耳を聾し、眼も近視となっていたという。（そのため、本の文字も大きくしてある）そこで、当時の天来の翻訳を助けてくれたのが、「友人 黒木耕一」であった⁽⁶¹⁾。黒木耕一（1875－1970）は、宮崎県延岡出身。早稲田在学中に内村鑑三に出会い、『聖書之研究』にも寄稿していた。のちに、栃木県などの旧制中学校で英語教師をしたという人物であった⁽⁶²⁾。天来と黒木は、明治33年（1900）7月、「第1回夏期講演会」（女子独立学校を会場）で、出会っている。同会の「集合写真」が残されており、内村、天来、黒木らが写っている⁽⁶³⁾。

天来訳の『十九世紀之豫言者』は、「当時の初めて読む者にとつたの理解を助ける意味もあって、原文に忠実な力強い漢文調で翻訳文の間に、住谷天来のそれまで研究した内容が補足的な文章として挟まれている」⁽⁶⁴⁾と指摘されている。

天来訳補の『十九世紀之豫言者』の書評が、『週刊新聞 直言』第2巻第1号（明治

38年2月5日)の広告欄(警醒社書店)に載せられている。同紙には「萬朝報評」、「福音新報評」、「帝国文学評」の書評がある⁽⁶⁵⁾。

「萬朝報評」には、

「十九世紀の豫言者として思想界の指南車として物質的文明の暗黒を照す光明として世界に欽仰せらるるカーライル、ラスキン、トルストイの三賢を評伝せり、蓋し訳者西学に精しく文学に長じ且つ深く三家の人物に私淑する者故に叙事の繁簡頗る要を得、其風丰紙上に躍然として親しく談論を聴くの想あり云々」(『週刊新聞直言』第2巻第1号、8頁)

と記されている。特に「訳者(天来)西学に精しく文学に長じ且つ深く三家の人物に私淑する者」と記され、天来が、「カーライル、ラスキン、トルストイ」に「私淑」していることを指摘している。

「福音新報評」には、

「訳者の遒勁にして豪宕なる鉄筆を揮ふて世界三大偉人の性情と径行と主義と奮闘と名著と閱歴とを記述せらる、熱誠の筆、雄麗の文、沈痛にして奇趣あり、読去読來の間、人をして天来の聖火に燃され偉人の風丰に接し、正義と人道の爲めに起つと思あらしむ云々」(『週刊新聞直言』第2巻第1号、8頁)

と記され、特に「熱誠の筆、雄麗の文」として、天来の文才が高く評価されていた。

いずれにしても、天来訳補『十九世紀之豫言者』(警醒社書店刊)の書評付広告が載せられた『週刊新聞直言』は、『平民新聞』廃刊後に出された「平民社」の機関誌であった。『平民新聞』は、日露戦争に対する「非戦論」のため、発禁の弾圧を受けた新聞であり、『週刊新聞直言』は、『平民新聞』の後継として当時の社会主義者たちが主に購読していたと思われる新聞であった⁽⁶⁶⁾。

その後、天来訳補の『十九世紀之豫言者』は、いずれも警醒社書店から3分冊に分けられ、刊行されている。それは、『トマス・カーライルと彼が労働の福音』、『社会改革家としてのジョン・ラスキン』、『トルストイ伯の福音』の三冊であり、明治42年(1909)1月20日に発行されている⁽⁶⁷⁾。

第3章 上州に生きる —教育者として—

1. 上州への帰郷

天来が、故郷・上州へ帰郷したのは、明治38年（1905）と思われる。天来は、なぜ帰郷したのか。それは、「大病」し、療養のための帰郷と言われている⁽¹⁾。天来自身も、「東京に漂浪するもの約十年、その間に病を得て故郷に還り、小やかなる草庵を建て、そこに休養するもの三四年であった」と述懐している⁽²⁾。天来宛の内村鑑三書簡の日付からも、天来の住所が、明治37年（1904）11月には、「神田区仲猿楽町14」であったものが、明治38年5月頃から、「群馬県群馬郡国府村小学校前」という宛先に変わっている⁽³⁾。

ところで、天来の「病」とは、どんな「病」であったのか。天来の甥の悦治によると、すでに、『十九世紀之豫言者』の出版頃には、「…叔父天来は年齢三十一歳で、『すでに耳を聾し、眼もまた近視者の一人』となって読書研究にも実に言語に絶する苦勞をしていたのであり、身体も決して健康ではなかったのであった」と言う⁽⁴⁾。天来の体調について、内村鑑三も天来宛の書簡（明治38年5月16日付）の中で、次のように述べている⁽⁵⁾。

「…君の靈魂は君の肉体の如く疲労し居らざるを知り、感謝致し候、…先般君の紹介を以て前橋へ入りし以来、上州は少しく愛すべき所となれり、神、若し機会を与へ給へば再び行くも可なり、殊に君の病を訪ひたく願ふ、上州は深き愛の福音を要す、…御小供御大切になさるべく候、暖氣増すに従ひ、健康は必ずに貴家に臨むべく候、御失望なさるまじく候」（『内村鑑三全集 37 書簡二』）

と言い、上州を訪問し、天来の健康を気遣い励ましていたことを伺わせる。いずれにしても、天来には、聴力や視力に衰えが見られ、日々の学究生活にも困難さを伴っていた頃と思われる。しかし、帰郷後の天来は、明治42年（1909）1月に刊行される『詩聖ダンテの教訓』⁽⁶⁾の翻訳にたずさわっていたと推定される。同書の「言志一束」には、「僕が此書を訳そうと思ったのは今から四年前であった。…けれども如何せん身は廢疾の仰臥三昧、今日は明日はと思ひ乍らも遂ひ遂ひ遷延して、…此九月に出来上がる事になったのである。…明治四十一年九月十九日誌す」⁽⁷⁾、「自序」の最後に「上州群馬郡国府村草庵にて訳述者誌す」⁽⁸⁾とある。つまり、『詩聖ダンテの教訓』の翻訳に、明治38年頃から明治41年まで費やしていたことがわかる。

2. 「共立普通学校」教師時代

上州に帰郷後の天来は、幽谷義塾時代に同窓であった井上浦造との交友も復活したのであろう。明治39年（1906）2月26日、『大間々高校百年史』の記事によると、「住谷天来来遊、午後同氏演説を聴かせる」との記述がある⁽⁹⁾。この頃には天来の健康も回復したものと思われる。

井上浦造は、新島襄の教え子で同志社神学校に学び、群馬県内の沼田、前橋、館林などで伝道生活を送った後、教育界に転じ、大間々町（現みどり市）に「共立普通学校」（現群馬県立大間々高等学校）という中等教育程度の私立学校を創設した。

その後、『大間々高校百年史』の記事によると、明治43年（1910）3月1日に「住谷天来を教師招聘するため国府〔現高崎市〕に出張（泊）」との記述が見られる⁽¹⁰⁾。当時の「共立普通学校」は、創立10周年を迎えて、地域からの評価も高まってきた頃であった。浦造は、学校での教育をさらに充実させるため、恐らく国府村（現高崎市）で生活していた天来をなんとか「共立普通学校」に招聘するべく訪ねたのであろう。浦造は、泊まりがけで天来に自己の教育の理想を語り、天来も浦造の要請に対して協力を申しでたものと思われる。明治43年（1910）3月10日には、「住谷講師歓迎会」を開いている。実質3月中から同校に勤務したのであろうか。同校の「第8回卒業記念写真」（明治43年3月卒業）には、6名の生徒及び「洋装姿の浦造」と「和服姿の天来」が並んで写っている⁽¹¹⁾。ただ、『大間々高校百年史』の在職期間の記録によると、「明治四十三年四月～明治四十四年九月」までとあり、同年4月からの勤務となっている⁽¹²⁾。

ともあれ、明治43年（1910）4月8日が始業式。当日には、「井上校長の訓話、住谷講師演説」との記事がある⁽¹³⁾。当時の教師陣は、井上校長、住谷天来が「国語・漢文」、同校を3月卒業したばかりの今泉清吉（当時、勢多郡新里村出身）が、「数学・物理」、山同富衛が、「簿記」を担当。5月3日からは、住谷天来講師の課外授業『日本外史』が開始されたという。同年7月30日の終業式には、井上校長の訓諭、住谷講師の演説などがあった。同校の「第9回卒業記念写真」（明治44年3月卒業）には、天来が和服姿で卒業生と並んで写っている⁽¹⁴⁾。

さて、在職中の天来の姿であるが、今泉亀雄（共立普通学校・大正2年3月卒）によると、「…私の同郷の今泉清吉さんが四月より夏休みまで住谷天来先生と桐原の西の山麓の家に同居し、九月東京の物理学校に入学するまで数学を教えてくれ、毎土曜日に私と共に

帰り月曜日にまた共に登校しました。土曜日に清吉さんを待つ間、住谷先生より色々な話を聞きました」（『大間々高校百年史』61頁）との回想がある。

この今泉亀雄の話によれば、当時、天来が「共立普通学校」付近の「桐原（現みどり市の西の山麓の家）」に住んでいたとの証言がある。ただ、「住谷天来の略歴」⁽¹⁵⁾によると、明治43年（1910）9月12日、「分家、戸主となる。東国分三四番地」との記録があるので、天来は一時的に桐原（当時の大間々町桐原）に滞在していたのであろうか。

なお、上記の「今泉清吉」は、同校を明治43年3月に卒業し、すぐに母校の教師となった俊才で、その後教師を辞め、東京の物理学校へ進学したという。

『上毛教界月報』第145号（明治43年11月15日発行）に天来は、「天災と天福」と題し、寄稿をしていた⁽¹⁶⁾。

『上毛教界月報』第150号（明治44年4月15日発行）によると、天来は、「共立普通学校」での教師生活の傍ら、キリスト教の伝道もしていたようである。同150号の記事の「原市教会」（三月）の報告によると、「10日夜 後閑会堂に於て演説会を開く住谷天来氏『人生と幸福』と題し演ぜらる来会者50名 11日夜より13日夜迄原市会堂に於て演説会第一夜弁士は柏木義円氏（英雄的行動）住谷天来氏（伝道の快樂）…」⁽¹⁷⁾などの記事があり、天来は、柏木義円とともに伝道していたことがわかる。

柏木義円（1860－1938）⁽¹⁸⁾は、越後国三島郡与板（現新潟県長岡市）出身。新潟師範学校、東京師範学校を卒業後、群馬県碓氷郡内の小学校へ赴任。安中教会に出入りするようになり、同志社に進み新島襄に師事する。同志社卒業後、安中教会の牧師となり、『上毛教界月報』⁽¹⁹⁾を創刊した。

また、『上毛教界月報』第150号の別の記事によると「住谷天来氏」として、かれのことが次のように紹介されている。「住谷天来氏は愈々伊勢崎町に定住して伊勢崎日本基督教会を牧せらるることとなりと…直接伝道界に得たるを単に伊勢崎教会の為に祝すのみならず亦我上毛教界の為に慶する者なり」⁽²⁰⁾ということで、いずれにしても、この頃には、伊勢崎に住むようになりキリスト教の伝道を主とすることになっていくようである。

なお、同年3月20日には、正式に「住谷天来」と「改名届け」を提出している⁽²¹⁾。

『上毛教界月報』第151号（明治44年5月15日発行）の「安中教会」（4月）の報告⁽²²⁾にも、「上毛傳道会の運動2日夜室田町清水藤太郎氏方にて開会。『死と生』柏木牧師『人生と幸福』住谷天来氏聴衆三十余名…」ということで、4月2日から4日にかけて三夜連続で講話をしている。

いずれにしても、明治44年の春頃からの天来には、「共立普通学校」の教師生活から、キリスト教の伝道活動のほうの主となるような生活の変化があったに違いない。

天来の「共立普通学校」の勤務は、明治44年（1911）9月までであった。『大間々高校百年史』の記録にも、明治44年度の天来の記事は、明治44年（1911）10月7日、「午後住谷講師送別会」との記載があるのみである⁽²³⁾。

したがって、「共立普通学校」教師時代の天来は、明治43年の4月からの勤務であったが、同年の夏頃までは、『孔子及孔子教』の著述、明治44年の春頃よりは、キリスト教の伝道も兼ねての教師生活だったことが推定される。

3. 『詩聖ダンテの教訓』の刊行

天来は、上州に帰郷後、『詩聖ダンテの教訓』の翻訳に取りかかっていた。『詩聖ダンテの教訓』（警醒社書店刊）は、明治42年（1909）1月5日発行された。同書の天来の「自序」には、「上州群馬郡国府草庵にて訳述者誌す」とある⁽²⁴⁾。

天来の訳によれば、原著者は、「米人 神洲孟亜（ヂンスモーアー）」（「Charles Allen Dinsmore」）と言った。同書の「言志一束」（明治41年9月19日記す）には、原著者の神洲孟亜（Dinsmore）は、かつてボストン教会の牧師をやっていた人物であったと言う⁽²⁵⁾。同書は、『The Teachings of Dante』を訳したものであった。天来訳『詩聖ダンテの教訓』の構成であるが、全体が5章に分けられている。「断天」、「使命の重荷」、「罪の幻影」、「自由の探求」、「神に上進」の章に分け、「付録」として、「断天が霊界の風土記」を載せている。

ある時、天来は、神洲孟亜（Dinsmore）の著書を手にする事になり、「早々原著者に手紙をやって其翻訳の承諾を得ることになったのである」と、「言志一束」に記している⁽²⁶⁾。すなわち、天来は、原著者に直接、書簡を送り、神洲孟亜（Dinsmore）の著書を翻訳する了承を取り付けたのであった。

天来が同書を訳すにあたって、「言志一束」の中で、次のように述べている。

「…僕も少許^{ばかり}断天（ダンテ）に就て研究する所があつたから、彼の宗教と云う題で、一度卑見^{ママ}を書いて見ようと思ったのである。然るに人物が人物ゆえ研究すれば研究する程、舞台が広く深く成つて来て容易に筆を下すことが出来なく成つて来た」⁽²⁷⁾

と、「ダンテ」についての研究の難解さを述べている。

天来は、「自序」の中で、「夫れ断天（ダンテ）が世界第一等の詩人にして、其著作『神劇』が天下獨超の逸品たることは、…」と言い、「其想の高、其智の深、其情の大、其意の遠、其文の美、其調の妙、真に空前絶後なり」とも言っていた⁽²⁸⁾。また、断天（ダンテ）について、「されば、彼の詩を読むは則ち世界の最高なる人文史を読む也。而して彼の為を学ぶは則ち人類の最美なる発展学を学ぶもの也」と述べている⁽²⁹⁾。

そこで、天来は、『The Teachings of Dante』を、「米人神洲孟亜氏著『断天の教訓』は正しく此大任に当る者にして、彼は確に其聖職の大部分を完全に果したるもの也」と、評価していた⁽³⁰⁾。

そして、天来は当時の日本の社会について、次のように分析していた。

「若し夫れ我国の今日の如く、野拙なる政治と、頽唐なる文学と軽薄なる宗教と平凡なる美術と、緩慢なる道徳と放縱なる生活とあり、而して一方には主我的実利的現金的独占的思想のみ跋扈し、外は列強の促迫に忪々し、内は億兆の窮乏にし、…」

(住谷天来「自序」『詩聖ダンテの教訓』)

と述べ、明治時代末期の閉塞した社会を歎いていた⁽³¹⁾。

すなわち、天来は、当時のこうした日本の社会情勢を憂い、「此の如き人物に接して此の如き書物を学び、以て其中より聖高の教訓を享くるも、決して無用の辯、不急の礼にあらざるを信ず」と、断天(ダンテ)の思想を学ぶことの意義を説いていた。

さらに、天来は、断天(ダンテ)について、次のように評価していた。

「凡そ世に詩人多く、豫言者多く、文人多く、哲人多く、達士多しと雖も、未だ我が断天ほど理性と信仰の光に照らして、宇宙の謎、人生の謎、天地万有の所有る秘密を解決し説教し讚歎し実践せるものは非ざるべし」(住谷天来「自序」『詩聖ダンテの教訓』)⁽³²⁾

いずれにしても、天来は「自序」の最後に、

「仰ぎ冀くば我が敬愛せる同胞諸君、此書に由りて此人に学び深く人生の帰趣目的、天地万有の創造及其発展の法則を了すると共に、其品性を研き、其気魄を養い、神人融会、万物一如、以て其事業とを簇々として円成し来らば、啻に一身の幸のみならず亦実に世界万民の福也」(住谷天来「自序」『詩聖ダンテの教訓』)⁽³³⁾

と結び、断天(ダンテ)の思想を学ぶことの意義を強調していた。

その後、天来訳『詩聖ダンテの教訓』を、柏木義円が『上毛教界月報』第124号(明治42年2月15日発行)⁽³⁴⁾の「新刊紹介」において、次のように評価していた。

柏木は、「訳者住谷天来君敬虔誠実且つ篤学の士特にダンテには造詣深しと聞く此書を著訳する者は重厚敬虔君の如き士にして始めて之を能くすなり此頃君より本書の寄贈を得て直ちに尊敬の念を以て之を繙読せり」(『上毛教界月報』第124号)と言い⁽³⁵⁾、信仰心の厚い誠実な人柄である天来が訳しているからこそ、ダンテのような思想家の翻訳ができるのであるとの見解を示していた。

天来は、同書の出版後、ただちに『詩聖ダンテの教訓』を柏木義円に贈ったようである。柏木は、「予はダンテの神曲を読みしことなくダンテに於ては全く門外漢なり去れば勿論本書を評騰するの資格なし然れども読み了て深き教訓の心痕に残るものあり…」⁽³⁶⁾、さすがの柏木も、天来の博識に感嘆していた。

4. 『孔子及孔子教』の刊行

住谷天来著『孔子及孔子教』は、明治44年（1911）6月23日、警醒社書店より刊行された⁽³⁷⁾。定価50銭。『孔子及孔子教』は、同書の「凡例」によれば、もともと内村鑑三主幹『聖書之研究』第50号（明治37年3月発行）～第55号（明治37年8月発行）に載録された「孔子及孔子教（1）～（6）」を前半部分に、後半部分は、7年後に天来が起稿した内容を補って完成されたという⁽³⁸⁾。

『孔子及孔子教』が発行された明治44年6月は、まだ天来が、井上浦造が創設した「共立普通学校」に在職中であった⁽³⁹⁾。同書の「自序」の末には、「浅間山頭の夕照を見つゝ 群馬の野、国府草庵にて 住谷天来 謹誌」と書かれている⁽⁴⁰⁾。ただ、「凡例」の末には、「明治43年8月 著者 いふ」と、書かれているので、恐らく明治43年頃には脱稿されていたものと推定される。

天来の「自序」には、「本書は東洋の大聖人と夙に江湖より賞め揚やさるゝ孔子其人の性格と教訓とに就き最も大膽に直截に評論を試みたる者也。…」と記されている⁽⁴¹⁾。そこで、同書は、従来一般的な孔子の思想に対して、天来独自の批判的な「孔子論」であると言われている⁽⁴²⁾。天来は、同書の意義を、

「真乎に彼の人物と其教義目的の利害得喪を知ると共に、新時代の新人の為に、新天新地を造るべき聖なる天職の自覚となり、人格発展の一助となり、崇徳広業の手引となり、以て進歩と向上と文明の大成とに聊かにても貢献する所あるを得ば実に無上の光榮たる也」（住谷天来「自序」『孔子及孔子教』）

と言う⁽⁴³⁾。

また、同書には、内村鑑三が「序言」を寄せている⁽⁴⁴⁾。そもそも、同書の前半部には、『聖書之研究』に載録された「孔子及孔子教（1）～（6）」の内容が載せられていたものであり、その関係からも天来は、内村に序文を依頼したのであろう。

内村の「序言」には、

「余の友人住谷天来君は其性来の質より謂ふも、亦其学問の性質より考ふるも純粹の漢学者である。然るに此人が孔子を師として仰がずしてナザレ人イエスに弟子として事ふるのである。余が特に君を敬する所以は茲にある。又君の孔子論の特に敬読すべき所以も亦茲に在ると思ふ。… 千九百十一年五月十五日 東京市外柏木に於て 内村鑑三」（内村鑑三「序言」『孔子及孔子教』）

とある。内村は、天来が「漢学者」でありながら、「孔子」を師として仰がずに、「イエス」を信じるキリスト者であることに注目していたと思われる。

天来がいつ頃、内村に「序言」を依頼したのか定かではないが、内村の天来宛の書簡（明治44年5月2日付）が残されており、内村は、「貴兄の『孔子論』に対して小生が序文を綴るとは少しく当を失するように思われ候得共、貴兄を世に紹介することは出来候間貴命に従い申すべく候、…」と述べている⁽⁴⁵⁾。結局、「序言」は、「5月15日」の日付となっていた。内村が、天来の著作を「世に紹介する」との思いが知れる書簡である。

内村は「序言」で、天来について、「…君は独立の人である。而して独立の立場からして、君が最も深く親める孔子に於て斯く言はるゝのである」と言う⁽⁴⁶⁾。

さらに内村は続けて、「…人類の首は孔子ではない。孟子ではない、釈迦ではない、ソクラテスではない。キリストと称られしナザレ人イエスである。而して彼の十字架の下に立ってのみ、孔子も釈迦もソクラテスも正常に解することが出来るのである」と、内村自身の見解をも語っている⁽⁴⁷⁾。

そして、内村は「序言」の最後で、「住谷君の孔子論は此立場より観たる孔子の評価である、其の我邦に於て異例なるは茲に在る。余は邦人の或者が君の此著に由りて大に啓発せらるゝ所あるを信ずる」と結び⁽⁴⁸⁾、キリスト者としての天来の著作（『孔子及孔子教』）に見られる「孔子論」の本質を述べている。

この『孔子及孔子教』に対して、早速、柏木義円が『上毛教界月報』第154号（明治44年8月15日発行）において、同書を紹介している。柏木は、

「…今日国民人格の思想を根底とし人權の概念を骨子とする立憲政体を実現しつゝあるの時此矛盾極むる儒教復活論を唱るなど実に此れ徒勞である此時に方て本著出で斯る論者の迷謬を破り国民をして帰嚮する所を知らしむるは最も時代の要求に応じたものと謂わざるを得ない」（『上毛教界月報』第154号）

と言い⁽⁴⁹⁾、天来の「孔子論」を支持している。

その後、『孔子及孔子教』は、大正の末には、絶版になったようであるが、昭和10年（1935）6月に新生堂より復刊された⁽⁵⁰⁾。天来の「第三版の刊行に際して一言を付す」（昭和10年3月3日）によれば⁽⁵¹⁾、

「…此小著が意外にも当時の識者として一世に名高き内村鑑三氏を始め、朝比奈知泉や、内田不知庵や、黒岩涙香や、堺枯川や、河上肇や、賀川豊彦等の諸先生の注目する処となり、此等の人々から推賞せられ、是は良い書物だ、痛快な評伝だ、興味深い

有益の書物だと裏書きされた事を聞いて心私かに光栄とする処であった」と述べられており、天来の著作に対し、なかなかの評判があったことが知れる。

昭和初期の暗い世相のなかで、あえて同書を復刊した背景に、天来の思いを、次の言葉に読み取れる。

「されば、東亜の聖人たる孔子の見方も、老子の見方も、乃至莊子や墨子などの観方も、新しい日本人の眼を開いて、之を新しく見、新しく検べて、その内容に籠れる真理の光を出来得る限り、深く、広く、高く、遠く、世界の津々浦々まで放送し伝達しなければならぬ」（住谷天来「第三版の刊行に際して一言を付す」）

と述べ、同書の復刊の意義を説いている⁽⁵²⁾。

こうして、『孔子及孔子教』（三版）は、好評を得たらしく、『聖化』第104号（昭和10年8月5日発行）には、同書の広告として、『聖書知識』、『信望愛』、『福音新報』の三紙からの批評が載せられている⁽⁵³⁾。

「『聖書知識』評」（塚本虎二主筆）には、

「…天馬空を行くような縦横無尽豁達自在なる評論である。…又曰くこれ住谷氏の独壇上である。孔子と孔子教とを『新らしい日本人の眼を開いて之を新らしく見、新らしく検べて』紹介されたものである。…本著が他の追随を許さぬ点である。…」（『聖化』第104号）

という評価がなされている。

また、「『信望愛』誌評」（金澤常雄主筆）では、

「漢学者にして儒学に造詣深き住谷氏が独自の立場より孔子の人物及思想を精細に縦横に論評し、…先生の豫言者的の熱意と気魄とが書中に躍動しており、…」（『聖化』第104号）

と述べられている。

さらに「『福音新報』評」では、

「…文章雄健一字一句を苟くもせざる慨がある我祖国に於ける同労者中漢^(マウ)字の造詣深きに至りては君の右に出る者は殆どないのではあるまいか、君にして初めて是の快著を著す事が出来たのである…」（『聖化』第104号）

との評が載り、いずれにしても同書の高評価が知れる。

第4章 キリスト者として ―平和への思い―

1. 前橋教会など、県内各地での伝道

天来は、上州へ帰郷後、前橋教会など、県内各地の教会とかかわりがあった。

『上毛教界月報』第94号(明治39年8月15日発行)⁽¹⁾の「前橋教会記事(7月)」によると、「宗教学術夏期講話会」として、「7月27日午前9時講話」、「イプセンのブランドに学べ」との演題で、天来が講話している記事が見られる。なお、同講話会の講師として、他に「山室軍平、柏木義円、松村介石、堀貞一」らの名前がある。

『上毛教界月報』第97号(明治39年11月15日発行)⁽²⁾の「前橋教会記事(10月)」によると、「10月21日 礼拝には住谷天来氏有益なる説教を為されたり氏は兼ねて病弱の身を努めて我教会を援助せらるゝは感謝に堪えざる所あり」とあるので、天来は、帰郷後の病身を押しながらも、前橋教会を援助していたことが知れる。

『上毛教界月報』第99号(明治39年12月15日発行)⁽³⁾の「高崎教会記事(12月)」によれば、「(12月)9日の日曜は牧師不在の為め住谷天来君に礼拝説教を依頼せり」との記述がある。

『上毛教界月報』第101号(明治40年3月15日発行)⁽⁴⁾の「碓氷郡の大挙伝道」によると、「(3月)9日夜『時代の要求と基督の精兵』と題し演説」している。

『上毛教界月報』第102号(明治40年4月15日発行)⁽⁵⁾の「前橋教会記事(7月)」によると、「第2回宗教学術講話会」として、「3月26日(火曜日)午後2時『人とは何ぞや』」と題し、天来が講演している。同講話会の講師として、他に、「安部磯雄、柏木義円、松村介石」らの名前がある。当時の前橋教会の牧師は、堀貞一であった。堀は、新島の弟子で同志社出身。明治32年から、前橋教会に来ていた。ところが、明治42年7月に、ハワイの教会の招聘を受けて赴任することになり、前橋教会を辞任した。その結果、次の牧師が着任するまでの間、天来が礼拝説教を担当することとなった⁽⁶⁾。

『上毛教界月報』第130号(明治42年8月15日発行)⁽⁷⁾の「前橋教会記事(7月)」によると、「後任牧師人選中毎日曜の礼拝説教を住谷天来氏に委嘱す」とある。

以後、明治43年(1910)1月に、野口末彦牧師を迎えるまでの約半年間、天来が礼拝説教を担当したようである。なお、後任の野口末彦は、井上浦造と同志社神学校を同期で卒業した人物であった⁽⁸⁾。いずれにしても、上州に帰郷後の天来は、前橋教会を始め、高崎、安中など、県内各地の教会とも関係を持ったことが知れる。

2. 「伊勢崎教会」牧師時代

明治44年（1911）3月20日、正式に「改名届け」を提出し、氏名を「住谷弥作」から「住谷天来」と名乗るようになった⁽⁹⁾。このことは、天来が、「牧師としてキリスト教会と共に歩もうとする意思表示」であったと指摘されている⁽¹⁰⁾。

天来が、伊勢崎教会牧師となったのは、明治44年4月頃からと推定される。『上毛教界月報』第150号（明治44年4月15日発行）⁽¹¹⁾によると、柏木義円は、

「住谷天来氏は愈々伊勢崎町に定住して伊勢崎日本基督教会を牧せらるゝことゝなりと吾人は氏の如き学識あり気節あり篤実真挚敬虔誠信の人を直接伝道界に得たるを単に伊勢崎教会の為に祝すのみならず我上毛教界の為に慶する者なり」

と言い、天来の伊勢崎教会の牧師就任を喜んでいる。

伊勢崎教会は、明治21年（1888）、日本基督教会として設立された⁽¹²⁾。伊勢崎周辺農村の養蚕、製糸関係の農民信徒が多かったという。明治30年代の第6代牧師には、富永徳磨が就任していた。天来は、同教会の第9代牧師として、『伊勢崎教会年表』に記されている⁽¹³⁾。

天来は、大正元年（1912）8月、日本基督教会試験委員長井深梶之助に、説教草案「ダンテの罪悪観及ヨハネ伝首章十四節」を提出。同年10月、仙台での日本基督教大会で教師試験に合格、牧師資格を取得。同年11月18日、星野光多^{みつた}（1860－1932）、山本秀煌^{ひでてる}（1857－1943）⁽¹⁴⁾から伊勢崎教会で按手礼を受けた⁽¹⁵⁾。星野光多⁽¹⁶⁾は、上野国利根郡戸鹿野村（現群馬県沼田市）出身。上州から横浜に出て、キリスト教に入信。慶応義塾などに学ぶ。明治17年には、上州の西群馬（高崎）教会牧師となり、伝道に努めた。その後は、フェリス女学校教頭、東京の両国教会、芝教会の牧師となった。

大正3年（1914）の「伊勢崎教会所在地変更及び担任教師変更届」（伊勢崎市役所文書）によると、「大正3年5月1日 佐波郡伊勢崎町1441番地ノ4 住谷天来」という書類が残されている⁽¹⁷⁾。その後、大正7年頃まで、同教会の牧師をしていた。

天来は、以後、主にキリスト教牧師として活躍するのだが、

「僕は霊界に入りて牧師として活動し、宗教と道德と文学の方面に力を尽した。而も天地の公道に基づき、神の国と神の義とを求め、キリストの福音に拠りて、社会の革正と人心の聖化とを企図し、此世の禍たる悪魔の征服を以て主眼とする…」

とのちに語っている⁽¹⁸⁾。特に「社会の革正と人心の聖化とを企図」という天来の言葉に、

後年創刊される雑誌、『聖化』の由来を感じる。

また、天来の伊勢崎教会時代には、「桐生教会」へも応援に出かけていた。『教会百年史』（日本基督教団桐生教会）によると、

「明治44年7月11日、…伊勢崎教会より住谷八朔氏来らる。同夜演説会を聞き、住谷氏『何故に善をなすや』と題して語られたり。…新任牧師村田四郎氏の就職式執行せらる。…住谷氏は伊勢崎教会を代表して祝詞を述べられる。…」

という記事がある⁽¹⁹⁾。

なお、大正2年（1913）の記録にも、「…八月以降ヨリハ伊勢崎教会牧師住谷天来氏ニ毎週一回ツツ来援ヲ乞ヒ…」とあり、前任牧師がわずかの期間で辞任のため、天来に応援の依頼があったことが知れる。大正3年（1914）の記録にも同教会に来援している記録があり、『教会百年史』の編著者は、「彼（天来）は耳の病気があり、文筆活動を中断していたのであったが、牧師としての活動は熱心であったようで、桐生教会はその彼（天来）の熱心な伝道に大いに恵まれたと言えよう」と記している⁽²⁰⁾。結局、大正4年の秋頃まで、続けていたようである。

3. 「甘楽（富岡）教会」牧師時代

天来は、明治末からは、伊勢崎教会（日本基督教会）の牧師をしていたが、大正7年4月頃から、甘楽教会（組合教会）の牧師となる⁽²¹⁾。甘楽（富岡）教会は、明治17年（1884）に群馬県北甘楽郡南後箇村（現富岡市）に、海老名弾正から受洗した信徒を中心に設立された甘楽第一基督教会に始まる⁽²²⁾。明治21年（1888）には、富岡製糸場前に会堂が建築され、信徒のなかには、富岡製糸工女もいたという⁽²³⁾。

そこで、天来が、甘楽（富岡）教会の牧師となった経緯であるが、大正7年（1918）2月24日、甘楽教会の「臨時総会」において、「住谷天来を我が教会牧師とし迎える様お願いすべく決定」されていた⁽²⁴⁾。その後、3月7日の記録には、「伊勢崎日本基督教会牧師住谷天来先生には、今度の前進伝道応援のため多忙中の処をわざわざ御来着せられ、…午後7時半より教会に於て伝道会を開く」とあり⁽²⁵⁾、天来は早速、甘楽教会へ出向いて伝道している。また、3月17日の「（甘楽）教会総会」の記録によると⁽²⁶⁾、

「伊勢崎教会牧師住谷天来先生には、我が教会牧師として身を献げられる事を心善く受けられ、四月第一日曜より我が教会牧師として礼拝説教をなさる由。総会の決議により須藤、荻野の二氏伊勢崎町へ住谷牧師の当教会牧師として依頼すべく19日に趣かる」（『甘楽教会百年史』）

とあるので、天来は依頼があつてから、すぐに決心したのであろう。

大正7年4月7日には、天来の「初説教」があり、4月17日に「住谷天来牧師歓迎会」が開かれた。「斉藤代議士の歓迎の辞」があり、天来の「感謝の辞」が、「我甘楽教会の教会名称の如く、甘じて楽しく居るのみならず、奮然として此の地方のために立たねばならぬ。其の一大責務あるを痛切に主張せられた」と記されている⁽²⁷⁾。

「斉藤代議士」とは、斉藤寿雄（1847－1938）のことであり、斉藤は、富岡出身。医師・地方政治家・衆議院議員として活躍した。新島襄が、日本に帰国後安中伝道に赴いた時、斉藤は、新島に出会い、のちに海老名弾正から受洗、甘楽教会の設立に力を尽くした⁽²⁸⁾。いずれにしても、天来の甘楽教会の赴任の背景には、斉藤や柏木義円の推薦があつたと言われている⁽²⁹⁾。

『上毛教界月報』第237号（大正7年8月20日発行）には、同年7月、天来や柏木義円ら上州の組合教会牧師たちが、軽井沢の「教師会」に出かけている記事がある⁽³⁰⁾。この間、天来は、同地に滞在していた尾崎行雄と面会しており、天来筆「軽井沢の六日」

に、その時の感想を述べている。天来は、

「就中面白かりしは尾崎行雄君を訪問して其政見を聞いた時、其率直にして真摯にして浩々落々の風度襟懐人をして言外に無限の妙味を悟らしめ、彼が懐抱する民主々義には心中少なからず、同情同感を催した事である。近き日本の将来に於て平民的首相たるべきものは夫れ尾崎君如き人物ではあるまい乎」（『上毛教界月報』第237号）⁽³¹⁾、「彼（尾崎）が懐抱する民主々義」に対して、共感したと述べていた。また、政治家として「平民的首相」にふさわしいとも言い、尾崎行雄を高く評価していた。このことは、大正期の日本の政治にかんする天来の政治観が知れる内容である。

大正10年に入って、天来は、再び「桐生教会」（日本基督教会）へ伝道の応援に出かけている。「桐生教会」の記録によると、同教会は無牧となり、「住谷天来に援助を仰ぐ」ことにした⁽³²⁾。桐生は、富岡から遠距離であるが、天来は、「毎月」出張して礼拝の説教をしたり、深い学識による講義をしたりして、信仰を深く養えるよう指導したという。

その他、大正10年（1921）2月28日、「福島裁縫女学校」の記録によると、天来は同校の「修身、作文、習字」を担当していた⁽³³⁾。「福島裁縫女学校」は、当時の甘楽郡福島町（現甘楽町福島）に、大正9年「山田しん」（同教会の信徒）によって設立された私立学校であった。なお、同校は富岡に移転後、校名を「山田裁縫女学校」と変更している⁽³⁴⁾。

同年3月14日、「高崎教会」の特別伝道に応援。4月29日、「足利教会」において説教。5月16日には、「高崎警察署」にて、管内の警部巡査に対して、「人格の完成」という題で講話した⁽³⁵⁾。いずれにしても、この頃は、桐生、足利、高崎などの教会はもちろん、「福島裁縫女学校」での教育や、時には、警察署などでも講演を行うなど、天来の活動が多方面に渡っていたことが知れる。

大正10年9月24日、「牧師学事会（下仁田）で講話」の記録によると⁽³⁶⁾、

「午前十時住谷牧師は、下仁田町を中心として其付近八ヶ村の小学校長及教師達の学事会に臨み『教育と宗教』としての現代の誤れる偏智教育、科学万能、知識全能の迷信、即ち魂抜きの教育が明治より大正にかけて大失敗を来せる実例を挙げて其欠点を指摘し、之を救うものは一に宗教の力、即ち神の前の第一人として靈魂の尊厳を認め其教養にあることを高調し、…」（『甘楽教会百年史』）

とあり、当地方の教師達を前に、キリスト教牧師としての天来の教育観を訴えていた。

大正11年（1922）10月20日、「住谷美津子葬儀」の記録によると⁽³⁷⁾、天来

の妻美津子が死去し、葬儀が行われた。「二十日住谷牧師夫人美津子の葬儀を当教会にて執行。会葬者二百余名。聖書朗読金澤常雄氏、祈禱太田九之八氏、略伝徳江亥之助氏、説教柏木義円氏」等によって行われたとある。

当時の金澤常雄（1892－1958）は、桐生教会（組合教会）の牧師であった⁽³⁸⁾。富岡出身で、旧制一高時代には、内村鑑三の「柏会」に属していた。太田九之八は、同志社出身で、佐野教会牧師であり、当時『上毛教界月報』の「発行兼印刷人」であった人物である⁽³⁹⁾。徳江亥之助は、前橋のクリスチャン弁護士であった。

また、「夫人の略伝」が『甘楽教会百年史』の「1922年（大正11年）10月20日」の記事に載せられており⁽⁴⁰⁾、それによると、美津子は、「茨城県新治郡田伏の豪士服部市右衛門の長女也」とある。幼児には、水戸や土浦にいたというが、父の財政上の失敗があり、上州の伊勢崎に移ったという⁽⁴¹⁾。その後、前橋に住んでいたが東京に出て、明治31年（1901）、「父と特別の信仰上の親みありし住谷牧師と結婚した」とある。なお、両者の結婚には、天来の友人の井上浦造が縁談を斡旋したともいう。明治33年（1900）に長男^{あつし} 穆⁽⁴²⁾、明治35年（1902）には、長女静江が生まれている⁽⁴³⁾。

美津子夫人の死後、天来は再婚している。大正12年（1923）4月18日の「住谷牧師再婚」によると⁽⁴⁴⁾、「住谷牧師は神戸の人伊達朝江と結婚し、東京牛込教会の牧師田島牧師司式の下に芽出度後室を迎えられたり。翌日教会員一同を教会に招き夫人の披露をなせり」と記録されている。「東京牛込教会の牧師田島」とは、田島進のことで、上州碓氷郡磯部の出身で、内村鑑三とも交友を持ち、「札幌独立教会」の主管を経験していた人物でもあった⁽⁴⁵⁾。

大正12年5月27日の「桐生教会」の記録によると⁽⁴⁶⁾、「住谷天来氏を聘して文芸講演会を催し、ドストエフスキの『白痴』に関する講義を聴けり。会衆二十三名あり」、7月の記録にも、「住谷天来氏の文芸講演会『罪と罰』についての話ありき」、10月の記録にも、「住谷天来氏の『墨子の非戦廢殺主義』という講演ありて」とある⁽⁴⁷⁾。いずれにしても、この頃、「桐生教会」へ出向き盛んに講演していたようである。特に、「墨子」にかかわる講演は、天来の「非戦論」の主張として注目される。

大正13年（1924）4月9日には、越後長岡教会の逢坂信悉牧師を迎え、甘楽教会では、「特別伝道説教会」を催している⁽⁴⁸⁾。逢坂信悉は、新潟出身で、札幌農学校に学び、内村鑑三の影響を受けていた。同年4月24日には、天来は、安中教会金蘭青年会に

において文芸講演会。その講演内容は、「ユーゴー翁の『ノートルダム・ド・パリー』に就き約二時間余」に及んだという⁽⁴⁹⁾。

大正13年も天来は、「桐生教会」において、「日曜日の礼拝説教と、一ヶ月に一回の割合で『文芸講演会』を開いていた」という⁽⁵⁰⁾。同年3月24日の夜の文芸講演会では、『カーライルの哲学と人生』、同年4月23日の夜の文芸講演会では、『カーライルの哲学と宗教』の講演をしたとの記録がある⁽⁵¹⁾。「カーライル」の講演は、『英雄崇拜論』の訳を出版している天来にとっては、得意の内容であったに違いない。

大正14年(1925)6月20日、甘楽教会の「文芸講演会」の記録によれば⁽⁵²⁾、

「当日は『自然の征服乎将た人間の征服乎』と題して仏文豪ユーゴー翁の傑作を例に引き、人間の力の如何に偉大にして外界の圧迫、自然の威力も尚微々たる人間の靈力には勝ち難き事実と、愛の力をして神の如き美しき壮大厳肅の働を奏するかを高調して、会衆一同大に感興を催したり」(『甘楽教会百年史』)

と記され、天来らしい格調高い講演をしていたことが知れる。

同年9月15日には、「札幌独立教会の牧師金澤常雄君、久々にて郷里富岡に帰省せられしを好機として、同氏に依頼し十五日の夜宗教講演会を教会に於て開く」とあり⁽⁵³⁾、天来は自身以外にも、各地から牧師を呼び、説教や講演などを依頼していた。

4. 『聖化』の創刊

『聖化』は、昭和2年（1927）1月10日、「編輯兼発行人 住谷天来」、「印刷人 住谷朝江」、「発行所 聖化社（群馬県富岡町31番地）」として、「第1号」が発刊された⁽⁵⁴⁾。定価1部10銭、タブロイド版の月刊スタイルであった。昭和14年（1937）6月の第149号まで続き、昭和時代の「戦時体制下」のなか、「非戦・平和」の言論を展開した雑誌として注目されている⁽⁵⁵⁾。天来は、すでに20代で郷里上州の『上毛之青年』（上毛青年社発行）で、30代では東京に出て、『警世』（警世雑誌社発行）のジャーナリストとして活躍した経験があった。

『聖化』の創刊当時、天来は「甘楽教会」の牧師であった。『聖化』第1号（昭和2年1月10日発行）の「題詞につきて」によると、『聖化』の創刊前に、『神の国』という雑誌を約2年ほど謄写版で、毎月1回発行していたという⁽⁵⁶⁾。しかし、「世の為め神の為に」と新たに『聖化』を発刊した。

天来は、「題詞につきて」⁽⁵⁷⁾で、

「目下新時代の悩みたる文明の没落と文化の衰頹とに際して、日々に悪化せる人心の現状を見ては如何に無情の木石と雖も亦声涙なきを得ないであろう。我等は茲に奮然として此大勢に反抗し、忽然こゝに一転期を劃して、之を善化し、美化すると共に、…」（『聖化』第1号）

と言ひ、昭和初期（当時）の世相を憂いている。続いて天来は、

「社会を挙げて国家をあげて俗化、醜化、禽獣化—さながら地獄の再現かと思はるゝ悽愴たる雰囲気の裡に悲鳴をあげて困転せる衰々たる兆民の生活を高め、之を助け、之を救い、其精神をして生命をして、雪の如く花の如く将た又之を玉の如く、純化し、聖化すると同時に…」（『聖化』第1号）

と述べ⁽⁵⁸⁾、国家社会の人心・精神の退廃を歎き、これを救おうとしている。

さらに、天来は『聖化』の命名の由来について、

「…神の如き全き聖境、至幸至楽の新天地に到達して何者囚われざる天賦の自由を味はしめんが為めに、敢信仰の冒険を企てゝ聊か天路の峻阪をよづる指導者の任に当たらんとするものである。思へば任重くして遠しである。…以て其尊き使命を十分に果たさん哉だ。是れ『聖化』の名ある所以である」（『聖化』第1号）

と言ひ⁽⁵⁹⁾、キリスト教牧師としての重責を述べ、その任にあたることを決意している。

この『聖化』第1号に、「歌ならぬ歌（まぼろし観人）」という題で、短歌が数首載せられている。そこに、「木がらしや 野に独り牧師たつ その痩せ姿威しくもあるかな」という句がある⁽⁶⁰⁾。この句には、まさに『聖化』を発刊し、これからこの雑誌とともに、キリスト教牧師としての気概を持ち、歩もうとする天来自身の姿を見る。

こうして天来の発行し続けた『聖化』は、「…あの帝国主義期の天皇制国家権力のもとでもなお、非妥協、非寛容な姿勢を堅持したのであれば、『聖化』にみられる彼の一連の言論は、忌わしい時代にあっても、そこから身をそらさずに生き抜いた闘いの言論であった」（門奈直樹「解説—『聖化』と非戦のジャーナリズム」）と評価された⁽⁶¹⁾。

また、『聖化』は天来が、「和漢洋の古典に通じた深遠な学識をキリスト教という信仰に凝結した信念を、文章として客観化し、普遍化して、自由と平和と愛をこの小雑誌に執筆した」（萩原進「軍国主義時代の憂国警世の雑誌」）とも言われた⁽⁶²⁾。

そして、「時代の流れとはいえ、官憲の弾圧の下『聖化』を廃刊しなければならぬ状況のなかでも天来は、自己の信念を曲げえなかった。孤立状態になっても自己の信念を曲げることなく、それを貫いて生きた住谷天来を、内村鑑三と同類の気質を備えた典型的な上州人と捉えることができよう」（久保千一「住谷天来—非戦の思想家」）とも指摘されている⁽⁶³⁾。

いずれにしても、天来は、「これまで上州に縁の深いキリスト者というと、新島襄、内村鑑三、柏木義円の三人があげられてきた。この三人は、キリスト者としてのみならず近代日本を代表する人物といってよい。ところが、『聖化』に接した今、三人だけでなく、どうしても天来をくわえて四人にしなければならない…」（鈴木範久「新島襄、内村鑑三、柏木義円そして住谷天来」）とも評価された⁽⁶⁴⁾。

5. 内村鑑三との交友と「上州人」の詩

住谷天来と内村鑑三の最初の出会いがいつ頃であったのか、それは恐らく、明治29年（1896）7月の基督教青年会主催の「第8回夏期学校」（静岡県興津）であったと思われる。いずれにしても、天来と内村の交友は長い年月にわたり続いた。内村は、昭和5年（1930）3月に亡くなるが、天来は、内村の回想をいくつかの文章として残している。天来の「内村先生の印象」によると、「私の眼に映じた先生は我国近代に於ける、尤も超群の豫言者であり、詩人であったと思うものであります」と言い、また、「彼のものした、宗教論でも、亦はその感想文でも、確に詩であり、豫言であります。此点に於ては明治から昭和の始めにかけて彼に匹敵するものは我が精神界に一人も無いと申しても決して過言でないと思ひます…」とも言っている⁽⁶⁵⁾。すなわち、天来は、内村のことを「豫言者」、「詩人」として捉えていた。

これに対し、内村は、天来のことをどのように思っていたのか。同郷の田島進のことともあわせて、内村は、「賛成の辞」『聖書之研究』第231号（大正8年10月10日）⁽⁶⁶⁾にて、次のように述べている。

「田島君は日本基督教会の教師であつて、余は無教会信者である。然かも我等信仰的交際を継続して茲に二十余年、互に助け慰め励まして今日に至つた。蓋し君は上州人にして余と同国である。住谷天来君を加えて我等三人、馬鹿正直の外に何の頼む所なくして基督教の宣伝に従事す。住谷君は漢学者、田島君は神学者、余は農学者である。三人やや稍情性を共にし、全く信仰を同うす」（『聖書之研究』第231号）

内村は、田島進、住谷天来との間には、「信仰的交際を継続」していると言い、固い絆があることを示している。また、三人は、自分と同国である「上州人」で、「馬鹿正直の外に何の頼む所なくして基督教の宣伝に従事す」と言う。内村は、天来のことを「漢学者」と言い、キリスト教については、「全く信仰を同うす」との認識を示していた。

次に内村鑑三の「日記」を手がかりに、天来と内村との交友関係、内村が天来に贈った「上州人」の漢詩⁽⁶⁷⁾について考察してみたい。

「大正10年6月14日（火）雨 朝八時、柏木を出て、雨の中を、高崎を経て伊香保に来た。その美き空気と温泉とにより、そこないし健康を取り返さんがためである。上州は余の祖先の墳墓の地である。その山川は、余の幼時をはぐくみしものである。榛名山の中腹に宿りて、余の母に抱かれて眠るがごとき気持ちがある」（『内村鑑三

日記書簡全集2』) (68)

内村は、高崎藩出身の武士の子として江戸にて生まれるが、故郷の山河に戻り、癒されていた様子が読み取れる。

「大正10年6月18日(土) 雨 上州に来て、余を大歓迎してくれる者がただ一人ある。それは、富岡組合教会の牧師、住谷天来君である。君は余と、同国、同信、同主義の人である。…天来君一人が上州にありて、上州は余にとりて失われたる国ではない。…」(『内村鑑三日記書簡全集2』)

と述べ(69)、内村は、天来のことを「同国、同信、同主義の人である」と言い、天来と深い同志意識を持っていたことが知れる。また、同日、天来が内村の体調を気遣い、「陸放翁」の句を贈った記述があり、これに対し内村は、「ありがたし、ありがたし。牧師にしてこの慰言を送ってくれる者は、全世界に天来君一人あるのみ」とも言い(70)、天来に対する内村の強い信頼がうかがえる。

「大正10年6月20日(月) 晴 雨晴れ、頭脳もまた晴れた。久しぶりに天然の美を楽しんだ。住谷天来君、わざわざたずね来たり、言いがたき喜びであった。われらは時世と教界と詩と歌と、ダンテとゲーテとラスキンと、旧約の預言と近代の地質とについて語った。またと得がたき好き交友の快樂であった」

(『内村鑑三日記書簡全集2』)

と言い(71)、天来と内村は当時の社会情勢はもちろん、キリスト教界のことや、「ダンテとゲーテとラスキンと」というように、宗教・哲学・文学などを語り尽くしたのであろう。

「大正10年6月21日(火) 半晴 住谷君、われを辞し去った。君を送り、緑陰繁き渋川街道を下ること数丁、固き握手を交えて別れた。…」とあり、天来は、内村に「訪内村先生於香山」と題し、漢詩二首を賦した(72)。その一首に、「仰視赤城青 俯瞰刀水白 浴後踞楼閣 宛然似仙客」(「注 仰ぎ視る、赤城の青きを。俯して瞰う、刀水の白きを。浴後、楼閣に踞る。宛然、仙客に似たり」)と詠んだ(73)。さらに続けて、内村は次のように記した。

「『住谷君、われらは上州人である。ゆえに、知恵や策略においては、とうてい江戸ッ子児や肥後人には敵わない。…われらは今より、牧師または伝道師と呼ばれまい。キリスト教の儒者と呼ばれよう。…われらは、たいていの事は武士道をもって解決する。外国人にはたよらない。聖書はありのままに信ずる。…昔の儒者が論語を教えたその代わりに聖書を講ずる者、それがわれらである。上州的蛮カラ的伝道師として行

り通そう』と。君、諾して去る」（『内村鑑三日記書簡全集2』）

との言葉⁽⁷⁴⁾に、内村の「上州人」観を知ることが出来る。まず、内村は「江戸」生まれなのに、自身を「江戸ッ子児」でないと言う。また、「基督教の儒者」、「武士道をもって解決する」との言葉に、「武士道に接ぎ木した基督教」という内村の宗教観が伺い知れる。ここで内村は、自身を「上州的蛮カラ的伝道師」と言い、天来と共に「上州人」としての魂を持ち、基督教の伝道にあたりたいとの思いを日記に記したのではないか。

「大正12年8月21日（火）曇 …富岡町の住谷天来君より、見舞の書面に、左の短歌をしるして送られた。

友あらず光は乏し、しかはあれど 君ゆえ、われは一つ道ゆく

比（たぐ）いなき力を人に見せつべき 奇跡の人と君なりにけり

三十余年間、親交を続け来たりし君のごとき信仰の友あるがゆえに、背教者続出する日本今日の信仰界にありてもなお、わが信仰を維持することができて、神に感謝する。…」（『内村鑑三日記書簡全集2』）

と、内村は述べていた⁽⁷⁵⁾。上州・甘楽（富岡）教会の牧師として伝道に当たっていた天来は、当時の心境を和歌として内村に伝えるとともに、内村に対する尊敬の念を語っていた。内村にとっても、天来はまさに、「信仰の友」であった。

大正13年（1924）8月18日から、内村は、上州へ向かった。渋川、沼田、中之条経由で四万温泉に行った。

「大正13年8月20日（水）半晴 …久しぶりにわが故郷の上州に入り、多くの上州人を見た。多くのわがお父さんに似たる人を見て、なつかしかった。…物を問えば、わが尋ねざる事までを語る。もちろん上州人にも悪人がある。されども透明なる彼らは陰険の人たらんと欲するも得ない。彼ら、自己を隠さんと欲するも、あたわず、…」

（『内村鑑三日記書簡全集3』）

と言い⁽⁷⁶⁾、上州の庶民に見る正直さ、無欲さ、ありのままの姿に、「上州人」の気質を見ていた。内村は続けて言う。「…余は今日に至り上州人に対し深き同情を表す。彼らもまた日本人の一部分であつて、日本国完成のために何かをなすべきの天職を持つと信ずる。…ただありのままである。…上州人は大なる希望をいだいて可なりと信ずる」と結び⁽⁷⁷⁾、「上州人」である自分も、「日本国完成のために何かをなすべきの天職を持つ」との内村の思いを読み取れる。また、内村は、

「昭和2年4月13日（水）晴 父の命日である。彼の真影に花を供えて記念した。
…自分は彼の後を承けて、とにもかくにも内村の家をさらに一代継続できて、神に感謝する。わが家は小なる上州武士であって、正直のほかに何の取り所なきものである。人には常にだまされやすく、貸しはありても借りはない。…」

（『内村鑑三日記書簡全集3』）

と述べていた⁽⁷⁸⁾。内村の「上州武士」（高崎藩出身）であるとの自意識を知ることことができ、「正直のほかに何の取り所なきものである。人には常にだまされやすく、…」の言葉に、内村の「上州人」の漢詩に繋がる思いが知れる。

「昭和3年10月19日（金）晴 上州高崎光明寺に、主婦と共に先祖の墓に参りた。
…墓参を終えて後に烏川のほとりに至り、はるかに榛名、碓氷の連峰をながめながら、わが少年時代の事どもを思い出した。…すべてが六十年前の事どもである。山の形は変わらず、川は依然として流る。…ただ、釣漁にふけるわれを戒めし父の声を聞かない。ああ、われもまた上州人である。…」（『内村鑑三日記書簡全集4』）

と言い⁽⁷⁹⁾、故郷高崎の山河の風景を見て、幼き少年時代を回想し、感慨にふける内村の「ああ、われもまた上州人である」の言葉に、老境に達した内村の心情が知れる。

「昭和4年8月23日（金）半晴 …上州富岡に牧師たる、わが信仰の友たる住谷天来君は、自分と同じく上州人であって、自分と違い漢学者である。…今日、氏より本当の詩が到来した。自分の詩は『高崎城を過ぎて』と題して左のごとくであった。

光陰如矢七十年 世変時移今昔感 不棄上州武士魂 独抛聖書守福音

これに対し住谷君の返詩は左のごとくであった。

「学道説教七十年 物変星移歎逝川 耿々尚存武士魂 独窮聖經宣福音

鳥兎匆匆七十年 桑田碧海驚變遷 独抱上州武士魂 尚抛聖書宣福音」⁽⁸⁰⁾

内村は、天来が、「武士魂」を理解している牧師であると言い、『上州気質』と題する駄句であるとして、同日の日記に「天地をつんざくばかり鳴る神の あとは空井にかかる明月」という句を記した。この句には、直情径行的であり、物事に対して熱し易く冷めやすいという「上州人」の気質が詠われている。

「昭和4年9月14日（土）晴 …上州富岡の住谷天来君が尋ねてくれた。二時間談じて去った。…上州人が上州人と語る時に何の心配もない。上州人は自己を包むことを知らない。みんなサラケ出してしまう。…今日は山荘に浅間山をながめながら、…大声に宇宙、人生を談ずることができて、久しぶりの談話の饗宴であった」

と記し⁽⁸¹⁾、特に「上州人は自己を包むことを知らない。みんなサラケ出してしまう」の言葉にも、内村の「上州人」観が知れる。

「昭和5年2月12日（水）晴 この日、住谷天来君、君の牧会の地、群馬県富岡より見舞いに来てくれた。詩三篇を遺し、祈禱を共にしてくれた…」と内村は言い、天来は、「雪風掃面砂払地 友愛四十余年知 懊惱一場春不間 飛来只見紅梅詩」という詩を内村に贈った。これに対して、内村は、天来に「上州無智亦無才 剛毅木訥易被欺 唯以正直對万事 至誠依神期勝利」という詩を示した⁽⁸²⁾。この詩が「上州人」の詩と呼ばれ、その後、昭和36年（1961）に内村鑑三の生誕百年を記念して、高崎市の頼政神社の境内にこの漢詩を刻んだ石碑が建立された⁽⁸³⁾。

いずれにしても、天来は、内村との長い交友を重ね、少なくとも内村の「日記」から見ても、良き理解者として常に内村を励ましていたことが知れる。つまり、内村が天来に示した「上州人」の詩は、何よりも内村自身と、「同国、同信、同主義の人」である住谷天来を、正直で無私な典型的な「上州人」として見ていたからなのであろう。

6. 高崎での晩年、『聖化』の廃刊

昭和2年(1927)1月に創刊された天来の『聖化』も、ついに昭和14年(1939)6月に、第149号をもって廃刊することとなった⁽⁸⁴⁾。昭和11年(1936)には、柏木義円の『上毛教界月報』がすでに廃刊され、翌昭和12年には、「日中戦争」が始まった。昭和13年(1938)には、天来と関係が深かった柏木義円も死去した。また、天来の盟友であった井上浦造の創設した「共立普通学校」も廃校となってしまった。

『聖化』の「廃刊の辞」については、これまでも天来の甥悦治をはじめ、しばしば論じられてきた。悦治は、「天来にたいするわたくしの最も共鳴感得する天来の晩年の人生観や社会観、思想的態度の純真一徹さというものがよくこの『廃刊の辞』に表れているのみでなく、「住谷天来」なる人物の理解への序曲でありフィナーレであると信じるからである」(住谷悦治「住谷天来とわたくし」)と述べている⁽⁸⁵⁾。

天来は、なぜ、『聖化』を廃刊にすることにしたのか、その顛末を「廃刊の辞」⁽⁸⁶⁾に詳細に記している。「原因は其筋の圧迫これのみと、然り、唯だ是れのみであります」と断言している。天来の「廃刊の辞」によると、昭和14年のある日、「警察から一人の査員」が来て、『聖化』(5月号)[第148号]は、「治安妨害」のため、「発禁」となるので、「没収」したという。その翌日に天来は、警察署の「高等課」へ呼び出された。ここで尋問されることになるが、その会話のなかで、『聖化』の購読者について次のような記述がある。「…こんな上州の片田舎で、発行する微々たる雑誌(『聖化』)を北は北海道より南は九州から南洋まで、東は海を越えて米国に行き、西は満鮮北支まで通して少ないながらも…」(住谷天来「廃刊の辞」)と記されていることから、当時の『聖化』の購読者が日本国内のみならず、一部には、海外(中国大陸、朝鮮半島、米国まで)にまで広がっていたことが知れる。そこで、『聖化』の配布状況であるが、昭和5年には、

12,000部の発行があったという。これに対して、柏木義円の『上毛教界月報』は、同年度で7,400部であったということから、『聖化』の方が、より多くの読者を持っていたことが知れる⁽⁸⁷⁾。

いずれにしても、天来は、「廃刊の辞」のなかで『聖化』への思いを「若し夫れ本誌の価値如何と善悪如何は千載の後、神の審判と天下具眼の士の裁決を待つより外はないでせう…」と言い、自分は「理想に生き、理想を追求する者である」と述べていた。

しかし、『聖化』は、当時の河合栄治郎の処分例を引き合いにだされたりして⁽⁸⁸⁾、「危

険思想」であると断罪され、官憲による廃刊を執拗に迫られた。こうして、天来は断腸の思いで、「…廃刊いたしませうと、其場で直に筆を執って廃刊届を認め、即日内務大臣の手許へ、その届書を差出すことと成って…」と言って、即日に廃刊を決めたのであった。天来は、「廃刊の辞」の最後に、「利根川の清流に臨み、天下皆酔へり我独り醒めぬと高吟しつつ…」、「血涙を絞って」、その筆を折った。

ここに、若き日の『上毛之青年』、壮年期の『警世』、円熟期の『聖化』の発行と、ジャーナリストとしても論陣を張ってきた天来は、日本の軍国主義の台頭とともに、ついにその言論を封殺されてしまった。すなわち、「自由」を叫び、「平和」を愛してきた天来も、「神の審判と天下具眼の士の裁決」を後世に頼むしかなかった。

だが、こうした天来の姿勢を高く評価していた「天下具眼の士」が、すでに同時代に存在していた。矢内原忠雄である。昭和14年7月発行『嘉信』第2巻第7号に、「聖化を悼む」との記事を載せた⁽⁸⁹⁾。「群馬県住谷天来翁発行の『聖化』は十三年の歴史を有つ伝道紙であるが、其筋の強要により六月号を以て廃刊となった。同紙廃刊之辞に曰く…」として、『聖化』の「廃刊の辞」を引用し、その顛末を記した。その最後に、矢内原は、

「以上は一九三九年の日本に起りたる一の歴史的事実として嘉信誌上の記録に留む。評曰、軽吏の恫喝、神人共に怒る。又曰、住谷先生よく戦って下さいました。有難う御座います。『聖化』の廃刊は妥協による続刊よりも、真理の為に大なる証明を為した。聖徒の死は神の御前に貴いのである」（『嘉信』第2巻第7号）

と記し、『聖化』を発行し続けていた天来を讃えた。

また、塚本虎二が、昭和14年7月発行『聖書知識』第115号において、「『聖化』誌の廃刊を惜しむ」と題して論評していた⁽⁹⁰⁾。塚本は、「私はその廃刊を読者何十万の大雑誌が悉く消え失せたより遙かに淋しく思ひ、また非常時日本の為に惜しみ悲しむ者である。…常に私に『聖化』誌の如きもの一日もこの国に無かるべからずと思はせてみたからである。…」と言い、当時の暗い世相にあつて、天来の『聖化』が廃刊させられたことを深く歎いていた。さらに塚本も矢内原と同じく、「廃刊の辞」を引用し、その顛末を紹介していた。そして、「『聖化』誌はその熱烈なる信仰と愛国の至情と遠大なる理想の故に玉砕したのである」とも記していた。また、同紙の「雑感雑録」の6月13日の記事に、「住谷天来先生の『聖化』が廃刊になったことを知り、長大息した」とも記した。

いずれにても、矢内原忠雄や塚本虎二などの内村門下の俊英が、内村亡き後も、天来に注目し、『聖化』の購読を通じて天来の思想に関心を払っていたことが知れる。

7. 『黙庵詩鈔』の刊行

昭和14年(1939)、『聖化』が廃刊された後、昭和16年(1941)10月に、天来著『黙庵詩鈔』が発刊された。「黙庵」とは、住谷天来の雅号である。発行者は、長谷川周治、発行所は平和社であった⁽⁹¹⁾。同書は、天来の「序文」⁽⁹²⁾によると、「余が主幹せる月刊雑誌(聖化)に載せし黙庵の詩を抄録」したものであった。

次に、同書の構成であるが、「詩文」形式として、「短句」が百首、「長句」が十七首となっている。他に「附録」として、「散文」形式が、「囂々録」と「小品五題」という題で載せられている。これらの文は、『聖化』や『聖書之研究』に載せられた「随時随感の漫筆」であると天来は言う⁽⁹³⁾。

すなわち、『黙庵詩鈔』は、「序文」の末に、「昭和十六年六月一日 世界大戦の酣なる時記之 天来道人」とあるので、『聖化』が廃刊された2年後の出版ということになる。天来は、「序文」のなかで、「然るに此睡詩を臆面もなく敢て世に公けにする著者は愚に非ずんば狂であろう」と敢えて語っている。しかし、「幸いにして『聖化』の読者や友人達の内に、是非一冊に纏めて出版して欲しいと煽てる人があるので、私は其の奮に乗って之を出版する事にした」と言い、同書は天来自身のこれまでの思いや思想を一冊にまとめたものといえる。

同書の出版を援助したのは、「序文」によると、「畏友長谷川周治」であったことを記している⁽⁹⁴⁾。長谷川周治(1884-1956)は、山形県出身。旧制山形中学を中退後、東京へ出て、内村鑑三の著書『後世の最大遺物』や、『聖書之研究』を読み影響を受けたという。その後、畔上賢造、政池仁、金澤常雄、矢内原忠雄ら「無教会主義」の人々と交流を持ち、また、その関係から天来との交流も生まれたようである。主に実業家として活躍したのだが、のちに「平和舎」という出版社を興し、『内村鑑三先生御遺墨帖』や天来の『黙庵詩鈔』などを出版した⁽⁹⁵⁾。

長谷川は、『黙庵詩鈔』の「序」⁽⁹⁶⁾で、「住谷先生の御名は『聖書之研究』誌上で昔から存じていましたが、…」と語り、天来が内村の『聖書之研究』に投稿していた頃にその名を知ったと述べている。また、天来のことを「第一先生の御気質がまじりのない生一本で、直情径行信仰を第一とし、正直を第一として居られる」と、その性格をよく言い表していた。そして、「先生は余りに清き過ぎ、余りに高きに過ぎるので尚更私の目に斯く映ずる」とも言い、天来に対する尊敬の念を示している。

長谷川は、「内村先生と住谷先生のお二人は我国開闢以来の大改革、明治維新を挿み相前後してこの国に生まれました。共に剛毅、木訥、信仰、学識、思想すべてに相似相通じられました」（長谷川周治「序」『黙庵詩鈔』）と、内村と天来の共通点を指摘している。さらに、「只正直を以て万人に接し、至誠神に依て勝利を期せられし内村先生にして、伊達やお世辞でかかる一生の交わりを続けられる筈はありません。偉人偉人を知ると申します」（長谷川周治「序」）とも言い、天来のことを内村に優るとも劣らない人物であるとの見解を示していた。ただ、内村の名声に比べて、「住谷先生は此世に酬いられざること甚だしく、亦それだけ天に向って、其山河に向って、其自然に向って、此国と此民とに向って深刻なる詩歌のよびかけが多いのであります」（長谷川周治「序」『黙庵詩鈔』）と言い、天来の主張や思想があまり世間に知られていないことを指摘している。

すなわち、「『聖化』誌は余りに真理に忠実なるの故に禁ぜられた」と言い、「住谷先生は此驚くべきイエスの福音を堅く信じ、これを万民に伝へんとして、詩に文に言に行にその純潔なる七十年の生涯を献げ、一貫して今も尚矍鑠として天に向って雄叫びを挙げ居られるのであります。」（長谷川周治「序」『黙庵詩鈔』）と記し、天来が、『聖化』廃刊後もなお、キリスト教の伝道に努め孤軍奮闘していた姿を伝えている。

次に『黙庵詩鈔』の「跋」⁽⁹⁷⁾であるが、^{まさいけじん}政池仁が記している。政池仁（1900－1985）は、愛知県出身。第四高等学校卒業後、東京帝大に入学。内村鑑三に出会い影響を受ける。その後、伝道誌を創刊、『基督教平和論』などの著書を出すも発禁となった。非戦・平和を主張し、「無教会伝道者」として活躍した⁽⁹⁸⁾。

政池は、「跋」のなかで、「斯界の一大先輩住谷天来先生の快著の校正の労に与り得んとは。況んや其跋文を書すの栄を与えられ、此快著と共に辱を万世に残すに至らんとは」と記した。すなわち、『黙庵詩鈔』の「校正」に政池があたり、天来から「跋」を書くように勧められたことが知れる。また、「然るに此処に天地の大真理基督教に徹したる大先生が、其妙技を揮つて真理の花技をこの名器にいみじくももられたのである。…見る者をして驚歎せしめないでは措かないのである」（政池仁「跋」『黙庵詩鈔』）と言い、「世に之に超ぐる漢詩集が再び現れ得るであろうか。否、と私は思う」とも述べている。

続けて政池は、天来について、「明治二年と云う時に生れられて、旧き日本と新しき日本を二つ乍ら生きられた住谷先生のみよくこの事が出来る」と言い、天来が生きた時代、すなわち、封建社会の名残の濃い明治草創期から、まさに日本の近代化の渦中を生きて来た天来なればこそ、このような漢詩集が出せたのであると指摘していた。

政池は、「此詩鈔を読んで何人も感ずる事は、其思想の内容が洋の東西、時の古今に通じて実に実に広い事である。…而も若し西洋と東洋の両思想を混然として此中に盛られたのであるならば左程の価値はない。之を世界無比の大和魂を以て融和して、東海の日本国でなくては歌えない歌が唱われたのである」（政池仁「跋」『黙庵詩鈔』）と指摘し、単に東西両思想のみならず、日本人の心をもって融和している詩こそが天来の思想であると述べている。そして、政池は、「（住谷）先生は又此時代を指導する為に神の特に遣し給へる詩人」であると捉えていた。

こうして、長谷川周治によって「平和舎」から発行された『黙庵詩鈔』は、矢内原忠雄により、『嘉信』第4巻11号（昭和16年発行）で、「新刊紹介」された⁽⁹⁹⁾。

矢内原は、「黙庵とは住谷天来翁の雅号である。翁は群馬県高崎市在住。…退隠後の今日も高齢に拘わらず、機会を得ては福音の証明に従事せられて居る。…老年逆境にありて従容として迫らず、信仰の想を詩に放って真に国士の趣がある」と言い⁽¹⁰⁰⁾、天来の当時の姿を伝えていた。また、続けて「その主筆たりし雑誌『聖化』が筆禍の為め廃刊を余儀なくせられた事は、当時本誌にも記したところであるが、…一書として刊行を見たる事は、我等の大なる喜びである」とも記し、『聖化』が「筆禍」の為めの廃刊であったことを記し強調していた。

なお、矢内原の年譜によると、『黙庵詩鈔』の発刊前、矢内原がどのような目的で天来を訪ねたのか不明であるが、「昭和16年5月12日～14日、住谷天来を高崎に訪問」との記録が残されている⁽¹⁰¹⁾。

矢内原は、天来のことを、「翁の学は和漢洋を兼ね、仏典に亙り、基督教の信仰深く、正義感熾烈である。翁の詩は漢詩の約束を無視したる自由詩の由なれど奇想天外、自由奔放、生气滂瀾として風格欽慕に餘あり、一読、近来の快著たるを感じた」と、天来の人となりが高く評価し、『黙庵詩鈔』を「近来の快著」として紹介した⁽¹⁰²⁾。

8. 昇天 一天来の死一

住谷天来は、昭和19年(1944)1月27日、高崎市昭和町219番地、「堀田屋」(堀口栄蔵邸客室二階)で亡くなった⁽¹⁰³⁾。享年76。天来が亡くなった「堀田屋」は、『聖化』の広告欄によると、「乾物並果物問屋」と記されている⁽¹⁰⁴⁾。

天来は、昭和2年(1927)富岡で『聖化』を創刊後、昭和9年(1934)甘楽(富岡)教会を辞任するが、高崎に定住し、『聖化』を発行し続けていた。『聖化』第96号(昭和9年12月5日発行)によると、「転居のお知らせ」が載せられ、それによると「高崎市赤阪村369 聖化社 住谷天来」と記されている⁽¹⁰⁵⁾。その後、高崎市の地番変更により、「高崎市昭和町219 聖化社」となった⁽¹⁰⁶⁾。

さて、天来の死後、金澤常雄主筆『信望愛』第190号(昭和19年3月1日発行)に「住谷天来先生を懐う」という題で追悼文が載せられた⁽¹⁰⁷⁾。金澤によると、「住谷天来先生は一月二十七日午前六時半、病床より七十六歳を以て神の御許に召されました。先生は、内村先生逝かれて後、地にありて私に残されただ一人の先生でありました。…」と述べ、天来の死を悼んでいる。

金澤常雄(1892-1958)は、群馬県甘楽郡高瀬村(現富岡市)出身。旧制富岡中学校在学中に甘楽教会において受洗。当時の牧師は、井上浦造とも同期で、同志社神学校を卒業した岡部太郎であった。金澤は、その後、旧制第一高等学校に進み、内村鑑三の「柏会」に加入、一高では、矢内原忠雄とも交友を結んでいた。さらに東京帝大に進学。卒業後は、内務省に入省するも官吏を辞職。内村の「聖書研究社」の助手となる。やがて、甘楽教会の牧師をしていた頃の天来と知り合い、のちに桐生教会(組合教会)の牧師となる。しかし、内村の薦めにより、札幌独立教会へ赴任するも、東京へ行き、無教会独立伝道者として、『信望愛』を創刊する⁽¹⁰⁸⁾。

以下、「住谷天来先生を懐う」⁽¹⁰⁹⁾には、金澤が、天来の「思想と信仰と生涯」を紹介する文章が載せられている。この文章は、住谷天来の「小伝」とも言える内容がある。金澤は、「…上州より新島襄を出し、内村鑑三を出し給いました。殊に先生の畏友内村先生の故郷が先生の故郷と極めて近い高崎であることも奇縁です。…」と言い、天来を「新島」、「内村」に次ぐ人物として紹介している。そして、金澤は、

「先生はその青春時代に青雲の志を抱かれ、経国済民は先生の理想であり、先生の燃ゆる知識慾は東西思想の粹を極むることに集注されました。…先生は更に基督教を発

見し、之に帰依し、遂に日基派の牧師となりました。牧職にありながらも内村先生の無教会信仰に共鳴を見出されました。…」(『信望愛』第190号)

と述べ⁽¹¹⁰⁾、天来が内村鑑三の「無教会信仰に共鳴」していったとの見解を示していた。

また、金澤は天来について、「…遂に牧職を辞し高崎に出て、教派に関係なく、また教会を作らず自由な立場で伝道し『聖化』誌(創刊は甘楽教会在任中)上に先生独自の健筆を揮はれました」と言い、晩年の高崎時代を「先生の使命を遺憾なく発揮せられた時代」と評価していた⁽¹¹¹⁾。

矢内原忠雄も『嘉信』第7巻第4号(昭和19年4月20日発行)⁽¹¹²⁾に、「1月27日、住谷天来翁主に在りて眠る」と記し、さらに、「彼らは皆信仰を懐いて死んだ。彼らは皆余と嘉信とに好意を寄せてくれた誠実の士であった」と言い、天来の死を悼んだ。

天来の甥悦治の息子一彦氏の「住谷天来と父・悦治」によると、「父(悦治)の日記(昭和19年1月28日)」に、天来についての記述があると言い紹介している⁽¹¹³⁾。悦治は、日記(昭和19年1月28日)に『…天来叔父の生涯を偲んだ。清きキリスト者、純粹な信仰者、深遠な哲学者、というよりダンテやカーライルの理解者としての思想家、稀にみる一個の福祉活動家であった』と記していた。天来の告別式(昭和19年1月30日)には、『挨拶は親戚代表として私(悦治)が述べた』と記した⁽¹¹⁴⁾。

住谷悦治(1895-1987)は、天来の兄友太の次男。旧制前橋中学校から仙台の二高を経て東京帝国大学に進む。東京帝国大学では、吉野作造らに学び影響を受けたという。また、悦治は、何よりもクリスチャンとして、叔父天来から洗礼を受けている。その後、同志社大学の教授、総長として活躍した⁽¹¹⁵⁾。

天来の告別式の説教は、栃木県佐野教会牧師の永島与八が担当したという⁽¹¹⁶⁾。永島与八(1873-1944)は、群馬県おうらぐん邑楽郡出身。足尾銅山鉍毒事件において田中正造の片腕として活躍した人物であった⁽¹¹⁷⁾。前橋に投獄された時、前橋教会の堀貞一により受洗。堀は、同志社出身で新島の弟子でもあった。その後、同志社神学校に学び、柏木義円の世話で佐野教会(組合教会)の牧師となる。天来とも交友を持ち、永島の著書『鉍毒事件の真相と田中正造翁』には、天来が「序文」を寄せている⁽¹¹⁸⁾。

悦治は、日記(昭和19年2月1日)に『我が最も影響を受けた天来叔父もかくして永遠に私らの俗世界から昇天してしまった。思えば明治四二、三年頃より、影響感化は甚大なもので、言葉をもって言い表すことは不可能である。私の精神上のほとんど大部分は叔父の賜物である。…』とまで書き残していた⁽¹¹⁹⁾。

また、悦治の「内村先生と住谷天来」⁽¹²⁰⁾によれば、「叔父の鋭い非妥協的な、上州人的な猛烈な（しかしほんとうは優しい・いとしい性格でありながらも）ひたむきな『魅せられたる魂』のような性格は、内村先生のそれと相許す共通点が多大であるをつくづく思っている」と記している。天来と内村の親しい間柄を知っていた悦治ならではの証言である。天来は、「遺言」を残していたようで、悦治によると、

「この叔父は、遺言の一つに、焼いた骨は少年時代の思い出と結ぶ利根川に流して欲しいというのであった。わたくしは、ある日、その大切に一部分を保蔵しておいた白い骨を包んだ小さな袋を、利根川の鉄橋の上から、流れに抛った。神とわたくしだけの知っている一つの秘密である。…」（住谷悦治「内村先生と住谷天来」）

と記し⁽¹²¹⁾、天来の遺骨は、甥悦治の手によって「利根川」へ散骨されたことが知れる。

注 「第1部 住谷天来の生涯と思想形成」

第1章 「住谷天来の生きた時代」

- (1) 住谷輝彦「住谷家略系図」『群馬文化』第241号、群馬地域文化研究協議会、1995年、21頁。
- (2) 萩原進「住谷天来」『近世群馬の人々(1)』、みやま文庫、1963年、149頁。
- (3) 住谷天来「跋」、森川抱次『敢闘七十五年』、紫波館、1943年所収、344頁。
- (4) 前掲書、344頁。
- (5) 国府村誌編集委員会編『国府村誌』、朝日印刷、1968年、398頁。
- (6) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」『群馬評論』創刊号、群馬評論社、1980年所収、「内山大蔵坊塾のこと」、115頁～116頁。
- (7) 住谷天来「跋」、『敢闘七十五年』、345頁。
- (8) 前掲書、345頁。
- (9) 住谷天来「人世の梃」『野の花』第14号、共愛女学校同窓会、1909年、1頁～6頁。
- (10) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、108頁～109頁。
- (11) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、日本経済評論社、1998年、288頁～290頁。
- (12) 萩原進『群馬県史 明治時代』、高城書店、1959年、588頁～589頁。
- (13) 群馬県議会図書室編『群馬県議会議員名鑑』、朝日印刷、1966年、382頁。
- (14) 前橋市教育史編さん委員会『前橋市教育史(上巻)』、朝日印刷、1986年、477頁。
- (15) 井上浦造『華甲記念後凋先生詩文集』、後凋詩文集刊行会、1928年、29頁。
- (16) 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988年、125頁。
- (17) 拙稿「新島襄と共立普通学校創設者・井上浦造」、日本ピューリタニズム学会編『日本ピューリタニズム研究』第5号所収、2011年、47頁～56頁参照。
- (18) 井上浦造『華甲記念後凋先生詩文集』、30頁。

- (19) 住谷天来「後凋先生」、『聖化』第20号、昭和3年8月5日発行、『復刻版 聖化(上)』、不二出版、1990年所収、118頁。
- (20) 青柳新米が、『追想録』及び『懐古九十年』との題で、書き残した回想録である。原本は、群馬県立文書館に所蔵されている。
- (21) 『日本キリスト教歴史大事典』、21頁～22頁。
- (22) 青柳新米「鳳鳴義塾」『懐古九十年 第七十二(64号) 昭和30年6月29日』(東京都、斎藤忠一家文書所収) 群馬県立文書館所蔵。
- (23) 「保岡亮吉」、『群馬県人名大事典』、上毛新聞社、1982年、538頁。
- (24) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、288頁～290頁。
- (25) 萩原進『群馬県史 明治時代』、高城書店、1959年、569頁～572頁。
- (26) 共愛学園百年史編纂委員会『共愛学園百年史上巻』、朝日印刷、1998年、123頁～125頁。
- (27) 前掲書、126頁～129頁。
- (28) 西田毅「『大阪公論』と竹越三叉」、田中浩編『近代日本におけるジャーナリズムの政治的機能』、御茶の水書房、1982年所収、88頁～89頁。
- (29) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、115頁。
- (30) 日本基督教団前橋教会『前橋教会史110年の歩み』、朝日印刷、1996年、1頁。
- (31) 前掲書、3頁～5頁。
- (32) 井上浦造『華甲記念後凋先生詩文集』、30頁。
- (33) 住谷天来「逝ける好友深澤君を偲ぶ」、深澤信三編『記念 深澤利重』(非売品)、1935年所収、148頁。
- (34) 稲田雅洋『悲壮は即ち君の生涯なりき 深沢利重と木下尚江』、現代企画室、1987年、7頁。
- (35) 新島襄編集委員会『新島襄全集8年譜編』、同朋舎、1992年、196頁。
- (36) 同志社校友会編『新島先生記念集』、文化時報社、1967年、243頁。
- (37) 『新島襄全集8年譜編』、371頁。
- (38) 住谷天来「新島先生を懐う」『新島研究43』、同志社新島研究会、1974年所収、18頁～22頁。

- (39) 『前橋教会史110年の歩み』、288頁。資料編「受洗者・転入者一覧」によると、3月4日、「住谷八朔」と記されている。
- (40) 前掲書、7頁。
- (41) 群馬県史編さん委員会『群馬県史 通史編7近代現代1』、朝日印刷、1991年、245頁。
- (42) 『群馬県新百科事典』、上毛新聞社、2008年、405頁。
- (43) 住谷天来「我が敬慕の的たりし湯浅治郎君は終に逝けり」『上毛教界月報』405号、昭和7年7月、『上毛教界月報 復刻版 第10巻』、不二出版、1985年所収、302頁～304頁。
- (44) 片野真佐子「解説—『上毛之青年』—将来の後継者たる平民の責任—」『『上毛之青年』解説・総目次・索引』、不二出版、1993年、5頁～13頁。
- (45) 『復刻版 上毛之青年 第1巻』、不二出版、1993年所収、2頁。
- (46) 前掲書、36頁。
- (47) 前掲書、62頁。
- (48) 前掲書、98頁～100頁。
- (49) 前掲書、118頁。
- (50) 前掲書、140頁。
- (51) 前掲書、145頁～147頁。
- (52) 前掲書、149頁。
- (53) 前掲書、149頁。
- (54) 植木枝盛『植木枝盛集 第8巻 日記2』、岩波書店、1990年、84頁。
- (55) 『復刻版 上毛之青年 第1巻』、149頁。
- (56) 前掲書、177頁。
- (57) 住谷天来「我が敬慕の的たりし湯浅治郎君は終に逝けり」『上毛教界月報』405号、302頁～304頁。
- (58) 掛川智子「群馬廃娼運動とその意義」『上毛民衆史』第2号、上毛民衆史刊行会、1982年所収。久保千一「群馬の廃娼運動」『柏木義円研究序説』、日本経済評論社、1998年所収などがある。
- (59) 『復刻版 上毛之青年 第1巻』、580頁。
- (60) 『復刻版 上毛之青年 第2巻』、162頁。

- (61) 関根元哉についてのプロフィール（生没年など）は不明である。井上浦造『華甲記念 後凋先生詩文集』、後凋詩文刊行会、1928年、30頁に幽谷義塾の同窓生として、住谷弥作（天来）、関根元哉の名前が出てくる。また、青柳新米の回想録（『追想録』）によると、関根は井上浦造、住谷天来などと共に「鳳鳴義塾」に学び、「上毛青年会」に所属し、廃娼運動に活躍していたと記していた。ただ、若くして没したようで、青柳新米もかれを高く評価していた。
- (62) 藤岡一雄「住谷天来略年表」『群馬文化』第241号、群馬県地域文化協議会、1995年、40頁～42頁。
- (63) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、288頁～290頁。
- (64) 前掲書、久保千一「住谷天来略年譜」288頁。
- (65) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、115頁。
- (66) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、288頁。
- (67) 『復刻版 上毛之青年 第1巻』、112頁。
- (68) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、288頁。
- (69) 前掲書、久保千一「住谷天来略年譜」162頁。
- (70) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、119頁。なお、写真（原版）の所在については、筆者も確認できていない。
- (71) 前掲書、住谷悦治「住谷天来とわたくし」、119頁。
- (72) 前掲書、住谷悦治「住谷天来とわたくし」、120頁。
- (73) 前掲書、住谷悦治「住谷天来とわたくし」、120頁。
- (74) 住谷八朔「大陰世界」『復刻版 上毛之青年 第2巻』、不二出版、1993年所収、202頁～203頁。
- (75) 刀水漁郎（住谷八朔）「此の義心、此の理心」『復刻版 上毛之青年 第2巻』、不二出版、1993年所収、258頁～262頁。
- (76) 『復刻版 上毛之青年 第2巻』、342頁。
- (77) 『共愛学園百年史上巻』、137頁。
- (78) 前掲書、203頁。「共愛社」の「発起人姓名」によると、「新島襄」ら25名が名を連ねている。
- (79) 『新島襄全集8 年譜編』、554頁。
- (80) 前掲書、558頁。

- (81) 『復刻版 上毛之青年 第1巻』、414頁。
- (82) 住谷天来「新島先生を懐う」『新島研究』同志社新島研究会、1974年所収、18頁～22頁。
- (83) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、288頁。
- (84) 『共愛学園百年史上巻』、「二 杉田潮の人となり」、231頁～241頁。
- (85) 前掲書、264頁。
- (86) 前掲書、「九 女学校拡張計画と杉田校長の辞任」、280頁～285頁。上毛共愛女学校の規模を拡張しようとする杉田潮校長・住谷天来ら教師側と、アメリカン・ボード宣教師側との学校運営をめぐる対立。結局、「女学校拡張計画」は頓挫した。
- (87) 住谷天来「逝ける好友深澤君を偲ぶ」、深澤信三編『紀念 深澤利重』（非売品）、1935年、149頁。
- (88) 『復刻版 上毛之青年 第2巻』、605頁の記事を参照。
「上毛共愛女学校の不義」とは、「上毛共愛女学校」の規模拡張計画をめぐる同校の内紛を指すものと思われる。（この問題により、結果的に規模拡張計画推進派の当時の杉田潮校長・住谷天来らが辞任に追い込まれた）

第2章 「内村鑑三との出会いと東京時代 —ジャーナリストとして—」

- (1) 住谷天来「逝ける好友深澤君を偲ぶ」、149頁。
- (2) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、109頁。
- (3) 鈴木範久『内村鑑三日録 1892～1896 後世へ残すもの』、教文館、1993年、181頁～182頁。
- (4) 前掲書、188頁。
- (5) 鈴木範久『内村鑑三日録 1897～1900 ジャーナリスト時代』、教文館、1994年、86頁。
- (6) 前掲書、234頁。
- (7) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、288頁。
- (8) 前掲書、288頁。
- (9) 『内村鑑三日録 1897～1900 ジャーナリスト時代』、278頁。
- (10) 前掲書、279頁。

- (11) 前掲書、279頁～280頁。
- (12) 前掲書、305頁。
- (13) 前掲書、305頁。
- (14) 内村鑑三『興国史談』、警醒社書店、1900年、内村鑑三「自序」。(国立国会図書館蔵 近代デジタルライブラリーより)
- (15) 『内村鑑三日録 1897～1900 ジャーナリスト時代』、306頁。
- (16) 鈴木範久『内村鑑三日録 1900～1902 天職に生きる』、教文館、1994年、9頁～12頁。
- (17) 政池仁『内村鑑三伝』、教文館、1977年、写真版頁参照。
- (18) 『内村鑑三日録 1900～1902 天職に生きる』、49頁。
- (19) 前掲書、62頁。
- (20) 前掲書、70頁。
- (21) 前掲書、80頁。
- (22) 前掲書、88頁。
- (23) 前掲書、87頁。
- (24) 前掲書、87頁。
- (25) 加藤正夫『宗教改革者・松村介石の思想 東西思想の融合を図る』、近代文藝社、1996年、138頁。
- (26) 『内村鑑三日録 1900～1902 天職に生きる』、92頁。
- (27) 前掲書、50頁。
- (28) 前掲書、50頁。
- (29) 前掲書、51頁。
- (30) 前掲書、56頁。
- (31) 前掲書、59頁。
- (32) 『内村鑑三全集 36書簡一』、岩波書店、1983年、481頁。
- (33) 田島進(1876-1952)群馬県碓氷郡磯部村(現安中市)出身。明治学院で神学を学ぶ。明治33年、内村鑑三の薦めにより、札幌独立基督教会教務主任となり、有島武郎などの教会入会式に立ち会う。その後、渡米し、オーボレン神学校、ユニオン神学校大学院、コロンビア大学大学院に学ぶ。帰国後は、明治学院神学部講師、牛込払方町教会牧師として活躍した。内村鑑三とは、晩年まで親しく交わった。

住谷天来とも親しかったらしく、天来の息子穆の結婚式には、司会を担当していた。
(有島武郎研究会編『有島武郎事典』、勉誠出版、2010年、337頁、「田島進」
の項を参照。)

- (34) 住谷弥作編『警世』第1号、警世雑誌社、1900年。
- (35) 松村介石「発刊の辞」、住谷弥作編『警世』第1号、警世雑誌社、1900年所収、
1頁～2頁。
- (36) 内村鑑三「英雄崇拜論 住谷天来訳 警醒社書店発行」、住谷弥作編『警世』第1
号、警世雑誌社、1900年所収、29頁～30頁。
- (37) トマス、カーライル原著『英雄崇拜論』について。トマス、カーライルが、18
40年、直接市民大衆に向かい6回にわたる連続講演をした内容を、翌1841
年に出版したもの。かれのいう「英雄」とは、「真人間」「真実の人」を意味す
る。すなわち、「真人間にかえれ！」という社会覚醒の叫びである。一世の哲人
・史家・社会批評家カーライルの予言者的気魄に満ちた峻厳な社会覚醒の叫びで
ある。『カーライル選集Ⅱ (Thomas Carlyle 著 入江勇起男訳)
「英雄と英雄崇拜」』、日本教文社、1962年所収、入江勇起男「訳者あとがき」、
350頁～360頁参照。
- (38) トマス、カーライル原著・住谷天来訳『英雄崇拜論』、警醒社書店、1900年所
収、住谷天来「自序」、4頁。なお、住谷天来訳『英雄崇拜論』の「目録」の構成
は、「第一篇 神としての英雄 オーデン、異教「スカンジナビヤ」の神代史」、
「第二編 預言者としての英雄 マホメット イスラム」、「第三篇 詩人としての英雄
ダンテ及シェークスピア」、「第四篇 僧侶としての英雄 ルーテル 宗教改革
ノックス 清教徒」、「第五篇 文学者としての英雄 ジョンソン ルーソー バー
ンズ」、「第六篇 クロムエル ナポレオン 近代革命」となっている。
- (39) 住谷天来「言志一束」、前掲書所収、7頁～8頁。
- (40) 土井林吉(晩翠)訳『英雄論』、春陽堂、1898年。(国立国会図書館蔵 近代
デジタルライブラリーより)
- (41) 住谷天来「言志一束」『英雄崇拜論』所収、6頁。
- (42) 平田久『カーライル 十二文豪 第1巻』、民友社、1893年。

- (43) 住谷天来「荘子の話（一）」、内村鑑三『聖書之研究』第352号、聖書研究社、1929年所収、『聖書之研究（復刻版）』第32巻、聖書之研究復刻版刊行会、1972年、497頁。
- (44) 鈴木範久『内村鑑三日録 1892～1896 後世へ残すもの』、188頁。
- (45) 天来訳『英雄崇拜論』、警醒社書店刊の明治35年版については、大正14年1月25日発行の同書、「十六版」に所収されている「明治35年10月12日」付けの住谷天来「自序第二」を典拠とした。
- (46) トマス・カーライル著 住谷天来訳『Hero-Worship 英雄崇拜論』、警醒社書店、1925年参照。
- (47) 前掲書、住谷天来「自序第三」、1頁～2頁。
- (48) 前掲書、「本書に対する世上の毀誉」、巻末1頁～7頁にかけて、同書の書評がいくつか載せられている。（内村鑑三君評）『警世』、（萬朝報評）、（白蛇子評）『実業新聞』、（田島進君評）『聖書之研究』、（植村正久君評）『福音新報』、（東京日々新聞評）、（天地人評）などの書評がある。
- (49) 『内村鑑三日録 1900～1902 天職に生きる』、85頁。
- (50) 『聖化』第149号（終刊）、昭和14年（1939）6月5日発行には、「十八版の『英雄崇拜論』の広告が掲載されている。
- (51) M. A. ウォード原著 住谷天来訳補『十九世紀之豫言者』、警醒社、1903年。同書は、M. A. ウォードが、カーライル・ラスキン・トルストイの生涯や思想を概略的に述べたものであり、住谷天来が、その原文を訳し、自身の研究した内容を補足的に補っているため、「訳補」とした。
- (52) 前掲書、「目次」1頁～2頁。住谷天来「十九世紀の豫言者 小引」1頁～7頁。M. A. ウォード「原序」9頁～14頁。住谷天来「緒言」15頁～18頁。「第一編 トーマス、カーライルと彼が労働の福音」1頁～137頁。「第二編 社会改革家としてのジョン、ラスキン」139頁～223頁。「第三編 トルストイ伯と其の福音」225頁～303頁。
- (53) 前掲書、住谷天来「緒言」15頁～18頁。
- (54) M. A. ウォード、露木紀夫他訳『カーライル、ラスキン、トルストイ』、ぱる出版、1999年所収、露木紀夫「はじめに」、5頁。
- (55) 前掲書、露木紀夫「はじめに」、5頁。

- (56) 住谷天来「緒言」、M. A. ウォード原著 住谷天来訳補『十九世紀之豫言者』所収、15頁。
- (57) 前掲書、住谷天来「緒言」15頁～16頁。
- (58) 前掲書、住谷天来「緒言」16頁～17頁。
- (59) 前掲書、住谷天来「十九世紀の豫言者 小引」1頁～7頁。
- (60) 前掲書、住谷天来「十九世紀の豫言者 小引」6頁～7頁。
- (61) 前掲書、住谷天来「緒言」17頁～18頁。
- (62) 『聖書之研究 総目録』、聖書之研究復刻版刊行会、1973年、280頁～281頁。
- (63) 政池仁『内村鑑三伝 再増補改訂新版』、教文館、1977年、「写真版」より。
- (64) 露木紀夫「はじめに」M. A. ウォード、露木紀夫他訳『カーライル、ラスキン、トルストイ』所収、5頁～6頁。
- (65) 労働運動史研究会編『明治社会主義史料集 第1集 直言』明治文献資料刊行会、1960年所収、8頁。
- (66) 前掲書、塩田庄兵衛「『直言』解説」、Ⅲ頁～Ⅵ頁。
- (67) 住谷天来訳『トマスカーライルと彼が労働の福音』、『社会改革家としてのヂヨンラスキン』、『トルストイ伯の福音』、警醒社、1909年。（国立国会図書館蔵、近代デジタルライブラリーより）

第3章 「上州に生きる ー教育者としてー」

- (1) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、289頁。
- (2) 住谷天来「逝ける好友深澤君を偲ぶ」、149頁～150頁。
- (3) 『内村鑑三全集 39 書簡四』、岩波書店、1983年、50頁。
- (4) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、112頁。
- (5) 『内村鑑三全集 37 書簡二』、岩波書店、1983年、50頁～51頁。
- (6) M. A. ウォード原著 住谷天来訳補『詩聖ダンテの教訓』、警醒社書店、1909年、住谷天来「自序」1頁～10頁、住谷天来「言志一束」11頁～18頁。
- (7) 住谷天来「言志一束」『詩聖ダンテの教訓』、18頁。
- (8) 住谷天来「自序」『詩聖ダンテの教訓』、9頁。

- (9) 『大間々高校百年史』、上毛新聞出版局、2000年、41頁。
- (10) 前掲書、51頁。
- (11) 前掲書、48頁。
- (12) 前掲書、資料③「教員姓名学歴其他」、565頁。
- (13) 前掲書、52頁。
- (14) 前掲書、53頁。
- (15) 萩原俊彦『近代日本のキリスト者研究』、耕文社、2000年、460頁。
- (16) 『上毛教界月報（復刻版）第4巻』、不二出版、1984年、270頁～272頁。
- (17) 前掲書、338頁。
- (18) 『日本キリスト教歴史大事典』、293頁参照。なお、柏木義円については、久保千一『柏木義円研究序説』、日本経済評論社、1998年に詳しく論じられている。
- (19) 『日本キリスト教歴史大事典』、678頁～679頁参照。『上毛教界月報』は、柏木義円主筆の月刊紙。1898年に創刊され、1936年まで459号まで続く。主な内容としてキリスト教や社会問題にかんする論説が載せられている。同紙は、柏木などの「非戦論」の主張のために、発禁処分を受けたこともあった。
- (20) 『上毛教界月報（復刻版）第4巻』、339頁。
- (21) 『近代日本のキリスト者研究』、460頁。
- (22) 『上毛教界月報（復刻版）第4巻』、348頁。
- (23) 『大間々高校百年史』、55頁。
- (24) 神洲孟亜原著・住谷天来訳述『詩聖ダンテの教訓』、警醒社書店、1909年、9頁。
- (25) 前掲書、住谷天来「言志一束」11頁。
- (26) 前掲書、住谷天来「言志一束」12頁。
- (27) 前掲書、住谷天来「言志一束」11頁～12頁。
- (28) 前掲書、住谷天来「自序」2頁～3頁。
- (29) 前掲書、住谷天来「自序」4頁。
- (30) 前掲書、住谷天来「自序」5頁。
- (31) 前掲書、住谷天来「自序」5頁～6頁。天来が、『詩聖ダンテの教訓』を翻訳していたのは、明治40年代初期であり、この頃、労働問題や社会主義運動が高まるが、明治政府の圧力により、次第に社会主義者への弾圧が厳しくなる時代であった。

- (32) 前掲書、住谷天来「自序」 8頁。
- (33) 前掲書、住谷天来「自序」 9頁。
- (34) 『上毛教界月報（復刻版）第4巻』、13頁～36頁。
- (35) 前掲書、18頁。
- (36) 前掲書、18頁。
- (37) 住谷天来『孔子及孔子教』、警醒社書店、1911年。
- (38) 前掲書、住谷天来「凡例」、1頁～2頁。
- (39) 『大間々高校百年史』、「資料③教員姓名学歴其他」、565頁。
- (40) 住谷天来「自序」『孔子及孔子教』、警醒社書店、1911年、2頁。
- (41) 前掲書、住谷天来「自序」、1頁。
- (42) 久保千一「三『孔子及び孔子教』－儒教批判－」、『柏木義円研究序説』、日本経済評論社、1998年、177頁～190頁所収を参照。ここで久保は、住谷天来著『孔子及孔子教』について、「孔子の思想のもつ独自性、本質、矛盾点、限界等について深い洞察と分析を加え、問題点を鋭く見抜き分析している」（『柏木義円研究序説』、190頁）と述べている。
- (43) 住谷天来「自序」『孔子及孔子教』、1頁～2頁。
- (44) 前掲書、内村鑑三「序言」、1頁～5頁。
- (45) 『内村鑑三全集 37 書簡二』、岩波書店、1983年、418頁。
- (46) 内村鑑三「序言」、住谷天来『孔子及孔子教』、警醒社書店、1911年所収、2頁。
- (47) 前掲書、内村鑑三「序言」、4頁。
- (48) 前掲書、内村鑑三「序言」、4頁～5頁。
- (49) 『上毛教界月報（復刻版）第4巻』、382頁。
- (50) 住谷天来『孔子及孔子教』、新生堂、1935年。
- (51) 前掲書、住谷天来「第三版の刊行に際して一言を付す」、2頁。
- (52) 前掲書、住谷天来「第三版の刊行に際して一言を付す」、1頁。
- (53) 住谷天来編『聖化』、聖化社、1935年。『復刻版 聖化（下）第73号～第149号（昭和8年1月～昭和14年6月）』、不二出版、1990年所収、179頁。

第4章 「キリスト者として ー平和への思いー」

- (1) 『上毛教界月報（復刻版）第3巻』、239頁。
- (2) 前掲書、274頁。
- (3) 前掲書、299頁。
- (4) 前掲書、323頁。
- (5) 前掲書、338頁。
- (6) 『前橋教会史110年の歩み』、42頁。
- (7) 『上毛教界月報（復刻版）第4巻』、95頁。
- (8) 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』、1988年、1087頁。
- (9) 藤岡一雄「住谷天来 略年表」『群馬文化』第241号、1995年所収、41頁。
- (10) 前掲書、40頁。
- (11) 『上毛教界月報（復刻版）第4巻』、339頁。
- (12) 『日本キリスト教歴史大事典』、112頁。
- (13) 日本キリスト教団伊勢崎教会編『伊勢崎教会年表』、（出版社不明）1969年。
- (14) 『日本キリスト教歴史大事典』、1448頁。山本秀煌は、丹後国出身。横浜に出て、キリスト教に触れる。東京一致神学校に学ぶ。日本基督教会牧師、日本キリスト教史家としても活躍した。
- (15) 藤岡一雄「住谷天来 略年表」『群馬文化』第241号、1995年所収、42頁。
- (16) 『日本キリスト教歴史大事典』、1284頁。
- (17) 伊勢崎市編『伊勢崎市史 資料編4近現代1』、ぎょうせい、1987年、782頁。
- (18) 住谷天来「跋」、森川抱次『敢闘七十五年』、紫波館、1943年所収、346頁。
- (19) 石黒悦雄編著『教会百年史 日本基督教団桐生教会』、清文社、1979年、163頁。
- (20) 前掲書、175頁。
- (21) 柏木義円編『上毛教界月報』第150号（明治44年4月15日発行）、「住谷天来氏」の記事による。
- (22) 『日本キリスト教歴史大事典』、352頁。

- (23) 『群馬県新百科事典』、上毛新聞社、2008年、186頁。
- (24) 日本キリスト教団甘楽教会編『甘楽教会百年史』、シャローム印刷、1984年、222頁。
- (25) 前掲書、222頁。
- (26) 前掲書、222頁。
- (27) 前掲書、225頁。
- (28) 『日本キリスト教歴史大事典』、557頁。
- (29) 久保千一「一天来という人」、『柏木義円研究序説』、日本経済評論社、1998年、163頁。
- (30) 『上毛教界月報（復刻版）第6巻』、240頁。
- (31) 前掲書、239頁。
- (32) 『教会百年史 日本基督教団桐生教会』、193頁。住谷天来が、伝道の応援をした桐生教会（日本基督教教会）は、1878(明治11)年、小川義綏らが桐生を訪れ、伝道を開始して設立された教会である。（『日本キリスト教歴史大事典』、439頁）
- (33) 『甘楽教会百年史』、232頁。
- (34) 群馬県教育史編さん委員会編『群馬県教育史 別巻人物編』、朝日印刷、1981年所収、「裁縫学校設立者または校長一覧」より、483頁。
- (35) 『甘楽教会百年史』、233頁。
- (36) 前掲書、235頁。
- (37) 前掲書、235頁。
- (38) 『日本キリスト教歴史大事典』、312頁。金沢常雄は、1921（大正10）年9月、住谷天来の斡旋で桐生教会（組合教会）の牧師に就任していた。桐生教会（組合教会）は、1915（大正4）年1月、アメリカン・ボードのペトラー宣教師の委嘱により、足利基督教会の菱本興吉牧師が、桐生基督講義所として開設した。（『群馬新百科事典』、214頁）
- (39) 柏木義円編『上毛教界月報』第288号（大正11年11月15日発行）、「甘楽教会」の記事による。
- (40) 『甘楽教会百年史』所収、「10月20日（金）住谷美津子葬儀」の記事、235頁～237頁。
- (41) 前掲書、236頁。

- (42) 住谷穆（1900－1937）天来の長男として、東京神田に生まれる。当時の天来は、雑誌『警世』の編集者をしていた頃であった。数年間を東京で過ごし、天来の上州帰郷に伴い、旧制前橋中学校に入学するも中退。再び、上京し、明治学院などで学ぶ。その後、朝日新聞社に入社して新聞記者として活躍し、長谷川如是閑などとも出会った。穆の妻は、ジャーナリストの大庭柯公の娘であった。しかし、病にかかり、昭和12年に没した。父天来は、『大夢の目醒 [住谷穆追想録]』、新報社（非売品）、1938年を出版した。同書には、長谷川如是閑も思い出を寄せている。
- (43) 萩原俊彦「住谷天来略歴」『群馬評論』創刊号、群馬評論社、1980年所収、129頁～130頁。
- (44) 『甘楽教会百年史』、「4月18日 住谷牧師再婚」の記事、238頁。
- (45) 『内村鑑三日録 1900～1902 天職に生きる』、85頁。
- (46) 『教会百年史 日本基督教団桐生教会』、201頁。
- (47) 前掲書、202頁。
- (48) 『甘楽教会百年史』、241頁。
- (49) 前掲書、242頁。
- (50) 『教会百年史 日本基督教団桐生教会』、204頁。
- (51) 前掲書、205頁。
- (52) 『甘楽教会百年史』、245頁。
- (53) 前掲書、246頁。
- (54) 住谷天来編『聖化』第1号、聖化社、1927年、『復刻版 聖化（上）第1号～第72号』、不二出版、1990年、1頁。
- (55) 門奈直樹「解説－『聖化』と非戦のジャーナリズム」、『聖化（解説・総目次・索引）』、不二出版、1990年、1頁。
- (56) 住谷天来「題詞につきて」、住谷天来編『聖化』第1号、聖化社、1927年所収。
- (57) 『復刻版 聖化（上）第1号～第72号』、不二出版、1990年、3頁。
- (58) 前掲書、3頁。
- (59) 前掲書、3頁。
- (60) 前掲書、3頁。

- (61) 門奈直樹「解説—『聖化』と非戦のジャーナリズム」、『聖化（解説・総目次・索引）』、4頁。
- (62) 萩原進「軍国主義時代の憂国警世の雑誌」、『聖化』（不二出版、復刻版概要パンフレット）所収。
- (63) 久保千一「五 思想の継承—結びにかえて」、『柏木義円研究序説』、日本経済評論社、1998年、206頁。
- (64) 鈴木範久「新島襄、内村鑑三、柏木義円そして住谷天来」、『聖化』（不二出版、復刻版概要パンフレット）所収。
- (65) 住谷天来「内村先生の印象」益本重雄・藤沢音吉『内村鑑三伝』、独立堂書房、1935年所収、485頁～488頁。
- (66) 内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第22巻』、聖書之研究復刻版刊行会、1971年、473頁。
- (67) 内村鑑三が住谷天来に贈った「上州人」の漢詩とは、内村の「1930年（昭和5年）2月12日」付けの日記に記されていた「上州無智亦無才 剛毅木訥易被欺 唯以正直对万事 至誠依神期勝利」の漢詩を指す。
- (68) 山本泰次郎『内村鑑三日記書簡全集2』、教文館、1964年、62頁～63頁。
- (69) 前掲書、63頁。
- (70) 前掲書、64頁。
- (71) 前掲書、64頁。
- (72) 前掲書、64頁～65頁。
- (73) 前掲書、65頁。
- (74) 前掲書、65頁。
- (75) 前掲書、344頁。
- (76) 山本泰次郎『内村鑑三日記書簡全集3』、教文館、1965年、79頁。
- (77) 前掲書、79頁。
- (78) 山本泰次郎『内村鑑三日記書簡全集4』、教文館、1965年、40頁。
- (79) 前掲書、230頁。
- (80) 前掲書、338頁。
- (81) 前掲書、345頁～346頁。
- (82) 前掲書、394頁。

- (83) 手島仁「『上州人とは』－内村鑑三と住谷天来をめぐる人々－」、群馬県立博物館編『上州人とは、群馬学確立に向けて 群馬の肖像Ⅱ』、朝日印刷、2005年、1頁。
- (84) 『復刻版 聖化（下）第73号～第149号』、不二出版、1990年、367頁～370頁。
- (85) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、124頁。
- (86) 『復刻版 聖化（下）第73号～第149号』、368頁。
- (87) 手島仁「解説 住谷天来」、住谷一彦他『住谷天来と住谷悦治－非戦論・平和論』、みやま文庫、1997年所収、149頁～161頁。「表2『聖化』配布状況」を参照。
- (88) 「河合栄治郎事件」を指す。東京帝国大学経済学部教授河合栄治郎の思想・行動をめぐって著書発禁処分（1938年）、休職処分（1939年）、起訴にいたった事件。（「日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』、山川出版社、513頁。）
- (89) 矢内原忠雄「聖化を悼む」、矢内原忠雄編『嘉信19』第2巻第7号、嘉信社、1939年。
- (90) 塚本虎二「『聖化』誌の廃刊を惜しむ」、塚本虎二編『聖書知識』、聖書知識社、1939年。
- (91) 住谷天来『黙庵詩鈔』、平和舎、1941年。
- (92) 住谷天来「序文」、『黙庵詩鈔』、1頁～3頁。
- (93) 前掲書、住谷天来「序文」、3頁。
- (94) 前掲書、住谷天来「序文」、2頁。
- (95) 武藤陽一「長谷川周治－平和に生きた前垂れがけの武士－」、無教会史研究会編『無教会キリスト教信仰を生きた人びと－内村鑑三の系譜』、新地書房、1984年、257頁～307頁参照。
- (96) 長谷川周治「序」、『黙庵詩鈔』、1頁～9頁。
- (97) 政池仁「跋」、『黙庵詩鈔』、253頁～255頁。
- (98) 『日本キリスト教歴史大事典』、1314頁。
- (99) 矢内原忠雄編『嘉信』第4巻11号、嘉信社、1941年。
- (100) 矢内原忠雄「新刊紹介」（『黙庵詩鈔』より）『嘉信』第4巻11号（昭和16年11月20日発行）所収。

- (101) 矢内原忠雄「年譜」、『矢内原忠雄全集』第29巻（書簡・補遺・年譜）、1965年、765頁。
- (102) 矢内原忠雄「新刊紹介」（『黙庵詩鈔』より）、『嘉信』第4巻11号所収。
- (103) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、289頁。
- (104) 住谷天来偏『聖化』第149号、聖化社、1939年、『復刻版 聖化（下）第73号～第149号』、不二出版、1990年、370頁。
- (105) 住谷天来偏『聖化』第96号、聖化社、1934年。
- (106) 住谷天来偏『聖化』第133号、聖化社、1938年の「のど書」によると、「編輯兼発行人 高崎市昭和町219 住谷天来」と記されている。
- (107) 金澤常雄編『信望愛』第190号、信望愛社、1944年。同紙については、「今井館資料館」所蔵を参照した。
- (108) 『日本キリスト教歴史大事典』312頁。
- (109) 金澤常雄編『信望愛』第190号、信望愛社、1944年。
- (110) 金澤常雄「住谷天来先生を懐う」、前掲書所収。
- (111) 金澤常雄「住谷天来先生を懐う」、前掲書所収。
- (112) 矢内原忠雄編『嘉信』第7巻4号、嘉信社、1944年。
- (113) 住谷一彦「住谷天来と父・悦治」、住谷一彦他編『住谷天来と住谷悦治－非戦論・平和論』、みやま文庫、1997年所収、143頁。
- (114) 前掲書、144頁。
- (115) 萩原俊彦「同志社総長 住谷悦治」、萩原俊彦『近代日本のキリスト者研究』、耕文社、2000年所収、438頁～451頁。
- (116) 萩原俊彦「住谷天来略歴」、464頁。
- (117) 『日本キリスト教歴史大事典』、987頁～988頁。
- (118) 住谷天来「序」、永島與八『鉞毒事件の真相と田中正造翁』、独立堂、1938年所収、11頁～13頁。
- (119) 住谷一彦「住谷天来と父・悦治」、144頁。
- (120) 住谷悦治「内村先生と住谷天来」、住谷悦治『あるころの歴史』、同志社大学、1968年、296頁～299頁。
- (121) 住谷悦治「内村先生と住谷天来」、299頁。

第2部 住谷天来の思想 ―とくにその社会・平和思想―

第1章 住谷天来の社会思想

1. 『上毛之青年』に見られる天来の社会観

- (1) 『上毛青年会雑誌』第5号（明治22年5月18日発行）に所収されている「真正ノ英雄」⁽¹⁾と題した住谷八朔（天来）の最初の論稿について。

天来は、「真正ノ英雄」について、「…真正ノ英雄トハ如何ナル者ゾ心事磊々落々トシテ一点ノ私ナク正ヲ踐テ懼レス真ニ就テ憚カラス其言フ所ヤ公明正大其行フ所ヤ天真爛漫俯仰天地ニ愧チサル者即チ是也」と述べている。すなわち、天来の言う「真正ノ英雄」とは、「私心なく」、物事に対しては、「公明正大」で、「天地」に恥じない者である。そして何よりも、「真理ニ基キ至誠ニ発シ千挫シテ撓マス万折シテ屈セス」ことが大事であると言う。ここに、天来の社会正義にかんする考え方が知れる。

さらに、「社会ノ徳義紊乱シ人民ノ元気衰耗シ国家将サニ土崩瓦解セントスルノ秋ニ当テ始メテ真正ノ英雄ヲ見ル」と言い、「真正ノ英雄」の姿として、「クロムウェル」、「ワシントン」、「ルター」などの名前を例に挙げていた。

天来は、当時の日本の社会について、「十九世紀ノ社会ハ進歩改良ノ社会ナリ建設的ノ社会ナリ只夫レ進歩改良、建設的ノ社会ナリ是ニ於テ乎吾人青年カ将来ニ於ケル責任負望ノ甚タ重大ナルヲ見ル…」と述べ⁽²⁾、「19世紀の社会」は、「進歩改良の社会」であり、「青年」が社会に積極的にかかわる必要性を論じている。

この天来の思想の背景には、当時の『国民之友』に見られる徳富猪一郎（蘇峰）の影響が見られる。天来は、

「我カ親愛ナル徳富氏ハ会テ国民之友ニ於テ之ヲ論シテ曰ク英雄ノ精神トハ進で止まざる発企心を遂げずんば休せざる執行心と此の二個の精神を運用する才能の過度なる者ハ英雄なりと…」（『上毛青年会雑誌』第5号）

と⁽³⁾、徳富の『国民之友』に見られる主張を例に述べている。

『国民之友』は、明治20年（1887）、「民友社」から創刊された。「民友社」は、徳富猪一郎（蘇峰）が義兄湯浅治郎の協力を得て設立した出版社であった⁽⁴⁾。そもそも、『上毛青年会雑誌』の創刊も、徳富の『国民之友』に影響を受けていたと思われる。『上

『上毛青年会雑誌』創刊号（明治22年1月15日発行）には、徳富自身が、「祝詞」を寄せている⁽⁵⁾。

その「祝詞」のなかで、徳富は、「小生か貴地青年諸君に於ける其縁固より浅きにあらず、既に幾度か諸君に面し其高説を聞き、併せて愚見を吐くのを機会を得たる義も有之、…」（東京民友社に於て 明治21年12月25日 徳富猪一郎）と述べている。このことは、当時の徳富と「上毛青年会」との深い結びつきを示すものである。また徳富の「民友社」の設立に協力した湯浅治郎は上州出身で、「上毛青年会」の有力な一員であり、『上毛青年会雑誌』の発刊にも資金協力（寄付）をしていた⁽⁶⁾。

そして、天来は次のように言う。

「…天ノ寛容浩大ナル天ノ公平無私ナル其智徳其ノ才力吾人ノ需ムル所ノ多少ニ応ジテ之ヲ賜フベシ然リト雖モ吾人ニシテ能ク自任自重自己必ズ英雄タルヲ得ベントノ信仰ナクンバ争デカ之ヲ得ベケンヤ」⁽⁷⁾（『上毛青年会雑誌』第5号）すなわち、「英雄」たるもの、「公平無私」の精神を持っていることはもちろんのこと、その人間性、信仰心が大事であると言う。そして、「クリスト曰ク爾曹モシ芥種一粒ノ信アラバ此山ニ移リテ海ニ入レヨ命ズルモ亦タ成ラント望ム」と、キリスト教信仰についても語っている。いずれにしても、天来は、「…而シテ此ノ英雄タルト否トハ外界其物ニアラズシテ自己其レ自身ニ在ル…」と言い、「英雄」の内面世界、精神性を重要視していた。

(2) 『上毛之青年』第25号（明治24年1月24日発行）に所収されている「大陰世界」（「西群馬 住谷八朔」）⁽⁸⁾について。

明治22年（1889）、「大日本帝国憲法」が公布された。翌明治23年（1890）、第1回衆議院議員選挙が実施され、第1回帝国議会が召集された。また、「教育勅語」が公布され、天皇を頂点とする近代日本の姿がここに形成された。

しかし、この「大日本帝国憲法」は、「国民大衆の意見をまったくといってよいほど無視しつつ、憲法制定、国会開設の要求だけは受け止めた形で制定されたものであった」と指摘されている⁽⁹⁾。

こうして『上毛之青年』という地方の一雑誌ではあったが、天来は、「大陰世界」と題し、当時の社会状況を、「…風俗は朽敗し、心術は漓腐し、一国を挙げて大陰世界と為し、正邪は顛倒し、善悪は上下し、雲乱れ、天陰り、自由の明星光を失し、正義の太陽地に没

し、…」と言い、「自由」が失われ、「正義」も行われていない社会であると指摘していた。また、天来は、

「…光あれよ自由の明星、——輝けよ正義の朝 ——自由よ自由、正義よ正義、彼等は常に此の四大文字の名辞を呼び題目を唱へ来たりしと雖も、未だ嘗て自由の行なく、正義の為なく、徒に其の名を称へて其の実体を求めざるが故に、自由の新鬼は煩冤し、正義の旧鬼は大哭す、…」 (『上毛之青年』第25号)

と述べ⁽¹⁰⁾、繰り返し、真の「自由」や「正義」が失われている現状を歎き叫んでいた。その一つの例として、

「…壮士頭上退去の厳命、議員の保安、去る13日午後十時夜色暗澹たる頃、警視總監の手中より産出せられたり、アア是れ何の意ぞ…紛々たる世事、正に一挫折を呈す、失望の嘆声放たざらんとするも豈に耐え可んや…」 (『上毛之青年』第25号)

と言い⁽¹¹⁾、当時の「保安条例」による自由民権派の政治的弾圧(明治24年1月13日)を非難していた⁽¹²⁾。また、続けて「堂々たる代議院中正を踏んで懼れざるブライト的の代議士無き乎、…自由の加護者何処に有る、正義の指導者何処に有る、想わざりき、鈴木昌司氏の提出せし保安条例施行解除動議は却て忽ち多数の否決とならんとは、…」⁽¹³⁾と言い、鈴木昌司⁽¹⁴⁾という代議士の「保安条例施行解除動議」が、あっけなく否決されたことを取り上げていた。

さらに天来は、「文明的社会の光輝たる、靈長的動物の品性たる、道德の源泉其源泉たる自由、正義の四大文字は、大陰世界の黒雲に被覆され、…」と言い、繰り返し人間にとって最も大切な「自由」や「正義」が奪われていたことを論じていた。

こうして、天来は、「此の大陰世界を一転して、光明の世界となし腕力の社会を一転して、道理の社会となす…」と言い、「自由」や「正義」のある社会を「光明の世界」と述べ、中央集権的な「腕力の社会」ではなく、「道理」の社会を理想としていた。

いずれにしても、天来は、保安条例解除の動議が否決されたことを歎き、「自由」、「正義」が抑圧されていた社会を「大陰世界」と呼び批判していた。

(3) 『上毛之青年』第28号(明治24年11月21日発行)に所収されている「此の義心、此の理心」(「刀水漁郎(住谷天来の筆名)」)⁽¹⁵⁾について。

天来は、いつ頃から「トーマス・カーライル」に関心を持ったのか。天来は、

「英国の文豪、トーマス、カーライルは、其著英雄崇拜論に於て謂えると有り、義の為に生を犠し、理の為に身を棄てるの時に当たり、初めて真正の生命ある者なり、衆多の人を使役すると手足の如く、自ら安坐して他人に苦勞を負わしむるは、英雄に非ず、偉人の本色は毅然として、他人の為に難を忍ぶに在るのみ、と誠に至言と云う可し、英雄の心事写し得て蓋す」(『上毛之青年』第28号)

と言う⁽¹⁶⁾。この論稿により、天来がすでに内村鑑三と出会う前から「トーマス・カーライル」に関心を持っていたことが確認される。

そして、天来は次のように言う。

「…人間の將に成す可きの本領は、理を取て義を重んじ、私を去て公に就き、天真の至誠、人を愛し、世を愛し、国を愛し、民を愛し、社会を愛し、真神を愛し、只此の義務てふ一片の責任を怠らざるの一あるのみ」⁽¹⁷⁾(『上毛之青年』第28号)

また、次のように明治中期の日本社会を分析している。

「…社会の現状を洞観すれば千古の長沙暗涙全く乾かざる者あり、曰く自由、曰く平等、曰く友愛是れ彼等が托して以て、邪を為し、奸を為し、非を為すの口吻のみ、曰く法律、曰く権利、曰く義務、是れ彼等が頼んで以て、私を為し曲を為し、盜を為すの利刀のみ、…」⁽¹⁸⁾(『上毛之青年』第28号)

すなわち、「自由」、「平等」、「友愛」などを叫んでいる人々であっても、実は口先だけのことであり、現実の法律と、理想とする社会とが、かけ離れたものになっていることを天来は指摘している。

さらに、天来は、「是に知る、举世滔々、罪惡に奔り、邪を行ひ非を行ひ、私を行ひ、不義を為し、不義を為し、而して忌み憚る所を知らず、聖經の所謂、義人無し、一人も有ると無し、明達者無し、神を求むる者無し、皆曲りて全く邪と為りぬ、…」⁽¹⁹⁾(『上毛之青年』第28号)と、当時の社会を批判し、真の「自由・平等・友愛」が確立されていないと言う。まして、国家、社会、官民あげて不義、不正がはびこり、「義人」や「神を求むる者」がいない社会を深く歎いていた。

(4) 『上毛之青年』第31号(明治25年2月20日発行)に所収されている「法律死せずんば大盗止まず」(「住谷刀水」)⁽²⁰⁾について。

ここでの天来の主張は、「英国の老儒スペンサー氏は、曾て其著に論じて曰く、…」との書き出しで、ハーバート・スペンサー(1820-1903)の思想を取り上げている。

「ルソー、J・Sミル、スペンサー」の三人は、「明治10年代までの日本にもっとも人気を博した西欧思想家」であり、上記の三人の思想が、「明治の日本人たちによって熱烈学習されていた」⁽²¹⁾とされていることから、天来もまさにその一員として「スペンサー」の思想などを学習していたのであろう。

天来は、「法律条例」について、次のように言う。

「社会の法律条例も、野蛮の境に於て必要なるは勿論の事、野蛮を出でて未開に進み、未開を脱して半開の域に進む、…去れども其人民の開明が、一度半開の境を脱して、全開に進み、全開を發して最上明文の地歩に達する間は、愈々出て、愈々入り次第々に其必要を滅却し、遂に無用に了はらん而已」⁽²²⁾(『上毛之青年』第31号)

天来は、「スペンサー」の「社会進化論」を念頭に、法律について論じたものと思われる。そして、「…余輩は再び断々乎として言はん、法律死せずんば大盗止まず、大盗止まずんば法律生ず、法律の存する間は、社会は猶蛮野の域に沈溺す」と言い、「法律」が無くとも、窃盗などのない社会を理想としたと思われる。

ただ、現実の世界を考えて見ると、

「然りと雖も、余輩は敢て、法律条例を無視する者にあらず、亦如何に法律条例なる者が、最上に文明と両立する能はざればとて、一も二も無く廢滅せよと言わず、夫れ只無視せず、夫れ只廢滅せよと云わず、故に今日の如き、未開的の社会、半開的の社会に於ては、其有要を認め、其必要を感ずる者也…」(『上毛之青年』第31号)と云い⁽²³⁾、「未開的の社会、半開的の社会」においては、「法律」は必要なものであると述べている。また、「…広く此の世界の有様を観察すれば、法律の社会是れ権利の社会、権利の社会是れ相對の社会、相對の社会は即ち角逐の社会にして、角逐の社会は、正に是れ抵抗の社会なり、…」とも云い⁽²⁴⁾、「法律の社会是れ権利の社会…」との言葉に、天来の法概念が知れる。さらに、

「…道德と法律、人類と国家、孰れか是れ後、何れか本、何れか末、…目的と手段、諸士是を知れりや、天下之を解せりや、人類是れ目的なり、国家是れ手段なり、道德

是れ本なり、法律是れ末也、国の中には人実に元素たり、世界の中には国実に元素たり、人は道德にて立ち、国は法律に頼つて立つ」（『上毛之青年』第31号）
と言い⁽²⁵⁾、「道德是れ本なり、法律是れ末也」、また、「人は道德にて立ち、国は法律に頼つて立つ」との言葉に、天来がいかに「道德」を重視していたかが知れる。

(5) 『上毛之青年』第32号（明治25年3月19日発行）に所収されている
「代議政体の要領」（「刀水漁郎」）⁽²⁶⁾について。

この論稿で天来は、「兆民子曰く人生百般の事業は譬えば猶酒の如し自由は譬えば猶酵母の如し…」と書き出し、まず中江兆民の思想を紹介している。

「…専制国の事物は皆酵母なきの酒にして…立憲国の事物民主国の事物は之に反して皆酵母あるの酒也夫の材料は温醸し其の精気は発越し人たる者始めて個々独立の人身と為るとを得る也何ぞや参政の権なり財産私有の権なり…奉教自由の権なり其他言論の権、出版の権結社の権等凡そ此類の権は人たる者に必ず具有す可き所にして此種を具有して後始めて人たるの声価を有すと為り」⁽²⁷⁾（『上毛之青年』第32号）

ここで天来は、「専制国」、「立憲国」、「民主国」における統治の違いを述べていた。

また天来は、「彼の英国の硯儒ジョン、スチュアート、ミル氏が其著代議政体は実に之を論ずる周匝明確にして適切なりと謂う可し」と言い、以前、天来自身が、J・Sミルの著書を読んでその要領を抄訳したという文章を載せている⁽²⁸⁾。

以下、ここでは天来の抄訳した一部を抜粋しておく。

「故に制度政体は此の三條件中の制限以内に在りて選択し得べき者也と云ふに有り所謂理想上の最良政体を考究するは是れ科学的知能の架空応用に非ずして高尚なる実地応用也而して其国の現状にて適當なる可き最良政体を其国に移し入るるは其従事すべき目的中最も正当なる者とす」⁽²⁹⁾（『上毛之青年』第32号）

「政体の適否を判断せんと欲せば最も善良なる政体の理想的標準を立てざる可からず此問題こそ実に吾人に研究すべき主要主眼の問題なりとす。而して此理想的極美なる政体は代議制度の在る一種亦は他の種類に在りて存す」⁽³⁰⁾（『上毛之青年』第32号）

2. 『警世』に見られる天来の社会観

雑誌『警世』については、第1部に創刊までの経緯や同紙の性格について概略的に述べたが、天来は、同紙の編集者として、また、寄稿者として多くの文章を寄せていた。ただ、雑誌『警世』の存在は、現時点では、あまり知られておらず、筆者の知る範囲においても、その分析・研究がほとんど進んでいない。

『警世』は、明治33年(1900)10月に、松村介石が主筆、住谷弥作(天来)が編集人、内村鑑三が「社友」として、「警世雑誌社」から創刊された。明治34年(1901)10月10日発行『警世』第23号までの編集人が、住谷弥作(天来)の名前となっている。同年10月25日発行『警世』第24号の編集人からは、「藤沢音吉」に交代している。藤沢音吉(1873-1941)は、長野県出身。藤沢は、『萬朝報』時代の内村鑑三を知り、のちに弟子となった人物であった⁽³¹⁾。

次に、『警世』の主な寄稿者は、「社友」として、内村鑑三、島田三郎、横井時雄、浮田和民の名前が挙げられている⁽³²⁾。その他、主だった寄稿者としては、石川安次郎(半山)、赤羽一(巖穴)、安部磯雄、木下尚江、留岡幸助、幸徳秋水、陸実(羯南)、田口卯吉、海老名弾正、加藤直士などの文章が散見される⁽³³⁾。いずれにしても、明治期の社会主義者やキリスト者、ジャーナリストとして活躍した錚々たるメンバーであった。

さて、次に『警世』誌上に見られる天来の特色ある主張をいくつか述べてみたい。

明治33年10月25日発行の『警世』第1号(創刊号)には、刀水漁郎(住谷天来)筆の「燈下の読書」という一文が載せられている⁽³⁴⁾。ここに、天来は、「我れ一夜千歳の寄書、サー、トマス、モール[モア]氏の『無何有郷』を見る、…」との書き出しで、空想主義的社会主義者と言われているトマス・モアの著書、『無何有郷』(『ユートピア』)を紹介している。このなかで天来は、トマス・モアの主張として、次の言葉を示している。

「彼亦曰く大凡今の社会に存立する政府は皆其名を公共の統治に借りて自家の私利を求むるに當々たる富者権者の占有する所に非ざるは無し…彼等は常に全国民を代表する至大の公権を僭用して自己の利便なる各種の特権を作為し定めて之を一国の法律と為せり」(『警世』第1号)

そして、天来は続けて、

「モール[モア]が三百年前の往昔に於て、其眩世の活躍を以て道破せる社会的重病の原因は毫末も今日と殊なし嗚呼誰か此書を読む者我日本の現社会を連想して、亦彼

と同一の感想に撃たれ、哀々たる天下の民に萬斛の熱涙を濺かざらんや…」(『警世』第1号)

と述べ、トマス・モアの主張を例にして、暗に当時の日本の社会体制を批判していたと思われる。ただ、天来が、トマス・モア思想について、どこまで理解していたかは知れないが、当時(明治三十年代)の日本の社会における「社会的重病」、すなわち、少なくとも様々な社会的な格差があることを指摘していた。

明治34年(1901)12月25日発行の『警世』第28号には、住谷天来筆の「寸心録(中)」に「平等主義と共和主義」との一節がある⁽³⁵⁾。天来は、「若しも口に自由を唱えて、心に専横の行を好みし、…薩長の閥族政治に謳歌朝謹する者あらば、是れ実に禍なる哉。彼は自由の仇のみならず、実に自由の敵なる而已」と言い、当時の政府を「薩長の閥族政治」と言い切り、かれらにくみする輩を「自由の仇のみならず、実に自由の敵」とであると鋭く批判していた。そして、天来は続けて、

「…口に平等の主義を唱えて、心に階級の制度を迎え、差別を立て、門閥を喜び、人爵に迷い、勲功を誇り、才と智と金と力を唯だ一つの武器と為し、鈍と愚と貧と弱とを酷たらしく蹂躪して、国は国を、家は家を、人は人を、社会は社会を、公私、内外、親疎を論じて、徒に我威我見を誇る者あらば、是れ実に禍なる哉。彼は平等の乱のみならず、実に平等の賊なる而已」(『警世』第28号)

と言い、当時(明治)日本の社会に存在していた「階級の制度」、「門閥」、「人爵」、「勲功」など、格差と差別を助長するものを憎み、「平等」を乱すものであるとして厳しく批判していた。さらに、天来は次のように言う。

「嗚呼平等と共和、豈軽々に言ひ易からんや。之をして実ならしむるは只『愛』の一字あるのみ蓋し愛情は社会の依りて立てる所。宇宙の親和、天地の融合、皆此の愛を以て礎と為す。人と人と、国と国と社会と社会と和熟するは、実に此愛情に在り。否な平等は実に愛情に基く、愛情は一切美德の根源也」(『警世』第28号)

すなわち、天来の言う「平等と共和」は、『愛』のある社会であった。『愛』のある社会とは、どのような社会か。天来は、「余は最後に断言す。之を学ぶは只神を信ずるに在る而已。何となれば神は即ち愛なれば也」と言い、キリスト教信仰に根ざす『愛』を社会の根底に捉えていた。

明治35年(1902)1月25日発行の『警世』第30号には、住谷天来筆の「寸心録(下)」に「我が宗教」・「我が信仰」との一文がある⁽³⁶⁾。

「我が宗教」・「我が信仰」は、当時の天来の宗教観、信仰について知れる興味深い文章である。「我が宗教」の書き出しには、「我が宗教は基督の基督教なり」とある。また、「我が信仰」には、「我は神を信じ、基督を信じ、又我を信ず」と言い、自らがキリスト教徒であることを明確に述べている。

そして、天来は、「我が宗教」⁽³⁷⁾で、「基督教は和の教也、故に我は列強の如く、其干戈を鋭くして、戦う可らず、争う可らず」と言う。つまり、これらの言葉から天来が、キリスト教思想に基づく「非戦論」的な思考を持っていたことが知れる。

また、天来は、「我が信仰」⁽³⁸⁾で、「自由、平等、友愛、正義、是れ実に神国の大憲にして、一切の真、善、美は皆悉く聖なる神の心に存す」と言い、さらに続けて「人生の惨事たる戦争は止めざる可らず」と述べている。

明治35年(1902)5月10日発行の『警世』第37号⁽³⁹⁾に、「住谷生」として、「漫興」と題する文章が載った。その書き出しには、「松村曰く、天来住谷君は警世発兌以来、吾人と編輯を與にするもの、今や耳を病み、更に又眼を病む、痛傷何ぞ限りあらんや。君十分の学殖あり、而して加うるに文才を以てす、其の前途に大望を負うの身たる夙に吾人の認識する、…」とあり、天来の身に不調をきたしていたことを述べている。

明治35年10月10日発行の『警世』第42号⁽⁴⁰⁾、松村介石の「読者諸君に告ぐ」によると、「予今回『警世』に主幹たるの名目を脱す…」と言い、松村自身が、歴史書の執筆や社会教育の演説などで多忙のため、その後任を天来に任せることになったと言う。松村は、「然れども住谷天来君は最初より我『警世』に従事せらるるもの、今後更に健筆を揮ひ、且つ編輯の任に当らるべければ、決して読者を失望せしめざらんを信ず」と言い、天来の文筆を高く評価して後事を託した。

これに対し、天来筆の「『警世』の一転起」の記事⁽⁴¹⁾には、「詞兄松村介石君、今者『警世』の主幹を辞して、余をして其大任に当らしめんとす…」と言い、天来はためらいながらも、「然りと雖も之を生める者も君と余にして、…君にして之を養う能わず、余にして之を育する無くば、夫れ將た遂に如何すべき。而かも『警世』や廢す可らず、何となれば時代の徴候は『警世』を駆って、厭く迄で声音の破産をなしても叫ばざる可らざる者あり」と述べていた。すなわち、雑誌『警世』の創刊に力を尽くしたのは、「君」(松村)と「余」(住谷)であったことを述べ、松村が、「主幹」を辞めても、同紙を廢刊させるのではなく、存続させることを読者に伝えている。

天来は、『警世』の存続の意義を、「社会の悲運、邦家の危機、世道の頽廢、人心の萎

靡、譬えば猶『ナイヤガラ』の大瀑に棹して直下する舟の如し、…而して之を警し、之を醒し、之を戒め、之を訓え…」と言い⁽⁴²⁾、社会の「悲運」や国家の「危機」、世の中の矛盾を同紙の主張で問い、正したいとの思いがあったと思われる。

ただ、天来は、「余即ち不得已、敢て自ら敗残の病軀を擁して…」と言い、依然として自身の体調不良があったこと述べている。そして、たとえ松村が、「主幹」を離れても、「正々の論、堂々の議、世を警し、人を醒すは敢て往日に異ならざる可し」と言い、また、「余と松村氏と『警世』の一事に於て、品性の修養、公道の拡張に異ならざるが如く、爾かく大体に異ならざる可し」とも言って、『警世』の編輯方針、性格は変わらないことを述べている。

次に、天来は、「『警世』の一転起」において、当時の社会を、次のように、分析していた。

「読者よ、方今我国の弊は、既に諸子の知らるるの如く、余りに学者多く、余りに智者多く、余りに強者多きに有り、而して其智者、学者、強者等は、余りに平氣に、…世の貧者弱者を侮辱し、…」(『警世』第42号)

すなわち、当時の日本の社会においては、「社会的強者が、弱者を虐げている」と、鋭く指摘していた。

そして、「社会的強者」は、「只独り遵奉せる自己中心主義の奴隷となり、安如、泰如、喜如、悦如として真に太平の民たるが如し、是れ活ける噴火山の絶頂に坐して死せる平和を貪らんとする者に非ずや」と言い、「社会的強者」の姿を批判していた。そして、天来は、「愚者若し奮うべく、弱者若し起つべきの時あらば、恐らく今日程急なる時は非ざらむ」と言い、さらに「余の如き愚にして弱き人々と共に、一層真理に忠ならんと欲す、而して余の如き多数と共に一層正義を施かんと欲す」とも言って、『警世』における言論の主張の目的は、「真理」に「忠」であり、「正義」を貫くことにあると述べていた。

こうして、天来は、『警世』における言論の力を信じ、

「余は一層真面目ならんと欲す、大胆ならんと欲す、況や高潔なる精神と、壮美なる品性と、火の如き熱誠と、男らしき忍耐と、濃厚なる愛情とは何れの国、何れの代にも救世済民の第一要素—余は之より余の如き世の愚者弱者と連携して此涵養と発越に努めんと欲す」(『警世』第42号)

と、読者に向けて宣言していた。

3. 『上毛教界月報』に見られる天来の社会観

『上毛教界月報』は、柏木義円（1860－1938）が創刊した雑誌である。柏木義円は、越後国三島郡与板（現新潟県長岡市）出身。新潟師範学校、東京師範学校に学ぶ。卒業後、群馬県碓氷郡の小学校へ赴任。その後、新島襄を知り、同志社英学校に学ぶ。同校卒業後は、熊本英学校・同志社にて教職に就く。同志社辞職後の明治30年（1897）、安中教会（組合教会）の牧師となり、明治31年（1898）、『上毛教界月報』を創刊。同紙は、戦前の昭和11年（1936）まで続いた月刊紙であった。『上毛教界月報』には、義円らによるキリスト教や社会問題にかんする論説、群馬県内の諸教会の動向などを載せている。また、義円も日露戦争時には、「非戦論」を主張。その後も平和思想を論じ、『上毛教界月報』は、しばしば発禁にされた⁽⁴³⁾。

この『上毛教界月報』へ天来が寄稿したのが、明治末期の『上毛教界月報』第145号（明治43年11月）に初見される⁽⁴⁴⁾。当時の天来は、井上浦造が創設した「共立普通学校」の教師をしていた頃であった。明治44年（1911）4月から天来は、伊勢崎教会（日本基督教会）の牧師となった。その後、大正7年（1918）には、柏木義円らの推薦を得て、甘楽〔富岡〕教会（組合教会）の牧師となり、この頃から昭和時代の初めにかけて『上毛教界月報』へ頻繁に寄稿していた。主な寄稿文は、キリスト教思想に関する文章であるが、時事的な社会問題を例にして述べている紙面も散見される。なお、昭和に入ってから、天来自身が、『聖化』⁽⁴⁵⁾を発行するようになったので、『上毛教界月報』への寄稿は減ってきたものと思われる。（天来の『上毛教界月報』への寄稿文一覧は資料編を参照）

天来は、『上毛教界月報』第263号（大正9年10月15日発行）に「軽井沢に於ける上毛教師会」と題する文を載せた⁽⁴⁶⁾。天来は、大正9年（1920）9月、柏木義円ら群馬県内の組合教会の牧師たち数名と軽井沢の「修養会」に出掛けた。天来によると、「修養会」では、「…祈禱し瞑想し読経し談笑し交遊して知らず知らずの間に肉体上の休養と霊性上の修養と思想と信仰の原動力を十二分に捕へ得べき絶好の機を与へらるゝに至った…」と言う。また、天来は、「其他莫哀山荘に幽棲せる尾崎行雄氏を訪ねて閑かに半日の政論を訊しが如き、又は離山の麓近く安倍磯雄氏を訪う社会問題やら新マルサス主義につき教えられし如き亦是れ近来一快事、…」と述べていることから、義円らとともに尾崎行雄や安倍磯雄などと面会していた。そして、天来は、

「嗚呼世界の改造や万国の平和や社会の革正や新天新地の開拓や、言うは如何にも容易であるが、実行は仲々に難い。乍然若しも天下の人々にして之を御互いの間より始めて二三人の友垣に及び而してより広くより深くより大により遠く此の強き愛と聖き愛と健やかなる愛とを実現するに至る時は其時其処に忽然として之を眼のあたりに見ることが出来よう」（『上毛教界月報』第263号）

と結び、「万国の平和」などは、「言うは如何にも容易であるが、実行は仲々に難い」と言い、「強き愛と聖き愛と健やかなる愛」とが実現すれば、平和が訪れるのではないかと説いた。

安部磯雄（1865－1949）も平和思想を持ったキリスト教社会主義者であった。安部は、福岡出身。同志社英学校に入学し、新島襄に学び受洗する。その後、渡米し帰国後は、同志社や東京専門学校（早稲田の前身）の教育者として活躍。また、社会主義者としても、「非戦論」を主張していた⁽⁴⁷⁾。いずれにしても、柏木義円、安部磯雄、天来などの非戦論者たちが集った軽井沢における「修養会」は、大変興味深い会合であった。

『上毛教界月報』第268号（大正10年3月20日発行）には、「信仰の衰兆と我等の覚悟（両毛教師会の席上に於て述べしもの梗概）」と題する文を載せた⁽⁴⁸⁾。天来によると、当時の群馬県地方のキリスト教界について、「我が上州の如き組合派に属するものみにも十数個の教会あり、…寂々寥々毎日曜日の礼拝に集るもの驚く勿れ只った十名、無慮十数名と来ては如何にも心細い次第である、…」と語り、キリスト教界の衰退を歎いている。そして、「宗教とは内的生命のことなり故に是は政治や経済とは全然其性質を異にして居る」と言い、「我々は純の純なるクリスチャンであってキリスト主義者である故に我々は奥のスタインや独のトライチュケに従うて帝国主義や軍国主義を唱えない」と、当時の天来は、あくまでのキリスト教牧師としての立場から平和思想を論じていた。

『上毛教界月報』第273号（大正10年8月15日発行）には、「六日間の饗宴（軽井沢に於ける上毛教師会の記事）」が載せられた⁽⁴⁹⁾。昨夏と同様に軽井沢にて、群馬県内の組合教会牧師たちと、「修養会」が開催された時の様子を述べている。参加者は、天来、柏木義円、太田九之八らと共に金澤常雄であった。天来によると、

「此九月より新たに牧会に従事すべき少壮有為にして伝道に熱心なる帝大出身の法学士金澤常雄君を桐生教会に与えられし事を上州のため將た又日本のために双手を挙げて喜ぶもの也。…あゝ金澤君の如きは一人を以て千万人に当るの士、我等が同君のために特に一夜の歓迎会を開いて互に肝胆を披露し、手に手を執りて無限の感激と快談

に夜の森々と更け渡るをも打忘るゝに至りしもの亦宜なりというべき也」（『上毛教界月報』第273号）

と記し、金澤常雄が桐生教会（組合教会）の牧師に就くことを紹介している。金澤は富岡出身で、一高時代には、内村鑑三の「柏会」にも属していた俊英で、東京帝大に進み内務省に勤務するも辞職、天来の勧めにより牧師となる。その後、無教会主義キリスト者となり、かれの発行した『信望愛』も、第二次世界大戦下には発禁処分の弾圧を受けた⁽⁵⁰⁾。

『上毛教界月報（湯浅治郎翁記念号）』第405号（昭和7年7月25日発行）に、天来は、「湯浅治郎君終に逝けり」を載せている⁽⁵¹⁾。湯浅治郎（1850－1932）は、安中出身。味噌醤油醸造業の家に生まれ、家業の傍ら横浜に出て、英語などの外国文化に触れる。新島襄の帰国後、安中教会の設立時に新島から受洗した。その後、群馬県会議員、議長となり、全国に先駆けて群馬県の廃娼を実現させた。また、知事を公選にすべきだとの主張をしていたという程、先見的な思想を持っていた。なお、第1回の衆議院議員にも選ばれ、国政に参画。新島の亡き後は、同志社の経営にも尽力した。義弟には徳富蘇峰がおり、蘇峰の「民友社」の経営支援やキリスト教関連書籍を扱った「警醒社」を組織した。いずれにしても、実業家、政治家として活躍した人物であった。弟の湯浅吉郎（半月）も、新島の同志社に学び、詩人にして旧約聖書学者、子息には湯浅一郎（画家）、湯浅八郎（同志社総長）などがいた⁽⁵²⁾。

なお、『上毛教界月報（湯浅治郎翁記念号）』第405号には、天来のほかに、柏木義円、井上浦造、田島進も寄稿していた。天来は同号で、「私が湯浅君を知ったのは私が丁度十七八という血気盛の頃であった」と言い、湯浅を知ったのは、前橋の幽谷義塾に学んでいた頃であり、上毛青年会にも属して廃娼運動に奔走していた時期であった。当時の湯浅は県会議長であり、天来は、「今日のやうな愚鱈の政治家と違ひ少なくとも古への志士仁人を以て任ずる政治家で、高尚の理想と雄大の抱負と健実なる主義を以て立たれし…」と、湯浅を高く評価していた。また、天来は湯浅について、「私の実に感服した事は君の平生の態度であった。君は質実剛健にして然も温良慕謚、毫もその辺幅を修飾せざることであった」と言い、「所謂クリスチャンの紳士とは恐らく此の如き人であろうとツクツク我々は感心したのであった」と述懐していた。そして、天来は、「精神界に於ける新島襄先生や内村鑑三先生等と相並んで、上州男児の面目を発揮しその独特の異彩を放って所謂群鶏の一鶴たるを得しことは誠に我らの誇りとして欣快とする処である」と言い、湯浅治郎を新島や内村にも匹敵する人物であると評した⁽⁵³⁾。

4. 住谷天来の教育観

天来は、農家出身ではあったが、向学心が旺盛で、地元の群馬郡国府村の国府小学校（現高崎市）を卒業後、前橋に出て、幽谷義塾で漢学を学ぶ。また、前橋英学校では、竹越与三郎（1865－1950）らに英学を学んでいた。そして、この頃キリスト教を知り、前橋教会に出入りするようになり、同志社卒の新島門下、不破唯次郎より受洗する。

その後、上京し、早稲田、慶応義塾に学んだ後、上州に帰郷し、「上毛共愛女学校」の教師（明治25年～明治29年）となる。同校は、新島襄も設立発起人として名前を連ねた群馬県におけるキリスト教主義の女学校として有名である。

こうして、女子教育に尽力した天来であったが、同校を辞職し、再び上京する。この頃、内村鑑三を知るが、天来は、明治32年（1899）頃、江原素六（1842－1922）の設立した「麻布中学校」の教師となる（天来の正式な在職期間は不明）。江原は幕臣出身のクリスチャンで、衆議院議員の政治家としても活躍した教育者であった⁽⁵⁴⁾。

天来は、明治38年（1905）頃、大病のため上州に帰郷。明治43年（1910）頃からは、親友井上浦造が山田郡大間々町（現みどり市）に創設した「共立普通学校」の教師（明治44年頃まで）となった。

井上浦造（1867－1952）は、群馬県勢多郡馬場村（現前橋市）出身。天来とは、前橋の幽谷義塾時代に知り合い交友を結ぶ。浦造も前橋教会にて不破唯次郎から洗礼を受けたクリスチャンで、新島襄に出会い、同志社に学ぶ。浦造は、群馬県内の教会で牧師となるが、教育に関心を持ち、明治33年（1900）に「共立普通学校」を創設した⁽⁵⁵⁾。天来が、教師となった「共立普通学校」は、何よりも井上浦造のピューリタニズムに基づいた教育思想による「人格教育」、「魂の教育」を重視した学校であった⁽⁵⁶⁾。明治44年（1911）、天来は同校を辞職することになり、群馬県内のキリスト教牧師として活躍することになる。

天来は、内村鑑三に出会う以前に、新島襄に出会っていたと思われる。それは、天来が、明治28年（1895）1月23日、新島の永眠5周年の命日に際して、前橋市臨江閣において開催された追悼講演「新島先生を懐う」の記録から推定される⁽⁵⁷⁾。この時の講演原稿（天来筆の原稿）によると、天来は、生き生きとした文章で、新島の人となりを書き残していた。

次に、天来が、新島襄をどのように捉えていたかについて述べる。

天来の原稿⁽⁵⁸⁾によると、「…一旦演説の題を掲げて此処に立った以上、私も男でありますから如何に不弁でも心に懐く赤誠を吐露して皆様の御聴を煩はそうと思います」と言い、講演を始めている。天来は、「…御存知の通り今晚は吾が日本の偉男児新島先生の永眠より五週年期の一月二十三日。即ち精神的改革者として儀表的人物として吾が国民の身代わりに立たれたる新島襄先生の命日であります」と言い、新島のことを「精神的改革者」、「儀表的人物」と述べている。また、天来は、「…併せて私し^(ママ)共同志の者が共に誓ふて先生の遺志を奉じ天下に運動するの覚悟をしたらば夫れで充分と思います」と言い、「(新島)先生の遺志を奉じ天下に運動するの覚悟」を持って、新島襄の精神を受け継ぐことを訴えていた。そこで、天来は、

「今ま吾々の父とも師とも力とも光明とも頼みたる新島先生に就て考へますと、…吾日本のキリスト教会の中に、吾が日本の文明社界の中に、吾が日本の精神教育の中に、特に先生に親炙(しんしや)したる人物の言行の中に、血となり涙となって先生は慥(たしか)に千万歳も生きつつあると信じます。是等の事を考へて見ると先生は決して尋常の人でなく則ち継ぐべき働をなしたる豪傑であり英雄であります」

(住谷天来「新島先生を懐う」)

と言い、新島が、日本の「キリスト教会」、「文明社界」、「精神教育」に影響を与え、また、新島に親しく教えを受けた人物の中に、かれの言葉や思想が生きているものであると述べていた。そして、「…先生の熱血ある心術、凜烈たる剛気を感じ為めに肉飛び血湧かんとするもの其幾回なるを知らず、実に先生の如きは其死に際して尤も男子らしき豪傑らしき手本を示したりと云うべし…」とも述べていることから⁽⁵⁹⁾、天来は、新島の姿に接し、演説などを聞いていたのではないかと思われる。

さらに、天来は、新島襄の精神や思想の一端を次の言葉にして紹介している。

「爾学校の教師よ、爾は爾の学校をして自由教育の学校とならしめ、努めて倜儻不羈の人物をして其性に順応して之を教化せしめよ」

「爾書生よ、品行を養い精あり活火あり熱血あり以て真正の正義を愛し国家に報いゆる人物と成れ」

「爾総ての者よ、宜しく爾の精神を尽し力を尽し、神を愛し、真理を愛し互いに相愛し、以て吾が邦をして清潔健全の国たらしめよ」(住谷天来「新島先生を懐う」)

などの言葉を記し⁽⁶⁰⁾、新島が、ピューリタニズムによる「人間教育」、すなわち「リベラル・エデュケーション」に重点を置いた教育思想を持っていたことを訴えていた。

天来は、最後に「私しは今新島先生に就て回顧し是より以後吾が日本人民の精神的改革の種、儀表的人物の源となるものは蓋（けだ）し新島先生なりと考へます」と結び、講演の原稿を終えている⁽⁶¹⁾。

いずれにしても、天来は新島襄を深く尊敬していたと思われる。そして、新島門下の不破唯次郎や柏木義円、井上浦造ら、同志社出身者との交友関係も深かったためか、同志社卒業生の群馬県内における交友会にも時々招かれていた⁽⁶²⁾。

大正15年（1925）1月16日、天来は、組合教会の甘楽（富岡）教会の牧師として講話をしていた。当日は、富岡近郊の小学校職員、高等女学校長、中学校長ら約200名ほどに『宗教と教育』と題して講演している⁽⁶³⁾。その時の記録によると、天来は、

「二者は相離るべからざるものにして二つのもの相待って人格を完成し、真に神の像に肖せて造られし人間の本领を發揮するものたることを高調し、現代文明の滅亡と之を回復するするの力は、如何にしても宗教と教育により、正しき人生観と宇宙観と与ふるありと結論し、約二時間許り講話」（『甘楽教会百年史』、246頁）

したと言い、「教育」と「宗教」は、不可分のものであって、両者により、人間の人格を完成できると述べていた。すなわち、「現代文明の滅亡と之を回復するするの力」が、「宗教と教育」にあると述べ、両者により、「正しき人生観と宇宙観」を知れると言う。ここに、天来の教育観が知れる。

『聖化』第4号（昭和2年4月5日発行）には、「嗚呼尊むべきペスタロッチ先生」と題する文を載せた⁽⁶⁴⁾。この文にも、天来の教育観を読み取れる。天来は、当時の教育について、「今日の如く知識万能教育万能の天下にありては到る処に立派な学校は建てられ、教師先生は星の如く多くあるが其の割合に立派な市民が起らないで、却て不良の男女のみが年一年に増して行くとは何という深刻な皮肉ではございません乎」と言い、「知識万能教育万能の天下」と鋭い指摘をしている。そして、続けて「…其処に大なる教育の欠陥があり、特に之を薫陶すべき人物の無い為ではございません乎」と言い、当時の「教育の欠陥」として、「之を薫陶すべき人物の無い為」、すなわち、人物を養成するための教師がいないことを指摘していた。

そこで、天来は、「此時に当って大教育家ペスタロッチ先生を偲ぶは誠に意義ある事でございます」と、教育思想家として著名なペスタロッチ（1746－1827）を取り上げる⁽⁶⁵⁾。天来は、ペスタロッチの「墓碑銘」にある言葉、「…人類の教育者となり。真の人間、基督信者、市民たり。凡てを他の為になして何事も己の為にせず…」などを引用

し、「何という香はしい懐かしい又慕わしい人格者ではございません乎。此墓碑銘こそ尤もよく彼の一代を物語る者でございます」と言い、ペスタロッチを高く評価していた。

さらに、天来は、「ペスタロッチが斯くも卓絶れた魂の持主である所以は実に彼が宗教家であり、基督者でありし為でございます」と言い、ペスタロッチが単なる教育者というだけでなく、宗教家、基督者であったことを強調していた。そして、最後に、

「彼は宗教を以て精神生活の基調となし之を以て自己の教育家たる一大使命を果したのでござい舛。何卒か御互に我国の教育の欠陥を認ると共に此点に於て深く学び度もので御座います」（『聖化』第4号）

と結び⁽⁶⁶⁾、当時の日本の教育が、すでに知識偏重の教育であると批判し、宗教を以て精神生活の基調とする「魂」の教育こそが大事であることを主張していた。

『聖化』第19号（昭和3年7月5日発行）には、「教育の失敗と人格の破産」という文を載せた⁽⁶⁷⁾。天来によると、「…今日の状況はどうだ、悉く此魂が腐って了うた、否、国民を挙げて人格の破産である。だから国難来の叫びが津々浦々に響き渡って今や国家は危機一髪の時である」と言い、当時の日本人が「人格の破産」をしていると厳しい指摘をしている。天来はなぜ、そうなってしまったのかと言うと、「是は教育の大失敗から来たものだ」と断言している。そして、続けて、

「御存知の通り明治、大正にかけての約五十年の時代は知識万能、教育万能の時代であります。而して教育を受けて知識さえあれば何んな田夫野人でも忽ち立派な人となって社会の為め、国の為め、美事善行は山ほど出来て、国家は隆盛、国民は安泰というのが彼等の等しく夢見る処であった」（『聖化』第19号）

と言い、明治・大正の時代は「知識万能」の教育の時代であったことを指摘し、これまでの政府の教育政策を批判している。また、天来は、「…日本の現状は如何上は一国の首相より下は山村の樵夫まで悉く悪魔の子分で、人格や品性に至っては殆ど零と云ってよい」と言い、これまでの教育の結果としては、人格や品性を重視していなかったと分析している。そして、天来は、「聖書」の言葉や「ベーコンの『知識は人を有力にするが然し乍ら知識は必ずしも人を善良にしない』』といった名言が如何によく現代の日本人に適中して居るかよ⁽⁶⁸⁾とも言い、当時の「知識万能」の教育の弊害を指摘していた。

次に天来は、「世界第一の教育家フレーベル」の言葉として、『神を知らしめ純潔神聖の生活に達せしむる是也』を引用し、キリスト教思想に基づく教育を例として述べた⁽⁶⁹⁾。フレーベル（1782－1852）は、ドイツ出身で、ペスタロッチにも師事していた教

育学者であった⁽⁷⁰⁾。天来は、「…如何に学校の数は多く、如何に設備は行き届いて、教師の数は山ほどあっても、神無しの教育、魂抜きの教育では到底悪魔の製造位いが関の山で、所詮本統の人間は一人でも造る事の出来ないのは明らかだ」と述べ、キリスト教思想に基づく教育をすることにより、人間としての品性、人格を身につけられることを主張していた。

『聖化』第28号（昭和4年4月5日発行）には、「牧者なき迷羊」という題の文を載せた⁽⁷¹⁾。ここで天来は、「イエス出でゝ大なる群集を見、その牧者なき羊の如くなるをいたく憫みて多くの事を教へはじめ給ふとある。今の日本の状態が丁度是ではないだろうか?…」と問いかけ、当時の文部省の教育政策について、

「文部省が全国の大学や専門学校や約七十余の校舎に五万円の金を分配して、夫れで思想を善導せよというたのはよいが、何処の学校でも、何うい方法で之を使用したなら果して其期待すべき思想善導が出来るかどうか…そこでその金をうけて持て余して居る処もあるれば、中には遠足や会合に使用して悉く飲みはたし…」

（『聖化』第28号）

と言い、当時の文部省の「思想善導政策」を批判していた。そして、天来は、「況や金で思想善導を謀るなどとは途方もない間違い」と厳しく批判している⁽⁷²⁾。

『聖化』第49号（昭和6年1月5日発行）には、「教育と人格」と題した一文を載せている⁽⁷³⁾。天来によると、「今の世に政治家といわれ、紳商といわれ、博士学士といわれる人々の大半は、所謂教育こそうけて居るが彼等は文明の蛮人で、これをヒュマニチーの上から見れば悉く道德上の破産者である（寧ろ罪人である）」と言い、「然り而して此罪は何処から来たか、其欠陥の由りて来る処如何?一言に約すれば、曰く教育の失敗これ也」と言い、これまでの文部省の教育政策について、「教育の失敗」と厳しく批判している。天来は、また次のように言う。

「今日の教育は学問技能を授くるに汲々としておるが、人として何よりも大切な人格品性の陶冶をば等閑して居る、是ぞ今日の頹風乱俗の源である此際之を救うものは魂の教育、即ち宗教の外にないのである。人よ須らく宗教に来れ」（『聖化』第49号）と。すなわち、教育の本質は、「人格品性の陶冶」にあると言い、そのためには、「魂の教育」を重視する宗教教育が大切であると主張していた。

『聖化』第53号（昭和6年5月5日発行）には、「画龍点睛」という文を載せた⁽⁷⁴⁾。天来によると、ある教育家から招聘を受け、小学校の「学事会」において、小学校長、教

師たちの前で講演した。天来は、ブラウニングの『欠けたものがあるが何でせう』という詩の一節を引いて、「恰も此詩の如く現代の日本には大切なものが欠けておる」と言った。天来によれば、「物を重んじて心を軽んじ、肉に囚われて霊を閑却した大失敗から来て居る」からだと言う。そして、天来は、日本の社会で犯罪が増加しているのは、「宗教を閑却して神ぬきの教育靈魂なしの教育施せし結果なりと喝破した」と言い、日本の教育には、「宗教教育」が欠けていることを指摘していた⁽⁷⁵⁾。また、天来は、

「有名なる教育家フレーベルやペスタロッチーや中江藤樹や山崎闇斎や将た又哲人ベーコンや西郷隆盛等の名言をあげ如何に彼等が人の子を教育するに当りて神を敬い、霊を尊び、宗教の力に由りて神人融合の妙と天道人道の一致とを以て、人格の完成を熱心に謀りしかを尤も力強く高調し、…」(『聖化』第53号)

と言い、古今東西の教育者、学者、政治家の名前を挙げ、「宗教」の力を持って、「人格の完成」を謀るべきだと強調していた。すなわち、天来は、「此際宗教を以て是非共此欠陥を補い以て画竜点睛の妙を現すべき」であると結論づけた⁽⁷⁶⁾。

5. 住谷天来と社会主義者との交友

天来がいつ頃から、社会主義思想に関心を持ったのかは定かではないが、明治35年（1902）7月には、赤羽一（巖穴）の著書『嗚呼祖国』に「序」を載せていた⁽⁷⁷⁾。赤羽^{はじめ}一（1875－1912）は、長野県出身の社会主義者。号は巖穴。東京法学院（のちの中央大学）に学ぶ。雑誌『警世』の記者となったということから、この頃の天来と知り合ったのだろうか。赤羽は、明治35年に『嗚呼祖国』を出版後、渡米するが、のちに同書は発禁となった。帰国後、日本社会党に入党、『日刊平民新聞』の編輯員として活躍するが、のちに筆禍のために入獄、獄死したという人物であった⁽⁷⁸⁾。

『嗚呼祖国』の天来の「序」によれば、「友人赤羽君の著『嗚呼祖国』は蓋し此憤慨の余に成れるもの其猛然烈然たる熱火は、宛から浅間の噴火の如く、人をして万丈の光煙を仰ぎ望むの思いあらしむ」と述べ、赤羽の同書への熱き思いを読者に伝えている。

また、天来は同書の「序」で、

「蓋し世に恐べき者多しと雖も、未だ今日の我国の如く、相助共済の精神無き社会ほど恐るべき者は非ず。何となれば相助共済の精神無き社会に於ては人は只自己あるを知て他あるを知らず、此自己にして満足せば、他を害し、他を傷け、他を虐げ、他を殺すも敢て顧みるを知らざるの強欲漢たらしむれば也」

と言い⁽⁷⁹⁾、当時の日本を「相助共済の精神無き社会」とであると指摘し、鋭い社会批判を展開していた。

また、天来は、「社会は此の如くして終に富者が貧者の汗血を絞り強者が弱者の臟腑を啖い…」と言い、「故に今日の社会に於て最も良く成功し、最も善く独立せる者は、最も甚しき利己主義の人にして、他を害し、他を傷け、…即ち現社会に於て最も多く名誉なる大勲位某の如き、最も多く財産ある少数の富豪の如き総て此種の標本と見て可也」⁽⁸⁰⁾とも述べ、社会的強者が、弱者を犠牲にしていることを痛烈に批判している。

明治36年（1903）11月発行の『平民新聞』第3号に、天来筆の「墨子の非戦主義」が載せられている⁽⁸¹⁾。そもそも、『平民新聞』は、日露戦争の危機が迫った明治36年10月に、『萬朝報』を退社した幸徳秋水⁽⁸²⁾、堺利彦（枯川）⁽⁸³⁾らが、社会主義・非戦論などを主張するために創刊した新聞であった。なお、この時に、内村鑑三もキリスト者として、『萬朝報』を退社している。この『平民新聞』は、「平民社同人」の名に於て、幸徳秋水、堺利彦（枯川）らが、「自由・平等・博愛」、「平民主義」、「社

会主義」、「平和主義」などを提唱した宣言が掲げられた新聞であった⁽⁸⁴⁾。

また、『平民新聞』第3号(明治36年11月発行)の「同情語録」には、「住谷天来氏(東京)」として、『両君が我国のヒューマニストとして将た我国のソーシアリストとして…赤手を揮つて独力此業に従い玉う事誠に我々の同感同情に堪えざる所に候』との言葉を載せている⁽⁸⁵⁾。このことから、当時の天来は、幸徳秋水、堺利彦(枯川)らの主義主張を支持していたと思われる。

その後、天来は日露戦争開戦後の明治38年(1905)頃には、東京を離れ、故郷の上州へ帰郷している⁽⁸⁶⁾。なお、幸徳秋水の「手帳」(明治43年)には「上州国府村住谷天来」との記載⁽⁸⁷⁾が残されており、幸徳と天来との交流をうかがわせるが、その他、両者の交流を示す資料については、筆者も見い出していない。

上州に帰郷後の天来は、地元の森川抱次(1869-1956)と深い交友関係があった。森川は、群馬県佐波郡名和村(現伊勢崎市)出身。天来と共に若き頃、廃娼運動に参加。その後、村長、県会議員などの地方政治家として活躍⁽⁸⁸⁾。森川もまた、『平民新聞』を購読し、社会主義思想について理解を示し、明治37年(1904)には、同地区に堺利彦らを招き、演説会を開催している⁽⁸⁹⁾。天来は、晩年、森川の著書『敢闘七十五年』(1943年刊)に「跋」を寄せ、同氏との長い交友関係を記していた⁽⁹⁰⁾。

こうして、天来は、「社会主義者」として見られたのか、あるいは、「非戦論者」としてなのか、甥悦治の回想によると、「当然社会主義者の一派と目されて要視察人として政府当局の警戒するところの人物であった」と言い⁽⁹¹⁾、当局から「要視察人」としてその行動を監視されていたという。それは、すでに悦治が十歳くらいの明治38年頃の事であったと言い、天来が上州へ帰郷した時期と一致している。甥悦治は、

「天来叔父は日露戦争以前に、非戦論を唱えていたのであった。…明治37年の日露戦争勃発前の日露外交の危機を洞察してキリスト教の愛と平和の立場から非戦平和の評論を発表したのであるから、わが国の非戦平和論を唱えた幸徳秋水、堺利彦そしてトルストイとの日本の友人たちとともに日本の非戦平和論者の先駆者の一人であったわけである」(住谷悦治「住谷天来とわたくし」)

と言い⁽⁹²⁾、天来の非戦・平和主義者としての立場を述べていた。

第2章 住谷天来の非戦・平和思想

1. 同時代のキリスト者の非戦・平和思想

近代日本における代表的な「非戦論者」として、本稿の第2章の「1. 同時代のキリスト者の非戦・平和思想」では、住谷天来の「非戦論」との対比において、特に「日露戦争」をめぐる「非戦論」を主張した木下尚江、深澤利重、柏木義円、内村鑑三の4人の「非戦・平和思想」を考察する。本稿で取り上げる4人の人物は、いずれも住谷天来と何らかのかかわりがあり、天来とは、特に深い交友関係も見出される。そして、木下、柏木、内村の3人は、日本を代表する「非戦論者」とも言える人物である。

1. (1) では木下尚江を取り上げる。木下は、「キリスト教社会主義」、「キリスト教博愛主義」の立場から、「非戦論」を主張したと言われている。なお、幸徳や木下は、週刊『平民新聞』に拠り、「非戦論」を展開している。

(2) 深澤利重は、上州前橋の地に住み、キリスト教の信者（正教会信徒であったが、途中プロテスタントとなる）として、トルストイにも影響を受けている。ただ、かれの著書『日露時局論』においては、製糸業者としての経済的視点から、「非戦論」を展開している。

(3) 柏木義円は、新島襄の弟子として、上州安中教会の牧師として長年過ごし、『上毛教界月報』を創刊し、「非戦論」を主張している。柏木は、キリスト者としての立場から、また、「社会主義思想」の影響も受けての「非戦論」を展開していた。柏木と天来とは、同じ上州の地から、柏木は『上毛教界月報』、天来は『聖化』という地域に根ざしたジャーナル（読者は県外にもいた）を通して、「非戦論」を展開していたことに特色がある。

(4) 内村鑑三の「非戦論」は、「キリスト教思想」による「絶対的非戦主義」の立場であると言われている⁽¹⁾。住谷天来とは、肝胆相照らす間柄であった。内村は、天来のことをキリスト教信仰を持った「漢学者」と述べていたこともあり⁽²⁾、天来の思想の背景には、深い東洋思想の理解があることを見抜いていた。天来が、「墨子の非戦主義」⁽³⁾を載せたのも、内村の『聖書之研究』であった。すなわち、天来は、他の非戦論者には見られなかった「墨子」という東洋思想を源流とする「非戦論」に着目していた。

(1) 木下尚江

木下尚江（1869－1937）は、明治2年（1869）長野県松本に、旧松本藩士の子として生まれた。明治14年に地元の松本中学校に入学、この頃クロムウェルを知り影響を受ける。同校を卒業後、上京。明治19年に東京専門学校（のちの早稲田大学）へ入学、明治21年に同校を卒業。地元松本の新聞社『信陽日報』の記者となる。明治26年、松本美以教会にて受洗する。明治29年、『信濃日報』主筆となり、明治32年、上京して『毎日新聞』へ入社。この頃、幸徳秋水を知る。明治33年、「足尾銅山鉍毒問題」を記事にし、「廃娼運動」にも取り組む。明治34年、幸徳秋水・安部磯雄らと社会民主党結成をはかるが、結社禁止を命じられる⁽⁴⁾。

木下尚江は、「普選運動の先駆者」⁽⁵⁾と言われているが、明治35年、前橋のキリスト教徒（深澤利重など）に推され、衆議院議員選挙に出馬するが落選している。木下を推した深澤利重は、前橋の製糸業者であり、上毛共愛女学校（当時）の理事でもあった。木下は、深澤宅を選挙事務所とした。なお、この時、木下の応援演説のために幸徳秋水・片山潜・安部磯雄などの社会主義者が前橋に来訪している⁽⁶⁾。

『上毛教界月報』第47号（明治35年9月発行）の「前橋通信（8月）」には、「八月は衆議院総選挙にて当市には木下尚江君が或有力者に推されて候補者に立ち、連夜、演説会ありしが、同君は勿論、応援に安部、片山その他の諸氏も…」と記されている⁽⁷⁾。また、『上毛教界月報』第51号（明治36年1月発行）にも、「昨夏総選挙の時前橋市に於ける木下氏一派の運動は…新呼立憲治下の候補らしき運動なりしなり而して其当の候補者木下尚江氏は申す迄もなく之に応援したる諸士中松村介石、海老名弾正、巖本善治、片山潜、安部磯雄の諸士は皆基督教徒にして殆ど基督教徒と社会主義者の運動なりしが如きの観ありたり」⁽⁸⁾と、木下の出馬した前橋における選挙の特質を記していた。

さて、木下尚江は、「平和主義、平和運動の先駆者」と言われているが、社会主義者になる以前、日清戦争当時から、確乎たる反戦論者であったとも言われている⁽⁹⁾。木下は「世界平和に対する日本国民の責任」（『毎日新聞』明治32年3月17～19日）において、「日本国民の職分は世界平和の中心になることである」と述べている⁽¹⁰⁾。かれは、日清戦争後もひたすら軍備拡張路線を歩む政府に対して、『毎日新聞』紙上、あるいは演説会の壇上から熱心に平和主義を鼓吹し、軍拡に反対し、軍隊と軍人に鋭い矢を放ったと指摘されている⁽¹¹⁾。木下は、「キリスト教博愛主義の立場から一貫したした平和論者」

(12)とも指摘されているが、特に日露戦争における非戦運動には熱心であった。「戦争の非義」と「万国軍備の廃絶」を提唱（「戦争人種」『毎日新聞』1903年5月11日）し、非戦論大演説会などを開催していた(13)。その後、幸徳秋水や堺利彦が『平民新聞』を発刊するや木下は、「執筆者の中に名がのっているが、実は協力者、というよりも中心人物の一人であった」と言われている(14)。

『平民新聞』第1号（明治36年11月15日発行）の「非戦論演説会」の記事によると、「十月二十日の夜、我が社会主義協会は非戦論演説会を本郷の中央会堂に開きたり、世を挙げて戦争熱に酔へりと思ひの外、こゝに平和を好める人道の子六百余人、来つて我等の説を聴かんとせり、…弁士堺、幸徳、西川、安部、木下の五人…」と記されていた(15)。当日の演説では、最後に木下が登場し、演説の趣旨が次のようであった。『諸君暫く諸君の頭を圧迫する所の日露問題をお忘れなさい、…一国の思想を以て人類共通の思想に打勝たせるのが果して正当であるか、…若し我々が益々人道を信ずるならば此一国家的倫理主義を打破らなければならぬ、…』(16)と言ひ、自国のみの利害を考えるのではなく、多国間における強調、すなわち国際協調の重要性を説いていた。そして、木下は、「我々が第一に考へねばならぬ問題は日本国民といふ事は無く人類の一員と云ふ事である」と述べ、博愛主義的な考えを強調していた。また、木下の演説は巧みであったという。『平民新聞』第6号（明治36年12月20日発行）、「同志の面影」の「木下尚江君」によると、「君は雄弁家である」と記されている(17)。

次に、『平民新聞』第9号（明治37年1月10日発行）、「予は如何にして社会主義者となりし乎」には、木下が「キリスト教社会主義」(18)の立場であったことを語っている。「…偶然にも従来軽蔑せる耶蘇教を通じて『神』テフ思想を得るに至り、一段の安意を得たりしなり斯くて余は四海同胞主義の熱心なる信者となりしも…」(19)と言ひ、まず、「キリスト教博愛主義」に至ったことを述べていた。そして、「生存競争の地上の悲劇は、神学の解釈すべき所に非ず」との見解を示し、「社会主義の経済論」に共鳴したという。そして、「余の信仰は、『基督教的共産主義』にして又『共産主義的基督教』なり」とも明言していた(20)。

当時の天来は、「墨子の非戦論」が、『平民新聞』第3号（明治36年11月29日発行）に掲載されていたこともあり、木下とは、異なる立場（キリスト教思想と東洋思想である墨子の思想）を並立させ、「非戦論」を展開していた。

なお、明治39年、社会主義から離れた木下は、上州・伊香保に隠棲してしまった(21)。

(2) 深澤利重

深澤利重^{としげ}（1856－1934）は、豊前国（現大分県）の酒造業者大慈弥家^{おおじみ}に生まれた。明治の始めには長崎に出て和洋の学を学ぶ。その後、養蚕業に関心を持つようになり、視察のために関東、東北地方を廻った⁽²²⁾。明治15年、前橋の製糸業者であった深澤雄象（元前橋藩士）の婿養子となり、深澤利重と名乗った⁽²³⁾。

深澤雄象は、正教会信徒であり、利重も信者となり受洗した。しかし、利重は、明治17年、新島襄門下の海老名弾正が前橋教会に牧師として来県した頃、海老名の影響を受け、プロテスタント組合教会派の前橋教会に転じた⁽²⁴⁾。海老名は、利重の死後編纂された『紀念 深澤利重』⁽²⁵⁾の中で、「深澤翁を思ひ忍ぶ」を著し、利重との出会いを次のように回想している。「翁は明治十七年の春、安中に来り、私の寓居を訪問された、…彼が私を訪問したるは、プロテスタント教の教義を聞かんが為めであった。彼と私との二人は、この時相共鳴する所があり、爾来信仰上の教友たるのみならず、又人物として離るべからざる親友たるを得たのである」と述懐している⁽²⁶⁾。

また、明治21年には、前橋英和女学校（のちに共愛女学校）を創立し、その中心的役割を担った⁽²⁷⁾。その背景には、当時軽視されがちであった女子教育を充実させようとの考えを持っていたからであった。その後、利重は、養父雄象から製糸業（研業社）を受け継ぎ、明治31年には、『日本蚕業論』⁽²⁸⁾を著し製糸業者として活躍した。明治35年、木下尚江が、日本で最初の社会主義の政見を発表したと言われる衆議院議員選挙（前橋選挙区）の際には、利重は、自宅を事務所として提供した⁽²⁹⁾。

日露戦争時の明治37年12月に、深澤利重は、『日露時局論』⁽³⁰⁾を著した。この『日露時局論』の主張については、「その非戦論の論拠を、あくまでも製糸業者という自己の立場を立脚点として、そこからこの戦争が日本の利益になるかどうかということを論じ、その非を訴えていることである」と指摘されている⁽³¹⁾。

利重は、『日露時局論』の冒頭で、「…人類生存の意義に基き、余自ら我日本国に生存を保持せんと欲する人類自然の天性に依り、日本国家を經營する上に於て、日露の時局は、我日本国の不利有害なることを認るが故に、之を我国の同胞に訴へ、其反省を促がし、速かに善後の策を講じ、以て我等の生存を保持せんと欲する者なり」と論じている⁽³²⁾。

利重は、「人類生存の意義」により、日本に生きる国民として、「人類自然の天性」があり、当時は、すでに日露戦争の只中であつたが、ロシアとの戦争は、決して日本の国益

にはならないと論じている。ただ、利重は、「…若し時局に対して、冷静に公平を旨とし、彼我の長短と其利害とを誤らず、正当の見解を下さんと欲する者あらば、其言必ず我國民の意に適せざるや必せり、…」とも言い⁽³³⁾、戦争の非を説く自己の説は、あえて当時の世論に背くものであるとも認識していた。

海老名弾正も「深澤利重君の非戦論」のなかで、「深澤翁とは、人物として相互に親交を続けて来つたのであるが、折々意見は衝突したのである」と述べていた⁽³⁴⁾。海老名は、利重との見解の違いを認め、「翁は当初から非戦論者であつたが、最後まで強硬なる非戦論者として、其の主張を墨守した。彼が非戦論を主張したるは、戦争そのものを非とする理想論に、熱中して居つたといふよりも、日露戦争は日本のために不利と見たからであつた」と言い⁽³⁵⁾、利重の「非戦論」の特徴を述べていた。

利重の畏友木下尚江も、「深澤君の遺文に序す」⁽³⁶⁾のなかで、『日露時局論』について、次のように評していた。尚江は、「…日本の全土を挙げて戦争の謳歌に余念なきの時、君敢然日露和親の宿説を吐きて避くる所なし。罵詈、讒謗の声、君が一身に聚りて、遂に検挙の説さへ伝唱されたるもの故なきに非ず」と述べ⁽³⁷⁾、当時の利重の「非戦論」に対しては、周囲の多数の非難があり、利重の「検挙」の可能性もあつたと言う。しかし、時が過ぎ、尚江は、「今日静に君の文章を読む、其の激論昂揚言、尚ほ心胆を寒くするものあり。当年君を怒りて国賊と罵りし人と雖も、今日君の文章に対して誰か其の真摯と勇胆とに驚歎せざらん」と言い⁽³⁸⁾、あらためて利重の「非戦論」を読むと、その主張に「真摯と勇胆とに驚歎」を感じたと述べ、かれの「非戦論」を高く評価していた。

柏木義円は、「深澤利重翁を懐ふ」⁽³⁹⁾の中で、「…我が『上毛教界月報』の終りまでの知己であられた方は実に翁と湯浅治郎氏とであつた。私の交遊中由来自由主義者として敬信推重し来りたるは徳富蘆花湯浅治郎吉野作造の三氏と翁とでありしに今や四氏皆亡し人生轉た寂莫の感なきを得ない」と述べており⁽⁴⁰⁾、利重が「自由主義者」であつたことを義円も認めていた。

深澤利重は、住谷天来とも交友関係があり、天来は、利重の人となり「逝ける好友深澤君を偲ぶ」⁽⁴¹⁾の中で、

「君は素と九州の生まれで、若うして上州に來り養蚕に製糸に孜々として従事する間、その生活と環境と、その宗教と道德との薫染するの結果、全く生粋の上州児となり、弱きを助けて強きを挫き、義を見ては進んで為し、仁を見ては喜んで行ひ、真を見ては奮って探ぐる、一片の俠骨たる処は正に一個の聖雄とも謂ふべき人であつた」

と述べ⁽⁴²⁾、利重の人格を「一個の聖雄」であったと讃えていた。

また、天来は、深澤利重には、トルストイの思想の影響も多分にあったと言う。

天来は、「逝ける好友深澤君を偲ぶ」の中で、「中頃大いにトルストイに心酔し、その主義主張はいふまでもなく、その宗教といひ、教育といひ、生活といひ、彼に私淑する処が極めて濃厚であった」と述べている⁽⁴³⁾。

いずれにしても、利重は、『日露時局論』の中で、冷静に当時の国際情勢や日本の立場を分析し、その要点を次の三点に要約していた。

「一 時局の戦勝、日本に於て終局の勝利を制するも、日本は唯其人命と国費を損するのみ、是に由て何の実利をも得ること能はざる…」、

「二 時局の戦勝、日本に帰するも、露国は決して其強大国たるを失ふに至らず、故に日本は将来強大なる隣邦露国の怨恨を買うて、禍害の根源を醸成し、之に対する国防に於て、国家の負を過重ならしめ、為に国運の衰退を来さん…」、

「三 時局の戦争、終局の勝利を日本に収めんと欲するは、唯一片の投機的僥倖に依るのみにして、決して日露両国実力の勝敗に由るにあらざるや明なり、…」

と言い⁽⁴⁴⁾、当時の国際情勢や日本とロシアの国力の差などを考慮した持論を展開した。

こうした、利重の「非戦論」の特色は、ブルジョワジー（製糸業者）としての経済的視点からの見地が大であり、これらの視点は、天来の「非戦・平和思想」とも違う見解であった。

(3) 柏木義円

柏木義円（1860－1938）は、越後国三島郡与板（現新潟県長岡市）に、浄土真宗西光寺住職の家に生まれた⁽⁴⁵⁾。新潟師範学校に学び上京し、東京師範学校を卒業する。その後、群馬県碓氷郡土塩小学校へ赴任。同郡細野西小学校長に就任する。この頃、新島襄の故郷に設立された安中教会に出入りするようになり、明治13年（1880）、同志社英学校へ入学する。しかし、学資に困窮したため途中で退学し、再び群馬県へ戻り、碓氷郡細野東小学校長となる。明治17年（1884）、安中教会にて海老名弾正から洗礼を受け、再度、同志社普通学校へ入学した。同志社では、徳富蘆花などとも親交を結び、新島襄からも信頼を得る。新島の死去に際しては、義円が、祈禱を捧げた。

明治22年（1889）、同志社卒業後、同志社予備校主任となり、山室軍平や山川均などを教えた。その後、熊本英学校校長代理として赴任するが、明治25年に同校を辞職し、同志社予備校主任に復帰。明治30年（1897）に同志社を辞職し、上州安中教会の牧師となる。明治31年（1898）には、『上毛教界月報』を創刊した⁽⁴⁶⁾。

柏木義円の「非戦論」については、すでいくつかの先行研究があり⁽⁴⁷⁾、「彼自身の平和論はキリスト教信仰に基くと共に、社会主義の立場からの戦争の原因の究明を常に伴っていることは特色がある」⁽⁴⁸⁾とか、「柏木の非戦論は、まさに人間の主体性と良心に信頼をおいた、真の意味での攻撃的（積極的）、前進的な非戦論であり姿勢であったと言える」などと指摘されている⁽⁴⁹⁾。

柏木自身の「私の平和論の歴史」『上毛教界月報』第401号（昭和7年6月20日）⁽⁵⁰⁾によれば、「日露戦争の時は、最早私はトルストイなどの感化を受けて非戦論と相成居候」と述べているように、「トルストイ」の思想の影響を受けたと述懐している。

日露戦争開戦前の「非戦論」としては、『上毛教界月報』第58号（明治36年8月15日）に「非戦論、国是論」⁽⁵¹⁾が、所収されている。ここでの柏木の主張には、「日清戦役と共に、…国費は膨張し、軍備は拡大し、…国民真個の実益は果して幾何の進捗を為せしか。国民自由独立の精神は萎靡して憲政は殆ど振はず、国民品性の墮落は特に慨す可き者あり」と言い⁽⁵²⁾、まず、日清戦争後の軍備増強の風潮を批判し、「自由独立の精神」などは、憲政に反映されるべくもなく、「国民品性」が墮落しているとの鋭い指摘をなしている。また、柏木は、「今日露国と戦ふは、此れ我国の国是を永く決する所以なり」と言い⁽⁵³⁾、日本とロシアの戦争となれば、今後、日本が軍国主義の道を選ぶことになり、

軍国主義が「我国の国是」になるであろうことも指摘していた。

そして、柏木は続けて、「今日開戦を主張する者は、軍国的精神を以て我国是の根底と為し、国民の自由と、権利と、安寧と、幸福と、内治の改善とを犠牲とし、国民をして平時は軍費を造くるの器械たらしめ、戦時は国家の為めてふ名と無理情死するの一種の奴隷たらしむるの覚悟なかる可らざる也」と言う⁽⁵⁴⁾。開戦論者に見られる「軍国的精神」が、日本の政治にもたらすことは、「国民の自由」、「権利」、「幸福」などを奪うことであると述べている。そのため、戦争後にあつては、軍事費を得るために経済活動を行うようなもので、まして、戦時にあつては、「国家の為め」という名のもとに、命を捧げるものとなるであろうことも指摘していた。すなわち、柏木は、あたかも近代日本の行く末を見通していたとも言える。

そこで、柏木の提言としては、「先ず我國民をして、…各自理想ある國民たらしめよ。個人として品性あり実力ある民たらしめよ。…而して品性と実力とに依て自然に平和的の膨張を為さしめよ」と主張している⁽⁵⁵⁾。つまり、柏木としては、日本国民には、「個人として品性あり実力ある民」であることを理想とすることが、日本に「平和」を構築することになると論じていた。

したがって、日本に「平和」を構築するためには、「…我にして平和の方針を取り、國民の品性と実力とを後援とし、専ら國際法と正義とに依て天佑を信じて立ち、之に依て信を世界に取らば、列国自ら我を信敬し、誰か敢て我を窺視する者あらんや」と言い⁽⁵⁶⁾、「國際法と正義」に基づく国となれば、世界各国から信頼を得られる国になるであろうと述べている。このことは、まさに今日の國際社会にも当てはまる普遍性のある平和主義の主張と言えるのではないか。

また、柏木は、『上毛教界月報』第88号（明治39年2月15日）の「吾人の主張」の「(六) 对社会主義問題」において、「吾人は、現今に存在する社会制度改革論中に在ては、社会主義の主張を以て最も勝れるものと為す」と述べ⁽⁵⁷⁾、「社会主義思想」に深い理解を示していた。

こうしたことから、柏木には、「キリスト教思想」と、「社会主義思想」の影響が色濃く見られ、住谷天来の思想とも類似点が見出される。ただ、天来には、墨子の「非戦論」のような東洋思想に着目していた点があり、この点については、柏木との相違が見られる。

(4) 内村鑑三の「非戦論」

内村鑑三（1861－1930）は、上州高崎藩士内村^{よしゆき}宜之の長男として江戸に生まれた⁽⁵⁸⁾。明治維新後、江戸から高崎に移り、幼少期を過ごす。高崎では、高崎藩英学校に学ぶ⁽⁵⁹⁾。その後、上京し、東京外国語学校（のちの東京大学予備門）に学ぶ。明治10年（1877）、札幌農学校に第2期生として入学した。同級生には太田（新渡戸）稲造がいた。また、この頃、キリスト教に入信した。明治14年（1881）、同校を卒業。卒業後は、一時、開拓使（のちの札幌県）御用掛となる。明治16年（1883）、第3回全国基督信徒大親睦会に札幌教会を代表して出席し、新島襄を知る。同年、安中教会へ行き、浅田タケと出会い、明治17年（1884）、タケと結婚する。この年、農商務省の役人を辞め、渡米し、明治18年（1885）、新島襄の勧めによりアマースト大へ入学した。明治20年（1887）、アマースト大を卒業し、明治21年（1888）、帰国する。帰国後は、新潟の北越学館、東洋英和学校などで教職につく。明治23年（1890）、第一高等中学校の教員となるが、不敬事件などにより同校を去った。その後も各地で教職についたり、『基督信徒の慰』などの著述を出版した。明治29年（1896）7月、基督教青年会第8回夏期学校（静岡県）にて講演を行うが、この時に住谷天来と出会っている⁽⁶⁰⁾。明治31年（1898）、『東京独立雑誌』を創刊し、主筆となる。明治33年（1900）、『東京独立雑誌』を廃刊し、『万朝報』に客員として入社する。また、同年、『聖書之研究』を創刊する。明治34年（1901）、木下尚江とともに足尾銅山鉍毒被害地を視察、この頃、万朝報社の黒岩周六、幸徳秋水、堺利彦らと社会改良団体「理想団」を結成する。

明治36年(1903)、日露開戦の気運に対し、「戦争廃止論」『万朝報』(明治36年6月30日)を主張⁽⁶¹⁾。内村は、「余は日露非開戦論者である^{ぼか}許りでない、戦争絶対廃止論者である、戦争は人を殺すことである、爾うして人を殺すことは大罪悪である、爾うして大罪悪を犯して個人も国家も永久に利益を収め得やう筈はない」と述べている⁽⁶²⁾。

内村は、「平和の福音（絶対的非戦主義）」『聖書之研究』第44号（明治36年9月17日）⁽⁶³⁾で、「今や戦雲、東亜の空を^{おお}蔽ふに方りまして、茲に^こ刻下の最大問題に対して私共キリストを信ずる者の態度を明かにして置くの必要があると思ひます、…単に^{こぼ}毀つべからざる聖書の確言に頼りまして私共の進退を定むべきであると思ひます」と言い⁽⁶⁴⁾、「聖書の確言」に頼るとの態度を示した。また、「…聖書の、殊に新約聖書の、此

事に関して私共に命ずる所は唯一つであります、即ち絶対的の平和であります、如何なる場合に於ても剣を以て争はないことでもあります、…絶対の平和は聖書の明白なる訓誡であります、私共、若し神と良心とに対して忠実ならんと欲すれば此態度を取るより他に途はありません」と述べ⁽⁶⁵⁾、キリスト者としての「非戦論」の立場であることを明確にした。

しかし、万朝報社が開戦論に転じたため、内村は、「退社に際し涙香兄に贈りし覚書」『万朝報』（明治36年10月12日）⁽⁶⁶⁾を載せ、幸徳秋水、堺利彦らとともに、万朝報社を退社する。内村は、「謹んで敬友黒岩涙香君に白す」⁽⁶⁷⁾において、「君に招かれて文壇に昇りし余は今や此著を余の最後の遺物として時事問題に別を告げんと欲す、今より後、余の筆は来世に就て語て現世に就て語ざるべし」と述べている⁽⁶⁸⁾。このことは、内村が今後、世俗的な「時事問題」を論じるのではなく、あくまでも「来世に就て語て現世に就て語ざるべし」として、万朝報社の退社後は、宗教的な立場（キリスト教徒としての立場）から論じるとの決意を示したものと思われる。

日露戦争開戦後の『聖書之研究』第51号（明治37年4月21日）には、「戦時に於ける非戦主義者の態度」を載せた⁽⁶⁹⁾。ここでも内村は、「私共は戦争が始まりたればとて私共の非戦主義を^や廃めません」と述べた。そして、日露戦争が勃発してからの内村の主張は、どのようになったかという、「非戦主義とは平和主義の意でありまして之を非戦といふは平和の消局的一面をいふのであります、…私共は今度は如何にして一日も早く平和を恢復せん乎との思考を起すに至ったのであります」と言い⁽⁷⁰⁾、日露戦争開戦後は、「平和を^{かいふく}恢復」させることに主眼を置いた。すなわち、内村は、「平和主義者の義務と責任と目的とは平和の維持又は其恢復にあります」と主張した。

『聖書之研究』第55号（明治37年8月18日）には、「内外見地の差違」を載せた⁽⁷¹⁾。この文では、「余輩は勿論、トルストイ伯に比ぶべきもなき取るに足らざる微少なき者であつて、非戦論に於ては伯の最も小なる弟子であるが、…」と述べ⁽⁷²⁾、トルストイの非戦論に影響されていることも明かしている。

『聖書之研究』第56号（明治37年9月22日）には、「余が非戦論者となりし由来」を載せた⁽⁷³⁾。この文章において内村自身が、「非戦論者」になった理由を四点に絞って述べている。内村は、「一、私を非戦論者にした者の中で最も有力なる者は申すまでもなく聖書であります、殊に新約聖書であります」と述べ⁽⁷⁴⁾、「聖書」、「新約聖書」に基づく「非戦論」であることを断言している。そして、「二、私をして殆んど極端なる非戦

論者とならしめし第二の源因は私の生涯の実験であります、…」と言う⁽⁷⁵⁾。内村の言う「生涯の実験」とは、「或る人達の激烈なる攻撃」にあった際、「無抵抗主義」を取ったことにより、「心の平和を得」ることが出来たということであった。続けて、「三、私をして非戦論者とならしめし第三の動力は過去十年間の世界歴史であります」と言う。内村は、「日清戦争の結果は私にツクツクと戦争の害あって利のないことを教へました、…戦勝国たる日本の道徳は非常に腐敗し、…」と言い⁽⁷⁶⁾、「日清戦争」の結果が、かえって「日本の道徳」の腐敗につながったことを指摘した。また、当時のアメリカについても、「私の第二の故国と思ひ来りし米国の今日の墮落を見て言ひ尽されぬ悲嘆を感ずる者であります」と言い、「米西戦争」⁽⁷⁷⁾の結果が、米国に「墮落」をもたらしたことを指摘した。そして、「四、私を非戦論者になした第四の機関は米国マッサチューセツト州スプリングフィールド市に於て発行せる The Springfield Republican と云ふ新聞であります」⁽⁷⁸⁾と、同紙を愛読していたと言う。「此新聞は私の見た最も清い最も公平なる新聞」であり、内村は、「此新聞は平和主義であります」と指摘した。また、「其紙上に於て世界有名の平和主義者の各論卓説を読みまして、私の好戦的論域は終に全く壊されました」と述べ、同紙から影響を受けたことを示した。こうして、内村は、「私は終に非戦論者となりました、然かし非戦論とはたゞ戦争を非とし、之に反対すると云ふこと計りではありません、非戦論の積極的反面は言ふまでもなく平和の克復並に其耕脩であります」と述べた⁽⁷⁹⁾。すなわち、内村の「非戦論」の要点は、「平和の克復並に其耕脩」にあったと思われる。

『新希望』第66号(明治38年8月10日)には、「平和主義の意義」を載せた⁽⁸⁰⁾。内村は、「平和主義、一名非戦主義、是れは何にも今日に兵役を拒み、軍事に反対するといふことではない、平和主義は戦争の非理と損害とを唱へ、万国共同して之を廃止し、之に代ふるに仲裁々判を以てせんとすることは是である」と言う⁽⁸¹⁾。そして、「世界有識者の輿論を喚起し、各其政府に迫りて、戦争に由ることなくして総ての国際的紛擾を決せしめんとすることである」と述べた。こうして、「…非戦主義者は、基督教の原理に基き、人道の大綱に則り、平和主義の必ず此世に実行を見るに至ることを信じて疑はなかつた」と言う⁽⁸²⁾。つまり、内村は、「基督教の原理」、「人道の大綱」など、宗教的、道徳的視点からの「非戦論」であることはもちろんのこと、現実的な国際情勢をも分析して、自らの主義主張を述べていた。したがって、内村の平和思想は、その源泉を徹底して「キリスト教思想」に求めた平和思想でもあったと思われる。

以上、第2章の「1. 同時代のキリスト者の非戦・平和思想」では、明治期の日露戦争をめぐる「非戦論」を主張した木下尚江、上州ゆかりの非戦論者として、深澤利重、柏木義円、内村鑑三の合計4人の人物の「非戦論」を、住谷天来の「非戦論」との対比において考察して見た。

そこで、近代日本における「非戦論」を主張した思想家を次の三つの類型に分けて見る。

①「社会主義思想」型…「非戦論」の背景を「社会主義思想」にもとめた思想家。

主に幸徳秋水・堺利彦らが、『平民新聞』にその主張を発表。

②「キリスト教社会主義」型…「非戦論」の背景を「キリスト教」（トルストイの影響も含む）と「社会主義思想」にもとめた思想家。

主に木下尚江・安部磯雄らが、『平民新聞』にその主張を発表した。

③「キリスト教思想」型…「非戦論」の背景をあくまでも「キリスト教」（トルストイの影響も含む）にもとめた思想家。主に内村鑑三らが、『聖書之研究』にその主張を発表した。

次に、第2章の「1. 同時代のキリスト者の非戦・平和思想」で取り上げた深澤利重、柏木義円、そして、住谷天来は、どの型にあてはまるか考えてみたい。

深澤利重は、「キリスト教」（トルストイの影響も含む）を信仰しており、木下尚江らの「社会主義者」たちの考え方も支持していたので、②「キリスト教社会主義」型に近いと思われる。ただ、深澤の「非戦論」（『日露時局論』）は、あくまでも製糸業者の立場から論じたものと思われ、経済的視点からの見地が大であった。

柏木義円も、「キリスト教」（トルストイの影響も含む）信仰に基づき、「社会主義思想」にも理解を示していたので、②「キリスト教社会主義」型に近いと思われる。柏木は、『上毛教界月報』により、長らく「非戦・平和思想」を展開した。

住谷天来は、「キリスト教」（トルストイの影響も含む）を信仰しており、幸徳秋水・木下尚江らの「社会主義者」たちの考え方も支持していたので、②「キリスト教社会主義」型に近い。ただ、天来は、「日露戦争」をめぐる「非戦論」の主張としては、「墨子」という東洋思想を源流とする平和思想に着目していたので、この点は、他の「非戦論者」には見られない特色である。以後、昭和時代に入って、『聖化』を創刊してからの天来は、次第に内村鑑三のような③「キリスト教思想」型の平和思想に、より接近して行ったものと思われる。

2. 住谷天来の非戦・平和思想

(1) 住谷天来の初期の平和思想について

住谷天来の初期の平和思想を述べる上において、ここでは、天来の二十代後半の論稿、『上毛之青年』（復刊）第2号（明治29年4月20日発行）に所収されている「仮装せる国民」（「住谷八朔」）⁽¹⁾を読み分析する。

天来は、日清戦争後の社会状況について、「今日の世間は、家も、国も将た社会も、悉く此仮面と仮装とを以て掩はるる也」と言う⁽²⁾。

そして、天来は、「第十九世紀は開明進歩の社会なりと称す、然れども爾の所謂開明進歩は、果して何をか意味するや、学問乎、知識乎、将た技術乎。余輩は敢てルーソーの顰を学んで、文明開化を咀ふものに非ずと雖も、聊か現代の文明に就ては厭倦の情なき能はず、…」⁽³⁾、当時の社会を「第十九世紀は開明進歩の社会なり…」⁽³⁾とは言うものの、その社会には多くの矛盾を含んでいると指摘する。また、天来は、

「人は素と正義博愛なる上帝の造り給う所、是故に其本然の性は自ら善良にして、正義なりき、博愛なりき、然れども、文明の特産たる学問や技術や、工芸の厭力に推倒せられ、其淳朴は害され、其徳性は汚されて、終に罪惡と艱難とに密接するに至りしに非ずや、…」⁽⁴⁾（『上毛之青年』（復刊）第2号）

と言い⁽⁴⁾、天来の思想には、キリスト教思想の影響が見受けられていた。

次に天来は、

「…歐州の文明国は年々巨万の財力を絞りにて国防を講し、軍備てふ雄大の戸を鎖さざれば太平は買はれざる也。棄てたる遺利を山海に拾ふは未しも、鶻の目、鷹の眼、隙さへあれば吞噬を事とし、人の財を掠め、人の国を奪ひ、而して営々たらずんば国民の福利は得られざる也」（『上毛之青年』（復刊）第2号）

と言い⁽⁵⁾、西欧諸国は、巨額の国家予算を投入し、「軍備」を拡大して、隙を見つけては、他国を侵略するような「弱肉強食」の有様であると指摘している。

さらに、天来は当時の日本について、

「我神州の現状は如何、八千万円の歳出入は足らずとして二億万円に近き予算を定め、其三分の一以上は一国の戸締まりとして軍備の為に充つると聞く。是も亦歐洲の文明に仲間入を為せし者、強ち彼れの狂愚のみを笑う可らず。顧みて国民の志気如何を見れば、文明の影響亦慨すべき者なり」（『上毛之青年』（復刊）第2号）

と言う⁽⁶⁾。すなわち、日本が、日清戦争に勝利して、西欧の文明国の仲間入りを果たしたからといって、西欧諸国のように、国家予算の多くを軍備の増強につき込み、軍備拡張の路線に至っていることを批判している。特に「彼れの狂愚のみを笑う可らず」と言い、日本の軍備増強を痛烈に批判している。ここに、天来の平和思想の一端が感じられる。

また、天来は当時の国内政治の状況を、

「…此由緒ある祖宗の血を掬む国民が、内に有司の権勢に畏れ、外は隣国の恫喝に恐るることや。人々三々相会して事を議すれば則ち曰く、其利は如何、其害は如何と、在朝在野滔々として然らざるは無し、其間に起て一人の義に断ずる者あること稀れ也」
(『上毛之青年』(復刊)第2号)

と言い⁽⁷⁾、日本の政治が、「有司」の権勢により左右され、諸外国の圧力を恐れ、利害得失にのみとらわれていると断じている。さらに天来は、

「…文明社会の国榜たる立憲代議政体の名は如何に音響よき題字なるよ、而かも一国の精英が寄り集りて国政を議すると称する、上下両院の有様は如何。衆議の府は衆議の府に非ず。代議士と号する者、真に被選の資格を備ふるは大半為すなきの徒、…議院は初より人をして欺瞞を以て敢てせしむる者、既に欺瞞を事とするを容さる、…」
(『上毛之青年』(復刊)第2号)

とも言い⁽⁸⁾、当時の明治政府が「立憲代議政体」を成しているとはいえ、その実は「衆議院」であっても、とても国民を代表するような議員が選出されていないと批判している。

そしてまた、「戦後〔日清戦争後〕の財政は、蒼生をして溝壑に転せしむる迄、盲従的に膨張せられ、立法の事業は、憲法を無視する迄、専制的に屈従せらるる、一は民人権利の消長に関し、一は国家経済の盛衰に繋る、…」と言い⁽⁹⁾、日清戦争後の国家財政は、軍事費により圧迫され、帝国議会においても憲法を無視するが如く、「専制的に屈従」させられていることを指摘している。そして、天来は、当時の「自由党」批判にも及び、

「更に政党に於て之を見よ、自由党彼れ何者、我に自由を与へよ、然らずんば我に死を与へよとのパトリックヘンリーか気概に因みて党名を下したる政党は、憐れ首領板垣の墮落と共に見事に其自由の守護神を放擲し、其自由を売り其良心に背きて十年一日仮装し来れる自己の真相を暴露せり…」(『上毛之青年』(復刊)第2号)

と言い⁽¹⁰⁾、藩閥と妥協してしまった自由党の首領、板垣退助が墮落してしまったことを鋭く指摘している。

また、天来は、「…党の総理を引拉へて内閣の一椅子を与え、党の有力者を抜て県知事

の職を与え、…アヽ自由死し、正義死し、廉恥死し、無義無慙、…廟堂の上に政を執る伊藤一輩の如何に多幸なる事よ」と嘆き⁽¹¹⁾、当時の第二次伊藤内閣に板垣退助が内務大臣として入閣したことを批判していた。

最後に、天来は、

「嗚呼嗚呼第十九世紀は確かに開明の社会ならん、慥に進歩の世界ならん、然れども人の天稟たる正義の光、博愛の道は年と共に衰え、廉恥、清節、俠骨漸く絶れ、由緒ある歴史ある国民の実血は、利慾の神の祭壇を清めて俗気俗魄の支配する所となれり…」（『上毛之青年』（復刊）第2号）

と言い⁽¹²⁾、このままでは、「正義の光、博愛の道」が廃れて行くと指摘し、「…然れども一たび清国に勝ちて以来、官府の令する所、民人唯々として之を諾し、議會亦幾と用なきの状なり、是れ大に戒むべきの時に非ざらんや 骸骨の上を装うて花見哉」と述べ⁽¹³⁾、日清戦争の勝利は、政府の命じるまま日本の新たな軍備の増強を許し、議會もその役割を失い、多くの人命を犠牲にしてのことであったと記した。

したがって、この天来筆「仮装せる国民」の主旨は、日清戦争後の日本が、さらなる軍備の増強に邁進していることを批判しており、天来の最初の平和思想が見られる論稿として注目したい。

(2) 住谷天来の非戦論 ー日露戦争期の「非戦論」をめぐってー

①天来とトルストイの平和思想

住谷天来の非戦論の主張には、その背景に、(1)キリスト教思想(なかでもトルストイの思想)の影響、(2)東洋思想(墨子の非戦論)が考えられる。

まず、キリスト教思想、なかでもトルストイの思想の影響について考察してみたい。

天来がいつ頃、トルストイを知ったのかは定かではないが、明治35年10月3日発行、トルストイ伯著・加藤直士訳『我懺悔』(警醒社刊)に、天来が「序」を載せている⁽¹⁴⁾。加藤直士(1873-1952)は、山形県出身。新潟の北越学館に学び、新潟教会にて受洗。その後、加藤はトルストイの『My Confession』を『我懺悔』(警醒社刊)として、『My Religion』を『我宗教』(文明堂刊)として訳出した。また、海老名弾正を助け、『新人』の編集に参画、『基督教世界』の主筆として招聘された。そして、神戸の自宅では神学倶楽部を開催し、会員には賀川豊彦もいた⁽¹⁵⁾。賀川も加藤訳の『我懺悔』、『我宗教』を読んでいたという⁽¹⁶⁾。いずれにしても、加藤はキリスト教界や、ジャーナリストとしても活躍した人物であった。

『我懺悔』の加藤直士の「例言」⁽¹⁷⁾によれば、「余曾つて住谷天来君の人物を聞き其文を読み、一たび交を結ばんことを希うや久し、…氏が『病中吟』一篇を読むに及んで、同情の念景仰の情転た禁ずる能はず…一日氏を其寓に訪う、一見旧の如く心血を傾けて語る…」とある。このことから、加藤が天来の著作[「病中吟」、『聖書之研究』第9号(明治34年9月)のことか]を読み感銘を受け、天来宅を訪問したとのことである。

加藤は、その時の様子について、「此際に方り余が読むべき好書なき乎と、氏示す二書を以てす、一は則ち聖オーガスチンの『懺悔録』にして、他は則ちトルストイ翁の其れなり。輒ち余は后者の英訳一本を購ひて帰りぬ」と言う⁽¹⁸⁾。このことから加藤は、天来からトルストイの著作『My Confession』を紹介されたことが知れる。つまり、天来は加藤より早く、すでに『My Confession』を入手し通読していたものと思われる。その後、加藤は、「通読二三章、如何に余は厳肅なる教訓を受けたりしぞ」と記し⁽¹⁹⁾、この『My Confession』を翻訳し、『我懺悔』として出版することとなった。

すなわち、加藤が『My Confession』を翻訳することとなったのは、天来がそのきっかけを与えたものであった。また、加藤は、「例言」において、「余は畏友住

谷君の校閲訂正に於ける、親切周到なる補助を謝せざる可らず。君病軀を擁して余の為に此の労を執る、…」と言い⁽²⁰⁾、天来が同書の「校閲訂正」を手伝ってくれたことを述べている。

天来は、同書の「序」⁽²¹⁾において、

「是れ露国高名の哲人トルストイ伯の懺悔録也。人生の虚妄を觀破し、人事の災源を除非し、迷悟二つの関頭に立つて、激戦奮闘、其心血を搾蓋せし後、一朝豁然として大聖の域に入りし哲人の面目、躍如として跳るが如し」

と記し、トルストイの思想を紹介している。

また、天来は『我懺悔』を読み、「吾人後学、此至真の書に接し、反觀反省、内、大に学ぶ所あらば、天地六合の迷宮たる、人の最も知り難き一我自身の本領—を知るに於て、実に好師友を得たりと謂う可し、…」と言い⁽²²⁾、トルストイの思想について、

「若夫れ此懺悔に由りて、吾人心内の琴線に触れ、神知靈覺の奏し来る妙へなる天来の清韻を聞かば、庶幾くは我の為すべき義務、踐むべき道、取るべき業、達すべき目的の何たるを悟り、心月高朗、英々独照、以て不盡の樂を有するに至らむ」

と述べ⁽²³⁾、天来自身もその思想に共鳴していたことが知れる。

そして、「序」の最後に、「加藤直士君の訳書、実に此必要を充たさんが為めに現はる、蓋し朝野の人心を動かし、其歡迎を享くる、誠に大早に雲霓を望むより急なるものあらん…」と結び、同書の翻訳の意義を記している。

次に、加藤直士は、『我懺悔』の出版の後に、トルストイ著『My Religion』（『わが信仰はいずれにありや』）の翻訳書として、『我宗教』を、明治36年（1903）3月14日、文明堂から出版した⁽²⁴⁾。

この『我宗教』にも、天来の「序」が載せられている⁽²⁵⁾。しかも、同書の加藤の「例言」⁽²⁶⁾によれば、「此書の大意を抄訳して其真髓を世人に紹介せんと欲し、既に其業の大半を竣へたりき」と言うが、「然るに益友住谷天来君の痛切なる忠告により豁然として悟るところあり、翻然方針を一変して新たに稿を起し爰に此書を完訳するに至れり」と述べていた。すなわち、このことから天来のアドバイスにより、加藤が『我宗教』を「抄訳」ではなく、「完訳」したことが知れる。

また、加藤の「例言」によると、「余は此書の訳述に関して幾多の奨励と補助とを与えられたる住谷天来君の厚意を謝せざるを得ず、苟くも此書によりて益するところある読者諸君は、請う余が為めに同君の労を謝せ」という言葉⁽²⁷⁾からも、同書の翻訳にも、天来

の影響があったことが伺える。

天来は、同書の「序」に、

「トルストイ伯は現代の偉人也。其盛徳に於て其大業に於て、天下之に及ぶもの鮮し彼曾て基督の基督教を立て、説て曰く『人類の幸福は基督教を奉ずるに在り曰く仁愛曰く平和曰く醇潔、曰く真理、人の踐む可き大道は是のみ。之に由て人類は同胞たる可く、個人の争は止み、而して戦争は廃す可し』と。彼が所謂『我宗教』の神髓は即ち是也」

と言い⁽²⁸⁾、トルストイの『我宗教』に見られる「戦争は廃す可し」との言葉に、「基督教」に基づく彼の平和思想を読み取っていた。このトルストイの平和思想に、天来も影響を受けていたと思われる。

また、天来は、トルストイをルソーと共に次のように評価していた。

「想うに彼は当代の文明に対する、最も大膽なる批評家なると共に、亦最も大膽なる啓蒙の豫言者也。今を距ること二世紀前、仏の熱狂ルソーが当時の文明を痛撃して、自然に還れと警めしが如く、トルストイ伯の理想は、十九世紀文明を逆倒して、直ちに原始基督教の聖愛主義に還さしめんとするに在り」⁽²⁹⁾

すなわち、天来はトルストイを「文明」の「批評家」、「啓蒙」の「豫言者」と捉えていた。

天来は、同書の「序文」の終わり部分で、

「友人加藤直士君、今や本書の訳成つて余に序文を徴せらるる、君はト翁の崇拜者にして、曩に翁の『我懺悔』を訳せしもの、余は君の如き篤学の士を友とするを名誉とし、茲に本書の如き高貴なる書を世に紹介するの榮譽に与かりしを謝する者也。

明治36年1月25日」

と、加藤との交友を記し⁽³⁰⁾、『我宗教』の「完訳」を出版することの意義を世間に知らしめた。

いずれにしても、加藤直士訳の『我懺悔』（警醒社刊）、『我宗教』（文明堂刊）は、その後、「日本で広く流布した」とも言われており、「プロテスタント的トルストイの受容の路線」として高く評価されている⁽³¹⁾。

こうして、天来は、トルストイの思想を紹介するため、自らも明治36年（1906）4月4日、警醒社から『十九世紀之豫言者』（M.A.ウォード原著 住谷天来訳補）を出版した。同書では「第三編 トルストイ伯と其の福音」⁽³²⁾で、トルストイを紹介してい

る。『十九世紀之豫言者』は、もともとM.A.ウォード（1853－1918）の著作を天来が翻訳したものではあるが、天来自らの「駄評」を挿入したということで、「訳補」としたものであった。

すなわち、同書の「第三編 トルストイ伯と其の福音」では、主にトルストイの生涯と彼のキリスト教思想が紹介されている。ここでは、同書の一部を抄録し、その概要を述べる。

「急灘の如く逆巻き返へる十九世紀の實際的物質的大勢の潮流に立ちて、而も絶えず新約聖書を文字通りに解釈し、由りて以て自身を律せんとし、為めに世俗と正反対に逸し去り、一派の識者よりは寧ろ罪人狂人を以て目せらるゝに至れる者あり。我がトルストイ伯の如きは蓋しその著るしき一例にして、…」⁽³³⁾

「蓋しトルストイは人生哲学、生命問題を基督の説教中に要めんと欲し、人の知るが如く、その教説を解釈せり。現時欧州第一の小説家としてトルストイ伯は、今や説教者たらんとして文学の桂冠を抛ちぬ。世界の快樂教訓の為めに、人生を描くことを休めて、彼は除に生命問題に転じたり。」⁽³⁴⁾

『余は最早国家と国家との間に於ける紛争葛藤、主張確執の渦中に投じて、其争に干与かる事能はず、余は最早や国家の区別より起る各種の措置—例えば税関、貢租兵器の製造、軍隊の構成、兵役、殊に戦争の如きを是認し、若くは之に加擔する能はず、否な余は他人の之に關与するを奨励する事能はず』⁽³⁵⁾

「真理を知る所の『クリスチャン』は、須らく人々の前に真理の証明を為さざる可らず、…彼は戦争を否認し、彼の外国人たると内国人たるとを問はず、広く天下の万民に対して等しく善事を行はざる可らず。基督教の偉大にして、其實行の重すべく、人類の幸福たり、永遠の生命たる所以亦実に茲に在り」⁽³⁶⁾

特にトルストイの「非戦論」の背景には、聖書におけるキリストの「山上の垂訓」があると言い、特に第四の戒律「悪に抗するなかれ」を重視した。この言葉こそ、悪への無抵抗の思想で、それは裁判や刑罰死刑、ひいては軍隊や戦争などに対する批判であったとい

う⁽³⁷⁾。天来は、このトルストイの平和思想にいち早く着目し、加藤直士に全面的に協力し、同氏の翻訳書（『我懺悔』・『我宗教』）を世の中に紹介した。

いずれにしても、天来は、明治36年（1906）11月に発行された『聖書之研究』第46号に「墨子の非戦論」を載せる以前に、明治35年（1905）10月に発行された加藤直士訳『我懺悔』の「序文」、明治36年1月に発行された加藤直士訳『我宗教』の「序文」、天来自らが訳補した、M.A.ウォード原著『十九世紀之豫言者』（明治36年4月発行）というように、トルストイの平和思想を紹介していた。

つまり、天来は、『聖書之研究』第46号に載せられた「墨子の非戦論」を発表する以前に、トルストイの平和思想の紹介の方をむしろ先行させていたことが分かる。

なお、明治36年、警醒社から出版された『十九世紀之豫言者』（M.A.ウォード原著 住谷天来訳補）に所収された「第三編 トルストイ伯と其の福音」は、その後、明治42年（1909）1月10日に警醒社書店より、『トルストイ伯の福音』というタイトルの単著として刊行された⁽³⁸⁾。

さて、「非戦平和論は自由民権や社会改良運動、廃娼運動などとともに、明治のキリスト教徒がもっともポジティブに取り組んだ実践課題であった」と指摘されているが⁽³⁹⁾、こうして加藤直士・住谷天来らが、トルストイの思想を、あえて日露開戦前に紹介していたことは、まさに、「明治思想史におけるトルストイらの思想史的影響」⁽⁴⁰⁾の一つとなるのではないか。

また、「日露非戦論を展開したキリスト者は、内村のほかに住谷天来、安部磯雄、木下尚江、柏木義円らが数えられる」と指摘されているが⁽⁴¹⁾、このうちの内村鑑三、住谷天来、柏木義円は上州ゆかりの人物であり、三者ともに交友関係を持っていた。

なお、天来は、木下尚江（1869－1937）⁽⁴²⁾とも交友関係があったが、天来と木下との関係はあまり知られてはいない。しかし、『紀念 深澤利重』所収、「逝ける好友 深澤君を偲ぶ」⁽⁴³⁾によると、「当時余（住谷）の畏友木下尚江君も時々一緒に同家（深澤家）に泊り合せることなどあり三人（木下、深澤、住谷）膝を交えて愉快に時事や漫談や人生問題等に就き一夜を語り明すことなどあったが、…」との天来の回想がある。

深澤利重（1856－1934）は、豊前国（大分県）出身であったが、製糸業者として前橋に住み活躍する。正教会の信徒であったが、柏木義円、住谷天来とも親しく、『日露時局論』を著し、非戦論を展開した人物でもあった⁽⁴⁴⁾。

天来と木下尚江の親しい間柄については、天来の甥悦治の回想にも、「木下尚江の名と

関連して、わたくしはいつも叔父住谷天来を想う。それは内村鑑三・住谷天来を連想すると同じである」と述べている⁽⁴⁵⁾。また、天来と木下との交友について、

「何よりも尚江が上州伊香保に滞在しているころ、すでに幸徳秋水事件や非戦・平和論のために当局から監視つづけられた叔父が郷里上州国府に寓居を構え、『ダンテの教訓』とか『孔子及孔子教』などの著述をしていたのであるが、尚江から、たびたびひそかに新聞や雑誌の間に挿しはさんだ手紙が届いたようである。平和・非戦論の故をもってお互いに世をはばかりる身の上であったのだ」（住谷悦治『鶏肋の籠』）

と述べている⁽⁴⁶⁾。

こうして、天来とトルストイとの関係については、甥悦治も「天来は明治36年4月にワードの『十九世紀の豫言者』を翻訳し、トルストイを早期に日本に紹介した」と述べ、さらに、「明治36年におけるトルストイの紹介は、キリスト教の愛と信仰と神の無限の光明とともに戦争の惨虐とを説き、非戦と平和の永劫の精神を実現しよう欲したものにほかならない。天来の翻訳によるトルストイ精神の早期宣揚を高く評価してよいであろう」と言い、天来の平和思想に着目していた⁽⁴⁷⁾。

②天来と墨子の非戦論

次に、天来の主張である「墨子の非戦主義」について述べる。

天来が、最初に「墨子の非戦主義」を発表したのは、明治36年（1903）11月19日発行、『聖書之研究』第46号のことであった⁽⁴⁸⁾。その後、早速、同年11月29日『平民新聞』第3号に、『聖書之研究』第46号に載せられた天来の「墨子の非戦主義」が紹介されている⁽⁴⁹⁾。そもそも、『平民新聞』は、明治36年10月、『萬朝報』を退社した幸徳秋水・堺利彦等が、「社会主義」、「非戦論」などを主張するために発行した新聞であった。

そこで、天来の「墨子の非戦主義」の主張は、あくまでも、内村鑑三主筆の『聖書之研究』紙上に発表されたものであり、クリスチャンの天来が、東洋の思想家である「墨子」に、「キリストの面影を見るもの」として紹介していた⁽⁵⁰⁾。すなわち、天来は、墨子が唱えた「兼愛」は、キリスト教の「博愛主義」にほかならないという立場をとっていた。

ここに天来の「非戦論」の特色があると思われる。いずれにしても、日露開戦前の天来

の「非戦論」の主張であるが、この「墨子の非戦主義」については、すでに久保千一が、「住谷天来—非戦の思想家」（『柏木義円研究序説』所収）で精しく分析している⁽⁵¹⁾。

さて、そもそも墨子の非戦論とは、どのような主張なのか。それは、墨子の（Ⅰ）「兼愛篇」と、（Ⅱ）「非攻篇」に見られる非戦・平和思想を根拠にしている⁽⁵²⁾。

（Ⅰ）「兼愛篇」…天下混乱の原因を『人を虧^かぎて自ら利す』る自愛の精神に求めた。

墨家は、天下の安寧の回復の方策として、「兼愛」を登場させる。この「兼愛」は、自愛の反対概念であり、自己と他者とを区別せずに兼ね愛させた点にこそあるという。すなわち、墨家は、社会秩序を破壊し、世界を混乱させる原動力が、他者を犠牲にしても自己の利益を獲得せんとする精神であることを洞察し、兼愛論によりその抑制を主張したものであるという。（浅野裕一『墨子』、56頁参照）

（Ⅱ）「非攻篇」…非攻論は、「他国への攻撃・侵略を非難する主張である」という。

この論旨を展開するにあたり、「非攻上篇」では、「犯罪」とは、自己の利益獲得のために他者に損害を与える行為であるとの定義を行う。したがって、この定義によれば、「侵略戦争」もまた国家の手による「犯罪」に他ならぬと、「攻戦」を個人犯罪の延長にあると位置づける。とすれば、「侵略戦争」は、他者に与える最大・最悪の「犯罪」であるという。（浅野裕一『墨子』、66頁参照）

すなわち、『平民新聞』第3号には、天来の「墨子の非戦主義」が、「墨子の兼愛説を紹介して其非戦主義を示したる所、時節柄大いに人目を牽くに足る」と評価されていた⁽⁵³⁾。そして、天来が、『聖書之研究』第46号に載せた「墨子の非戦主義」から引用した墨子の語として、何箇所かを抄録して紹介している。

『平民新聞』第3号所収の「墨子の非戦主義」には、

『天の意、大国の小国を攻め、大家の小家を乱し、強の弱を暴し、詐の愚を謀り、貴の賤に傲ることを欲せず、人の有力者相営し、有道者相教へ、有財者相分たんことを欲し（宛然是れ二十世紀の社会主義「天来氏註」）又上の強めて治を聴き、下の強めて事に従うを欲す…此の如くする時は国家治り、財用足り、百姓皆暖衣飽食を得、便寧にして憂なし』（『平民新聞』第3号）

との墨子の言葉が引用されている⁽⁵⁴⁾。また、『平民新聞』第3号には、「天来氏が墨子を評する言」として、『余輩は遠く二千五百年の古に於て、我が東洋の賢士たる墨子の心中早く既にキリストの面影を見るもの也』、『墨子は実に東洋の大哲にして我主キリストの兄弟分也』との言を示している⁽⁵⁵⁾。

このあと、天来の代表的な「非戦論」の論稿が確認されるのは、『上毛教界月報』第302号（大正13年1月25日発行）に発表された「墨子の非戦論と兼愛主義」である⁽⁵⁶⁾。この天来の論稿は、「大正12年10月桐生教会に於ける文芸講演の大意也」と文末に記されている。当時の天来は、組合教会である甘楽教会（富岡）の牧師であり、時々、日基教会である桐生教会へも応援に出掛けていた。大正12年（1923）10月は、前月に「関東大震災」が発生しており、大変厳しい世情であった。しかし、桐生教会の『教会百年史』には、「彼（天来）は礼拝説教の外に、時々『文芸講演』と称して講演会を行い、文学を通してキリスト教を広めようと…」としていた天来の姿が記されていた⁽⁵⁷⁾。

いずれにしても、『上毛教界月報』第302号に発表された「墨子の非戦論と兼愛主義」には、「近代の露西亜に平和主義の非戦論者トルストイあることを知るも、彼よりも二千余年の前にトルストイにも優りし人にして兼て哲学秀て平和主義非戦主義、廃殺主義の墨子あることを知らざるは何と不見識の事であろうぞ、是れ東洋の西洋に勝る事を知らざるものだ」と記し、「トルストイ」よりも遙か以前に、「墨子」が「非戦論」を主張していたことを紹介している⁽⁵⁸⁾。

また、同号で天来は、「近時欧州の大戦と曰い、近くは昨年九月一日の大震災と共に勃発した鮮人の虐殺並に自警団の暴行の如きは明治大正の開化の時代に在つて何と曰う恥かしい野蛮極まる獣性の跳梁ではあるまいか」と言い、「第一次世界大戦」の惨禍や「関東大震災」の発生時における社会不安から「朝鮮人の虐殺」などが生じてしまったことなどの例を引き合いに出し、当時の日本の社会批判をも展開していた⁽⁵⁹⁾。

そして、天来は、墨子の非戦論の根底をなしているのが、まず、「兼愛篇」にあると言う。すなわち、社会が混乱する原因は、墨子によると、「人間相互の間に愛の一字が欠けて居るから起ると断言して居る」からだと言う。つまり、「他人の家を見ること己の家を見るが如く他人の国を見ること自分の国を見るに等しからば御家騒動も内憂外患も戦争も殺人も同時に止まり世は実に平和の世、親睦の世、安泰の世となるに違いない」と言い、墨子の主張の要点として、「平和は人間に取て最も利益なるが故に相愛することは詰り相利することであると力説した」と述べている⁽⁶⁰⁾。

次に、天来によれば、墨子は、「戦争は人間の最も矛盾した且つ不利益の行動である」と言う。また、「非攻篇」によると、「一度戦争を起せば民間の産業は忽ち頓挫するばかりでなく非常に疲弊し、莫大な軍備に一国の財貨を消費し、同胞人類の死傷は挙げて算な

く、畜類の損害も算なく人民の祭祀は廃れ、正業は休み、その惨状は言うに忍びない、…」
と言い⁽⁶¹⁾、実際上の利害関係から論じても、戦争の非なることを指摘している。

そこで、天来は、「此所の道理に毅然たる覚悟を定めて熱烈なる平和と兼愛主義を掲げ
非戦論の宣伝と同時に戦術兵器の改良に腐心し以て全く戦争の恐るべきを悟らしめ而して
之を廃そうとしたのが墨子である」と結論づけている⁽⁶²⁾。

そして、なお、墨子について、「二千有余年後の今日も尚その主義と精神とか未だ実現
を見ずして現代の文明病に等しく苦しむことを痛切に悲しむものである」と言う。すなわ
ち、天来は、「どうか我々はキリストの使徒として厭く迄平和非戦論を掲げ之を徹底的に
海の内外に実現したいものである。此点に於て墨子は我々に取りて尤も善き聖雄的先覚者
にして亦殆どキリストと同じ思想を有った一世の豫言者たることを見るのである」と指摘
していた⁽⁶³⁾。

(3) 『聖書之研究』に見られる天来の平和思想

『聖書之研究』は、内村鑑三が、明治33年(1900)9月30日に主幹として発行した日本で最初の聖書の研究雑誌である。その後、一時『新希望』(第64号~74号)と改題されたが、名前も第75号より元に戻り、昭和5年(1930)、内村の死により第357号をもって廃刊された⁽⁶⁴⁾。内村が、『聖書之研究』を創刊するに当たって、天来も深くかかわっていたことは、本稿(第1部)において既に指摘しておいた⁽⁶⁵⁾。

ここでは、天来の『聖書之研究』における寄稿状況を分析し、その内容を明らかにする。天来は、明治33年9月に発行された『聖書之研究』第1号から、昭和5年4月の『聖書之研究』第357号(終刊号)までの間、多くの寄稿をしている。天来の寄稿文のなかで最も注目されるのが、「非戦論」の主張として知られる『聖書之研究』第46号(明治36年11月19日)の「墨子の非戦主義」である⁽⁶⁶⁾。次いで、『聖書之研究』第50号~第55号までの「孔子及孔子教(一)~(五)」である。この内容は、のちに天来が単著『孔子及孔子教』としてまとめ出版している。その他、「ダンテ」、「カーライル」、「ブラウニング」、「サヴォナローラ」、「莊子」など、東西思想を取り上げ論じている。(天来の『聖書之研究』への寄稿文一覧については、資料編を参照)⁽⁶⁷⁾

次に『聖書之研究』に載せられた天来のいくつかの文を読み、天来の平和思想の一端を考察して見たい。『聖書之研究』第9号(明治34年5月20日発行)には、「病中吟」と題した文を寄せた⁽⁶⁸⁾。天来は、

「余は今春耳を病んで蟄居又蟄居、瞬時に九旬の日子を消して空しく三春の行楽に負けり。花開かざる前よりして花落つる後の今日、猶聊かの愈快を見ず、…寧ろ我の一身に取て、より多く悲しむ可く、より深く痛む可きは其聴覚世界を失へること是れ也…」(『聖書之研究』第9号)

と言い、この頃より耳を煩っていたことが知れる。さらに続けて、

「未だ俄かに聾を以て棄つ可きに非ざる也、況や物を視、物を聴くは、未だ必ずしも血肉に因らず、反つて深遠高大なる宇宙の秘密に徹底して其实軀を捕捉するは、心の眼、心の耳の要且つ切なるに於てをや、況や非の大にして不幸の尤も大なるは莊子の所謂哀は心死より大なるは無きに於てをや」(『聖書之研究』第9号)

と述べ、難聴のハンディを背負っても、「心の眼」、「心の耳」が大切であると述べていた。

また、天来は、次のようにも言う。

「故に我は今よりして耳を人界の喧囂に閉じて、心を靈界の高きに馳せ、以て真妙なる天籟に聴かんとす、近きに聞かずして遠きに聴き、今に聞かずして古に聴き、人に聞かずして神に聴き、有声に聞かずして無声に聴き、有形を語らずして無形を語り、現在に友たらずして将来と友たらんとす」（『聖書之研究』第9号）

すなわち、「心を靈界の高きに馳せ、以て真妙なる天籟に聴かんとす」、「人に聞かずして神に聴き」などの言葉に、天来のキリスト教信仰の一端を知れる。

また、「我は慈悲深き神を信じ、自由を愛し、正義を愛し、至正にして至公、至仁にして至愛、而かも極めて大能なる唯一の神を信ずるが故に、如此き運命論者に同意する能はざる也」とも言い⁽⁶⁹⁾、キリスト教思想による「自由」や「正義」を愛することを述べていた。

いずれにしても、この頃の天来には、耳を悪くし、身体的なハンディを背負ってしまった自己の境遇を、キリスト教の信仰を持ち、乗り越えて行こうとする強い意志が感じられる。こうした天来の境遇については、甥の悦治も「住谷天来とわたくし」のなかで、「弱視と難聴の人」として天来のことを語っている⁽⁷⁰⁾。

『新希望』第64号（明治38年6月14日発行）には、「余の眇たる新希望」という題の文が載った⁽⁷¹⁾。創刊以来の『聖書之研究』の名称は、第64号より『新希望』に改題された。当時は、まだ、日露戦争只中であり、内村は敢えて時勢にも鑑み、改題したものと思われる。『聖書之研究』第63号（明治38年4月20日発行）の「本誌改題予告」によれば、「『新希望』は第一に来世の希望を歌うべし。『新希望』は第二に地上に於ける平和を唱うべし。『新希望』は第三に総ての方面に於て拡大、征服（平和的）改善を計るべし。其本誌の継承者なるが故に聖書の研究を以て其主題と為すことは言うまでもなし」と記されていた⁽⁷²⁾。

天来は、『新希望』第64号の「余の眇たる新希望」において、次のように言う。

「余の敬愛せる唯一の雑誌、我が『聖書之研究』は正に本号を以て『新希望』と改題せん」とす。善哉『新希望』よ！汝が燦乎たる光明と凜乎たる指導とは、能く人世の闇夜を破って、將に亡びんとする人の子を起して、さながら獅子の奮迅せるが如く、雲霞の如く群がれる禍難災厄を屈服せしむ。…蓋し新希望は新知識を意味し、新生命を意味し、新活動を意味し、新平和を意味す…」（『新希望』第64号）

と述べ、天来もまた、内村の『新希望』の命名に賛意を示し、暗に時勢を考慮して「平和」

を望む主張に共感していた。

『新希望』第70号（明治38年12月10日発行）には、「詩人ブラウニングの人生観」という題の文を載せた⁽⁷³⁾。「ブラウニング」とは、ロバート・ブラウニング（1812-1889）のことで、イギリスの詩人である。天来は、このロバート・ブラウニングを高く評価していた。天来は、

「…哲人カーライルと相並んで、同時に同一の英国に生れ、十九世紀の大導師として普く欧米の文界を飾り、靈物両界の双子として、共に時代の要求を充しぬ。然れども一は其悲慨を以て、一は其満悦を以て、各々独特の長を發揮せるが如し、故に此二者を知るは偶以て其時世を知る也、否其時世の両面の要求を知る也」（『新希望』第70号）

と言い、「ブラウニング」のことを「カーライル」と並び称していた。

また、天来は続けて次のように言う。

「カ氏に散文的詩想あれば、ブ氏に詩形的散文あり、彼に『ピューリタン』の気魄あれば、此に『ヴェーダ』の達悟あり、彼に仏教的厭世観あれば、此に基督教的楽天観あり、然り而して二者共に、一代の文豪として、…誠に能く似たりと謂うべし」（『新希望』第70号）

と言い、「カーライル」や「ブラウニング」の特質について語っていた。

天来は、最後に「ブラウニング」について、次のようにまとめている。

「思うに詩人の多き何ぞ限らん、然れども斯かる雄大の文字を描き、斯かる豊富の思想を宿して、人間の独特の光栄と權威と運命を説き尽せるもの未だ曾てあらざるべし。其鋭利なる直覚眼と其博大なる哲学想と其剛健なる鉄石心と其勇猛なる向上力とは共に古今独歩と云うべし…ブラウニングの如きは蓋し此神聖の詩人なる哉」（『新希望』第70号）

と結んでいる。

この天来の「詩人ブラウニングの人生観」に対して、内村の次のような評が載せられている。天来の言葉によると、「内村生曰く、今日此時住谷君より此歡喜の大福音に接す、読者諸氏は此大作を忽にすべからざるなり」と記されている⁽⁷⁴⁾。

なお、天来の「詩人ブラウニングの人生観」を『新希望』第70号に載せるにあたって、内村の天来宛ての書簡（明治38年5月8日付）によると、天来の住所が、「群馬県群馬郡国府村小学校前」となっており、この年の5月には、すでに天来は上州の故郷へ帰郷し

ていた⁽⁷⁵⁾。

内村の書簡⁽⁷⁶⁾によると、天来に『聖書之研究』を『新希望』に改題することを告げ、「短文なりと必ず毎号御寄送願上候…ダンテ、ブラウニングの希望等は歓迎に御座候。偉人の希望を唱えられ、御自身希望を増されんこと、希望の至りに存候」と記し、内村は天来が上州に退いてからも、『新希望』へ寄稿するように依頼していた。

なお、この頃の天来は、耳を病み、健康上の悩みもあったと思われ、失意の帰郷であったのかもしれない。内村は「御自身希望を増されんこと、希望の至りに存候」と同書簡に書き記し、天来を慰め、励ましていた。

『聖書之研究』第100号（明治41年6月10日発行）には、「予と研究誌」という特集の記事がある⁽⁷⁷⁾。その中に「上野 住谷天来」として、次の文が寄せられた。

「…正直に申上ければ『我は葡萄樹汝等其枝也』と云へる聖語は亦直に余と研究誌との関係御座候…世界広しと雖も雑誌山の如く多しと雖も余の精神を向上し余の思想を涵養し余の心志を剛健にし余の趣味信仰を聖化せるもの未だ此誌に優る者とは他に認め不申候」（『聖書之研究』第100号）

と言い、『聖書之研究』誌が、天来のキリスト教思想や信仰にとって、いかに示唆を与えていたかが知れる。また、天来は、

「…無形の教会が其孤寂を以て笑はるゝに係はず海の内外を通じて愈健実に我徒の心霊の上に牢乎として打健てられつゝあるは誠に大奇蹟大恩寵と歎美致候、余は本誌に由りて最も古き信仰と最も古き真理とを復活して基督の聖訓その儘を無二の靈糧とすべき金剛不壊の確證を得たる一人に候」（『聖書之研究』第100号）

と言い、内村鑑三のいわゆる「無教会主義」のキリスト教に理解を示していた。

『聖書之研究』第101号（明治41年8月10日発行）には、「カーライルの宗教」と題する文を載せた⁽⁷⁸⁾。天来はすでに、明治33年（1900）に警醒社書店より『英雄崇拜論』（トマス・カーライル原著 住谷天来訳）を刊行していた。同書については、内村も天来の訳文に高い評価を与えていた。

天来は、「カーライルの宗教」について、

「彼の所謂信仰とは猶ほ支那の陸象山の如く宇宙を容れ宇宙を包む大なる自我を信ずるの謂也。別言すれば神と共に立ち、神と共に歩み、神の中に住み、神と共に働く所の千古万古に亘りて存する大なるヒューマニチーの自我を見出し、此自我に頼り、此自我を信じ、之が為に奮起し、之が為に献靖し、之が為に奉事する其宗教的熱誠と其

豫言者的敬虔と、其詩人的憧憬と其戦士の殉難あるもの誠にカーライルの一代にして、彼は実に此信仰を有したり」（『聖書之研究』第101号）

と述べ、カーライルには、「神と共に立ち、神と共に歩み、神の中に住み、神と共に働く所の千古万古に亘りて存する大なるヒューマニチーの自我」があることを指摘した。

『聖書之研究』第104号（明治41年11月10日発行）には、「筆の快樂」という文を載せた⁽⁷⁹⁾。天来によると、「…其实世界に於ける大革命とか、憲法上の大改革とかは、武器よりも寧ろ議論に由りて成し遂げられた者は少くない。よし亦武器を用いた場合でも大抵は筆の力が剣に勝り、思想は砲礮よりも更に更に力があると歎賞して居るが、真に然である」と言い、「筆の力が剣に勝り」との見解は、まさに言論の力を信じていた。

また、天来は、「筆の力が剣に勝り」の例として次の例を挙げた。

「仮令は保羅（パウロ）の筆は、該撒（シーザー）や亜歴（アレキサンダー）の剣に優り、断天（ダンテ）の筆は査列曼⁽⁸⁰⁾（シャーレマン）や触出力⁽⁸¹⁾（フレデリック）の剣に勝り、美留頓（ミルトン）の筆は、格倫鐳（コロンエル）や亜爾布烈度（アルフレット）大王の武器に勝り…」（『聖書之研究』第104号）

と言い、世界史上のパウロ、ダンテ、ミルトンなどの名前を挙げ、かれらの宗教、思想などを引き合いに出していた。そして、さらに続けて、

「若しも世界の各皇帝や各宰相や各国民が少しでも此事に感著いたならば、あの仰山な金を遣って馬鹿らしい軍艦や砲台を拵^{こしら}へて野蛮の血祭をすることを一刻も早く廃めて、真個に平和な自由な思想の原野を開拓して、人心を培養する大図書館や大学校を幾個も建つることが出来るであらう」（『聖書之研究』第104号）

と言い、まさに巨額な予算を軍備の増強に注ぎ込む当時の世界情勢や日本の現況を批判していた。すなわち、天来は、「軍艦や砲台」を造るよりは、図書館の建設や学校の教育に向けたほうが良いとする平和思想を展開していたものと思われる。

『聖書之研究』第122号（明治43年8月10日発行）には、「サヴォナロラと日本の現代」との文を載せた⁽⁸²⁾。

天来は、すでに『聖書之研究』第119号（明治43年5月10日発行）に、「サヴォナロラ略伝」、『聖書之研究』第120号（明治43年6月10日発行）に、「サヴォナロラの時代と人物」を寄稿していた。サボナロラ（1452-1498）とは、イタリアの宗教改革者で社会の腐敗を糾弾し、後に焚刑に処せられたという人物であった。

『聖書之研究』第122号の「サヴォナロラと日本の現代」によれば、

「文芸復興期（ルネッサンス）の伊太利（イタリア）に於て、彼を要し彼を待ちしが如く、我日本の現代に於ても、彼の如き警策を欲し、彼の如き理想の実現を待つもの実に大早の雲霓を待つより急なるを思はずんば非ずである」（『聖書之研究』第

122号）

と言ひ、イタリアのルネッサンス期に活躍した「サヴォナロラ」のような人物が出現することを、当時の日本にも現れることを期待していた。天来が、この論稿を発表し始めた明治43年（1910）5月は、ちょうど幸徳秋水らが検挙された大逆事件が起きた頃でもあった。当時の天来は、盟友の井上浦造が創設した群馬県大間々町（現みどり市）の共立普通学校の教師をしていた。

天来は、『聖書之研究』第122号で、「余の結論は斯うである、世界に於て最も雄大なる人物は真理を尊び正義を愛し、之を遵奉し又之を公言する所の人である」と言う。そして、「サヴォナロラ」について、「雄大なる聖高の人格を以て其一生を全ふしたる一人である」と言ひ、当時の日本の社会について、「今の時代はサヴォナロラの如く、真理を明瞭に告白する者の無いのと、正義を大膽に実行するものの無いのと、愛の精神を公平に実現する者の無いのが何よりの不幸で、何よりの災害で社会民生の危機は懸って此一事にありと謂ふて宜からう」と述べている⁽⁸³⁾。

すなわち、「今や我国の現状は一つの危機に瀕して居る、見渡せば其文芸も宗教も政治も道徳も商業も工業も決して公正の進路を取りつゝあるとは云へない」と言ひ、当時の日本の社会全体が閉塞していることを歎いていた。そして、「嗚呼誰か明治のサヴォナロラと成りて此国民に一荊鞭を与へて…以て之に聖高偉大の新生命を吹き込むものぞ？」と結論づけている⁽⁸⁴⁾。

『聖書之研究』第224号（大正8年3月10日発行）には、「我主我神」という題の文を載せた⁽⁸⁵⁾。天来は、その一節で次のように言う。

「見給へ、文明開化を以て誇て居る現代人は開戦以来五カ年の星霜と二千億円の軍備を費し三千余万の生霊と幾千幾万噸の艦隊と商船とを原野海底に埋没して、古昔の蛮人だも敢て為し得ざりしも最も恐るべき戦争、古今未曾有の最大悲劇を演出して今では其跡始末に全く困り切りて居るではない乎」（『聖書之研究』第224号）

天来は、大正3年（1914）に勃発した第一次世界大戦を巨額な軍事費を費やし、貴い人命を失ったことを悲しみ、「最も恐るべき戦争、古今未曾有の最大悲劇」として歎いていた。そして、続けて、

「…連合国の特派員が仏京ベルサイユに会して講和の大議を定むるの時、彼等の言行や其処分が果して何の辺までにイエスの聖旨聖訓と天地の公道と人生の本義に触れて居る乎…自己本位から割出して、自国の利益とか自国の権勢とかを少しでも他国他人に比して多く得ようとする傾きがあるならば、…今日の平和会議は明日の戦争開始とならぬとは限らない…」 (『聖書之研究』第224号)

と言い、のちに開催されることになるベルサイユ講和条約の内容について触れ、キリスト教思想に基づいた「天地の公道と人生の本義」が大切であり、各国が自国本位の利益を追求するならば、平和会議の意義がないことを憂いていた。

こうして、天来は、

「戦争廃止は実に人類の理想である。少なくとも此理想は三千年又は四千年の昔、腕力と暴力とが天下を治める唯一の武器と認められた抑もの太古より宣伝せられて居るのである。爾来幾多の惨劇が演ぜられて此理想は風前の燈の如く、…今尚人類の頭から去らないのみか、現に最も大切なる要求であると言うことが年一年に分って来たのは頼母しい」 (『聖書之研究』第224号)

とも言い、「戦争廃止は実に人類の理想である」との言葉に、天来の平和思想の一端が伺える。

(4) 『聖化』に見られる天来の平和思想

『聖化』第2号(昭和2年2月5日発行)には、「昭和の日本と其の使命」と題する文を載せた⁽⁸⁶⁾。天来によれば、「明治大正に見る六十年間の歴史は、我日本に取りて実は大飛躍大進歩の時代」であったと言うが、「その末年に至りては、強弩の末魯を穿たずと日ったような格で、あらゆる社会の各方面からは行き詰ったという恐ろしい呻吟の声を聞いた」と言い、大正末から昭和初期にかけては、日本の社会が行き詰まっていると述べた。

そして、元号の「昭和」の由来が、「百姓昭明にして万邦を協和す」にあることを指摘し、「此昭和が正に新日本の大理想なりとすれば、内に於ては四民平等の大義を完成して盛に民風を作興し、外に於ては世界的平和と天地の公道を拡張して、以て四海に其の仁政を施く事であろう」と言い⁽⁸⁷⁾、漢学者としての見識も示していた。また、天来は、「昭和の日本は、諸国民の現状を打破してあらゆる世界の方針を転換し、由て以て平和と自由と友愛とを将来すべき正に革命の大機運に会せりと謂うべしだ」とも言い、「昭和」という時代の幕開けにつき、新しい期待感を述べていた。

天来は、その理想とした社会変革について、次のようにも語っている。

「是に於てか日本は新にキリストの洗礼をうけて、まがひなき名詮の神国と成り更らに又神国の民は其力によりて聖化せる二千五百有年来の尊き日本魂を以て、新らに全世界の人々に平和の洗礼を施すであらう」(『聖化』第2号)

このことから、天来にも内村鑑三と同様に、「キリスト教思想」と「日本魂」との結びつき、すなわち、「二つのJ」(JesusとJapan)の発想が、内在されていたと思われる⁽⁸⁸⁾。

『聖化』第4号(昭和2年4月5日発行)、天来筆の「囂々録」には、当時の政治批判が載せられている⁽⁸⁹⁾。天来は、「大正も過ぎ昭和の新時代に於てすらが、耳を掩うて鏡を盗むと曰ったやうな調子で、何れの政客も公明正大といふ事を知らない。其癖口では曰うが、只管ら利権を得んが為に暗中飛躍で盛に偽と悪と醜との展覧会を開き…」と語り、当時の政治家一般についても「公明正大」を知らず、ただ自己の利権を得ようとしているだけだと批判している。また、天来は、「日本には私党はあっても公党はない、邪党はあっても正党はない、我党はあっても天下の民党はない、何れも我利我欲の亡者で、御互いに泥仕合を盛にやって…、日本の憲政は遂に其美を見るが出来ぬ」と言い⁽⁹⁰⁾、当時の政党に「我党はあっても天下の民党はない」と断言し、日本の憲政を歎いていた。

さらに、天来は、

「綱紀の紊乱も厚顔無耻、而も一面には堂々として政治の公明を強辯し乍ら他面に於ては詔勅を引用して以て自己の非曲を蔽う。国政を愚弄し、国民を無視するの罪久しく安きを得んやだ」（『聖化』第4号）

と言い、「詔勅を引用して以て自己の非曲を蔽う。国政を愚弄し、国民を無視するの罪」との言葉は、当時の政治家のモラルを痛烈に批判していた。

こうした政治状況を見て天来は、

「若し日本にクロンウェルの如き英傑があつて、今の議会の状態を見れば彼は必ず一隊の鉄騎を率いて貴衆両院の門を鎖じ、迅雷疾風の勢を以て彼等議員を一網に打尽して、悉く之を東海に一扫し、自ら国民に代つて新帝を補翼し奉り、以て公明正大なる昭和の神政を施き及ぼし、自由民権の為に万丈の気を吐き来るや必せうだ」

（『聖化』第4号）

と言い、敢えてクロンウェルの名前を挙げ、イギリスの革命を連想させるような政治状況を、当時の日本の政治に当てはめて考えて見た。

次に述べているのは、当時の若槻内閣の岡田良平文相が提出した「宗教法案」について、天来の見解が載せられている。天来は、

「怪しからぬは岡田文相の案出した宗教法案である。日本国民は安寧秩序を妨げず及び臣民たる義務に背かざる限りに於て信教の自由を有すると、是は神聖にして犯すべからざる帝国憲法の明文では無い乎。然るに何事ぞ、彼は故らに繁鎖なる法律を設けて、人の信仰の自由を奪い、何等宗教の素養（或理解）なくして文相自ら宗教を監督するという、僭越も亦甚だしい哉、…かゝる駄案は調査も修正もあつた者に非ず、宜しく須からく撤廃して永久に問題にせずして可也だ」（『聖化』第4号）

と言い、明治憲法下における「信教の自由」であっても、この「宗教法案」は、「人の信仰の自由」を奪うものであると、キリスト者としても断固反対の態度を示していた。結局、この若槻内閣（昭和2年）の「宗教法案」は、不成立となった。その後、「宗教法案」は、日中戦争が始まって国家主義化が進む中で、昭和14年（1939）の平沼内閣で、宗教団体と結社の統制を目的に「宗教団本法」として成立される⁽⁹¹⁾。そして、同年、ついに天来の『聖化』も、官憲により廃刊を余儀なくされるのである。

『聖化』第14号（昭和3年2月5日発行）の「囁々録」⁽⁹²⁾に、天来は、「日本に憲政が施れて約三十年を経過したけれども憲政の美は未だ曾て一度も發揮されないで却て偽

と醜と悪のみが暴露されて居る、何たる不幸の国民であろう」と言い、明治中頃に立憲主義が始まったもの大正、昭和になってもその実態は、「偽と醜と悪」が暴露されていると歎いている。こうした当時の政治について、天来は、

「是は畢竟国会の開設以来僅に二三子を除くの外、政の正たり政の公たるを知らざる処の似而非をる政治家輩が僭越にも天下の政權に携って私利私益のみ謀るからだ、何うか此劃時代的普選の際に当って既成政党の我利我利盲蛇を悉く一掃して殆ど一人も出さぬように一般民衆が目を覚して努力して欲しいものだ」（『聖化』第14号）
と言ひ、政治家が私利私欲に走り、政党も「我利我利盲蛇」となってしまう、そのためにも「普選」において、一般民衆が正しい目をもって政治に関心を向けなければならないとの見解を述べていた。

なお、天来は、『聖化』第14号に「愛犬『平和（ピース）』の死を弔す」との文を寄せている。この文によれば、天来は、『平和（ピース）』という名前の犬を飼っていたことが知れる。愛犬にまで、『平和（ピース）』と名付けたのは、ほほえましい限りであるが、わざわざこの記事を紙面に載せているのも、当時の暗い世相を意識し、敢えて自己の平和思想を託そうとして述べていたのかもしれない。

また、天来は、次のように言う。「最近数年の間世界の名士達が寄て集てやれヴェルサイユ会議だの、ワシントン会議だの、…千古の知雄を傾て御名論は山と出るも、遂に軍備の縮小も万国止兵も未だに実行されていないのは誠にモドかしくもあり又情けない事だ…何時世界に平和が来るであろう？」と言ひ切り⁽⁹³⁾、当時の世界情勢についても、形式の平和会議は開かれても真の軍縮や平和が訪れていないことを歎いている。続けて、「此時此際我家の愛犬ピース（平和）は病を得て死んだ。何という不祥の事であろう」と言ひ、愛犬ピース（平和）を弔す「挽歌」を漢詩で詠んでいる。これも天来ならではの「平和」の叫びに違いないのではないか。

『聖化』第15号（昭和3年3月5日発行）には、「神国日本の自覚と其の天職」との文を載せた⁽⁹⁴⁾。天来は、「日本は古来から瑞穂の国と云われて居る、是は決して武の国でも文の国でも商工の国でもない、実は農業という最も純朴な自然を友とする平和な仕事に我が国民の天職であらねばならぬ」と言ひ、「農業という最も純朴な自然を友とする平和な仕事」が「天職」であると述べている。そして、さらに続けて、

「然るに時勢の転変は誤って一度日清戦争や日露戦役に参加して以来、…今や英米の如き好戦的国民と切りに覇を争って居るが、是は決して日本本来の面目では無い。

其証拠には今や政治に於ても経済に於ても将た又教育においても、凡ての方向が行き詰って進退維れ谷て居るではないか」（『聖化』第15号）

と言い、当時の日本の社会が、「政治」、「経済」、「教育」などの分野においても、行き詰まり閉塞しているとの時代認識を示していた。

そこで、天来は、「ここが聖書の『是れ人をして神を尋ねしめ、或は探りて見出す事あらしめん為め也』で、今こそが一大発見、即ち神と神の子たる天職を発見しなければならぬ時である。ここに神の摂理がある」と言い⁽⁹⁵⁾、聖書の言葉を用いて、日本の「天職」を発見しなければならないと説いている。

そして、天来は当時の世界情勢について、「今や暗きは全地を掩い闇は諸の民を蓋うて危機一髪は世界の状況である。而して世界は物質的文明の没落と共に精神的文明の創造を求めつつある」と言う⁽⁹⁶⁾。昭和初期の日本を取り巻く厳しい国際状況は、危機一髪であるとの認識により、現代文明を「物質的文明の没落」と捉え、新たに「精神的文明」を創造しなければならないことを述べていた。

こうした状況を打破するために天来は、「曾ては印度で亡びたる仏教を取り入れて之を活かし、又支那で衰てし儒教を迎えて之を興したる日本今又欧米の国民が其信仰に於て落第したる基督教を新たに迎えて内に籠れる未発の真理を開明し之を世界に宣伝するもの日本の使命でなくて何であろう」と言い⁽⁹⁷⁾、かつて日本に取り入れられた「仏教」や「儒教」のように「基督教」を取り入れることの必要性を強調していた。そして最後に、天来は、日本が、「最も明るい輝かしい平和の大道を創造し宣揚すべきである」と結んでいる。

『聖化』第45号（昭和5年9月5日発行）には、「自由よ嗚呼自由よ！」との一文を載せた⁽⁹⁸⁾。天来は、「人は誰しも自由を愛します、而して束縛ほど嫌いのものはありません。自由は人間の特権であって、天より人間に与えられた賜物の中で最も偉大なる賜物は自由であります」と言い、若き日、「上毛青年会」で自由民権思想の影響を受けて以来、晩年に至るまで、天賦人権論的な自由論を述べていた。

天来は、これまでの歴史を振り返り、

「…実に板垣伯を筆頭として当時の先覚者達の力であります。爾来六十余年の間、相当地に自由は獲得せられたようであるが、未だ本の表面で内而にありては一向自由を握て居りません。言い換れば政治上、社会上の自由は人は多少に拘わらず得ておるようだが、道徳上の自由、精神上的の自由、靈魂の自由は得て居りません」

（『聖化』第45号）

と述べ、板垣退助らの自由民権運動、大正デモクラシーによる「普選」の実施などで、「自由」の獲得も為されてきたが、「道徳上の自由、精神上的自由、靈魂の自由」は、得ていないと言う。次いで、天来は、

「…折角開設せられた我帝国議会の如き、最近数年の状態を見れば…妄に罵詈雑言と讒謗を逞うして、最も厭うべき格闘乱戦の喜悲劇を演ずるのみで、开処に一の正義がなく、ソコに一の真理がなく、国家民人の福利を謀る正論公議を只の一度でも見ることが出来ないのであります」（『聖化』第45号）

と言ひ、当時の帝国議会の実態を厳しく批判し、「国家民人の福利を謀る正論公議を只の一度でも見ることが出来ない」と歎いていた。

さらに、天来は、現実の政治批判だけではなく、次のようにも言う。

「蓋し真の自由とは単に身の自由のみならず、心の自由であり、魂の自由である。…更に進んでは一切の聖愛正義を喜び勇んで為すことの出来る自由であります。これは金銭や名誉や肉慾や罪惡の奴隷となって七転八倒するような、今の政治家、今の学者、将た又現代の爛熟せる文化の下に迷える衆生の到底夢にだも見る事の出来ない自由であります」（『聖化』第45号）

すなわち、天来の重視した自由とは、「心の自由」であり、「魂の自由」であり、「一切の聖愛正義を喜び勇んで為すことの出来る自由」というものを指していた。

『聖化』第55号（昭和6年7月5日発行）には、「世界の謎」という題の一文が載せられた⁽⁹⁹⁾。天来は、冒頭で「人には天賦の自由があり、又天賦の聡明がある。この自由を正当に利用し、この聡明を適切に駆使する限り、その前途は洋々として進歩又進歩…」と言ひ、ここでも、「天賦の自由」の大切さを語っている。

また、天来は次のように、

「さらば如何に物質万能の時代であり、如何に科学万能の世界であっても、物質や科学のみに囚われて、単に之のみを偏重して生活すべき筈はない。物質以外に精神があり、科学以上に宗教がある。金力や財力や智力の外に、品性の力、道徳の力、靈魂の力あることを決して無視したり、又は喪失してはならぬ」（『聖化』第55号）

と言ひ、「物質万能」、「科学万能」の時代であっても、「宗教」をおろそかにしてはいけないと指摘し、「品性の力」、「道徳の力」、「靈魂の力」を無視したり、失ってはいけないと述べていた。

特に科学の発達について、天来は次のような見解を示していた。

「此科学の進歩が兵備と武器とに非常な革命を起して水雷地雷を生み潜航艇を生み、飛行機を生み、進んでは恐るべき毒瓦斯を製造するに至って、近代の科学は正に人類相互の戦争の挑発者助成者であるのみならず、進んでは戦争の謳歌者であり狂信者であるようになってきた」（『聖化』第55号）

と言ひ、近代科学の成果が、恐ろしい武器や兵器といった戦争の道具を生み出してしまったという矛盾を指摘していた。また、天来は、次のように言う。

「原来人間の理性が進み、智力が発達するならば人間同志が相互に仲好くなり相親み相助けて平和幸福を享樂すべきに、実に其反対に不幸にして世界歴史の事實は之と逆行して、益々相競い相相争い、奪い掠め、撃ち、殺し、互に血で血を洗うような惨憺たる修羅城を現出するのは一九一四年の世界大戦が其最もよい実例で、軍縮とか平和会議とかは有名無実で、今尚全世界は虎視眈々の有様である」（『聖化』第55号）

天来は、人間の「理性」により、「人間同志が相互に仲好くなり相親み相助けて平和幸福」を獲得できるのに、現実はその反対となり、1914年の〔第一次〕世界大戦を引き起こしてしまったことを指摘し、その後のヴェルサイユ条約やワシントン会議などの成果も、有名無実で、依然、世界各国は「虎視眈々の有様」であるとの危機感を抱いていた。

そして、天来は、

「…人類全体の為め最も多く役立つもの則ち全宇宙の共栄共存共樂の原理から割出してH. G. ウェルスの所謂（The world Commonwealth）世界共和政治—（世界国家）なるものを新たに打建てるように成つて来なければならぬ。即ち是は一人一国の利害關係でなく世界全体の安寧と幸福とを謀るのである」（『聖化』第55号）

と言ひ、H.G.ウェルス⁶（1866—1946）の平和思想まで持ちだし、「（The world Commonwealth）世界共和政治—（世界国家）」という、先駆的な構想を紹介した。また、天来の「一人一国の利害關係でなく世界全体の安寧と幸福とを謀るのである」との思想は、当時の日本の平和のみならず、世界全体の平和と幸福を考えていた点で特筆される。

『聖化』第58号（昭和6年10月5日発行）には、「一切の禍根」という文が載せられた⁽¹⁰⁰⁾ ここでも、天来は、「世界人類の兄弟主義、万国万民の平和主義、共栄共存の相愛主義相愛主義—是は何しても万人が父なる神を堅く信じて、共に偕に神の前に子たるの実、即ち考子たるの面目を発揮し来らざる限りは、其実現し難きこと駱駝の針の孔を通

より難しである」と述べ、「世界人類の兄弟主義、万国万民の平和主義、共栄共存の相愛主義」を実現するためには、「父なる神」を信じること、すなわち、キリスト教思想に基づかなければならないと言う。

『聖化』第66号（昭和7年6月5日発行）には、「闇の力」と題する文が載せられた。⁽¹⁰¹⁾「お互に文化だ文明だと誇ておる欧米は申すも愚か、東洋の君子国たる我が愛する日本の如きも今尚闇の力—悪魔の力が盛に地の全面を蔽うて跋扈し、…囊には浜口首相の兇変あり、次で井上準之助、団琢磨の暗殺あり、…次いで五月六日には仏の首相ゾーメの狙撃せらるるあり、今亦同月十四日には犬養首相の謀殺事件あり…」と記し、当時の昭和初期の暗い世相（テロリズム）を憂い、続けて「ミルトンの語を借れば」と述べ、「『おゝ！闇の闇の闇の闇、身は真昼間の光の中に置き乍ら、かえす由なき闇の身の無邊際なる日蝕、白日の影さえさゝじ』とは此事である。全く神を離れた世界である」と言い、ミルトンの詩⁽¹⁰²⁾を用いて、当時の世相を歎いた。そこで、「今にして悔改めずんば世界文明の没落は断じて疑いなしである。嗟、此惨劇を如何せんや」と結び、「世界文明」の没落を指摘した。

『聖化』第74号（昭和8年2月5日発行）には、「軍国主義の再来」という一文を載せた⁽¹⁰³⁾。天来は、そのなかの「人類最大の罪悪」で、「英国第一流の名士にして大政治家たりしジョン・ブライは曰う『人類の罪悪を一括せしものは是れ戦争也』と、如何なる弁解、如何なる理由を山積するも、戦争の最も大なる罪悪たることを否むことは出来ぬ…」と述べていた。すなわち、どのような理由があろうと、「戦争」は「大なる罪悪」であると断言している。さらに、「進歩した人間の時代に於ては此惨憺たる戦争をやめて真の平和と自由と幸福とを与うるのが、正に文化の極致ではあるまい乎」と述べ、あくまでも「非戦・平和」を主張していた。

また、天来は、「世は逆まに蛮風の再現」において、以下のように日本の軍国主義の台頭を憂慮していた⁽¹⁰⁴⁾。

「今や我が愛する日本の如きも、亦御多分に洩れず、盛に殺人機の充実を謀ておる。世界大戦以来、経済困難、思想困難、其他諸ろの国難になやまされつゝある矢先に於て、本年度の予算は実に日本始つて以来の大予算で二十二億四千万円也といふ。而して海陸両軍省の予算は八億二千万円といふ驚くべき巨額に上つておる。単に国債のみでも九十億円に達しておるといふではないか、是では全く中世の暗黒時代に逆戻りをして益々民をして塗炭に苦ましむるものである。…亡国の危機は正に一髪の間になり

そうだ」（『聖化』第74号）

天来は、第一世界大戦以後、経済の不況や思想統制など、困難な社会状況が生まれていることを述べ、また、年々増加する巨額な軍事費の割合を指摘し、まさに「亡国の危機」が迫っていることを憂いていた。

『聖化』第63号（昭和7年3月5日発行）の「巻頭」には、「美留頓（ミルトン）に寄す」と題した「欧凶翁（ワーズワース）作」の詩を掲げていた⁽¹⁰⁵⁾。

「美留頓よ、君は何故生きて居ないの乎

英国は君を求めること切である

英国は今や泥水の沼と成っておる

教会も、軍隊も、文学も、家庭も

富貴の社会も、悉く英国の遺産たる内心の歓びを

奪われて了った

我等は今、我利我欲の奴隷と成った

嗚呼 我等を高めるために 再び

我等に帰ってくれ、そして

我等に礼儀と美徳と

自由と威力とを与え給えよ！」（以下、8行省略）

最後に、「天来曰く 日本の状態も亦正に此の如しだ。彼の如き人物が一人でもよいから出て来て、此の日本の惨めさを救ふてくれよばよいと思ふ」と言い⁽¹⁰⁶⁾、「美留頓（ミルトン）」のような人物の出現を期待し、待望していた。ここにも、天来の思想の一端が示されている。

(5) 住谷天来の非戦・平和思想の軌跡

住谷天来の非戦・平和思想の軌跡について、①日清戦争期、②日露戦争期、③第一次世界大戦期、④日中戦争期の各時代における特色をまとめる。天来が、各時代の対外戦争において、どのような姿勢、あるいは戦争観を抱いていたのかを簡単に述べる。

①日清戦争期… この時期の天来の著した文章は、筆者の知る所では限られており、わずかに『上毛之青年（復刊）』第2号（明治29年4月20日発行）に所収されている「仮装せる国民」に、天来の平和思想が読み取れる。天来は、当時の日本が、日清戦争に勝利した後も、ひたすら西欧諸国のように、国家予算の多くを軍備の増強につぎ込んでいる日本の軍備拡張路線を批判していた⁽¹⁰⁷⁾。なお、この頃の日本のクリスチャンの多くは、日清戦争を「義戦」として捉え、政府の軍国主義政策に理解を示していた⁽¹⁰⁸⁾。

②日露戦争期⁽¹⁰⁹⁾ …この時期の天来は、トルストイの平和思想の影響を強く受け、又中国の思想家（墨子の非戦論）を論拠として盛んに非戦・平和思想を展開していた。特に、加藤直士訳（トルストイ著）『我懺悔』・『我宗教』への序文、住谷天来訳補『十九世紀之豫言者』などで、我が国にいち早く、トルストイの平和思想を紹介していた。また、内村鑑三主幹『聖書之研究』第46号（明治36年11月29日発行）には、「墨子の非戦主義」を載せた⁽¹¹⁰⁾。

③第一次世界大戦期… この時期の天来の平和思想を知る手がかりとして、『聖書之研究』第224号（大正8年3月10日発行）に、「我主我神」が載せられている。同紙によれば、天来は、大正3年（1914）に勃発した第一次世界大戦により、巨額な軍事費を費やし、多くの貴い人命を失ったことを悲しみ、「最も恐るべき戦争、古今未曾有の最大悲劇」と歎いていた⁽¹¹¹⁾。

④日中戦争期… 昭和時代に入り、甘楽（富岡）教会の牧師であった天来は、『聖化』を創刊した。『聖化』は、天来が国家社会の人心・精神の退廃を歎き、これを救おうと発行したキリスト教思想に貫かれた雑誌である。同紙は、「…あの帝国主義期の天皇制国家権力のもとでもなお、非妥協、非寛容な姿勢を堅持したのであれば、『聖化』にみられる彼の一連の言論は、忌わしい時代にあっても、そこから身をそらさずに生き抜いた闘いの言論であった」（門奈直樹「解説－『聖化』と非戦のジャーナリズム」）と評価されている⁽¹¹²⁾。

注 「第2部 住谷天来の思想 ーとくにその社会・平和思想」

第1章 住谷天来の社会思想

- (1) 住谷八朔「真正ノ英雄」『復刻版 上毛之青年 第1巻』、不二出版、1993年所収、98頁～100頁。
- (2) 前掲書、住谷八朔「真正ノ英雄」、100頁。
- (3) 前掲書、住谷八朔「真正ノ英雄」、100頁。
- (4) 和田守『近代日本と徳富蘇峰』、御茶の水書房、1990年、129頁。
- (5) 徳富猪一郎「祝詞」『復刻版 上毛之青年 第1巻』、不二出版、1993年所収、3頁～4頁。
- (6) 『復刻版 上毛之青年 第1巻』、不二出版、1993年所収、「毎月或は一時金品を本会へ寄付せらる」(氏名一覧)、24頁。
- (7) 前掲書、住谷八朔「真正ノ英雄」、100頁。
- (8) 住谷八朔「大陰世界」『復刻版 上毛之青年 第2巻』、不二出版、1993年所収、202頁～203頁。
- (9) 田中浩『近代日本と自由主義』、岩波書店、1993年、10頁。
- (10) 住谷八朔「大陰世界」『復刻版 上毛之青年 第2巻』所収、202頁。
- (11) 前掲書、住谷八朔「大陰世界」、203頁。
- (12) 岩波書店編集部編『近代日本総合年表』、岩波書店、1978年、126頁。
- (13) 住谷八朔「大陰世界」、203頁。
- (14) 鈴木昌司〔1841－1895〕越後国生れ、明治前期の自由民権家。1877年政治結社明十社を結成。1883年の高田事件で逮捕。大同団結運動に奔走し、第1回衆議院選挙に当選した。(日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』、山川出版社、1997年、1178頁参照。)
- (15) 刀水漁郎(住谷天来)「此の義心、此の理心」『復刻版 上毛之青年 第2巻』、不二出版、1993年所収、258頁～262頁。
- (16) 前掲書、刀水漁郎(住谷天来)「此の義心、此の理心」、260頁。
- (17) 前掲書、刀水漁郎(住谷天来)「此の義心、此の理心」、260頁～261頁。
- (18) 前掲書、刀水漁郎(住谷天来)「此の義心、此の理心」、261頁。

- (19) 前掲書、刀水漁郎（住谷天来）「此の義心、此の理心」、261頁。
- (20) 住谷刀水「法律死せずんば大盜止まず」『復刻版 上毛之青年 第2巻』、不二出版、1993年所収、389頁～395頁。
- (21) 田中浩「第十章 古典的自由主義と新自由主義のはざまにあつて ミル」『田中浩集 第7巻 ヨーロッパ・近代日本 知の巨人たち』、未来社、2013年所収、121頁。
- (22) 住谷刀水「法律死せずんば大盜止まず」『復刻版 上毛之青年 第2巻』所収、391頁。
- (23) 前掲書、住谷刀水「法律死せずんば大盜止まず」、391頁。
- (24) 前掲書、住谷刀水「法律死せずんば大盜止まず」、393頁。
- (25) 前掲書、住谷刀水「法律死せずんば大盜止まず」、394頁。
- (26) 刀水漁郎（住谷天来）「代議政体の要領」『復刻版 上毛之青年 第2巻』、不二出版、1993年所収、444頁～447頁。
- (27) 前掲書、刀水漁郎（住谷天来）「代議政体の要領」、444頁。
- (28) 前掲書、刀水漁郎（住谷天来）「代議政体の要領」、444頁～445頁。
- (29) 前掲書、刀水漁郎（住谷天来）「代議政体の要領」、445頁。
- (30) 前掲書、刀水漁郎（住谷天来）「代議政体の要領」、446頁。
- (31) 『日本キリスト教歴史大事典』、1216頁。
- (32) 内村鑑三編『聖書之研究』第2号、聖書研究社、1900年所収、「警世」（広告）より。『聖書之研究 復刻版 第一巻』、聖書之研究復刻刊行会、1969年所収。
- (33) 『警世』については、原本を検索しずらく、筆者は古書店より購入し、収集し得た原本により出典を確認した。
- (34) 刀水漁郎「燈火の読書」住谷弥作編『警世』第1号、警世雜誌社、1900年所収。
- (35) 住谷天来「寸心録（中）」藤沢音吉編『警世』第28号、警世雜誌社、1901年所収。
- (36) 住谷天来「寸心録（下）」藤沢音吉編『警世』第30号、警世雜誌社、1902年所収。
- (37) 前掲書、住谷天来「寸心録（下）」『警世』第30号所収。
- (38) 前掲書、住谷天来「寸心録（下）」『警世』第30号所収。
- (39) 住谷天来「漫與」藤沢音吉編『警世』第37号、警世雜誌社、1902年所収。

- (40) 松村介石「読者諸君に告ぐ」藤沢音吉編『警世』第42号、警世杂志社、1902年所収。
- (41) 住谷天来「『警世』の一転期」藤沢音吉編『警世』第42号、警世杂志社、1902年所収。
- (42) 前掲書、住谷天来「『警世』の一転期」『警世』第42号所収。
- (43) 『日本キリスト教歴史大事典』、678頁～679頁。
- (44) 住谷天来「天災と天福」『上毛教界月報（復刻版）第4巻』所収、270頁～272頁。
- (45) 本稿第1部「『聖化』の創刊」を参照。
- (46) 住谷天来「軽井沢に於ける上毛教師会」『上毛教界月報（復刻版）第6巻』所収、568頁～570頁。
- (47) 『日本キリスト教歴史大事典』、50頁。
- (48) 住谷天来「信仰の衰兆と我等の覚悟」『上毛教界月報（復刻版）第7巻』所収、30頁～33頁。
- (49) 住谷天来「六日間の饗宴」、『上毛教界月報（復刻版）第7巻』所収、109頁～110頁。
- (50) 篠田一人「無教会主義キリスト者の抵抗」、同志社人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究I』、みすず書房、1979年、86頁。
- (51) 住谷天来「我が敬慕の的たりし湯浅治郎君は終に逝けり」、『上毛教界月報（復刻版）第10巻』所収、302頁～304頁。
- (52) 『日本キリスト教歴史大事典』、1451頁。
- (53) 住谷天来「我が敬慕の的たりし湯浅治郎君は終に逝けり」、302頁～304頁。
- (54) 『日本キリスト教歴史大事典』、194頁。
- (55) 前掲書、125頁。
- (56) 拙稿「新島襄と共立普通学校創設者・井上浦造」『ピューリタニズム研究』第5号、日本ピューリタニズム学会、2011年所収、47頁～56頁を参照。
- (57) 住谷天来「新島先生を懐う」『新島研究』、同志社新島研究会、1974年所収、18頁～22頁
- (58) 前掲書、住谷天来「新島先生を懐う」、19頁。
- (59) 前掲書、住谷天来「新島先生を懐う」、21頁。

- (60) 前掲書、住谷天来「新島先生を懐う」、21頁～22頁。
- (61) 前掲書、住谷天来「新島先生を懐う」、22頁。
- (62) 「同志社交友同窓会」『上毛教界月報』第274号（大正15年9月15日発行）には、同年8月8日、前橋市臨江閣において同志社交友会同窓会が開かれたとの記事が載せられ、柏木義円、井上浦造らが参加していたことが分かる。住谷天来は来賓として招かれていた。（『上毛教界月報』（復刻版）第7巻』所収、122頁。）
- (63) 『甘楽教会百年史』、246頁。
- (64) 住谷天来編『聖化』第4号、聖化社、1927年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、19頁。
- (65) 小澤周三ほか『教育思想史』、有斐閣、1995年、95頁～101頁。
- (66) 『聖化』第4号、『復刻版 聖化（上）』所収、19頁。
- (67) 住谷天来編『聖化』第19号、聖化社、1928年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、109頁。
- (68) 前掲書、住谷天来「教育の失敗と人格の破産」、109頁。
- (69) 前掲書、住谷天来「教育の失敗と人格の破産」、109頁。
- (70) 『教育思想史』、220頁～224頁。
- (71) 住谷天来編『聖化』第28号、聖化社、1929年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、164頁。
- (72) 前掲書、住谷天来「牧者なき迷羊」、164頁。
- (73) 住谷天来編『聖化』第49号、聖化社、1931年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、289頁。
- (74) 住谷天来編『聖化』第53号、聖化社、1931年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、317頁。
- (75) 前掲書、住谷天来「画龍点睛」、317頁。
- (76) 前掲書、住谷天来「画龍点睛」、317頁。
- (77) 住谷天来「序」、赤羽巖穴『嗚呼祖国』、鳴臯書院、1902年所収、1頁～4頁。
- (78) 藤田美実「赤羽一（巖穴）一呪詛と悔恨 二略歴」『明治的人間像』、筑摩書房、1969年、91頁～94頁。
- (79) 住谷天来「序」、赤羽巖穴『嗚呼祖国』所収、1頁～2頁。
- (80) 前掲書、住谷天来「序」、2頁。

- (81) 『週刊平民新聞（一）自第1号至第16号』（史料近代日本史社会主義史料）、創元社、1953年、58頁。
- (82) 幸徳秋水（1871－1911）高知県出身。自由民権思想の影響を受け、中江兆民の思想に傾倒する。「万朝報」の記者となり、社会主義研究会に参加。社会民主党の結成に木下尚江らと参加。足尾鉍毒事件への援助にも活躍。日露開戦気運のなかで堺利彦とともに「万朝報」をやめ、平民社により「非戦論」を主張する。のちに大逆事件により刑死。（『日本史広辞典』、山川出版社、1997年、781頁参照。）
- (83) 堺利彦（1871－1933）号は^{こせん}枯川。福岡県出身。自由民権思想にひかれ、上京し、第一高等中学校に入学するも中退。その後、「万朝報」に入社する。幸徳秋水、内村鑑三らと「理想団」を結成。日露開戦気運のなかで幸徳秋水とともに「万朝報」をやめ、平民社により、社会主義の立場から「非戦論」を主張する。（『日本キリスト教歴史大事典』、562頁参照。）
- (84) 『週刊平民新聞（一）自第1号至第16号』、西田長寿「解説」、1頁～12頁。
- (85) 前掲書、住谷天来「同情語録」、66頁。
- (86) 久保千一「住谷天来略年譜」『柏木義円研究序説』、289頁。
- (87) 大逆事件記録刊行会編『大逆事件記録 第2巻 証拠物写し（上巻）』、世界文庫、1964年所収、幸徳傳次郎「手帳」（明治43年、住所氏名記載アリ）、「押収番号155ノ2」より、191頁。
- (88) 『日本キリスト教歴史大事典』、1407頁。
- (89) 伊勢崎市編『伊勢崎市史 通史編3近現代』、ぎょうせい、1991年、277頁～278頁。
- (90) 森川抱次『敢闘七十五年』、紫波館、1943年所収、住谷天来「跋」、341頁～348頁。
- (91) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、『群馬評論 冬1980年 特集住谷天来』、群馬評論社、1980年所収、118頁。
- (92) 前掲書、118頁。

第2章 住谷天来の非戦・平和思想

1. 同時代のキリスト者の非戦・平和思想

- (1) 内村鑑三「平和の福音（絶対的非戦主義）」『聖書之研究』第44号（明治36年9月17日）
- (2) 内村鑑三「賛成の辞」『聖書之研究』第231号（大正8年10月10日）
- (3) 住谷天来「墨子の非戦主義」『聖書之研究』第46号（明治36年11月19日）
- (4) 「木下尚江」『日本キリスト教歴史大事典』、364頁。
- (5) 和田守「木下尚江の普選論と平和論」『ピューリタニズム研究』第6号、日本ピューリタニズム学会、2012年所収、9頁～11頁。
- (6) 『悲壯は即ち君の生涯なりき 深沢利重と木下尚江』、117頁～148頁にかけて、木下尚江の前橋における衆議院選挙の顛末を詳しく取り上げている。
- (7) 『復刻版 上毛教界月報 第2巻』不二出版、1984年、326頁。
- (8) 前掲書、367頁。
- (9) 山極圭司「木下尚江論」『徳富蘆花 木下尚江集 現代日本文学大系9』、筑摩書房、1971年所収、428頁。
- (10) 木下尚江「世界平和に対する日本国民の責任」『徳富蘆花 木下尚江集 現代日本文学大系9』、361頁～364頁。
- (11) 山極圭司「木下尚江論」『徳富蘆花 木下尚江集 現代日本文学大系9』、428頁。
- (12) 和田守「木下尚江の普選論と平和論」『ピューリタニズム研究』第6号、10頁。
- (13) 前掲書、10頁。
- (14) 山極圭司『木下尚江』、理論社、1955年、139頁。
- (15) 服部之総、小西四郎監修『週刊平民新聞（一）』所収、14頁。
- (16) 前掲書、15頁～16頁。
- (17) 前掲書、123頁。
- (18) 「キリスト教社会主義」とは、キリスト教信仰のなかにある社会主義的な思想部分に立脚して、資本主義がもたらす矛盾の解決に迫ろうとする思想と運動。日本では、初期社会主義の主要な勢力であった。代表的なキリスト教社会主義者としては、安部磯雄や木下尚江らが『平民新聞』、『新紀元』などに拠り、その主張を展開した。（『日本史広辞典』、632頁。『日本キリスト教歴史大事典』、427頁などを参照）

- (19)前掲書、184頁。
- (20)前掲書、184頁。
- (21)「木下尚江年譜」『徳富蘆花 木下尚江集 現代日本文学大系9』、458頁。
- (22)「深沢利重」『日本キリスト教歴史大事典』、1196頁～1197頁。
- (23)「深沢利重」『群馬新百科事典』、651頁～652頁。
- (24)『悲壯は即ち君の生涯なりき 深沢利重と木下尚江』、78頁。
- (25)深沢信三編『紀念 深沢利重』、英文社、1935年。(群馬県立図書館蔵を参照)
同書の「目次」には、「一、深沢利重遺文抄」として、「木下尚江」の「深澤君の遺文に序す」、「日本蚕業論」、「日露時局論」などが所収されている。「二、略歴並に評伝」。「三、友情」として、「住谷天来」、「柏木義円」、「山室軍平」、「海老名弾正」などの追想が所収されている。「四、共愛女学校と故人」。「五、近親者の思ひ」。「六、年譜並に家系」という構成になっている。
- (26)海老名弾正「深澤翁を思ひ忍ぶ」『紀念 深沢利重』、170頁。
- (27)青柳新米「深澤さんと共愛女学校」『紀念 深沢利重』、184頁。
- (28)『日本蚕業論』は、明治31年5月30日、東京経済雑誌社より出版された。(木下尚江「深澤君の遺文に序す」『紀念 深沢利重』、1頁。)
- (29)『悲壯は即ち君の生涯なりき 深沢利重と木下尚江』、133頁。
- (30)深澤利重「日露時局論」(明治37年12月1日稿)は、深沢信三編『紀念 深沢利重』、55頁～70頁に所収されている。なお、深澤利重「日露時局論」が、実際に出版されたかどうかは不明とのことである。(『悲壯は即ち君の生涯なりき 深沢利重と木下尚江』、167頁。)
- (31)稲田雅洋「日露非戦論—内村鑑三と深沢利重を中心にして—」『愛知教育大学研究報告第35集』、1986年、88頁～100頁。
- (32)深澤利重「日露時局論」『紀念 深沢利重』、55頁。
- (33)前掲書、55頁～56頁。
- (34)海老名弾正「深澤翁を思ひ忍ぶ」『紀念 深沢利重』、170頁。
- (35)前掲書、171頁。
- (36)木下尚江「深澤君の遺文に序す」『紀念 深沢利重』、1頁～4頁。
- (37)前掲書、2頁。
- (38)前掲書、2頁～3頁。

- (39) 柏木義円「深澤利重翁を懐ふ」『紀念 深沢利重』、166頁～167頁。
- (40) 前掲書、167頁。
- (41) 住谷天来「逝ける好友深澤君を偲ぶ」『紀念 深沢利重』、146頁～152頁。
- (42) 前掲書、148頁。
- (43) 前掲書、148頁。
- (44) 深澤利重「日露時局論」『紀念 深沢利重』、57頁～58頁。
- (45) 「柏木義円」『日本キリスト教歴史大事典』、293頁。
- (46) 『日本キリスト教歴史大事典』、678頁～679頁。柏木義円が主筆の月刊紙。柏木が安中教会の牧師となり、明治31年に創刊した。柏木のキリスト教や社会問題にかんする論説、群馬県内の諸教会の報告や個人消息などを載せる。非戦・平和志向の言論の内容のためか、しばしば発禁処分を受けた。昭和11年に廃刊。
- (47) 柏木義円にかんする主な先行研究として、伊谷隆一『非戦の思想』、紀伊国屋新書、1967年。片野真佐子『孤憤のひと柏木義円』、新教出版社、1993年。久保千一『柏木義円研究序説』、日本経済評論社、1998年などがある。
- (48) 武田清子「義円の社会観」『人間観の相剋』、弘文堂、1959年、267頁。
- (49) 久保千一『柏木義円研究序説』、72頁。
- (50) 柏木義円「私の平和論の歴史」『復刻版 上毛教界月報 第10巻』不二出版、1984年、222頁～223頁。
- (51) 柏木義円「非戦論、国是論」『復刻版 上毛教界月報 第2巻』不二出版、1984年、452頁～457頁。
- (52) 前掲書、柏木義円「非戦論、国是論」、456頁。
- (53) 前掲書、柏木義円「非戦論、国是論」、456頁。
- (54) 前掲書、柏木義円「非戦論、国是論」、456頁。
- (55) 前掲書、柏木義円「非戦論、国是論」、456頁。
- (56) 前掲書、柏木義円「非戦論、国是論」、456頁。
- (57) 柏木義円「吾人の主張」『復刻版 上毛教界月報 第3巻』不二出版、1984年、158頁～160頁。なお、久保千一『柏木義円研究序説』、72頁において、柏木が「社会主義への評価を高くしている」との指摘がなされている。
- (58) 「内村鑑三」『日本キリスト教歴史大事典』、176頁。

- (59)内村の「高崎藩英学校」時代については、鈴木範久『内村鑑三日録1 1861～1888 青年の旅』、教文館、1998年、28頁～30頁を参照。同校には、少年時代の尾崎行雄も学んでいた。
- (60)鈴木範久『内村鑑三目録 1892～1896 後世へ残すもの』、教文館、1998年、188頁。
- (61)内村鑑三『内村鑑三選集2 非戦論』、岩波書店、1990年、50頁～51頁所収。
- (62)内村鑑三「戦争廃止論」『万朝報』（明治36年6月30日）、前掲書、50頁。
- (63)内村鑑三『内村鑑三選集2 非戦論』、59頁～64頁所収。
- (64)内村鑑三「平和の福音（絶対的非戦主義）」『聖書之研究』第44号、（明治36年9月17日）、前掲書、59頁。
- (65)内村鑑三「平和の福音（絶対的非戦主義）」、前掲書、59頁。
- (66)内村鑑三『内村鑑三選集2 非戦論』、77頁所収。
- (67)前掲書、75頁～76頁所収。
- (68)前掲書、76頁。
- (69)内村鑑三『内村鑑三選集2 非戦論』、128頁～134頁所収。
- (70)内村鑑三「戦時に於ける非戦主義者の態度」『聖書之研究』第51号、（明治37年4月21日）、前掲書、129頁。
- (71)内村鑑三『内村鑑三選集2 非戦論』、153頁～154頁所収。
- (72)内村鑑三「内外見地の差違」『聖書之研究』第55号、（明治37年8月18日）、前掲書、153頁。
- (73)内村鑑三『内村鑑三選集2 非戦論』、160頁～163頁所収。
- (74)内村鑑三「余が非戦論者となりし由来」『聖書之研究』第56号、（明治37年9月22日）、前掲書、161頁。
- (75)前掲書、161頁。
- (76)前掲書、162頁。
- (77)「米西戦争」とは、1898年に起きたアメリカとスペイン間の戦争を指す。
- (78)内村鑑三「余が非戦論者となりし由来」『聖書之研究』第56号、（明治37年9月22日）、前掲書、162頁。
- (79)前掲書、163頁。
- (80)内村鑑三『内村鑑三選集2 非戦論』、180頁～181頁所収。

(81)内村鑑三「平和主義の意義」『新希望』第66号、(明治38年8月10日)、
前掲書、180頁。

(82)前掲書、181頁。

2. 住谷天来の非戦・平和思想

(1) 住谷八朔「仮装せる国民」『復刻版 上毛之青年 第2巻』、不二出版、1993
年所収、473頁～478頁。

(2) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」473頁。

(3) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、474頁。

(4) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、474頁。

(5) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、474頁～475頁。

(6) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、475頁。

(7) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、475頁。

(8) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、475頁～476頁。

(9) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、476頁。

(10) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、476頁。

(11) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、476頁～477頁。

(12) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、477頁～478頁。

(13) 前掲書、住谷八朔「仮装せる国民」、478頁。

(14) トルストイ伯著・加藤直士訳『我懺悔』、警醒社書店、1902年(国立国会図書
館蔵 近代デジタルライブラリーより)所収、住谷天来「序」、1頁～3頁。

(15) 日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』、1988
年、305頁。

(16) 左近毅『賀川豊彦における平和思想の形成過程—トルストイの影響をめぐって』、
大阪市立大学文学部紀要 第48巻 第2分冊、1996年、1頁～15頁。

(17) 加藤直士「例言」、トルストイ伯著・加藤直士訳『我懺悔』、警醒社書店、
1902年(国立国会図書館蔵 近代デジタルライブラリー)所収、1頁～8頁。

(18) 前掲書、加藤直士「例言」、4頁。

(19) 前掲書、加藤直士「例言」、4頁。

- (20) 前掲書、加藤直士「例言」、7頁。
- (21) 前掲書、住谷天来「序」、1頁。
- (22) 前掲書、住谷天来「序」、1頁～2頁。
- (23) 前掲書、住谷天来「序」、2頁。
- (24) トルストイ伯著・加藤直士先生訳『我宗教』、文明堂、1903年。
- (25) 前掲書、住谷天来「序」、1頁～5頁。
- (26) 前掲書、加藤直士「例言」、1頁。
- (27) 前掲書、加藤直士「例言」、3頁。
- (28) 前掲書、住谷天来「序」、1頁。
- (29) 前掲書、住谷天来「序」、1頁。
- (30) 前掲書、住谷天来「序」、5頁。
- (31) 柳富子『トルストイと日本』、早稲田大学出版部、1998年、20頁。
- (32) M.A.ウォード原著・住谷天来訳補『十九世紀之豫言者』、警醒社、1903年
所収、「第三編 トルストイ伯と其の福音」、225頁～303頁。
- (33) 前掲書、「第三編 トルストイ伯と其の福音」、225頁。
- (34) 前掲書、「第三編 トルストイ伯と其の福音」、229頁。
- (35) 前掲書、「第三編 トルストイ伯と其の福音」、286頁。
- (36) 前掲書、「第三編 トルストイ伯と其の福音」、291頁。
- (37) 都築政昭『真実 トルストイはなぜ家出したか』、近代文藝社、2010年、
111頁～112頁。
- (38) 住谷天来訳『トルストイ伯の福音』、警醒社、1909年。（国立国会図書館蔵、
近代デジタルライブラリーより）
- (39) 西田毅「シンポジウム『近代日本におけるキリスト教の受容と平和思想』テーマの
趣旨並びに接近視角について」、『ピューリタニズム研究』第6号、日本ピューリ
タニズム学会、2012年、5頁。
- (40) 前掲書、西田毅「シンポジウム『近代日本におけるキリスト教の受容と平和思想』
テーマの趣旨並びに接近視角について」、5頁。
- (41) 西田毅「天皇制国家とキリスト教—『三教会同』問題を中心に—」、『ピューリタ
ニズム研究』第7号、日本ピューリタニズム学会、2013年、31頁。

- (42) 木下尚江（1869－1937）長野県松本出身。東京専門学校（のちの早稲田大学）卒業。松本教会にて受洗。その後、東京毎日新聞記者となり、足尾鉍毒事件、廃娼運動などに熱心に取り組む。社会民主党結成に参画。日露戦争に際し「非戦論」を唱え、幸徳秋水らと平民社を創立する。（『日本キリスト教歴史大事典』、364頁参照。）
- (43) 住谷天来「逝ける好友深澤君を偲ぶ」、深澤信三編『紀念 深澤利重』、（非売品）1935年、146頁～152頁。
- (44) 『日本キリスト教歴史大事典』、1196頁。
- (45) 住谷悦治『鶏肋の籠』、中央大学出版部、1970年、192頁。
- (46) 前掲書、192頁～193頁。
- (47) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、『群馬評論 冬1980年 特集住谷天来』、群馬評論社、1980年所収、118頁。
- (48) 内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第7巻』、聖書之研究復刻刊行会、1969年所収、23頁～32頁。
- (49) 『週刊平民新聞（一）自第1号至第16号』（史料近代日本史社会主義史料）、創元社、1953年、58頁。
- (50) 前掲書、58頁。
- (51) 久保千一「住谷天来－非戦の思想家」『柏木義円研究序説』、日本経済評論社、1998年所収、158頁～210頁。特に「二 非戦・平和思想－墨子の非戦主義」（165頁～176頁）を参照されたい。
- (52) 浅野裕一『墨子』、講談社学術文庫、1998年、49頁～81頁参照。
- (53) 『週刊平民新聞（一）自第1号至第16号』、58頁。
- (54) 前掲書、58頁。
- (55) 前掲書、58頁。
- (56) 『上毛教界月報（復刻版）第7巻』、不二出版、1984年、524頁～528頁。
- (57) 石黒悦雄編著『教会百年史 日本基督教団桐生教会』、清文社、1979年、200頁～202頁。
- (58) 住谷天来「墨子の非戦論と兼愛主義」『上毛教界月報（復刻版）第7巻』所収、525頁。
- (59) 前掲書、住谷天来「墨子の非戦論と兼愛主義」、526頁。

- (60) 前掲書、住谷天来「墨子の非戦論と兼愛主義」、527頁。
- (61) 前掲書、住谷天来「墨子の非戦論と兼愛主義」、528頁。
- (62) 前掲書、住谷天来「墨子の非戦論と兼愛主義」、528頁。
- (63) 前掲書、住谷天来「墨子の非戦論と兼愛主義」、528頁。
- (64) 『聖書之研究』については、「聖書之研究復刻版刊行会」発行（1969年～1973年）の『聖書之研究 復刻版 第1巻～第33巻』を参照した。
- (65) 本稿、「第1部 第2章 内村鑑三との出会いと東京時代」を参照。
- (66) 住谷天来「墨子の非戦主義」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第7巻』所収、23頁～32頁。
- (67) 本稿、「資料編」、住谷天来『聖書之研究』一覧を参照。
- (68) 住谷天来「病中吟」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第2巻』、聖書之研究復刻刊行会、1969年所収、207頁～212頁。
- (69) 前掲書、住谷天来「病中吟」、210頁。
- (70) 住谷悦治「住谷天来とわたくし」、「わたくしは何時天来を知ったか（1）弱視と難聴の人」、110頁～112頁。
- (71) 住谷天来「余の眇たる新希望」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第8巻』所収、398頁～403頁。
- (72) 内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第8巻』所収、「本誌改題予告」、384頁。
- (73) 住谷天来「詩人ブラウニングの人生観」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第9巻』所収、13頁～30頁。
- (74) 前掲書、住谷天来「病中吟」、30頁。
- (75) 山本泰次郎『内村鑑三日記書簡全集6』、教文館、1964年所収、「第311信（和文封書）」、98頁。
- (76) 前掲書、「第311信（和文封書）」、98頁。
- (77) 住谷天来「予と研究誌」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第11巻』所収、296頁～297頁。
- (78) 住谷天来「カーライルの宗教」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第11巻』所収、333頁～342頁。
- (79) 住谷天来「筆の快樂」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第11巻』所収、524頁～526頁。

- (80) 「査列曼」(シャールマン) [住谷天来の表記]。カール大帝 [K a r l , C h a r l e m a g n e] (742-814) のこと。
- (81) 「触出力」(フレデリック) [住谷天来の表記]。フリードリヒ2世(大王)、(1712-1786) のこと。
- (82) 住谷天来「サヴォナロラと日本の現代」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第11巻』所収、325頁～332頁。
- (83) 前掲書、住谷天来「サヴォナロラと日本の現代」、331頁～332頁。
- (84) 前掲書、住谷天来「サヴォナロラと日本の現代」、332頁。
- (85) 住谷天来「我主我神」、内村鑑三『聖書之研究 復刻版 第22巻』所収、129頁～136頁。
- (86) 住谷天来「昭和の日本と其の使命」住谷天来編『聖化』第2号、聖化社、1927年、『復刻版 聖化(上)』、不二出版、1990年所収、7頁～12頁。
- (87) 前掲書、住谷天来「昭和の日本と其の使命」、8頁。
- (88) 内村鑑三「二つのJ」『世界のなかの日本 内村鑑三選集4』、岩波書店、1990年、306頁～307頁。
- (89) 住谷天来「囁々録」、住谷天来編『聖化』第4号、聖化社、1927年、『復刻版 聖化(上)』、不二出版、1990年所収、19頁～24頁。
- (90) 前掲書、住谷天来「囁々録」、23頁。
- (91) 笠原芳光「宗教団体法」『日本キリスト教歴史大事典』、650頁。
- (92) 住谷天来「囁々録」、住谷天来編『聖化』第14号、聖化社、1928年、『復刻版 聖化(上)』、不二出版、1990年所収、83頁。
- (93) 前掲書、住谷天来「愛犬『平和(ピース)』の死を弔す」、82頁。
- (94) 住谷天来「神国日本の自覚と其の天職」、住谷天来編『聖化』第15号、聖化社、1928年、『復刻版 聖化(上)』、不二出版、1990年所収、85頁。
- (95) 前掲書、住谷天来「神国日本の自覚と其の天職」、85頁。
- (96) 前掲書、住谷天来「神国日本の自覚と其の天職」、85頁。
- (97) 前掲書、住谷天来「神国日本の自覚と其の天職」、85頁。
- (98) 住谷天来「自由よ嗚呼自由よ!」、住谷天来編『聖化』第45号、聖化社、1930年、『復刻版 聖化(上)』、不二出版、1990年所収、266頁。

- (99) 住谷天来「世界の謎」、住谷天来編『聖化』第55号、聖化社、1931年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、324頁～325頁。
- (100) 住谷天来「一切の禍根」、住谷天来編『聖化』第58号、聖化社、1931年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、341頁。
- (101) 住谷天来「闇の力」、住谷天来編『聖化』第66号、聖化社、1932年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、393頁。
- (102) 新井明『人と思想 ミルトン』、清水書院、1997年、120頁～121頁。
- (103) 住谷天来「軍国主義の再来」、住谷天来編『聖化』第74号、聖化社、1933年、『復刻版 聖化（下）』、不二出版、1990年所収、8頁。
- (104) 前掲書、住谷天来「世は逆まに蛮風の再現」、8頁。
- (105) 住谷天来編『聖化』第63号、聖化社、1932年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、371頁～376頁。なお、「美留頓に寄す 歐囃翁」と題した元の詩は、田部重治選訳『ワーズワース詩集』、岩波文庫、1996年、109頁によると、「ロンドン・1802年（2）」との題で載せられている。
- (106) 住谷天来編『聖化』第63号、聖化社、1932年、『復刻版 聖化（上）』、不二出版、1990年所収、371頁。
- (107) 本稿、第2部「第2章 住谷天来の平和思想」「1. 住谷天来の初期の平和思想について」を参照。
- (108) 日清戦争期（当時）日本のキリスト教界の主流であった植村正久、本多庸一、井深梶之助らは、政府の膨張主義政策、軍国主義政策を支持していた。（太田雅夫「第一次世界大戦をめぐる非戦論」「一、明治期非戦論の系譜」『キリスト教問題研究 第14-15号』、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1969年所収。）なお、内村鑑三も日清戦争については、「義戦論」の立場をとった。（鈴木範久『内村鑑三の人と思想』、岩波書店、2012年、158頁～161頁。）
- (109) 日露戦争期における日本のキリスト教界は、植村正久、本多庸一、小崎弘道、海老名弾正らが、戦争支持側に立った。かれらに対して、「非戦論」の立場に立ったのが、内村鑑三、柏木義円、木下尚江、住谷天来らである。すなわち、キリスト教界では、その立場が大きく二分していたものと思われる。（田畑忍編『非戦・平和の論理』、法律文化社、1992年、68頁～72頁参照。）
- (110) 本稿、第2部「第2章 住谷天来の平和思想」「2. 住谷天来の非戦論」を参照。

- (111) 本稿、第2部「第2章 住谷天来の平和思想」、「3. 『聖書之研究』に見られる天来の平和思想」を参照。
- (112) 本稿、第2部「第2章 住谷天来の平和思想」、「4. 『聖化』に見られる天来の平和思想」を参照。

むすび

本稿では、「第1部 住谷天来の生涯と思想形成」において、住谷天来の生涯を追い、かれの思想形成を考察した。

住谷天来（1869－1944）は、上州の群馬郡国府村（現群馬県高崎市）に生まれた。かれは、青年期、当時の前橋教会牧師・不破唯次郎（新島襄門下の同志社卒）から受洗した。また、上州（前橋や高崎など）に来訪していた新島襄との接触も推定され、新島からの影響も大きかったと思われる。以後、キリスト教信仰を終生持ち、クリスチャンとしての生涯を送った。この前橋時代には、上毛共愛女学校の教師として、当時の校長であった杉田潮^{うしお}（新島襄門下の同志社卒）らと共に、ピューリタニズムの精神による同校の教育にも貢献した。また、明治の末期には、親友でもある井上浦造（新島襄門下の同志社卒）の創設した共立普通学校の教師としても活躍した。いずれにしても、新島襄や新島門下の人々との交流を深め、ピューリタニズムやデモクラシーの精神を体得し、「教育者」として活躍した。

上京後の天来は、内村鑑三を知り大きな影響を受ける。この在京中に雑誌『警世』の編輯人として、本格的に「ジャーナリスト」として活躍し、松村介石⁽¹⁾、加藤直士^{なおし}⁽²⁾などを知り、交友関係の幅を広げた。また、この頃、いわゆる社会主義者であった赤羽一^{はじめ}（巖穴）や木下尚江なども交流を持ち、幸徳秋水や堺利彦らが創刊した『平民新聞』第3号には、天来筆「墨子の非戦主義」が載せられた。いずれにしても、社会主義思想への関心を深めた時期と思われる。

住谷天来は、明治期の日本に、トルストイの平和思想を積極的に紹介した。明治35年（1902）発行、トルストイ著・加藤直士訳『我懺悔』（警醒社刊）、明治36年

（1903）発行、トルストイ著・加藤直士訳『我宗教』（文明堂刊）に「序文」を載せた。また、明治36年発行、M. A. ウォード原著 住谷天来訳補『十九世紀之豫言者』（警醒社刊）に所収されている「トルストイ伯と其の福音」でも、トルストイの平和思想を取り上げていた。すなわち、天来の「非戦論」の主張の背景には、大きく二つの平和思想の影響があった。それは、「キリスト教思想（なかでもトルストイの思想）」と「墨子の非戦主義」の主張であった。

大正時代になると、伊勢崎教会（日本基督教会）や甘楽〔富岡〕教会（組合教会）などのキリスト教会牧師として活躍する。また、安中教会（組合教会）牧師の柏木義円（新島

襄門下の同志社卒)とも交友を深めていく。柏木も『上毛教界月報』を創刊し、「非戦論者」として著名であった。天来は、柏木義円らと共に、軽井沢などで尾崎行雄や安部磯雄らとも面会し、影響を受けていた。

その後も天来は、昭和2年(1927)、『聖化』を創刊し、キリスト教思想を根底にして、軍国主義の高まる天皇制国家権力のもとでも、「非戦・平和」を叫び続ける。『聖化』は、キリスト教思想に基づく群馬県という地方のジャーナルではあったが、内村鑑三門下の矢内原忠雄や金澤常雄、塚本虎二⁽³⁾などの人々にも読まれ、影響を与えていたようである。しかし、昭和14年(1939)、官憲の圧力により『聖化』は廃刊に追い込まれ筆を折った。こうして、天来のペンの力(「自由」、「平等」、「平和」の叫び)は奪われたが、キリスト教への信仰は失わず、「キリスト者」として、昭和19年

(1944)1月にその生涯を終えた。矢内原忠雄の『嘉信』、金澤常雄の『信望愛』、塚本虎二の『聖書知識』では、『聖化』の廃刊が惜しまれ、天来の死を悔やむ記事などが載せられた。その後も矢内原や金澤らは、平和思想を持ち続け活躍した。

筆者が住谷天来に関心を抱いたのは、共立普通学校創設者・井上浦造を調べたことがきっかけであった。天来と浦造は、前橋の幽谷義塾で共に学び、生涯の友となった。二人とも新島襄や内村鑑三といった上州出身の偉大な人物を知り影響を受け、思想形成がなされたものと思われる。

「第2部 住谷天来の思想—とくにその社会・平和思想—」の「第1章 住谷天来の社会思想」においては、天来のいくつかの論稿(『上毛之青年』・『警世』・『上毛教界月報』など)を読み、天来の社会思想(社会批判や教育観)を分析した。天来は、当時(天来が生きた明治・大正・昭和初期の時代)の社会を批判し、自己の信じる所信を主張していた。

「第2章 住谷天来の非戦・平和思想」では、住谷天来とほぼ同時代を生きたキリスト者であった木下尚江、深澤利重、柏木義円、内村鑑三の「非戦・平和思想」と、天来の「非戦論」との対比を試みた。また、『聖書之研究』・『聖化』などの論稿を読むと、住谷天来の「非戦論」には、上記4人の「非戦・平和思想」とも違う天来独自の視点が見られた。

ところで、昭和27年(1952)12月、内村鑑三門下の南原繁が、前橋の群馬会館で前橋女子高校の生徒を前にして講演している。この時南原は、『上州に入った時に思い出したのは内村鑑三と住谷天来のお二人である』と語ったという⁽⁴⁾。南原繁と天来との接点は不明であるが、南原が「内村鑑三」に次いで、「住谷天来」の名前を挙げたのも、天来の影響を受けていたものと思われる。

昭和33年(1958)5月には、矢内原忠雄が、安中の新島学園高校の開校記念日に講演している⁽⁵⁾。講演は、午前と午後の二回行われ、午前は、同校の中高生徒を前に、『神と人間』と題して講演した。その中で、矢内原は、『上州は日本キリスト史上、新島襄、内村鑑三、柏木義円、住谷天来、金澤常雄等の優れた人物を出している。この地に育つ諸君がどうかこれらの先輩に学び、神を信じることによって国に尽くす人間となるように祈る』と述べたという⁽⁶⁾。また、午後の講演は、『国を興す道』と題する公開の講演であった⁽⁷⁾。矢内原は、

「…即ち民主主義の原理に依って国を興すべきであるが、根本は教育の問題である。日本は教育に依って知識を普及し技術の振興、経済力の増進をはかると共に、知識を正しき方向に使う精神の教育をなすべきである。然して教育の根本は靈魂の問題であり宗教の問題である人対神の問題である。…住谷天来先生の詩を引いて上州に於ける信仰の先輩達が特に非戦平和を以て国を支えたことを誇り且つ学ぶべき」と訴えたという⁽⁸⁾。

いずれにしても、南原繁や矢内原忠雄といった戦後日本の民主主義教育の基礎を築いた教育者が、住谷天来の平和思想を深く理解してその影響を受けていたに違いない。その後、天来の「非戦・平和」の思想は、地元の群馬県内のキリスト者・須田清基⁽⁹⁾や角田儀平治⁽¹⁰⁾らにも受け継がれ、昭和56年(1981)には、前橋市の利根川西岸に「非戦愛国之先覚者 住谷天来」と刻まれた石碑が建てられた⁽¹¹⁾。

さて、最近の国際情勢は戦乱が各地で相次ぎ、日本国憲法の平和主義の原則も変容しようとしている。今回、住谷天来の生涯を明らかにし、かれの「非戦・平和思想」を考察したが、どれだけその実像に迫れたかは定かではない。しかし、このような時代であるからこそ、天来の「非戦・平和思想」を真摯に学び、その精神を継承していくべきではないか。

本稿は、特に住谷天来の「非戦・平和思想」に着目し、「非戦・平和の思想家」として住谷天来を位置づけようと試みた論稿である。したがって、住谷天来の思想については、あくまでも「社会・平和思想」に絞って考察したものがある。

ただ、住谷天来は、ダンテ・カーライル・トルストイから、孔子・墨子などといった東西の思想に通じており、その幅広い見識のために、かれの思想の全体像を掴むことは難しい。そこで、内村鑑三が、クリスチャンでもある天来のことを「漢学者」であったと指摘していたように、『孔子及孔子教』に見られる天来の東洋思想や、宗教観などを分析することが、今後の研究課題として考えられる。

注 「むすび」

- (1) 松村介石（1859－1939）播磨国明石（現兵庫県）出身。横浜のバラ学校、東京一致神学校に学ぶ。『福音新報』、『基督教新聞』の編集に従事。内村鑑三の後任として、新潟の北越学館の教頭となる。その後、神田の基督教青年会館の講師として活躍。明治33年には、雑誌『警世』を創刊。その他多くの著作もあり、内村鑑三、植村正久と共に「三村」と称された。（『日本キリスト教歴史大事典』、1329頁参照。）
- (2) 加藤直士（1873－1952）山形県鶴岡出身。新潟の北越学館に学ぶ。新潟教会にて受洗。トルストイの『我懺悔』（明治35年）、『我宗教』（明治36年）を訳出する。その後、神戸に住み「神学倶楽部」を開催。会員に賀川豊彦らが出た。（『日本キリスト教歴史大事典』、305頁参照。）
- (3) 塚本虎二（1885－1973）福岡県出身。東京帝国大学法科に学び、在学中に内村鑑三に師事。卒業後は、農商務省に入るが、役人を辞めて聖書研究に入る。無教会主義を主張し、『聖書知識』を創刊する。（『日本キリスト教歴史大事典』、880頁参照。）
- (4) 萩原進「住谷天来」『近世群馬の人々(1)』、みやま文庫、1963年、147頁。
なお、前橋女子高校六十年史編集委員会編『前橋女子高校六十年史 下巻』、朝日印刷、1980年、365頁によると、「昭和27年（1952）12月12日に南原繁講演会が群馬会館において開催され、3年生全員が聴講した」との記録が残されている。
- (5) 新藤二郎『待晨』、上毛新聞出版局、1993年、133頁。
新藤二郎は、当時（1958年）には、新島学園中学校・高等学校の教師をしていた。新藤の両親は、上州の出身であり、新藤は、幼少期に安中教会にて、柏木義円から洗礼を受けている。その後、矢内原忠雄に出会い、影響を受けている。東京帝国大学出身。なお、新藤は、のちに同校の第4代校長に就任している。（『待晨』、『新島学園五十年の歩み』、上毛新聞社、1997年、新藤二郎「歴代理事長・校長・学長・学園長略歴」の項目などを参照。）
- (6) 前掲書、新藤二郎「矢内原忠雄先生」、134頁。

- (7) 前掲書、新藤二郎「矢内原忠雄先生」、134頁。この日の午後の矢内原の講演は、定員600の礼拝堂に約800の聴衆を前に講演した。
- (8) 前掲書、新藤二郎「矢内原忠雄先生」、135頁。
- (9) 須田清基（1894－1981）群馬県安中市出身。柏木義円から受洗。台湾に渡り伝道する。戦争が大量殺人を犯すことを悟り、大正12年（1923）陸軍大臣田中義一宛に兵役離脱届を提出。良心的兵役忌避を実践した。第二次世界大戦後は、前橋にて伝道。郷土の風土・人物を詠み込んだ「上毛カルタ」では、「平和の使徒新島襄」、「心の燈台 内村鑑三」の詠み札を考案した。また、内村鑑三・住谷天来ら「非戦・平和」の思想家を顕彰する建碑運動を推進した。（『日本キリスト教歴史大事典』、725頁～726頁。『群馬新百科事典』、438頁。西方恭子『上毛かるたのこころ』、中央公論事業出版、2002年、136頁などを参照。）
- (10) 角田儀平治（1906－1997）群馬県渋川市出身。旧制渋川中学校、旧制第二高等学校、東京帝国大学に学ぶ。卒業後は弁護士となり共産党事件を担当。昭和8年（1933）には、治安維持法違反で逮捕される。その後、カトリック信者となる。群馬県内において社会福祉事業にも力を尽くす。須田清基と共に「非戦・平和」の思想家、住谷天来を顕彰する建碑運動を推進した。（『群馬新百科事典』、530頁参照。）
- (11) 住谷天来を顕彰した「非戦愛国之先覚者 住谷天来」の碑は、「住谷天来顕彰会」（須田清基・角田儀平治らを中心に結成）により、昭和56年（1981）前橋市石倉町群馬大橋西詰）に建設された。同碑には、「非戦愛国之先覚者 住谷天来 1869－1944 聖化1930年1月号所載 為萬世開太平」の銘文と、天来の「漢詩」が刻まれている。（角田儀平治編『聖化に学ぶ』、群馬書籍印刷、1991年、8頁。手島仁「住谷天来を語る・没後五十年」、群馬地域文化研究協議会編『群馬文化』第241号、1995年所収、19頁などを参照。）

非戦・平和の思想家 住谷天来の研究

資料編

— 目次 —

- ・ 住谷天来 年譜 1

- ・ 第1次資料（住谷天来関係）
 - （1）住谷天来の著書及び訳書 8
 - （2）住谷天来の「序文」及び「跋」 8
 - （3）その他、住谷天来の著作及び原稿 9
 - （4）『上毛之青年』 10
 - （5）『上毛孤児院月報』 11
 - （6）『上毛教界月報』 12
 - （7）『聖書之研究』 15
 - （8）『警世』 18
 - （9）住谷天来宛書簡（内村鑑三からの来簡一覧）… 21

- ・ 第2次資料（住谷天来関係） 24

- ・ 参考文献 26

- ・ 群馬県略地図 31

住谷天来 年譜

- 1869年 [明治2] 2月16日 群馬県群馬郡国府村大字東国府508番地（現群馬県高崎市）に農家の次男として誕生。幼名弥作。八朔と号す。
- 1876年 [明治9] (7才) 群馬郡国府小学校（現高崎市）に入学。
- 1883年 [明治16] (14才) 国府小学校卒業後、農業に従事する。
- 1885年 [明治18] (16才) 前橋（元前橋藩士鳥山方に下宿）に出て、幽谷義塾に学び、塾幹となる。
※（この頃、井上浦造と知り合う）
- 1886年 [明治19] (17才) 前橋英学校にて学ぶ。 ※（竹越与三郎に学ぶ）
- 1887年 [明治20] (18才) 幽谷義塾を退塾。「上毛青年会」結成に参画。
- 1888年 [明治21] (19才) 前橋英和女学校設立に参加。
3月4日 前橋教会 不破唯次郎（同志社卒）牧師より受洗。
- 1889年 [明治22] (20才) 1月5日 演説「青年会雑誌の作用」（上毛青年会春期大会）
3月10日 第27回上毛青年会において、委員10名の一人として選出される。演説「与論の勢力」（前橋住吉屋）
4月14日 第28回上毛青年会において演説「天賦の自由」（前橋住吉屋）
5月18日 「真正の英雄」『上毛青年会雑誌』第5号
6月9日 「上毛青年社常議員」となる。
7月7日 上毛青年会臨時演説会に植木枝盛が演説し、住谷八朔が前座で「真正ノ壮士」と題し演説をする。

- 1890年 [明治23] (21才) 2月27日上京して早稲田(英語政治科に学ぶが一月で退学)
7月16日 慶応義塾(別科)に入学
11月 「上毛青年社社員」として記載される。
- 1891年 [明治24] (22才) 1月24日「大陰世界」『上毛之青年』第25号
11月21日「此の義心、此の理心」『上毛之青年』第28号
12月 慶応義塾(別科)を卒業
- 1892年 [明治25] (23才) 1月16日「屈原の醒、玄石の瞳」『上毛之青年』第30号
2月20日「法律死せば大盗止まず」『上毛之青年』第31号
3月19日「代議政体の要領」『上毛之青年』第32号
※群馬県へ帰郷後、上毛青年社社員の傍ら、春頃より上毛共愛女学校で
(国・漢・英)を教える。
- 1894年 [明治27] (25才) 3月29日 第3回上毛共愛女学校卒業式にて漢詩「送卒業生」の吟詠
- 1895年 [明治28] (26才) 新島先生永眠五周年記念講演「新島先生を懐う」(前橋 臨江閣)
- 1896年 [明治29] (27才) 1月 上毛共愛女学校を退職。(校長杉田潮と共に辞職)
4月20日「仮装せる国民」『(復刊)上毛之青年』第2号
※春頃、「上毛青年社」を退社。
※上京して服部市右衛門と牛乳販売業(愛光社煉乳所)を創業
7月16日 基督教青年会第8回夏期学校(静岡県興津)に参加し、内村鑑三
に出会い親しく歓談する。日記に「言フベカラザル利益ヲ得且
ツ感化ヲ受ケタリ」と記す
7月26日 「上毛青年社 社員の現状」
『(復刊)上毛之青年』第5号(上毛共愛女学校退職後、上京との記事あり)
- 1897年 [明治30] (28才) 9月6日 内村鑑三と会い、時事・宗教など語る。
※服部ミツと結婚(東京・数寄屋橋教会) [井上浦造の斡旋による]

1899年 [明治32] (30才) 7月5日 神田で内村鑑三と会う。

※この頃、麻布中学校で(国・漢・英)を教える

1900年 [明治33] (31才) 長男 穆(あつし)の誕生

7月25日～8月3日 第1回角筈夏期講談会(女子独立学校)にて、内村

鑑三・大島正健らと並び写真撮影

9月30日「解嘲之章」『聖書之研究』第1号

10月3日 住谷天来訳『英雄崇拜論』(警醒社書店)刊行。

※この頃、雑誌『警世』の編輯人となる。

10月11日発行、内村鑑三著『興国史談』の編輯、校正を行う

10月25日「燈下の読書」『警世』第1号

1901年 [明治34] (32才) 7月20日「理想団」(内村鑑三、幸徳秋水、堺利彦ら発起人)の発会式
に参加する。

※雑誌『警世』第23号(10月10日発行)まで編輯人をつとめる。

1902年 [明治35] (33才) 1月25日 内村鑑三・松村介石・田村直臣・小崎弘道らと警醒社書店の
会合に参加。(宗教談、鉍毒問題、人物談などが論ぜられる)

7月5日発行 赤羽巖穴『嗚呼祖国』に序文を載せる。

10月3日発行 加藤直士訳(トルストイ著)『我懺悔』に序文を載せる

※雑誌『警世』第43号から主幹か? 長女 静江の誕生

1903年 [明治36] (34才) 1月25日 加藤直士訳(トルストイ著)『我宗教』に序文を載せる

4月4日 住谷天来訳補『十九世紀之預言者』(警醒社書店)刊行

11月「墨子の非戦主義」『聖書之研究』第46号

11月29日『平民新聞』第3号に「同情語録」が載る。

11月29日『平民新聞』第3号に「墨子の非戦主義」が転載される。

1904年 [明治37] (35才) 5月10日 「迫害論」『上毛孤児院月報』第64号(黙庵の名前で載せる)

- 1905年 [明治38] (36才) 大病のため、群馬県へ帰郷。国府村に住む。
- 1907年 [明治40] (38才) 8月16日 木下尚江より来簡
- 1909年 [明治42] (40才) 1月5日 住谷天来訳『詩聖ダンテの教訓』(警醒社書店)刊行
 1月10日 住谷天来訳『トルストイ伯の福音』(警醒社書店)刊行
 1月10日 住谷天来訳『トマス・カーライルと彼が労働の福音』
 (警醒社書店)刊行
 1月10日 住谷天来訳『社会改良者としてのジョンラスキン』
 (警醒社書店)刊行
 10月15日 「人世の挺」『野の花』第14号(共愛女学校同窓会)
- 1910年 [明治43] (41才) 4月 「共立普通学校」で(国・漢)教える
 11月15日 「天災と天福」『上毛教界月報』第145号
- 1911年 [明治44] (42才) 3月20日 「住谷天来」と正式に改名届け
 4月 伊勢崎教会牧師(日本基督教会)となる
 6月23日『孔子及孔子教』(警醒社書店)刊行
 9月 「共立普通学校」を退職する。
 10月7日 住谷の送別会が開かれる。
 11月6日 共愛女学校において、「人間の目的と其満足」と題して演説
- 1912年 [明治45] (43才) 3月22日 共愛女学校第21回卒業式後の同窓会において、「人生の三大
 事」と題して講話
 7月 「人間の目的と其満足」『野の花』第17号(共愛女学校同窓会)
 [大正 元] 11月18日 星野光多、山本秀煌から伊勢崎教会にて挨拶を受ける
- 1913年 [大正 2] (44才) 8月より 桐生教会[日本基督教会](毎週1回応援する)
 (～大正4年10月まで)

- 1915年 [大正 4] (46才) 6月1日 住谷天来述『人』(日本基督教興文協会)
- 1916年 [大正 5] (47才) 9月4日 前橋の利根川にて甥の住谷悦治に洗礼を受ける
- 1918年 [大正 7] (49才) 4月7日 甘楽(富岡)教会[組合教会]牧師となる
- 1921年 [大正10] (52才) 1月より 桐生教会[日本基督教会]の応援(～大正14年9月まで)
- 1922年 [大正11] (53才) 妻美津子の死
- 1923年 [大正12] (54才) 伊達朝江と再婚 ※この頃、『神の国』発刊か
- 1924年 [大正13] (55才) 1月25日「墨子の非戦論と兼愛主義」『上毛教界月報』第302号
- 1927年 [昭和 2] (58才) 1月10日 『聖化』を創刊、聖化社(富岡町)
- 1930年 [昭和 5] (61才) 2月12日 内村鑑三を見舞う(内村より「上州人」の詩を贈られる)
5月 5日 『聖化』第41号に「内村先生を偲ぶ」を掲載
- 1931年 [昭和 6] (62才) 2月8日「ラスキン生誕記念講演会」(東京・日比谷にて、中里介山らと
講演する。)
3月5日 多胡寅次郎『信仰の偉人 宮内文作翁傳』に序を載せる
- 1934年 [昭和 9] (65才) 11月末、甘楽教会牧師を辞任。高崎の堀田屋に転居。
- 1935年 [昭和10] (66才) 4月29日 『聖哲遺詠人生之歌』(一粒社)刊行
6月16日(復刊)『孔子及孔子教』(新生堂)刊行
11月9日 深澤信三編『紀念 深澤利重』に、「逝ける好友深澤君を偲ぶ」
を載せる

- 1937年 [昭和12] (68才) 長男 穆 38歳にて死去
5月25日 永島与八『鉋毒事件の真相と田中正造翁』に序文を載せる
- 1938年 [昭和13] (69才) 2月 5日『聖化』第134号に柏木義円の追悼文、天来が誄辞を贈る
7月10日『大夢の目醒 [住谷穆追想録]』(新報社)刊行
8月10日『仁風遺影 故徳江博士の追憶』(新報社)刊行
- 1939年 [昭和14] (70才) 6月5日『聖化』第149号にて廃刊
7月20日 矢内原忠雄『嘉信』第2巻7号に「聖化を悼む」が載る
- 1941年 [昭和16] (72才) 5月12日～14日 矢内原忠雄が高崎に、天来を訪問する
8月20日 長谷川周治編『内村鑑三先生御遺墨帖解説』に「跋」を載せる
10月31日『黙庵詩鈔』(平和舎)刊行
11月20日 『嘉信』第4巻11号に『黙庵詩抄』が紹介される
- 1943年 [昭和18] (74才) 11月3日 森川抱次『敢闘七十五年』に「跋」を載せる
- 1944年 [昭和19] (75才) 1月27日死去(高崎の堀田屋にて)
1月30日告別式 永島与八が説教。遺族代表挨拶 甥悦治が行う。
※(のちに、天来の遺言により、遺骨の一部が利根川へ散骨される)

参考文献

- ・萩原俊彦「住谷天来略歴」樽谷修編『季刊群馬評論 創刊号 特集住谷天来』、群馬評論社、1980年、129頁～132頁。
- ・藤岡一雄「住谷天来 略年表」群馬県地域文化研究協議会編『群馬文化』第241号、朝日印刷、1995年、40頁～42頁。
- ・住谷一彦、住谷馨、手島仁、森村方子編『住谷天来と住谷悦治—非戦論・平和論—』、みやま文庫（147）、1997年、「年表・住谷天来」、186頁～187頁。
- ・久保千一「住谷天来略年譜」久保千一『柏木義田研究序説 上毛のキリスト教精神史』、日本経済評論社、1998年、288頁～290頁。
- ・萩原俊彦「住谷天来の略歴」萩原俊彦『近代日本のキリスト者研究』、耕文社、2000年、455頁～467頁。

※「住谷天来 年譜」の作成について

住谷天来の「年譜」は、上記の参考文献をもとに、筆者が確認した事項などを新たに加えて作成したものである。

第1次資料（住谷天来関係）

（1）住谷天来の著書及び訳書

- ・トーマス、カーライル原著 住谷天来譯『英雄崇拜論』、警醒社書店、1900年。
- ・M. A. ウォード原著 住谷天来譯補『十九世紀之豫言者』、警醒社書店、1903年。
- ・米人 ^{チャーレス} 査列、^{モレン} 恵連、^{ヂンス} 神洲孟、^{モアー} 壺原著 住谷天来譯述『詩聖ダンテの教訓』、警醒社書店、1909年。
- ・M. A. ウォード原著 住谷天来譯補『トルストイ伯の福音』、警醒社書店、1909年。
- ・M. A. ウォード原著 住谷天来譯補『トーマス・カーライルと彼が労働の福音』、警醒社書店、1909年。
- ・M. A. ウォード原著 住谷天来譯補『社会改良者としてのジョンラスキン』、警醒社書店、1909年。
- ・住谷天来『孔子及孔子教』、警醒社書店、1911年。
- ・住谷天来述『人』、日本基督教興文協会、1915年。
- ・住谷天来譯『聖哲遺詠 人生之歌』、一粒社、1935年。
- ・住谷天来『孔子及孔子教（東京 新生堂版）』、新生堂、1935年。
- ・住谷天来『大夢の目醒 [住谷穆追想録]』、新報社（非売品）、1938年。
- ・住谷天来『仁風遺影 故徳江博士の追憶』、新報社（非売品）、1938年。
- ・住谷天来『黙庵詩鈔』、平和舎、1941年。

（2）住谷天来の「序文」及び「跋」

- ・住谷天来「序」、赤羽巖穴『嗚呼祖国』、鳴阜書院、1902年。
- ・住谷天来「序」、トルストイ伯著、加藤直士訳『我懺悔』、警醒社書店、1902年。
- ・住谷天来「序」、トルストイ伯著、加藤直士先生訳『我宗教』、文明堂、1903年。
- ・住谷天来「序」、多胡寅次郎『信仰の偉人 宮内文作翁傳』（出版元不明、非売品）、1931年。

- ・住谷天来「序」、永島與八『鉍毒事件の真相と田中正造翁』、独立堂、1938年。
- ・住谷天来「跋」、長谷川周治編『内村鑑三先生御遺墨帖解説』、平和舎、1941年。
- ・住谷天来「跋」、森川抱次『敢闘七十五年』、紫波館、1943年。

(3) その他、住谷天来の著作及び原稿

- ・住谷天来「新島先生を懐う」（新島先生永眠五周年記念講演 原稿）
同志社新島研究会編『新島研究 43』、同志社新島研究会、1974年所収。
- ・住谷天来「墨子の非戦主義」『週刊平民新聞』第3号（明治36年11月29日）
所収。『週刊平民新聞（一）自第1号至第16号』（史料近代日本史 社会主義史料）、
創元社、1953年所収。
- ・住谷天来氏（東京）「同情語録」『週刊平民新聞』第3号（明治36年11月29日）
所収。『週刊平民新聞（一）自第1号至第16号』（史料近代日本史 社会主義
史料）、創元社、1953年所収。
- ・住谷天来「人世の梃」『野の花』第14号、共愛女学校同窓会、1909年所収。
- ・住谷天来「人間の目的と其満足」『野の花』第17号、共愛女学校同窓会、
1912年所収。
- ・住谷天来「内村先生を偲ぶ」内村祐之編『内村鑑三追憶文集』、聖書研究社
（非売品）、1931年所収。
- ・住谷天来「逝ける好友深澤君を偲ぶ」深澤信三編『紀念 深澤利重』、英文社、
1935年所収。

(4) 『上毛之青年』（『上毛青年会雑誌』を改題）

① 『上毛青年会雑誌』

- ・住谷八朔「真正ノ英雄」『上毛青年会雑誌』第5号、1889（明治22）年5月20日発行。

② 『上毛之青年』

- ・住谷八朔「大陰世界」『上毛之青年』第25号、1891（明治24）年1月24日発行。
- ・刀水漁郎「此の義心、此の理心」『上毛之青年』第28号、1891（明治24）年11月21日発行。
- ・刀水漁郎「屈原の醒、玄石の睡」『上毛之青年』第30号、1892（明治25）年1月16日発行。
- ・住谷刀水「法律死せずんば大盗止まず」『上毛之青年』第31号、1892（明治25）年2月20日発行。
- ・刀水漁郎「代議政体の要領」『上毛之青年』第32号、1892（明治25）年3月19日発行。

③ 『（復刊）上毛之青年』

- ・住谷八朔「仮装せる国民」『（復刊）上毛之青年』第2号、1896（明治29）年4月20日発行。

※「（上毛青年社）社員の現状」（「住谷八朔氏」の記事）『（復刊）上毛之青年』第5号、1896（明治29）年7月26日発行。

(典拠)

- ・『復刻版 上毛之青年』（第1巻 明治22年1月～23年6月『上毛青年会雑誌』改題）不二出版、1993年。
- ・『復刻版 上毛之青年』（第2巻 明治23年7月～25年3月、明治29年4月～29年10月）不二出版、1993年。

(5) 『上毛孤児院月報』

- ・黙庵「迫害論」 『上毛孤児院月報』第64号、1903（明治37）年5月10日発行。
- ・住谷逸人「人生の真意義」 『上毛孤児院月報』第84号、1905（明治39）年1月1日発行。
- ・住谷逸人「春の福音」 『上毛孤児院月報』第88号、1905（明治39）年5月10日発行。
- ・住谷逸人「埋れたる神殿」 『上毛孤児院月報』第89号、1905（明治39）年6月10日発行。
- ・住谷逸人「慾」 『上毛孤児院月報』第90号、1905（明治39）年7月10日発行。
- ・住谷逸人「富と徳（上）」 『上毛孤児院月報』第91号、1905（明治39）年8月10日発行。
- ・住谷逸人「清き生涯」 『上毛孤児院月報』第104号、1906（明治40）年9月20日発行。
- ・住谷逸人「義人の理想」 『上毛孤児院月報』第108号、1907（明治41）年1月15日発行。
- ・住谷逸人「自任自重」 『上毛孤児院月報』第125号、1908（明治42）年9月20日発行。

※「住谷天来の書簡紹介」（永島与八宛） 『上毛孤児院月報』第60号、1903（明治37）年1月10日

(典拠)

宇都榮子・細谷啓介編『上毛孤児院関係資料集成』（第1巻～第5巻）六花出版、2011年～2012年。

(6) 『上毛教界月報』

- ・住谷天来「天災と天福」 『上毛教界月報』 第145号、1910（明治43）年11月15日発行。
- ・住谷天来「故宮内文作翁」 『上毛教界月報』 第204号、1915（大正4）年11月15日発行。
- ・住谷天来「漢詩三篇」 『上毛教界月報』 第217号、1917（大正6）年1月15日発行。
- ・住谷天来「軽井沢の六日－教師会における感想－」 『上毛教界月報』 第237号、1918（大正7）年8月20日発行。
- ・住谷天来「我楽苦多主義」 『上毛教界月報』 第238号、1918（大正7）年9月15日発行。
- ・住谷天来「不思議の力」 『上毛教界月報』 第241号、1918（大正7）年12月21日発行。
- ・住谷天来「人の子」 『上毛教界月報』 第243号、1919（大正8）年2月15日発行。
- ・住谷生「聖書と聖日」 『上毛教界月報』 第244号、1919（大正8）年3月15日発行。
- ・住谷仙士「弥次喜多伝道記」 『上毛教界月報』 第246号、1919（大正8）年5月15日発行。
- ・住谷天来「人格の力」 『上毛教界月報』 第247号、1919（大正8）年6月15日発行。
- ・転雷生「恵まれた六日間の修養会」 『上毛教界月報』 第249号、1919（大正8）年8月15日発行。
- ・住谷天来「靈魂の偉大と人間の不死」 『上毛教界月報』 第250号、1919（大正8）年9月15日発行。
- ・天来生「本年大阪に開かれたる組合教会総会に於ける僕の感想」 『上毛教界月報』 第253号、1919（大正8）年12月15日発行。
- ・住谷天来「命がけの仕事」 『上毛教界月報』 第254号、1920（大正9）年1月15日発行。

- ・住谷のヤソ人「軽井沢に於ける上毛教師会」『上毛教界月報』第263号、1920（大正9）年10月15日発行。
- ・住谷天来「信仰の衰兆と我等の覚悟」『上毛教界月報』第268号、1921（大正10）年3月20日発行。
- ・住谷天来「神の慈厳」『上毛教界月報』第271号、1921（大正10）年6月15日発行。
- ・すみのや仙人「六日間の饗宴」『上毛教界月報』第273号、1921（大正10）年8月15日発行。
- ・住谷天来「救ひの宗教—靈肉一如」『上毛教界月報』第274号、1921（大正10）年9月15日発行。
- ・天来生「佐野伝道記」『上毛教界月報』第277号、1921（大正10）年12月15日発行。
- ・住谷天来「新年の祝詞」『上毛教界月報』第278号、1922（大正11）年1月15日発行。
- ・住谷天来「新年の喜び」『上毛教界月報』第279号、1922（大正11）年2月15日発行。
- ・住谷天来「墨子の非戦論と兼愛主義」『上毛教界月報』第303号、1924（大正13）年2月28日発行。
- ・天来道人「三十年の努力の跡—御荷山伝道小記」『上毛教界月報』第307号、1924（大正13）年6月20日発行。
- ・天来生「宮前伸次郎略歴」『上毛教界月報』第343号、1927（昭和2）年6月20日発行。
- ・住谷天来「迷信と偶像打破（上）」〔※聖化より転載〕『上毛教界月報』第367号、1929（昭和4）年6月20日発行。
- ・住谷天来「迷信と偶像打破（下）」〔※聖化より転載〕『上毛教界月報』第368号、1929（昭和4）年7月20日発行。
- ・住谷天来「前号反響」『上毛教界月報』第374号、1930（昭和5）年1月20日発行。
- ・住谷天来「前号反響」『上毛教界月報』第391号、1931（昭和6）年6月20日発行。

- ・住谷天来「感想」『上毛教界月報』第395号、1932（昭和7）年5月20日発行。
- ・住谷天来「我が敬慕の的たりし湯浅治郎君は終に逝けり」『上毛教界月報』第405号、1935（昭和10）年3月20日発行。
- ・住谷天来「歌及び詩」『上毛教界月報』第451号、1936（昭和11）年5月20日発行。

（典拠）

柏木義田編『復刻版 上毛教界月報』（第1巻～第12巻）不二出版、1984年～1985年。

(7) 『聖書之研究』

- ・住谷逸人「解潮文章」『聖書之研究』第1号、1900（明治33）年9月
- ・住谷天来「病中吟」『聖書之研究』第9号、1901（明治34）年5月
- ・住谷天来「冷清々語」『聖書之研究』第11号、1901（明治34）年7月
- ・住谷天来「觀天喜地」『聖書之研究』第16号、1901（明治34）年12月
- ・住谷天来「自誨の歌」『聖書之研究』第23号、1902（明治35）年7月
- ・住谷天来「墨子の非戦主義」『聖書之研究』第46号、1903（明治36）年11月
- ・住谷天来「信仰歌」『聖書之研究』第49号、1904（明治37）年2月
- ・住谷天来「孔子及孔子教（一）」『聖書之研究』第50号、1904（明治37）年3月
- ・住谷天来「孔子及孔子教（二）」『聖書之研究』第51号、1904（明治37）年4月
- ・住谷天来「孔子及孔子教（三）」『聖書之研究』第52号、1904（明治37）年5月
- ・住谷天来「孔子及孔子教（四）」『聖書之研究』第53号、1904（明治37）年6月
- ・住谷天来「孔子及孔子教（五）」『聖書之研究』第54号、1904（明治37）年7月
- ・住谷天来「孔子及孔子教（六）」『聖書之研究』第55号、1904（明治37）年8月
- ・住谷天来「余の眇たる新希望」『聖書之研究』第64号、1905（明治38）年6月
- ・住谷天来「人生の苦惱」『聖書之研究』第67号、1905（明治38）年9月
- ・住の谷の柚人「我と我魂」『聖書之研究』第69号、1905（明治38）年11月
- ・住谷天来「詩人ブラウニングの人生觀」『聖書之研究』第70号、1905（明治38）年12月

- ・住谷天来「農聖枢哲夫の性行」『聖書之研究』第78号、1906（明治39）年8月
- ・住谷天来「囚われたる人生—余の小なる罪惡」『聖書之研究』第89号、1907（明治40）年7月
- ・住谷天来「欲の上新」『聖書之研究』第92号、1907（明治40）年10月
- ・住谷天来「窮思録」『聖書之研究』第94号、1908（明治41）年1月
- ・住谷天来「偉思録」『聖書之研究』第95号、1908（明治41）年1月
- ・住谷天来「黙教の秘義」『聖書之研究』第96号、1908（明治41）年2月
- ・住谷天来「信仰と詩趣」『聖書之研究』第97号、1908（明治41）年3月
- ・住谷天来「ダンテの教訓」『聖書之研究』第98号、1908（明治41）年4月
- ・住谷天来「信仰の勝利」『聖書之研究』第99号、1908（明治41）年5月
- ・住谷天来「予と研究誌」『聖書之研究』第100号、1908（明治41）年6月
- ・住谷天来「カーライルの宗教」『聖書之研究』第101号、1908（明治41）年8月
- ・住谷天来「罪の概念に関するダンテの解説」『聖書之研究』第102号、1908（明治41）年9月
- ・住谷天来「然灯録」『聖書之研究』第103号、1908（明治41）年10月
- ・天来生「筆の快樂」『聖書之研究』第104号、1909（明治42）年11月
- ・住谷天来「近刊ダンテの教訓に序す」『聖書之研究』第106号、1909（明治42）年2月
- ・住谷天来「詩人ブラウニングの福音」『聖書之研究』第107号、1909（明治42）年3月
- ・住谷天来「耽溺せる国民と其政治」『聖書之研究』第112号、1909（明治42）年9月
- ・住谷天来「クリスマスの喜び」『聖書之研究』第115号、1909（明治42）年12月
- ・住谷天来「サヴォナロラ略伝」『聖書之研究』第119号、1910（明治43）年5月

- ・住谷天来「サヴォナロラの時代と人物」『聖書之研究』第120号、1910
（明治43）年6月
- ・住谷天来「サヴォナロラと日本の現代」『聖書之研究』第122号、1910
（明治43）年8月
- ・天来生「第二百号を迎う」『聖書之研究』第200号、1917（大正6）年3月
- ・住谷天来「我主我神」『聖書之研究』第224号、1919（大正8）年3月
- ・住谷天来「大知と大愛」『聖書之研究』第228号、1919（大正8）年7月
- ・住谷天来「荘子の話（一）」『聖書之研究』第352号、1929（昭和4）年
11月
- ・住谷天来「荘子の話（二）」『聖書之研究』第353号、1929（昭和4）年
12月
- ・住谷天来「荘子の話（三）」『聖書之研究』第354号、1930（昭和5）年1月
- ・住谷天来「献内村鑑三先生」『聖書之研究』第357号、1930（昭和5）年
4月

（典拠）内村鑑三主筆『聖書之研究』（第1巻～第33巻）、聖書之研究復刻版刊行会、
1972年。

(8) 『警世』

- ・刀水漁郎（住谷天来）「燈下の読書」『警世』第1号、1900（明治33）年10月25日発行。
- ・刀水漁郎（住谷天来）「新著紹介」『警世』第1号、1900（明治33）年10月25日発行。
 - [T, S, （住谷天来）『倫理宗教時論』、岸本能武太著、警醒社書店発行]
 - [T, S, （住谷天来）『中江藤樹』、得能文・新海正行 合著、裳華房発行]
 - [T, S, （住谷天来）『カブール』、羽田浪之紹纂訳、開拓社発行]
- ・刀水漁郎（住谷天来）「太平の祥」『警世』第4号、1900（明治33）年12月10日発行。
- ・住谷天来「志士の同盟」『警世』第4号、1900（明治33）年12月10日発行。
- ・刀水漁郎（住谷天来）「評壇」（『Bushido, the Soul of Japan.』新渡戸稻造著、裳華房発行）、『警世』第4号、1900（明治33）年12月10日発行。
- ・刀水漁郎（住谷天来）「冬夜雑感」（「暗黒と光明」、「天下の事」、「国家の事」、「徳と勇」）、『警世』第7号、1901（明治34）年1月25日発行。
- ・住谷天来「道」『警世』第13号、1901（明治34）年4月25日発行。
- ・刀水漁郎（住谷天来）「客窓漫録（下）」（「周の皇子と近眼者流」）、『警世』第23号、1901（明治34）年10月10日発行。
- ・刀水漁郎（住谷天来）「自祭之文」『警世』第24号、1901（明治34）年10月25日発行。
- ・住谷天来「露團々」（晩秋と人生）『警世』第26号、1901（明治34）年11月25日発行。
- ・住谷天来「寸心録（上）」『警世』第27号、1901（明治34）年12月10日発行。
- ・住谷天来「寸心録（中）」『警世』第28号、1901（明治34）年12月25日発行。

- ・住谷天来「新天の暁鐘」『警世』第29号、1902（明治35）年1月10日発行。
- ・住谷天来「寸心録（下）」（「世界最高の倫理観」、「兆民先生と木村鷹太郎氏」、「我が宗教」、「我が信仰」）『警世』第30号、1902（明治35）年1月25日発行。
- ・住谷天来「文学小観（上）」（「文学の樂園」、「文士の天国」、「一変して苦境となり再転して地獄たらん」）『警世』第32号、1902（明治35）年2月25日発行。
- ・住谷天来「上田氏の『詩聖ダンテ』を読む」『警世』第33号、1902（明治35）年3月10日発行。
- ・住谷生「漫興」『警世』第37号、1902（明治35）年5月10日発行。
- ・住谷天来「自然と人生」（「晩景」、「初恋」）『警世』第40号、1902（明治35）年8月15日発行。
- ・住谷天来「『警世』の一転期」『警世』第42号、1902（明治35）年10月10日発行。
- ・住谷逸人（住谷天来）「パイロンを評す」『警世』第42号、1902（明治35）年10月10日発行。
- ・天来生『我懺悔に題す』（※加藤直士君の訳書、トルストイ伯の『我懺悔』）『警世』第42号、1902（明治35）年10月10日発行。
- ・記者（住谷天来）「一点の素心」『警世』第44号、1902（明治35）年11月10日発行。
- ・T. S.（住谷天来）「人生の戦」『警世』第44号、1902（明治35）年11月10日発行。
- ・天来生「シェーレーの名吟」『警世』第44号、1902（明治35）年11月10日発行。
- ・刀水漁郎（住谷天来）「送巖穴序」『警世』第44号、1902（明治35）年11月10日発行。
- ・刀水漁郎（住谷天来）挿批「新刊紹介」「万国興亡史」松村介石著、『警世』第44号、1902（明治35）年11月10日発行。

- ・記者（住谷天来）「睡世醒語」『警世』第45号、1902（明治35）年11月25日発行。
- ・天来稿「無道界」『警世』第46号、1902（明治35）年12月10日発行。
- ・刀水漁郎（住谷天来）評「新刊紹介」「海舟先生氷川清話（合本）」吉本襄撰、『警世』第46号、1902（明治35）年12月10日発行。
- ・天来稿「来るべき新天地」『警世』第48号、1903（明治36）年1月10日発行。
- ・天来生「ダンテ之傳と其肖像」、「『神劇』の一節」『警世』第48号、1903（明治36）年1月10日発行。
- ・記者（住谷天来）「吹断録」『警世』第49号、1903（明治36）年1月25日発行。
- ・天来「ルーテル之肖像」『警世』第49号、1903（明治36）年1月25日発行。
- ・天来「『我宗教』に序す」『警世』第49号、1903（明治36）年1月25日発行。
- ・記者（住谷天来）「王春書懐」、「美なる哉此雪」『警世』第50号、1903（明治36）年2月10日発行。
- ・記者（住谷天来）「十九世紀の豫言者」『警世』第51号、1903（明治36）年2月25日発行。

（典拠）『警世』については、原本を検索しづらく、筆者は古書店にて購入した号で確認した。

※『警世』第1号は、1900（明治33）年10月25日に発行され、
『警世』第82号、1904（明治37）年7月発行で、終刊にされたという。

（参考文献 加藤正夫『宗教改革者・松村介石の思想』、近代文芸社、
1996年参照）

(9) 住谷天来宛書簡 (内村鑑三からの来簡一覧)

[書簡日付 年月日]	[住谷天来宛 住所]
明治33 (1900) 年 7月17日	神田区仲猿楽町14 [封書]
8月24日	神田区仲猿楽町10 [はがき]
9月13日	神田区仲猿楽町10 [はがき]
9月 □ 日	神田区仲猿楽町10 [はがき]
10月31日	神田区仲猿楽町14 [封書]
12月26日	神田区仲猿楽町14 [はがき]
明治35 (1902) 年 7月 3日	神田区仲猿楽町14 [はがき]
明治36 (1903) 年 2月19日	神田区仲猿楽町14 [封書]
2月24日	神田区仲猿楽町14 [はがき]
11月 1日	神田区仲猿楽町14 [はがき]
11月 9日	神田区仲猿楽町14 [封書]
明治37 (1904) 年 3月 4日	神田区仲猿楽町14 [はがき]
6月29日	四谷区内藤町1 [はがき]
11月 1日	神田区仲猿楽町14 [はがき]
明治38 (1905) 年 5月 8日	群馬県群馬郡国府村小学校前 [封書]
5月16日	群馬県群馬郡国府村小学校前 [封書]
8月22日	上州群馬郡国府村 [はがき]
10月17日	群馬県群馬郡国府村小学校前 [封書]
10月30日	群馬県群馬郡国府村 [はがき]
11月22日	群馬県群馬郡国府村 [封書]
11月30日	群馬県群馬郡国府村 [はがき]
12月 4日	群馬県群馬郡国府村 [封書]
12月 6日	群馬県群馬郡国府村 [封書]
12月12日	群馬県群馬郡国府村 [封書]
明治39 (1906) 年 7月 7日	群馬県群馬郡国府村 [封書]
7月13日	群馬県群馬郡国府村 [はがき]

[書簡日付 年月日]		[天来宛 住所]	
明治39 (1906) 年	7月17日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
	7月31日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
	12月23日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
明治40 (1907) 年	1月29日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
	8月28日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
明治41 (1908) 年	1月17日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
	1月27日	群馬県群馬郡国府村	[封書のみ]
	1月27日	群馬県群馬郡国府村	[はがき]
	3月30日	群馬県群馬郡国府村	[はがき]
	4月24日	群馬県群馬郡国府村	[はがき]
	7月11日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
	7月15日	群馬県群馬郡国府村	[はがき]
	7月29日	群馬県群馬郡国府村	[はがき]
	12月26日	芝公園金地院内 服部方	[はがき]
	明治42 (1909) 年	3月16日	群馬県群馬郡国府村
5月 3日		群馬県群馬郡国府村	[封書]
8月17日		群馬県群馬郡国府村	[封書]
11月15日		群馬県群馬郡国府村	[封書]
明治43 (1910) 年	4月11日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
明治44 (1911) 年	1月 1日	群馬県群馬郡国府村高等小学校前	[封書]
	5月 2日	群馬県伊勢崎	[封書]
	5月 3日	群馬県群馬郡国府村	[封書]
大正 7 (1918) 年	8月26日	群馬県富岡町	[絵葉書]
大正 8 (1919) 年	6月26日	群馬県富岡町	[葉書]
大正11 (1922) 年	12月20日	群馬県富岡町	[封書]
大正13 (1924) 年	7月29日	群馬県富岡町	[封書]
昭和 3 (1928) 年	1月10日	上州富岡町	[はがき]
	12月20日	群馬県富岡町	[封書]

[書簡日付 年月日]

[天来宛 住所]

昭和 4 (1929) 年	6月18日	群馬県富岡町	[封書]
	8月21日	群馬県富岡町	[封書]
	9月 9日	群馬県富岡町	[封書]
	10月18日	群馬県富岡町	[封書]
	11月28日	群馬県富岡町	[封書]
(年度不明)	12月26日	神田区仲猿楽町	[封書]
	2月26日	(封筒欠)	
	4月29日	(封書 切手なし、消印なし)	

(典拠)

『内村鑑三全集36 書簡1』岩波書店、1983年
『内村鑑三全集37 書簡2』岩波書店、1983年
『内村鑑三全集38 書簡3』岩波書店、1983年
『内村鑑三全集39 書簡4』岩波書店、1983年

第2次資料（住谷天来関係）

- ・萩原進「自由のために戦った人々」昭和26年9月22日付『上毛新聞』。
- ・萩原進「住谷天来（上）」昭和38年1月12日付『上毛新聞』。
- ・萩原進「住谷天来（中）」昭和38年1月19日付『上毛新聞』。
- ・萩原進「住谷天来（下）」昭和38年1月26日付『上毛新聞』。
- ・萩原進「住谷天来」『近世群馬の人々（1）』、みやま文庫、1963年。
- ・萩原進「今一人の内村鑑三 住谷天来」『上毛人物めぐり』、朝日印刷、1963年。
- ・住谷悦治「内村鑑三と住谷天来」『あるところの歴史』同志社大学、1968年。
- ・住谷悦治「真のキリスト教徒 住谷天来」『郷土史にかがやく人々 第2集』、前橋印刷、1969年。
- ・住谷悦治「住谷天来略伝」『鶏肋の籠』、中央大学出版、1970年。
- ・西村白秀編『住谷天来詩集』、詩吟評論社、1972年。
- ・須田清基「非戦論の先駆住谷天来」『隠れた教育者、春山松太郎の生涯』、群馬寛容会、1975年。
- ・角田儀平治「住谷天来」『群馬の先駆者』、前橋朝禱会、1977年。
- ・住谷天来顕彰会編『住谷天来顕彰会ニュース 第1号』、住谷天来顕彰会、1978年。
- ・住谷天来顕彰会編『住谷天来顕彰会ニュース 第2号』、住谷天来顕彰会、1979年。
- ・住谷悦治「住谷天来とわたくし」『季刊 群馬評論 冬1980年 特集住谷天来』、群馬評論社、1980年。
- ・清水要次「社会浄化と平和主義 住谷天来」『郷土のしおり 上州とキリスト教』、郷土誌刊行会、1980年。
- ・住谷一彦「内村鑑三と住谷天来」『内村鑑三全集 月報19』、岩波書店、1982年。
- ・武邦保「住谷天来の人と思想 ー非戦と自由の先がけー」『群馬評論』第11号、群馬評論社、1982年。
- ・門奈直樹「戦時下のキリスト教ジャーナリズム ー住谷天来と非戦の言論ー」『民衆ジャーナリズムの歴史』、三一書房、1983年。

- ・久保千一「住谷天来」『近代群馬の思想群像Ⅱ』、日本経済評論社、1989年。
- ・武邦保「住谷天来のジャーナリズム」『本郷だより 第19号』、不二出版、1990年。
- ・門奈直樹「『聖化』と非戦のジャーナリズム」『『聖化』解説・総目次・索引』、不二出版、1990年。
- ・群馬県図書館協会編『住谷文庫目録』、フジサワ印刷、1990年。
- ・手島仁他「特集 住谷天来を語る・没後五十年」『群馬文化 第241号』、群馬地域文化研究協議会、1995年。
- ・住谷一彦「住谷天来への視線 ―非戦平和の牧師像」『群馬文化』第249号、朝日印刷、1997年。
- ・住谷一彦他編『住谷天来と住谷悦治 ―非戦論・平和論―』みやま文庫、1997年。
- ・久保千一「住谷天来 非戦の思想家」『柏木義円研究序説 上毛のキリスト教精神史』、日本経済評論社、1998年。
- ・萩原俊彦「壮年期住谷天来の活動」『近代日本のキリスト者研究』、耕文社、2000年。
- ・田中秀臣「叔父住谷天来の死」『沈黙と抵抗 ある知識人の生涯 評伝住谷悦治』、藤原書店、2001年。
- ・手島仁「内村鑑三と住谷天来をめぐる人々」『上州人とは、群馬学の確立に向けて 群馬の肖像Ⅱ』、群馬県立歴史博物館、2005年。
- ・手島仁「住谷悦治遺稿とテーマ展示『群馬の肖像Ⅱ』」『群馬県歴史博物館紀要』第26号、2005年。
- ・笠原芳光「『医蘇』としてのイエス―住谷天来『黙庵詩鈔』」『日本人のイエス観』、教文館、2007年。
- ・斎田朋雄「非戦と平和の使徒 住谷天来と『聖化』」『西毛文学』192号～209号、2003年～2008年。
- ・拙稿「非戦・平和思想の源流を『上州人』に探る―新島襄・内村鑑三・住谷天来」『群馬県立女子大学第2期群馬学センターリサーチフェロー研究報告集』、群馬県立女子大学群馬学センター、2014年。

参考文献

- ・青柳新米『懐古九十年 第七十二（64号）昭和30年6月29日』（東京都、斎藤忠一家文書所収）群馬県立文書館所蔵。
- ・赤羽巖穴『嗚呼祖国』、鳴臯書院、1902年。
- ・浅野裕一『墨子』、講談社学術文庫、1998年。
- ・新井明『人と思想 ミルトン』、清水書院、1997年。
- ・有島武郎研究会編『有島武郎事典』、勉誠出版、2010年。
- ・石黒悦雄編著『教会百年史 日本基督教団桐生教会』、清文社、1979年。
- ・伊勢崎市編『伊勢崎市史 資料編4近現代1』、ぎょうせい、1987年。
- ・伊勢崎市編『伊勢崎市史 通史編3近現代』、ぎょうせい、1991年。
- ・稲田雅洋「日露非戦論－内村鑑三と深沢利重を中心にして－」『愛知教育大学研究報告第35集』、1986年。
- ・稲田雅洋『悲壮は即ち君の生涯なりき 深沢利重と木下尚江』、現代企画室、1987年。
- ・井上浦造『華甲記念後凋先生詩文集』、後凋詩文集刊行会、1928年。
- ・岩波書店編集部編『近代日本総合年表』、岩波書店、1978年。
- ・植木枝盛『植木枝盛集 第8巻 日記2』、岩波書店、1990年。
- ・内村鑑三『興国史談』、警醒社書店、1900年。（国立国会図書館蔵、近代デジタルライブラリーより）
- ・『内村鑑三選集2 非戦論』、岩波書店、1990年。
- ・『内村鑑三選集4 世界のなかの日本』、岩波書店、1990年。
- ・太田雅夫「第一次世界大戦をめぐる非戦論」『キリスト教社会問題研究第14－15号』、同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会、1969年。
- ・小澤周三他編『教育思想史』、有斐閣、1995年。
- ・『大間々高校百年史』、上毛新聞出版局、2000年。
- ・掛川智子「群馬娼婦運動とその意義」『上毛民衆史』第2号、上毛民衆史刊行会、1982年。
- ・加藤直士「例言」、トルストイ伯著・加藤直士訳『我懺悔』、警醒社書店、1902年（国立国会図書館蔵 近代デジタルライブラリー）。

- ・加藤正夫『宗教改革者・松村介石の思想 東西思想の融合を図る』、近代文藝社、1996年。
- ・金澤常雄編『信望愛』第190号、信望愛社、1944年。
- ・『カーライル選集Ⅱ（Thomas Carlyle著 入江勇起訳）「英雄と英雄崇拜」』、日本教文社、1962年。
- ・共愛学園百年史編纂委員会『共愛学園百年史上巻』、朝日印刷、1998年。
- ・群馬県議会図書室編『群馬県議会議員名鑑』、朝日印刷、1966年。
- ・群馬県史編さん委員会『群馬県史 通史編7近代現代1』、朝日印刷、1991年。
- ・『群馬県人名大事典』、上毛新聞社、1982年。
- ・『群馬県新百科事典』、上毛新聞社、2008年。
- ・群馬県教育史編さん委員会編『群馬県教育史 別巻人物編』、朝日印刷、1981年。
- ・国府村誌編集委員会編『国府村誌』、朝日印刷、1968年。
- ・左近毅「賀川豊彦における平和思想の形成過程—トルストイの影響をめぐって」、『大阪市立大学文学部紀要』第48巻（第2分冊）、1996年。
- ・『週刊平民新聞（一）自第1号至第16号』（史料近代日本史社会主義史料）、創元社、1953年。
- ・『上毛教界月報（復刻版）』、不二出版、1984年。
- ・『上毛之青年 解説・総目次・索引』、不二出版、1993年。
- ・『上毛民衆史』第2号、上毛民衆史刊行会、1982年。
- ・新藤二郎『待晨』、上毛新聞出版局、1993年。
- ・鈴木範久『内村鑑三の人と思想』、岩波書店、2012年。
- ・鈴木範久『内村鑑三日録 1861～1888 青年の旅』、教文館、1998年。
- ・鈴木範久『内村鑑三日録 1892～1896 後世へ残すもの』、教文館、1993年。
- ・鈴木範久『内村鑑三日録 1897～1900 ジャーナリスト時代』、教文館、1994年。

- ・鈴木範久『内村鑑三日録 1900～1902 天職に生きる』、教文館、1994年。
- ・住谷弥作編『警世』第1号、警世雑誌社、1900年。
- ・『聖化（解説・総目次・索引）』、不二出版、1990年。
- ・『聖書之研究 総目録』、聖書之研究復刻版刊行会、1973年。
- ・『聖書之研究 復刻版 第1巻～第33巻』、聖書之研究復刻版刊行会、（1969年～1973年）。
- ・大逆事件記録刊行会編『大逆事件記録 証拠物写し（上巻）』第2巻、世界文庫、1964年。
- ・武田清子『人間観の相剋』、弘文堂、1959年。
- ・田中浩編『近代日本におけるジャーナリズムの政治的機能』、御茶の水書房、1982年。
- ・田中浩『近代日本と自由主義』、岩波書店、1993年。
- ・田中浩『田中浩集 ヨーロッパ・近代日本 知の巨人たち』第7巻、未来社、2013年。
- ・田部重治選訳『ワーズワース詩集』、岩波文庫、1996年。
- ・田畑忍編『非戦・平和の論理』、法律文化社、1992年。
- ・塚本虎二編『聖書知識』、聖書知識社、1939年。
- ・角田儀平治編『聖化に学ぶ』、群馬書籍印刷、1991年。
- ・都築政昭『真実 トルストイはなぜ家出したか』、近代文藝社、2010年。
- ・土井林吉（晩翠）訳『英雄論』、春陽堂、1898年。（国立国会図書館蔵、近代デジタルライブラリーより）
- ・同志社人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究I』、みすず書房、1979年。
- ・同志社校友会編『新島先生記念集』、文化時報社、1967年。
- ・トルストイ伯著・加藤直士訳『我懺悔』、警醒社書店、1902年（国立国会図書館蔵 近代デジタルライブラリーより）。
- ・トルストイ伯著・加藤直士先生訳『我宗教』、文明堂、1903年。（国立国会図書館蔵 近代デジタルライブラリー）。
- ・「新島学園五十年の歩み」編集委員会編『新島学園五十年の歩み』、上毛新聞社、1997年。

- ・新島襄編集委員会『新島襄全集 8 年譜編』、同朋舎、1992年。
- ・西方恭子『上毛かるたのころ』、中央公論事業出版、2002年。
- ・西田毅「シンポジウム『近代日本におけるキリスト教の受容と平和思想』テーマの趣旨並びに接近視角について」、『ピューリタニズム研究』第6号、日本ピューリタニズム学会、2012年。
- ・西田毅「天皇制国家とキリスト教—『三教会同』問題を中心に—」、『ピューリタニズム研究』第7号、日本ピューリタニズム学会、2013年。
- ・日本キリスト教歴史大事典編集委員会編『日本キリスト教歴史大事典』、教文館、1988年。
- ・日本キリスト教団伊勢崎教会編『伊勢崎教会年表』、(出版社不明)1969年。
- ・日本キリスト教団甘楽教会編『甘楽教会百年史』、シャローム印刷、1984年。
- ・日本基督教団前橋教会『前橋教会史110年の歩み』、朝日印刷、1996年。
- ・日本史広辞典編集委員会編『日本史広辞典』、山川出版社、1997年。
- ・萩原進『群馬県史 明治時代』、高城書店、1959年。
- ・平田久『カーライル 十二文豪』第1巻、民友社、1893年。(国立国会図書館蔵、近代デジタルライブラリーより)
- ・藤沢音吉編『警世』第28号、警世雑誌社、1901年。
- ・藤沢音吉編『警世』第30号、警世雑誌社、1902年。
- ・藤沢音吉編『警世』第37号、警世雑誌社、1902年。
- ・藤沢音吉編『警世』第42号、警世雑誌社、1902年。
- ・前橋市教育史編さん委員会『前橋市教育史(上巻)』、朝日印刷、1986年。
- ・前橋女子高校六十年史編集委員会編『前橋女子高校六十年史 下巻』、朝日印刷、1980年。
- ・政池仁『内村鑑三伝』、教文館、1977年。
- ・益本重雄・藤沢音吉『内村鑑三伝』、独立堂書房、1935年。
- ・無教会史研究会編『無教会キリスト教信仰を生きた人びと—内村鑑三の系譜』、新地書房、1984年。
- ・森川抱次『敢闘七十五年』、紫波館、1943年。
- ・矢内原忠雄編『嘉信』第2巻第7号、嘉信社、1939年。
- ・矢内原忠雄編『嘉信』第4巻第11号、嘉信社、1941年。

- ・ 矢内原忠雄編『嘉信』第7巻第4号、嘉信社、1944年。
- ・ 『矢内原忠雄全集』第29巻（書簡・補遺・年譜）、岩波書店、1965年。
- ・ 山本泰次郎『内村鑑三日記書簡全集2』、教文館、1964年。
- ・ 山本泰次郎『内村鑑三日記書簡全集3』、教文館、1965年。
- ・ 山本泰次郎『内村鑑三日記書簡全集4』、教文館、1965年。
- ・ 山本泰次郎『内村鑑三日記書簡全集6』、教文館、1964年。
- ・ 山極圭司『木下尚江』、理論社、1955年。
- ・ 山極圭司「木下尚江論」『徳富蘆花 木下尚江集 現代日本文学大系9』、筑摩書房、1971年。
- ・ 柳富子『トルストイと日本』、早稲田大学出版部、1998年。
- ・ 労働運動史研究会編『明治社会主義史料集 第1集 直言』、明治文献資料刊行会、1960年。
- ・ 和田守『近代日本と徳富蘇峰』、御茶の水書房、1990年。
- ・ 和田守「木下尚江の普選論と平和論」『ピューリタニズム研究』第6号、日本ピューリタニズム学会、2012年。
- ・ M. A. ウォード、露木紀夫他訳『カーライル、ラスキン、トルストイ』、ぱる出版、1999年所収。
- ・ 拙稿「新島襄と共立普通学校創設者・井上浦造」『ピューリタニズム研究』第5号、日本ピューリタニズム学会、2011年。

群馬県略図



聖学院大学大学院
政治政策学研究科
(修士課程修了)

群馬県前橋市 大崎 厚志